天理市埋蔵文化財調査概報

平成18(2006)年度

2011

天理市教育委員会

土坑SK108遺物出土状況

土坑SK108出土鍬形石

例　　言

1，本書は天理市教育委員会が平成18年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。平成18年度におこなった発掘調査は下表のとおりである。

平成18年度 発掘調査一覧

	名　称	住　所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概　要
1	平等坊・岩室遺跡 第28次	平等坊町208他	宅地造成	460㎡	平成18. 5.15 ～ 7.15	青木 石田	弥生時代中期～後期：大溝、土坑、井戸、自然流路など
2	成願寺遺跡 第14次	萱生町1095他	市道建設	100㎡	平成18. 6.12 ～ 7.18	北口	弥生時代中期～後期：溝など
3	願興寺跡	和爾町629他	農業施設	144㎡	平成18. 7.31 ～ 8.14	北口	奈良時代：掘立柱建物など
	柳本藩邸遺跡 第11次	柳本町782他	個人住宅	27㎡	平成18. 8. 7 ～ 8.24	石田	江戸時代後期：石垣、自然流路など
4	平等坊・岩室遺跡 第29次	岩室町38他	区画整理	750㎡	平成18.10.10 ～19. 2.11	青木	弥生時代前期～古墳時代前期：大溝、土坑、井戸、自然流路など
5	合場遺跡 第６次	西井戸堂町405-1他	学校	310㎡	平成18.10.30 ～12.15	北口	中世：井戸 古墳時代後期：自然流路
6	平等坊・岩室北遺跡 第１次	荒蒔町283-1他	ため池改修	430㎡	平成18.11.22 ～12.26	石田	自然流路
	平等坊・岩室遺跡 第30次	岩室町アタラシ223	範囲確認	70㎡	平成19. 2.19 ～ 3.19	北口	溝、土坑

なお、**柳本藩邸遺跡（第11次）**、**平等坊・岩室遺跡（第30次）**については下記文献にて報告済である。

※ 天理市教育委員会(編)2008『天理市文化財調査年報』平成18年度

2，調査は天理市教育委員会文化財課文化財係が実施し、青木勘時（技術吏員・現係長）、北口聡人（技術員・現主事）、石田大輔（技術員・現主事）がそれぞれの現地調査を担当した。

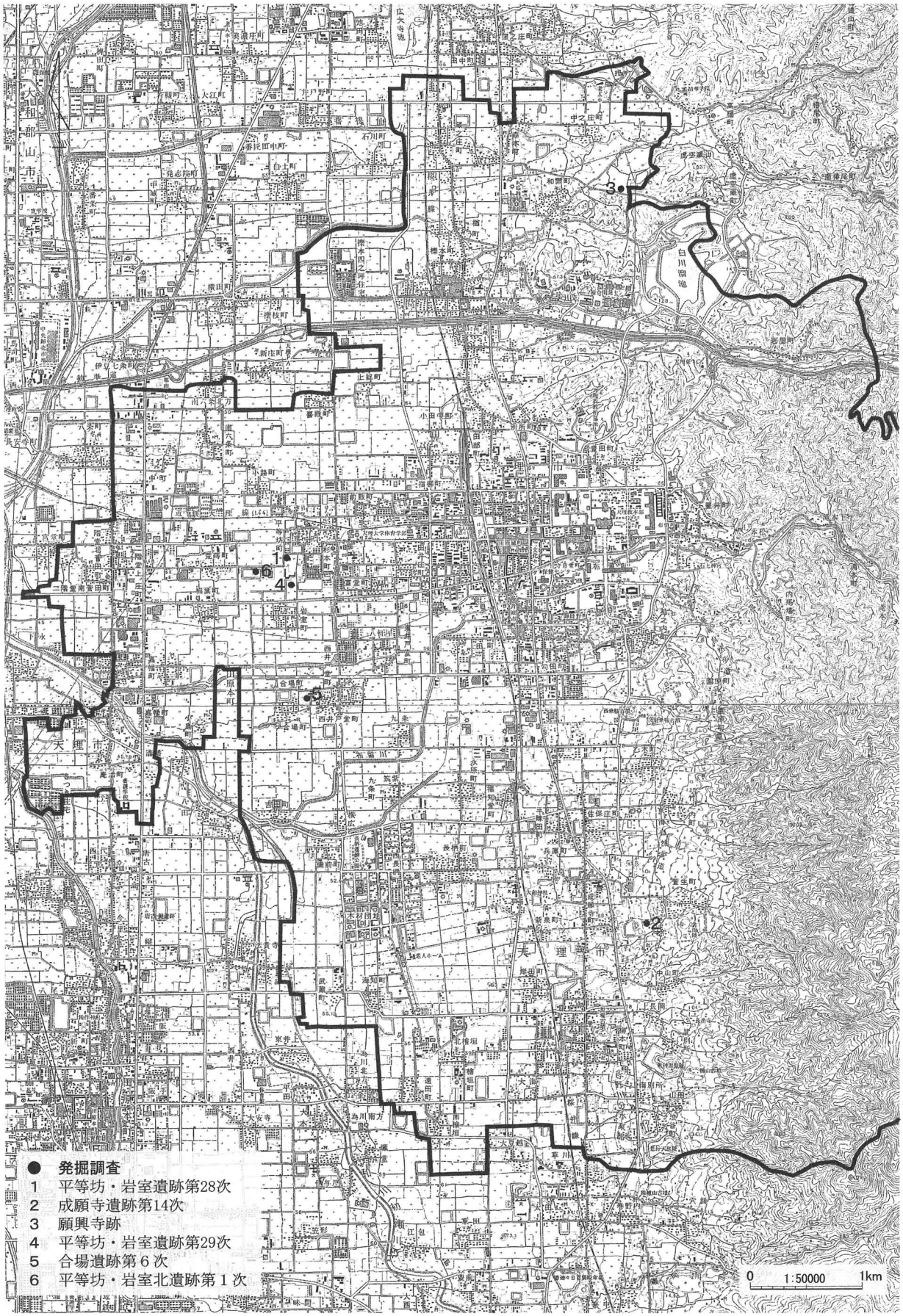
また、現地調査、遺物整理から本書の作成に至るまでに下記の整理補助員、学生諸氏の御助力を得た。

芳村信芳、中森軍之介、中森冨美代、河喜多淑子、藤岡早紀、岩井真生、鈴木貴子
伊東由実（奈良大学卒業生）、今井和代（天理大学・現奈良女子大学大学院）、
小野間智子（奈良教育大学・現筑波大学大学院）、柿本雅美・島田智子・中西宏昌・村下博美（天理大学）、
後藤愛弓（奈良女子大学・現奈良女子大学大学院）、福家恭（天理大学・現桜井市教育委員会）、
松本真並（天理大学卒業生）、松本吉弘（京都大学・現京都大学大学院）、
安原貴之（天理大学・現奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）　〔特記するものを除き所属は平成18年度当時のもの〕

3，本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田大輔が編集した。文責は各担当箇所の末尾に明示した。

目　　次

巻頭図版
例　言
目　次
平成18年度調査地点位置図
１．平等坊・岩室遺跡（第28次）---------- 石田大輔　1
２．成願寺遺跡（第14次）---------- 北口聡人　29
３．願興寺跡 ---------- 北口聡人　42
４．平等坊・岩室遺跡（第29次）---------- 青木勘時　46
５．合場遺跡（第６次）---------- 北口聡人　94
６．平等坊・岩室北遺跡（第１次）---------- 石田大輔　114
図　版
抄　録



平成18年度　調査地点位置図（本書に収録したもの）

1．平等坊・岩室遺跡（第28次）

Ⅰ．はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代から古墳時代にかけての拠点集落遺跡である。地理的には盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成された扇状地下方に展開する沖積平野上に立地する。

遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mと推定される（第１図）。これまでに遺跡北半部を中心に実施された発掘調査の成果により、弥生環濠集落の出現から終焉、あるいは古墳時代集落への移行に至るまでの集落変遷と動態が把握されつつある。

当遺跡においては、平成３（1991）年実施の第８次調査以降に宅地造成、店舗建設などの開発行為が相次ぎ、その景観を急激に変化させつつある。

第１図　調査地と既往の調査地点（第28次調査まで）

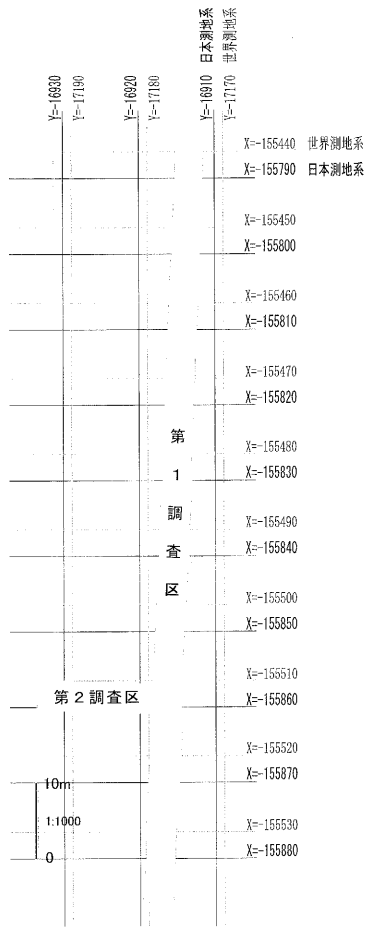
Ⅱ．調査の契機と経過

１．調査の契機

今回の第28次調査は、平等坊・岩室遺跡北部において民間の宅地造成事業が計画されたことに伴い実施した事前調査である。平成４年度に西側隣接地で天理市教育委員会がおこなった第10次調査の調査成果等から、今回の対象地にも遺構が多数存在することが予測された。そこで、宅地造成計画のうち道路予定地部分のみに限って調査対象とし、４ｍ幅の調査区を設定することにした。

２．調査の経過（第２図）

調査地では近年まで耕作がおこなわれていたが、今回の調査開始時点ではすでに休耕地となっていた。調査にあたっては、道路予定地内にその形状に合わせ南北方向に長さ100ｍ、幅４ｍの第１調査区、東西方向に長さ15ｍ、幅４ｍの第２調査区を設けた。まず、表土・耕作土を重機により掘削したのち、遺物包含層・遺構埋土を人力により掘削、排土はベルトコンベアにより排出して作業を進めた。調査は平成18年５月15日に開始し、７月15日にすべての作業を完了した。最終的な調査面積は460㎡である。



第２図　調査区座標図

Ⅲ．層序・遺構

１．層序（第３図）

第Ⅰ層は表土、第Ⅱ層は耕作土・床土で、第Ⅰ・Ⅱ層あわせて層厚40cm程度ある。第Ⅲ層は黒褐色砂質土層を主体とする遺物包含層で層厚は厚いところで30cm程度あり、調査区内の全域に分布している。第Ⅲ'層は黄褐色粘質土を主体とするしまりの強い土層で、地山面（第Ⅳ層）の下降する第１調査区南半にのみ分布している。第Ⅳ層は地山で、調査区北端では標高53ｍ付近で検出されるが、南に向かって緩やかに下降し、調査区南端ではおおよそ標高51.5ｍ付近で検出される。

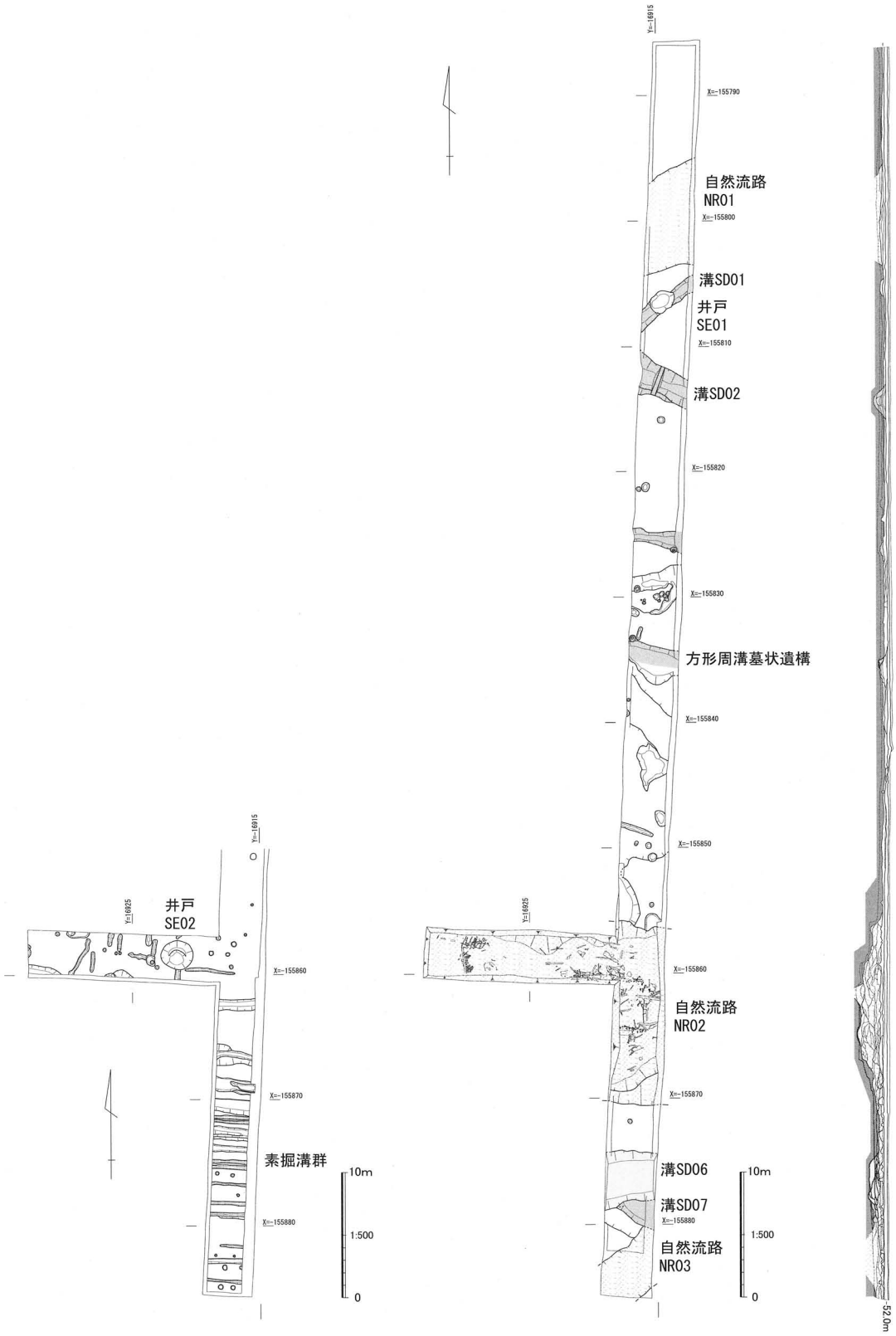
２．遺構（第３図）

素掘溝群

調査区内の広い範囲において、第Ⅲ層上面で耕作に伴う素掘溝群を検出した。また、第１調査区南半では第Ⅲ層下の第Ⅲ'層上面でも素掘溝群を検出した。第Ⅲ層上面で検出した素掘溝群は南北方向が主体、第Ⅲ'層上面で検出した素掘溝群は東西方向が主体であった。

自然流路NR01

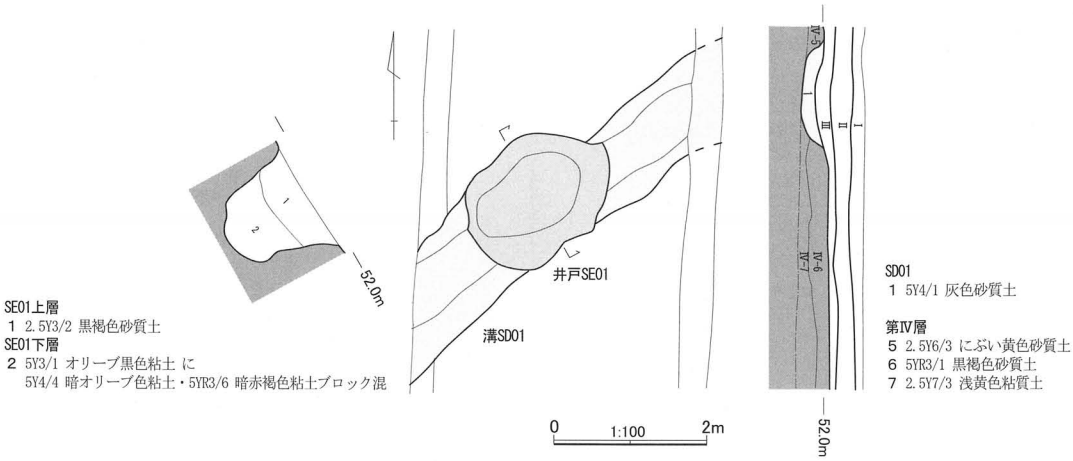
第Ⅳ層上面で砂層（にぶい黄色細砂層）の落ち込みを確認した。検出面での幅約９ｍを測る。確認のために深掘りをおこなったが、埋土に遺物は含まれていなかった。



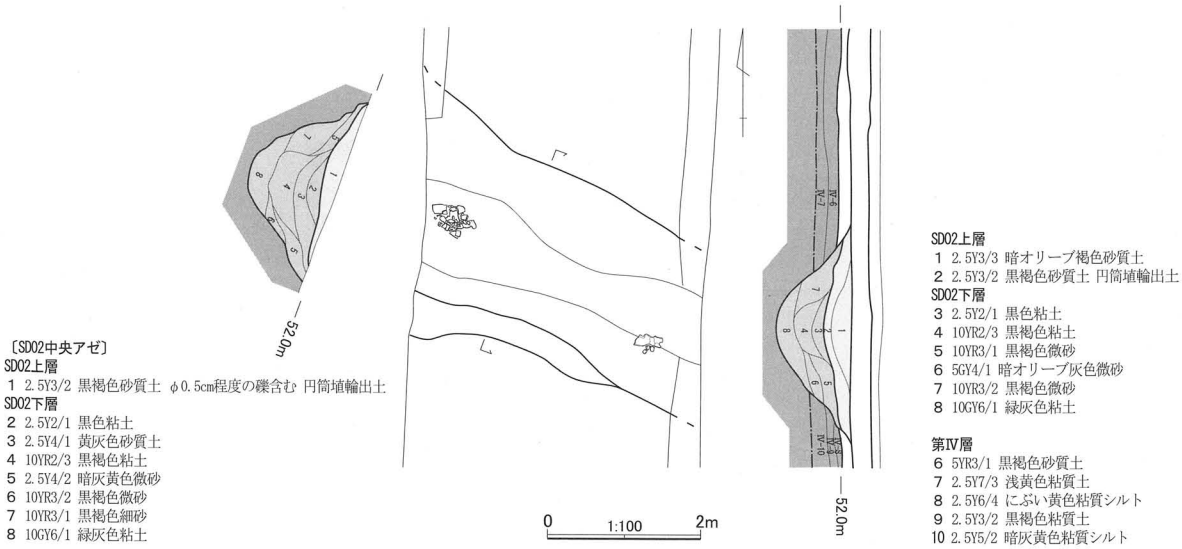
※ 国土座標は日本測地系を表示。

第Ⅲ・Ⅲ'層上面の遺構　　第Ⅳ層上面の遺構

第３図　調査区平面図・土層図



第４図　溝SD01・井戸SE01 平面図・土層図



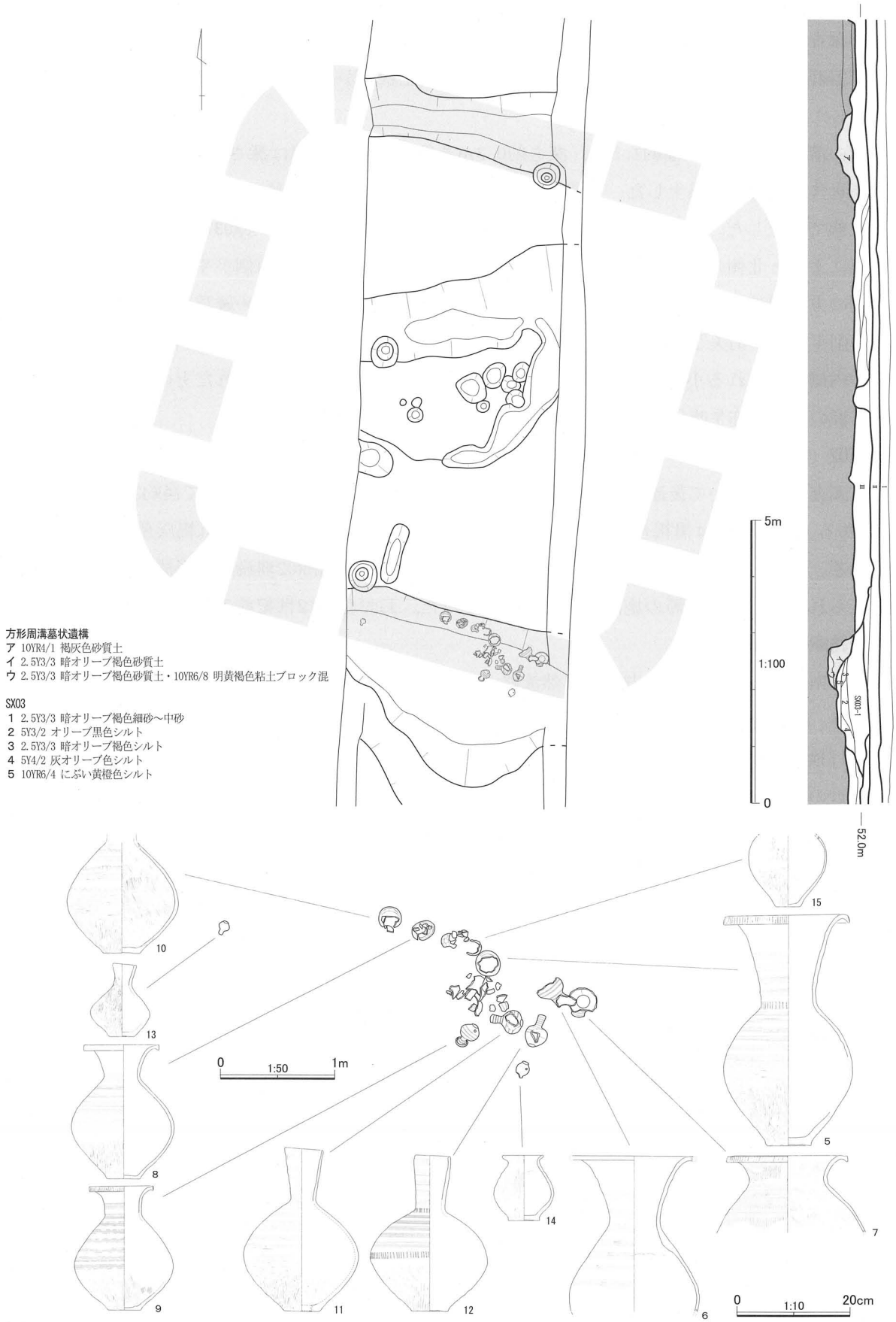
第５図　溝SD02 平面図・土層図

溝SD01・井戸SE01（第４図）

溝SD01は調査区北半の第Ⅳ層上面で検出した北東－南西方向の溝で、検出面での幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色砂質土で遺物はほとんど認められなかった。井戸SE01は検出面で径約２m、検出面からの深さ約1.2mを測る井戸で、溝SD01北肩を壊す形で掘り込まれている。埋土上層は黒褐色砂質土、埋土下層は暗赤褐色粘土ブロックなどを含むオリーブ黒色粘土である。井戸枠等の痕跡は認められなかった。SE01埋土下層から弥生時代後期の直口壺１点が出土した。

溝SD02（第５図）

溝SD02は調査区北半の第Ⅳ層上面で検出した南東－北西方向の溝である。検出面での幅約2.4m、深さ約1.0mを測る。埋土上層は黒褐色砂質土であり、律令期の土器片とともに古墳時代後期の円筒埴輪２個体が出土した。円筒埴輪はいずれも原位置を保つものではなく、細片に分かれた状態である。近隣に古墳が存在したことが想定され、それが削平された際に混入したものと考えられる。SD02が古墳周濠である可能性もあるが、判断は保留しておく。埋土下層からは遺物が出土しておらず、溝の形成時期は不明である。



第６図　方形周溝墓状遺構 平面図・土層図

方形周溝墓状遺構（第６図）

第１調査区の中央付近で東西方向の溝を２条検出した。南側の溝から完形品を多く含む弥生時代中期の土器群が出土した。土器群は11個体以上あり、出土状況からみて方形周溝墓に伴う可能性があると判断した。

北側の溝は検出面での幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。南側の溝は深さ約0.3mを測り、北岸から完形品を含む土器群が出土した。土器群は溝底からやや浮いた位置（第６図イ）で、南側に転倒したような状態で出土した。一方、南岸は第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構（SX03）に破壊されている。断面観察によると北側の溝底は標高51.6m、南側の溝底は標高51.4mで南側がやや低かった。一辺約９m程度の方形周溝墓が想定されるが、東辺・西辺の周溝は調査区外のため確認できていない。墳丘は後世の削平により消失しているが、周溝内の埋土下層はもともと墳丘に由来する堆積の可能性もある。周溝の内側に見られる小規模な落ち込みや土坑は、墳丘の削平後に形成されたものであろう。出土した土器群の時期は弥生時代中期後葉に位置付けられる。

井戸SE02（第７図）

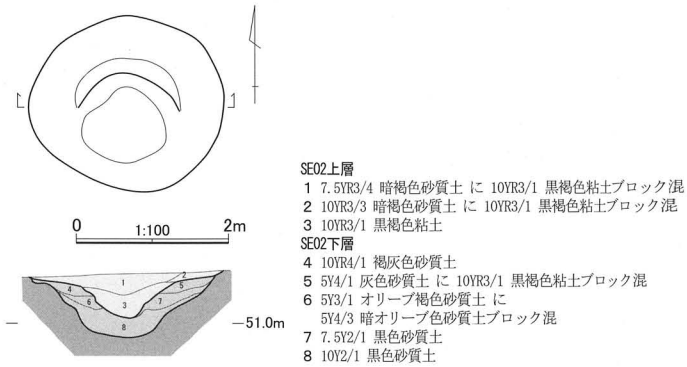
第２調査区内において後述する自然流路NR02上面で検出したもので、検出面で径約2.7m、深さ約1.0mである。埋土上層は黒褐色粘土ブロックが混ざる暗褐色砂質土層、下層は褐灰色～黒色の砂質土層である。上層、下層それぞれから瓦器椀が出土した。自然流路NR02埋没後に形成された井戸であると考えられるが、井戸枠等の施設は認められなかった。おおむね12世紀前半頃の時期を想定できる。

自然流路NR02（第８図）

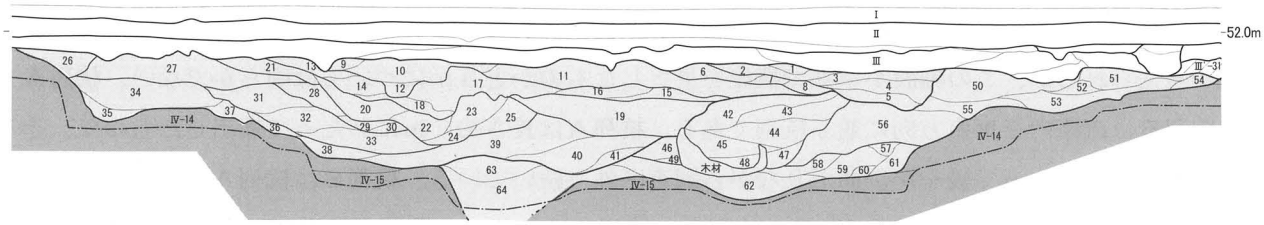
調査区南半で検出した東西方向の自然流路で、東から西に流下する。第１調査区内で南北両岸を確認したが、第２調査区は全域が流路の範囲内に含まれていた。NR02の規模は第１調査区内で幅約14m、最深部は検出面からの深さ1.9m以上を測る。河道内の南北両岸付近の河床は緑灰色シルト層、流路中央付近の河床は黒褐色粘土層である。第１調査区東壁沿いに深掘りをおこなって河床の検出に努めたが、作業の安全性を考慮して最深部の検出は断念した。

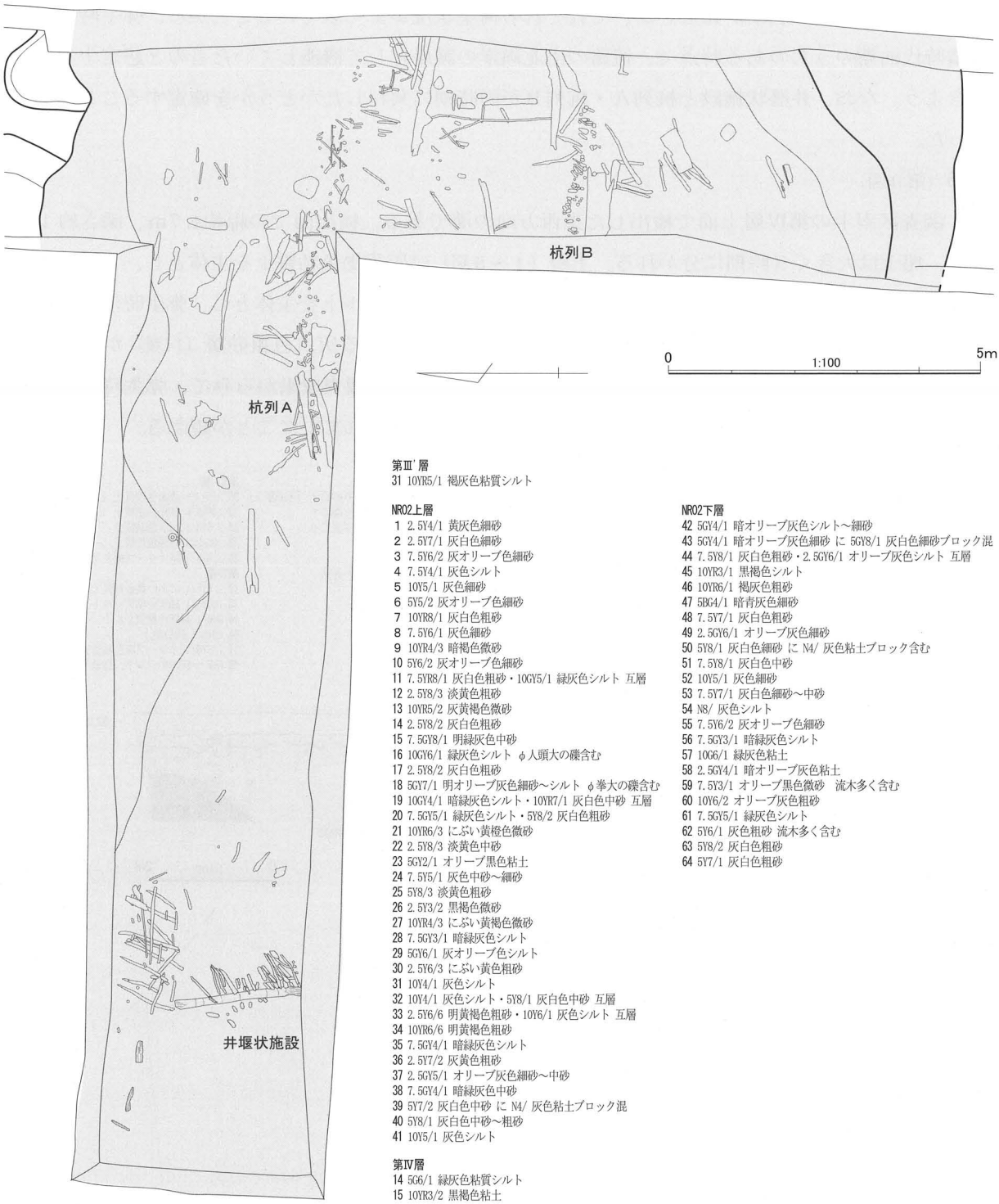
流路埋土は大きく二時期にわかれる。NR02上層からは古墳時代終末期～奈良時代を中心とする土器類が出土した。また、NR02下層からは弥生時代後期～古墳時代前期の土器類が出土した。NR02下層の堆積後、北岸寄りに流路が形成されたとみられる（NR02上層）。NR02上層の埋没後に前述の井戸SE02が構築されており、流路の最終埋没時期は12世紀をくだらない。

流路内では、埋土下層の時期に対応するとみられる木杭等による構築物を多数検出した。**井堰状施設**は第２調査区西端付近で検出したもので、杭列によって南北方向の横木を固定する構造が観察できる。横木は径15cm、長さ２m以上の丸太であるが、調査区外につづくため全長は不明である。横木の東西両側には径５cm程度の断面円形の杭が密に打たれている。これらの杭の多



第７図　井戸SE02 平面図・土層図





第Ⅲ'層
31 10YR5/1 褐灰色粘質シルト

NR02上層
1 2.5Y4/1 黄灰色細砂
2 2.5Y7/1 灰白色細砂
3 7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂
4 7.5Y4/1 灰色シルト
5 10Y5/1 灰色細砂
6 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
7 10YR8/1 灰白色粗砂
8 7.5Y6/1 灰色細砂
9 10YR4/3 暗褐色微砂
10 5Y6/2 灰オリーブ色細砂
11 7.5YR8/1 灰白色粗砂・10GY5/1 緑灰色シルト 互層
12 2.5Y8/3 淡黄色粗砂
13 10YR5/2 灰黄褐色微砂
14 2.5Y8/2 灰白色粗砂
15 7.5GY8/1 明緑灰色中砂
16 10GY6/1 緑灰色シルト φ人頭大の礫含む
17 2.5Y8/2 灰白色粗砂
18 5GY7/1 明オリーブ灰色細砂～シルト φ拳大の礫含む
19 10GY4/1 暗緑灰色シルト・10YR7/1 灰白色中砂 互層
20 7.5GY5/1 緑灰色シルト・5Y8/2 灰白色粗砂
21 10YR6/3 にぶい黄橙色微砂
22 2.5Y8/3 淡黄色中砂
23 5GY2/1 オリーブ黒色粘土
24 7.5Y5/1 灰色中砂～細砂
25 5Y8/3 淡黄色粗砂
26 2.5Y3/2 黒褐色微砂
27 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂
28 7.5GY3/1 暗緑灰色シルト
29 5GY6/1 灰オリーブ色シルト
30 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
31 10Y4/1 灰色シルト
32 10Y4/1 灰色シルト・5Y8/1 灰白色中砂 互層
33 2.5Y6/6 明黄褐色粗砂・10Y6/1 灰色シルト 互層
34 10YR6/6 明黄褐色粗砂
35 7.5GY4/1 暗緑灰色シルト
36 2.5Y7/2 灰黄色粗砂
37 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂～中砂
38 7.5GY4/1 暗緑灰色中砂
39 5Y7/2 灰白色中砂 に N4/ 灰色粘土ブロック混
40 5Y8/1 灰白色中砂～粗砂
41 10Y5/1 灰色シルト

第Ⅳ層
14 5G6/1 緑灰色粘質シルト
15 10YR3/2 黒褐色粘土

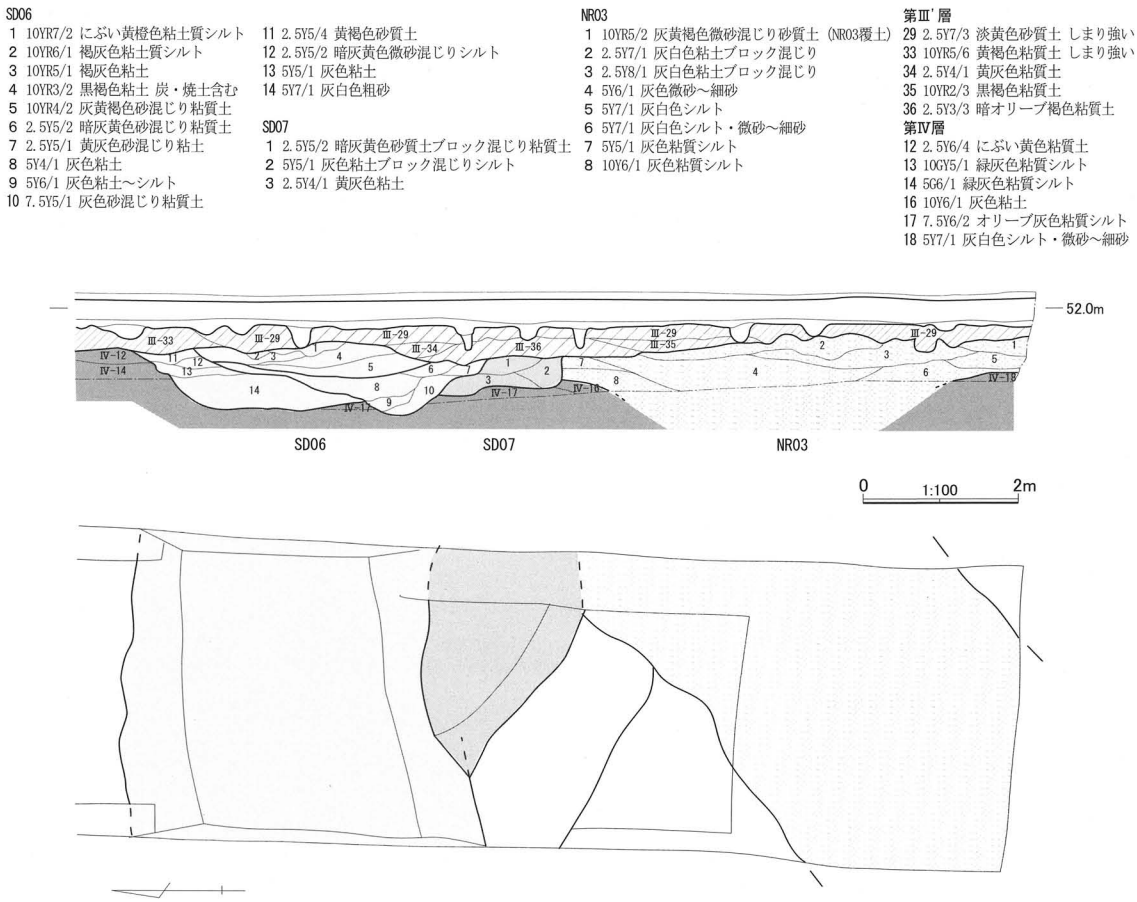
NR02下層
42 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト～細砂
43 5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂 に 5GY8/1 灰白色細砂ブロック混
44 7.5Y8/1 灰白色粗砂・2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト 互層
45 10YR3/1 黒褐色シルト
46 10YR6/1 褐灰色粗砂
47 5BG4/1 暗青灰色細砂
48 7.5Y7/1 灰白色粗砂
49 2.5GY6/1 オリーブ灰色細砂
50 5Y8/1 灰白色細砂 に N4/ 灰色粘土ブロック含む
51 7.5Y8/1 灰白色中砂
52 10Y5/1 灰色細砂
53 7.5Y7/1 灰白色細砂～中砂
54 N8/ 灰色シルト
55 7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂
56 7.5GY3/1 暗緑灰色シルト
57 10G6/1 緑灰色粘土
58 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土
59 7.5Y3/1 オリーブ黒色微砂　流木多く含む
60 10Y6/2 オリーブ灰色粗砂
61 7.5GY5/1 緑灰色シルト
62 5Y6/1 灰色粗砂 流木多く含む
63 5Y8/2 灰白色粗砂
64 5Y7/1 灰白色粗砂

第８図　自然流路NR02 平面図・土層図

くは西側に向かって倒れかかるような状態で出土しており、流路上流に当たる東側からの水流の作用を受けたものとみられる。流路に対して横断方向に構築されていることから井堰の機能を有する可能性が考えられるが、この施設が単独で機能を果たしたものかどうかについては明らかでない。**杭列A・杭列B**は流路内を東西方向に並ぶ杭列である。**杭列A**は長さ約７ｍにわたって検出したもので、その配列は南に向かって緩やかに曲がりながら調査区外へ続いている。**杭列B**は杭列Ａの南側で長さ約2.5ｍにわたって検出したものである。杭列Ａ・杭列Ｂは約４ｍの間隔で並んでいる。両者が厳密に同時期のものかどうか判断が難しいが、それぞれの構築状況がよく似ていることから、弥生時代後期～古墳時代前期のうちのある時点で、流路の南北両岸の護岸として機能していたものと想定することもできよう。なお、井堰状施設と杭列Ａ・杭列Ｂが同時期に共存したかどうかを確定することはできなかった。

溝SD06（第９図）

第１調査区南半の第Ⅳ層上面で検出した東西方向の溝である。検出面での幅約4.7ｍ、深さ約１ｍを測る。埋土は大きく３時期に分かれる。上層（１～５層）は灰黄褐色粘質土を主体とし、古墳時代前期初頭～前半までの土器を含む。下層（６～10層）は灰色粘土～シルトを主体とし、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器を含む。また、溝北岸よりの最下層である灰白色粗砂層（14層）からは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土した。周辺における調査成果からみて、弥生時代後期末以降の環濠に相当するとみられ、再掘削（１～10層）により維持されていたことが窺える。



第９図　溝SD06・溝SD07・自然流路NR03 平面図・土層図

溝SD07（第９図）

第１調査区南半の第Ⅳ層上面で検出した。南東－北西方向に延びる溝で、北岸には前述の溝SD06が掘り込まれている。埋土上層はブロックの混じる粘質土、下層は黄灰色粘質土であり、弥生時代中期末から後期初頭にかけての土器を少量含む。後述する自然流路NR03埋没後に掘削されたものと考えられる。

自然流路NR03（第９図）

第１調査区南端の第Ⅳ層上面で検出した。流路上面に弥生時代後期～古墳時代前期前半の土器が出土する粘土ブロック混じりの砂層が堆積しており、これを覆土層（NR03-１～３層）として遺物の取り上げをおこなった。遺物が出土したのはこの覆土層のみで、確認のため深掘りをおこなったものの下層からは出土しなかった。このため覆土層の遺物はNR03本体の時期を反映しないと判断している。

切り合い関係からこの付近の遺構変遷についてまとめると、自然流路NR03→溝SD07→溝SD06の順に推移したものとみられる。

Ⅳ．出土遺物

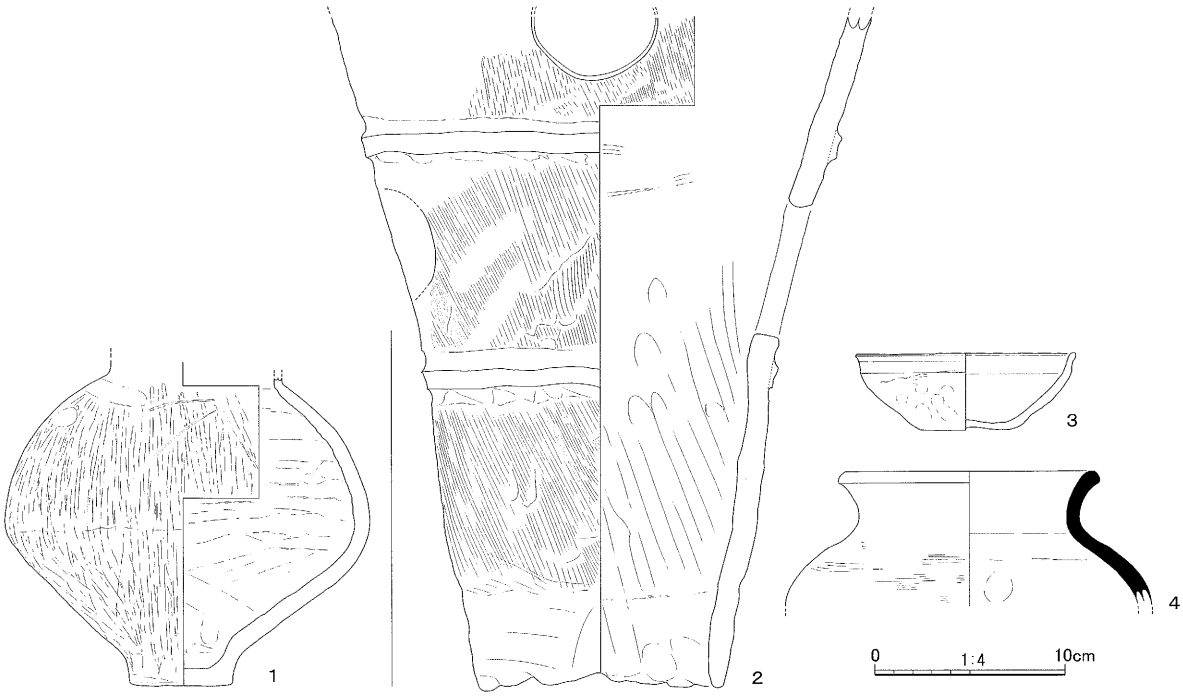
今回の調査では遺物包含層、素掘溝埋土、自然流路、大溝や土坑などの遺構より多量の遺物が出土した。ここでは、出土遺物を遺構ごとに報告する。

井戸SE01出土遺物（１）

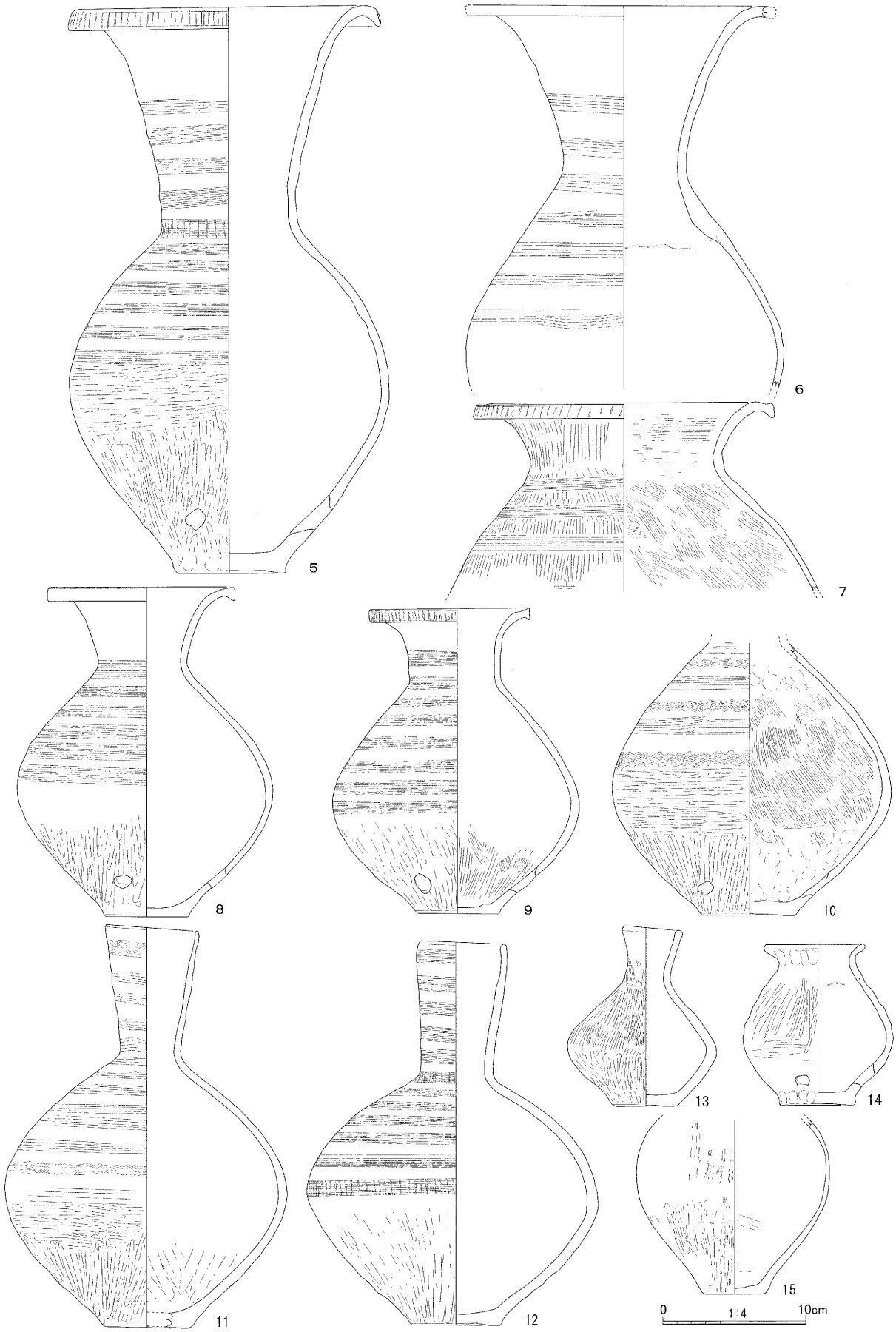
井戸SE01からは遺物１点のみが出土した。１は壺の胴部で、頸部が失われている。外面のミガキ調整が顕著で、胴部上半外面にはヘラ記号が施されている。弥生時代後期前半に位置付けられる。

溝SD02出土遺物（２～４）

溝SD02埋土のうち上層のみ遺物が出土した。２は円筒埴輪で、およそ半周分が破片化した状態で出



第10図　井戸SE01・溝SD02出土遺物



第11図　方形周溝墓状遺構出土遺物

土したものである。残存するのは２条３段分で、底部高が第２段の突帯間隔より大きい。第２段、第３段にそれぞれ円形の透孔を直交方向に穿つ。外面は１次調整ナナメハケ、内面は指ナデにより仕上げられている。底部調整は外面を板押圧、内面を指頭圧により整形している。突帯はあまり突出しない形状で、断続ナデののち横ナデ調整されている（断続ナデ技法Ａ）。古墳時代後期前半のものであろう。３・４は２と同一層位から出土している。３は土師器椀、４は須恵器壺で、奈良時代前後のものとみられ、溝SD02の埋没時期に対応すると考えられる。

方形周溝墓状遺構出土遺物（５～15）

方形周溝墓状遺構の一部と推定される溝から出土した土器群である。少なくとも12個体が出土しており、そのうち図化し得た11個体を掲載する。

５・６は広口長頸壺である。頸部と胴部の境目で明瞭に屈曲する形状で、頸部から胴部上半にかけて櫛描き直線文を施している。５は垂下した口縁端部に刺突文、胴部と頸部の境界に簾状文を施し、胴部下半には穿孔がある。６は口縁端部が失われている。７～９は広口壺で、頸部から胴部上半にかけて櫛描き直線文を施している。７・９は口縁部に刺突文を施す。また、８・９には胴部下半に穿孔がある。11～13は細頸壺で、10もその可能性がある。10～12は頸部から胴部上半にかけて櫛描き直線文を主体的に施しているが、13は無文である。このほか、無文の壺14・15があり、14は胴部下半に穿孔がある。

これら土器群は完形のものと打ち欠かれたものがあり、そのうち５個体に穿孔がある。総体としては弥生時代中期中葉に位置付けられよう。

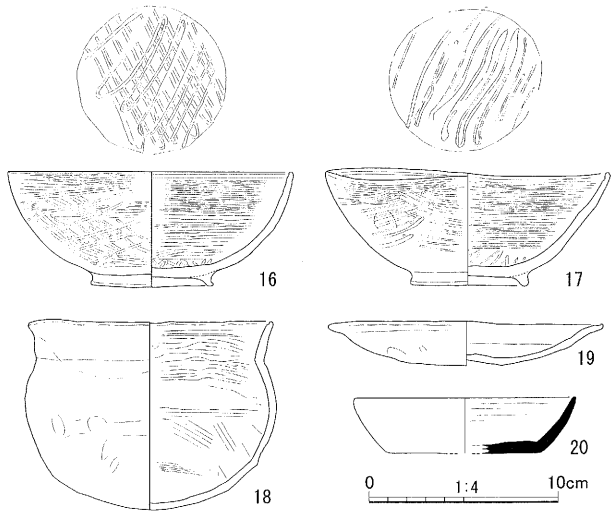
井戸SE02出土遺物（16～20）

16は井戸SE02上層、17～20はSE02下層から出土した。16・17は瓦器椀で、体部内外面のヘラミガキが密である。16は見込みに斜格子状のヘラミガキを、17はジグザグ状のヘラミガキを施している。18は土師器甕で、内面に粗いハケを施している。20は須恵器杯である。瓦器椀の様相からみて井戸SE02の埋没時期は12世紀前半を前後する時期に位置付けられる。

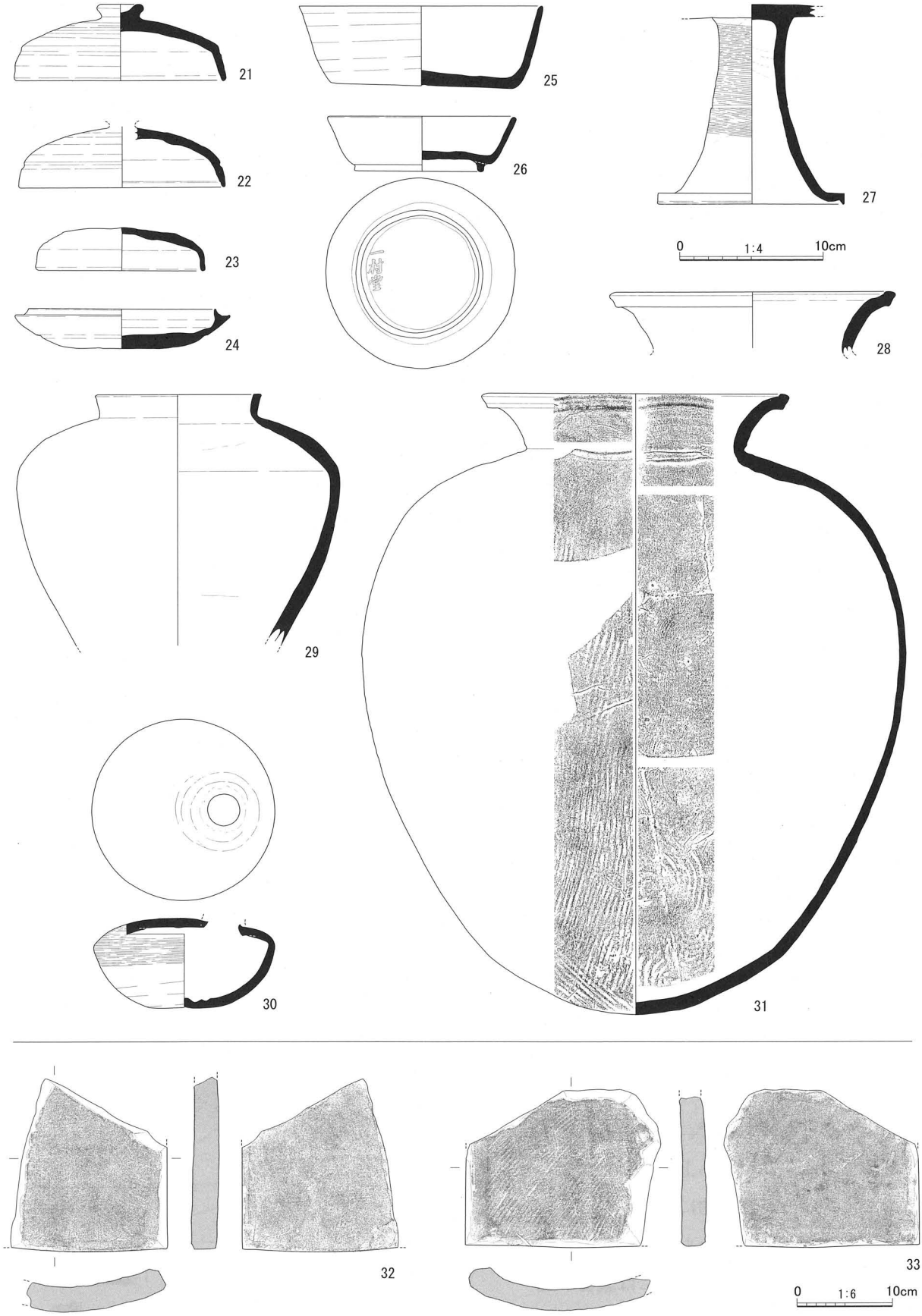
自然流路NR02出土遺物（21～64）

上層出土遺物（21～50）　NR02上層からは、須恵器、瓦、土師器などが出土した。

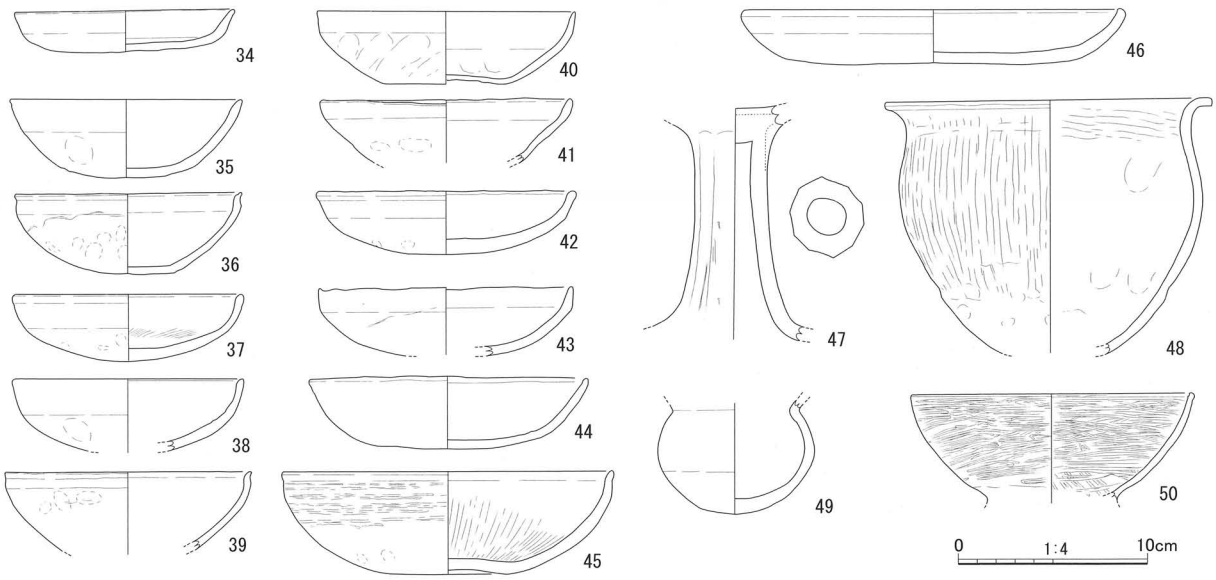
21～31は須恵器である。21～23は蓋である。21の天井部にくぼみのある形状のつまみが付くほか、22にもつまみが付いていた痕跡がある。24～26は杯である。24は低い立ち上がりをもつもので、全体に浅く扁平な形状である。25は立ち上がりをもたないもので、口縁部が直線的に外方にのびる。26も同様に立ち上がりをもたないもので、底部に高台が付く。底部外面には墨書が施されており「一村堂」と判読できる。27は高杯で、脚柱部にカキメ調整ののち沈線を



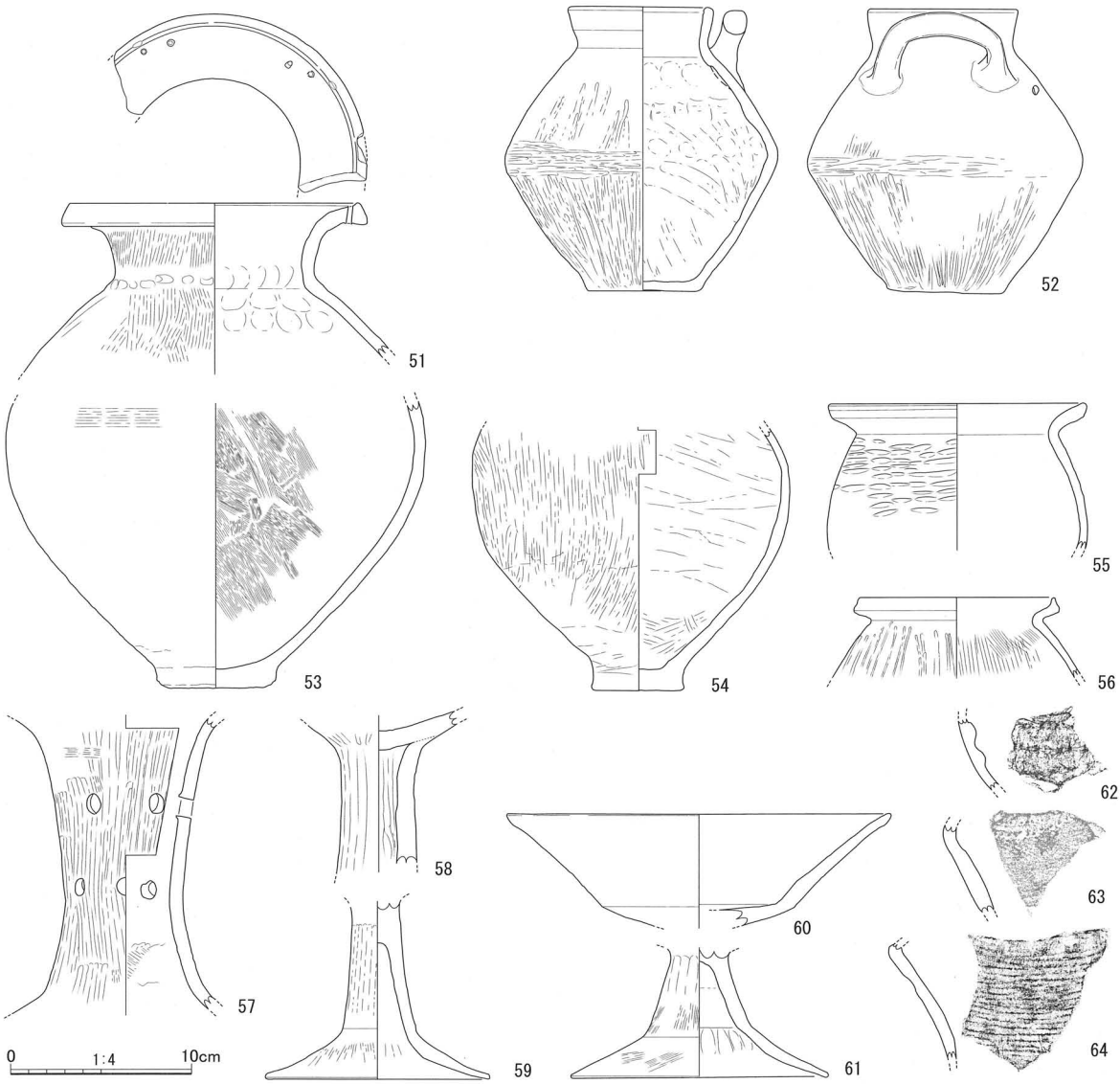
第12図　井戸SE02出土遺物



第13図　NR02上層出土遺物（1）



第14図　NR02上層出土遺物（2）



第15図　NR02下層出土遺物

施す。29は短頸壺である。30は平瓶で頸部は失われているが、内外面には円板閉塞による成形の痕跡が認められる。31は大型甕で、口頸部が短く外反する形状である。28も甕の口頸部と思われる。

32～33は平瓦である。模骨痕跡が認められ、桶巻作りにより製作されたものと思われる。

34～49は土師器である。34～45は杯で、45が外面をミガキ調整し、内面にミガキ暗文を残すほかは、基本的にナデ調整で指頭圧痕を残すものが多い。46の皿もナデ調整により仕上げている。47の高坏は脚柱部を面取りにより断面多角形に仕上げている。48の甕は外面および内面の口縁部付近を荒いハケで仕上げており、粗雑な印象を受ける。49は小型の壺である。

50は瓦器椀で、体部内外面ともに密にヘラミガキを施する。

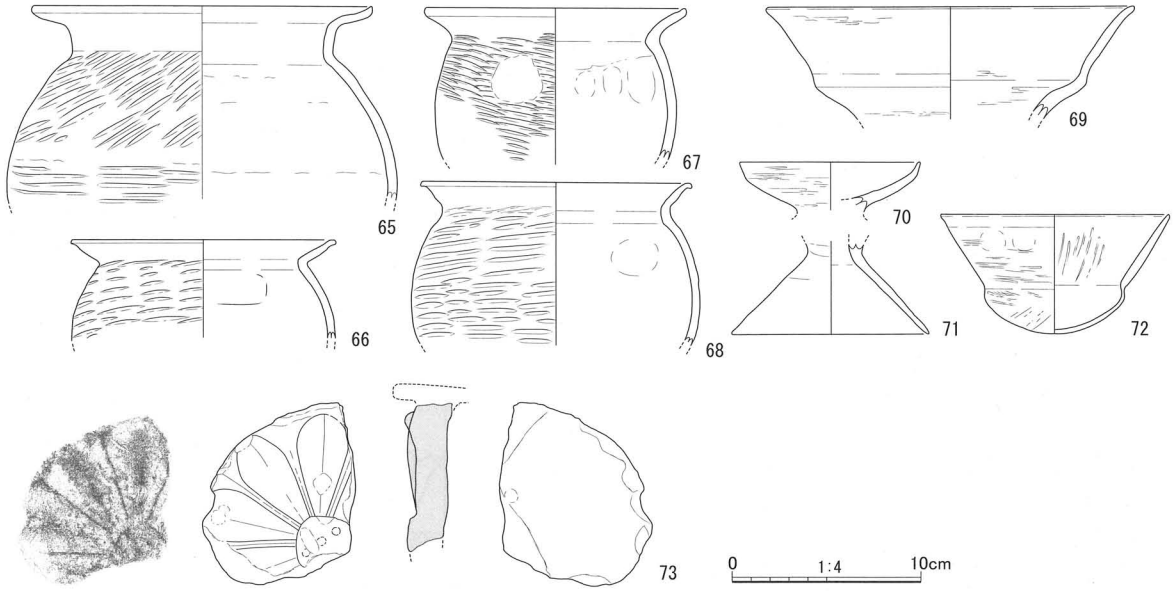
これらNR02上層出土遺物の時期は、おおむね古墳時代後期～平安時代前半期の幅におさまるようである。NR02上層に構築されていた井戸SD02の時期をふまえると、NR02上層の埋没時期は11世紀頃とみられる。

下層出土遺物（51～64）　51は広口壺である。口縁端部に２個１組の穿孔が２ヶ所確認できる。口頸部および胴部は粗いハケメを残す。口頸部と胴部の境目には連続した刻み目がつけられている。52は完形の水差で、把手を貼り付けにより接合している。外面はミガキ調整で仕上げており、無文である。53、54は壺、55、56は甕である。56は口縁部上端が立ち上がり、外面を粗いミガキ調整で仕上げている。57は器台か。縦方向のミガキにより仕上げており、中位に５方向の透孔を２段にあけている。58～61は高杯である。60、61は同一個体と思われる高杯で、杯部外面には細かな横方向のミガキが施されている。62～64には特徴的な土器片を挙げた。62は貼付突帯文をもつ。63は頸部との境目に二重の刺突がある。64は胎土の色調から河内系の可能性がある。

これらNR02下層出土遺物は、一部を除き弥生時代中期末～後期のものが主体であるが、庄内式前半段階の59～61もあり、古墳時代前期初頭までの時期幅があるものとみられる。

第Ⅲ'層出土遺物（65～73）

65～68は甕である。いずれも胴部をタタキで仕上げている。65、68は頸部をタタキののちにナデを

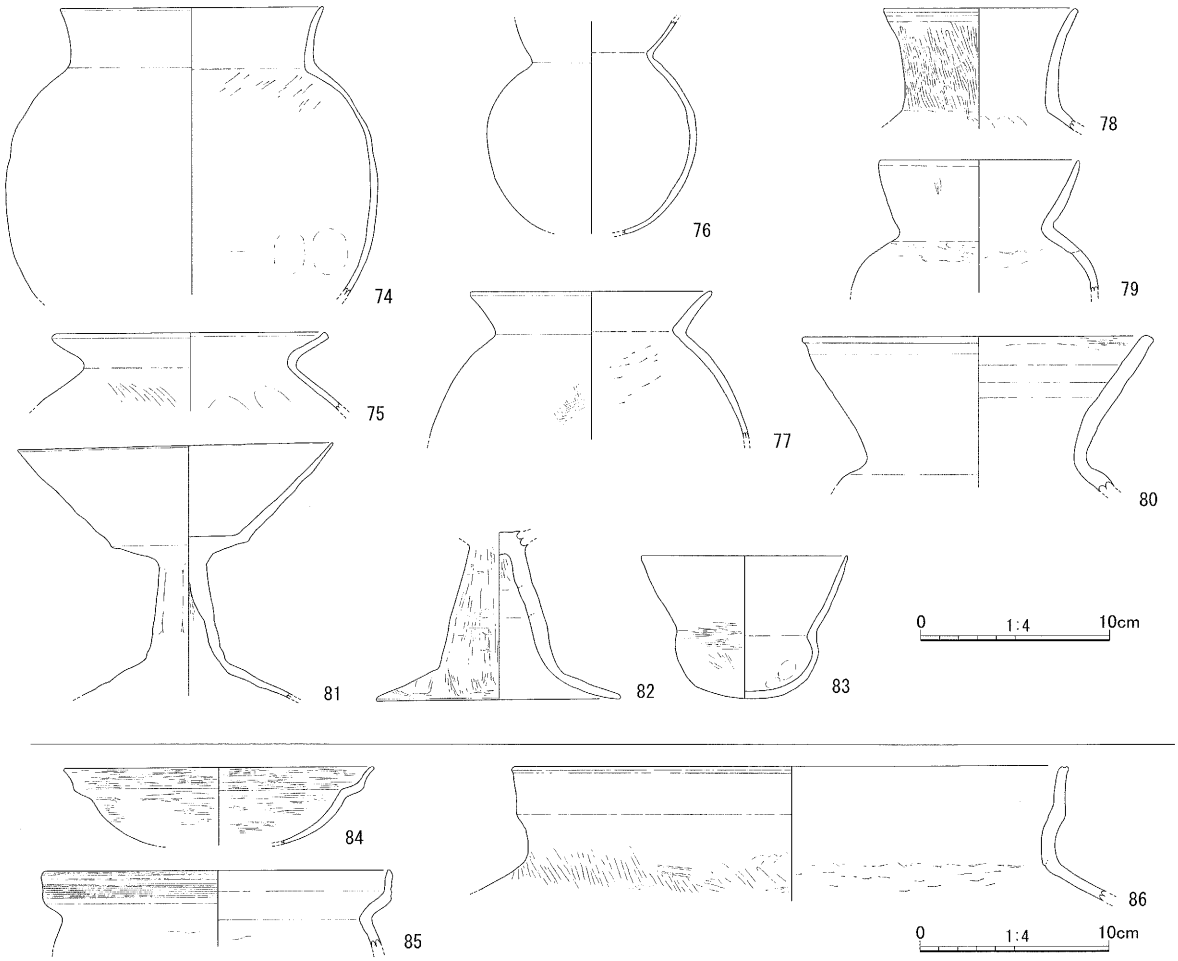


第16図　第Ⅲ'層出土遺物

施す。69は壺の口縁部で、二重口縁形を呈する。横方向のミガキが観察できる。70、71は小型の器台であるが、摩滅が著しく調整は判然としない。72は小型丸底鉢で、口縁部が外上方に延びる形状である。器表面は摩滅しているが、外面には一部に細かな横方向のミガキが、内面にも縦方向のミガキ調整が観察できる。

73は軒丸瓦破片で、瓦当部のみ残るが外縁は失われている。表面の摩滅が著しく文様が不鮮明だが、素弁蓮華文軒丸瓦である。花弁の数は８～10弁になるものと思われる。弁端は不明瞭である。中房には少なくとも３点の蓮子が認められる。瓦当裏面の外縁よりには丸瓦筒部との接合痕跡を示す凹凸がみられる。７世紀後半のものであろう。

第Ⅲ'層から出土する遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭までのものが主体であるが、ここに図示したほかに須恵器片が少量含まれ、さらに瓦が存在するなど相当の時期幅がある。第Ⅲ'層直上の第Ⅲ層は遺物包含層と理解しているが、第Ⅲ'層については地山面（第Ⅳ層）の標高がわずかに下降するNR02以南にのみ分布していることから、低地の地上げを意図した整地行為により形成されたものである可能性を想定しておきたい。第Ⅲ'層の形成時期は、73の瓦の存在から推定すると７世紀後半以降となろう。



第17図　溝SD06上層出土遺物

溝SD06上層出土遺物（74～86）

上層上部から74～83が、上層下部から84～86が出土した。

74～77は甕である。74、77は内面に粗いケズリ調整を施す。75は外面に弱いヘラミガキが施されている。78～80は壺口縁部である。78、79は口縁部外面にヘラミガキが施されている。81、82は高杯である。81は口縁部が直線的に延びる形状で、杯底部の稜があまり明瞭ではなく、ナデ調整により仕上げている。82は脚部のみ残存しており、縦方向のミガキ調整が観察できる。83は小型丸底鉢で外面にミガキ調整を残す。

84は有段屈曲鉢で、内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。85は吉備系の口縁部をもつ甕で、口縁部に凹線を巡らす。86は有段口縁の甕で北近畿系の特徴をもつ。外面はヘラミガキ、内面は粗くケズリ調整している。

これら溝SD06上層出土土器については、概ね古墳時代前期初頭～前半に位置付けられるものと考えられる。

溝SD06南岸下層・北岸下層出土遺物（87～96）

南岸下層から87～93が、北岸下層から94～96が出土した。

87～90は甕である。87は外面をハケ調整で仕上げ、外面頸部直下に列点文を施す。89は外面にタタキを残し、内面は板ナデ、口縁外端面に凹線が巡る。88、90も外面にタタキを残す甕で、90は内面に横方向ハケを密に施している。91の直口壺は外面を主に縦方向のハケ調整で仕上げているが、胴部下半にヘラミガキを残す。92の高杯は現状では二個体に分かれているものの、同一個体と思われるため復元して図化した。杯部は有段屈曲鉢に類似した形状で、横方向に細かいミガキ調整をおこなっている。また、口縁部および脚裾部外面にそれぞれ沈線を３条施すとともに、脚部に３ヶ所穿孔している。93の短頸壺は外面をミガキ調整で仕上げている。

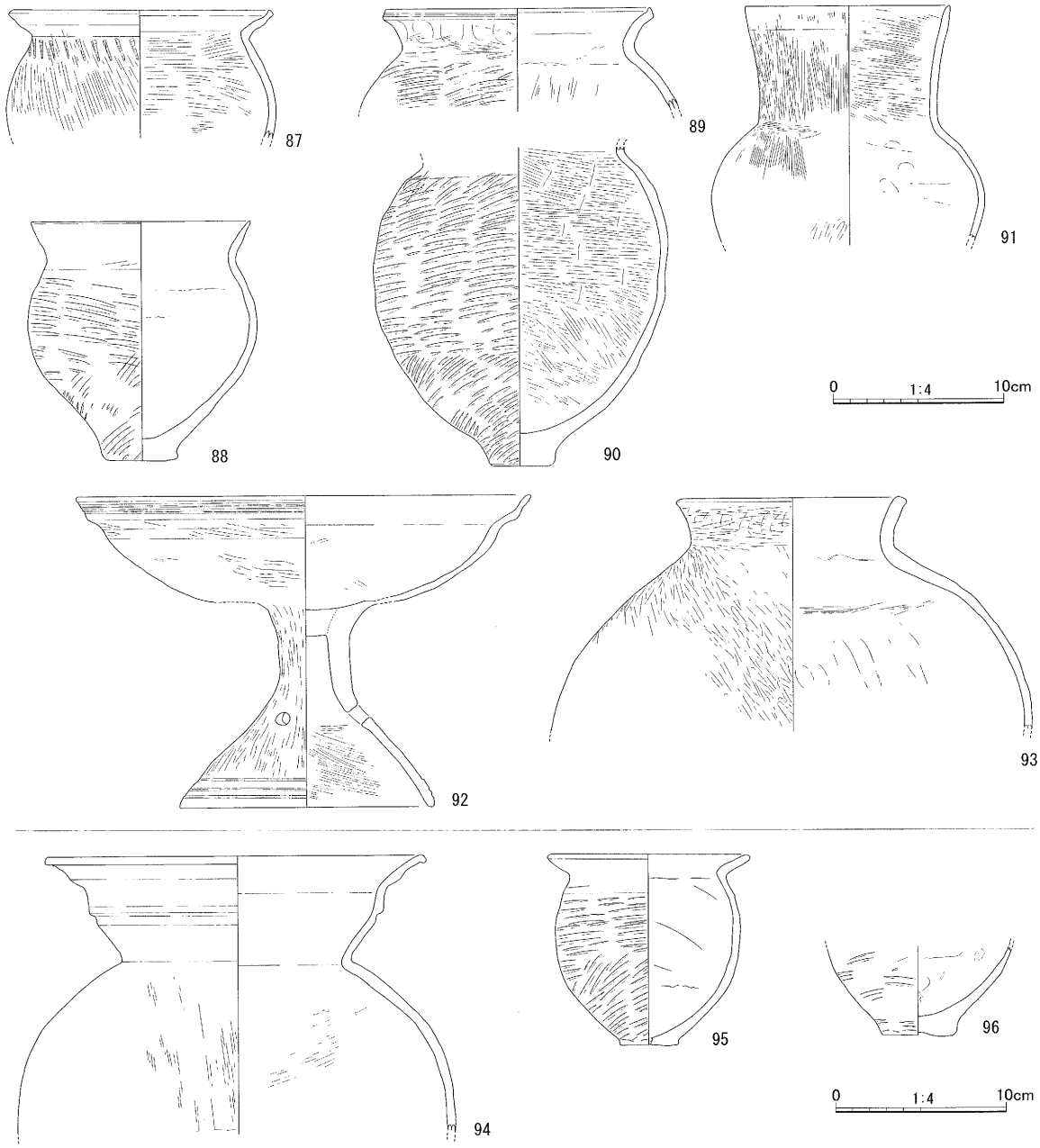
94の壺は二重口縁をもつ。内外面ともに摩滅が著しいものの、胴部外面は縦方向のハケ調整、胴部内面は横方向のケズリ調整を施している。95、96は甕で、外面をタタキ調整で仕上げている。

これら南岸下層・北岸下層出土遺物については、概ね弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられよう。

溝SD06最下層出土遺物（97～124）

97～104の甕は、いずれも外面タタキ調整で、97、101のように口縁端をつまみ上げるものや、104のような瀬戸内系口縁をもつものもある。105は広口壺で、球形の胴部を有し内外面ともにハケ調整で仕上げている。108は口縁端部を垂下させる広口壺である。109の短頸壺は外面をミガキ調整により仕上げ、口縁端部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。111は胴部上位に刺突による列点文を施している。112は吉備系の口縁部をもつ甕で、口縁端部に凹線を巡らす。115は東海系の瓢形壺と呼ばれるもので、外面は丁寧にミガキ調整し、透孔を穿つ。116は内傾した口縁をもち、外面に横方向のミガキ調整が残る。

118～122は高杯である。118は椀形の杯部に外に開く口縁をもつもので、杯部内外面ともにミガキ調整で仕上げている。また、脚柱部はハケ調整、脚裾部はミガキ調整である。119も外面に密にミガキ調整を施す。120は口縁が外反する形状の杯部で、内外面に縦方向のミガキ調整を施す。121、122は口縁が直線的に延びる形状の杯部で、杯部外面のミガキ調整は121が横方向、122は縦方向である。



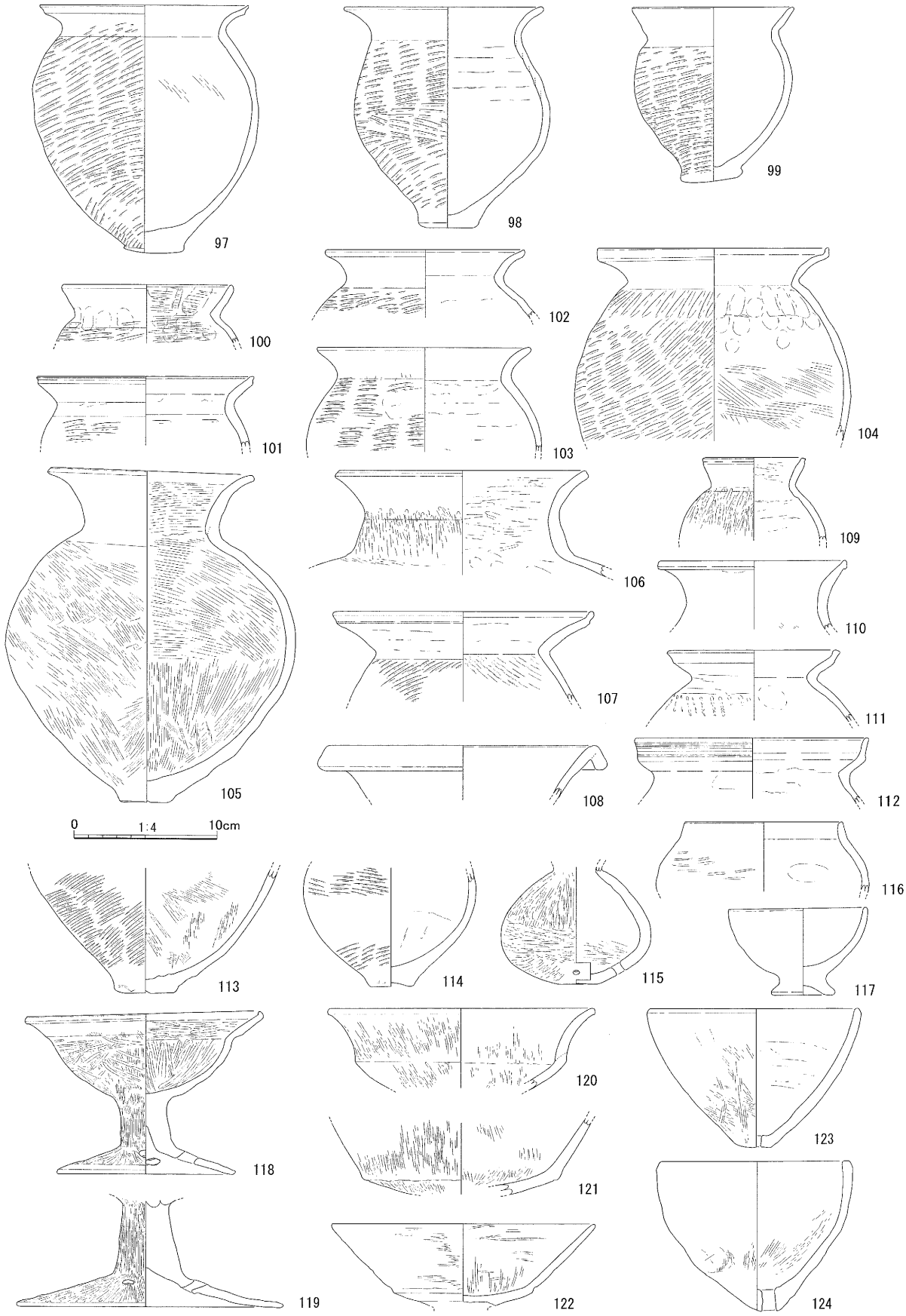
第18図　溝SD06南岸下層・北岸下層出土遺物

123、124は底部に小孔を穿つ有孔鉢である。

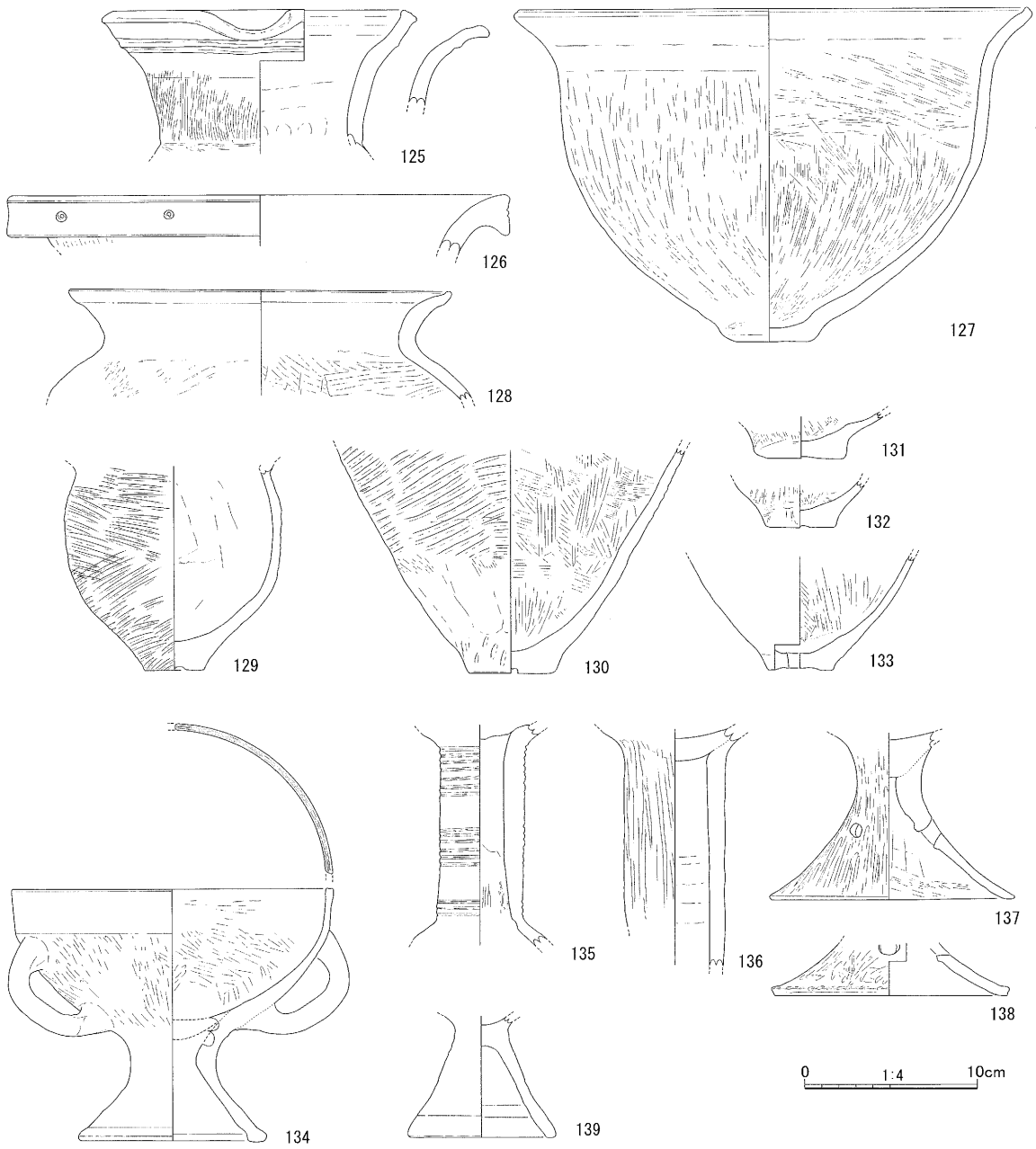
これら溝SD06最下層出土遺物については、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものと考えられ、南岸下層・北岸下層出土遺物との明確な時期差は認められない。各層出土遺物の時期からみて、SD06最下層・下層の埋没時期は古墳時代前期初頭、上層の埋没時期は古墳時代前期前半に位置づけられると考えられる。

自然流路NR03覆土出土遺物（125～139）

125は長頸壷で、口縁部に凹線を巡らし、端部に注口をもつ。126は広口壺で、口縁端部に竹管文が施されている。127は大型の鉢で、口縁部が外反する形状である。内外面ともにミガキ調整で仕上げ



第19図　溝SD06最下層出土遺物



第20図　自然流路NR03上部覆土層出土遺物

る。128～130は甕で、いずれも外面をタタキ調整で仕上げている。133は底部に穿孔があり、有孔鉢と思われる。

134は把手付の台付鉢で、台部分のみ完形である。台部分はケズリののちナデ調整をおこない、鉢部分はミガキ調整により仕上げている。口縁上端面には沈線が施されている。139も台付鉢の一部かもしれない。135、136は高杯の脚柱部である。135は脚柱部にヘラ描き直線文が３段施されている。137、138は高杯の脚裾部で、外面に縦方向のミガキ調整を施す。138は外面の縦方向のミガキ調整に加えて、裾端部に刻み目を施している。

NR03上部覆土層出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期前半と時期に幅があり、NR03本体の時期を反映しないものと判断している。

第１表　出土遺物観察表（１）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
1	壺	井戸SE01 下層	(外)5YR 5/1 褐灰　一部 7.5YR 5/1 橙 (内)5YR 5/2 灰黄褐	密	良好	5.3	(17.3)	頸部以下残存	(外)胴部上半タテ方向ミガキ、胴部下半タテ方向ミガキ。記号文あり。外面の胴部上半に器面剥離の穴が2箇所。 (内)胴部上半ヨコ方向ナデ、胴部下半右上がりナデ。
2	円筒埴輪	溝SD02 上層	(外)5YR 7/8 橙 (内)5YR 6/6 橙	粗	良好	(12.2)	(35.7)	1/4	(外)斜め方向ハケ、突帯は断続ナデ技法。底部板押圧。 (内)ナデ。底部ユビオサエ。
3	椀	溝SD02 上層	(外)7.5YR 6/4 にぶい橙 (内)7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	11.4	4.0	1/4	(外)口縁ヨコナデ、体部ユビオサエ。 (内)ヨコナデ。
4	須恵器壺	溝SD02 上層	(外)7.5YR 8/2 灰白 (内)7.5YR 8/1 灰白	密	やや軟	(13.0)	(7.1)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部ヨコ方向のハケ。器面剥落と磨滅が激しい。 (内)口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヨコナデ、一部ユビオサエ。
5	広口長頸壺	方形周溝墓状遺構	(外)7.5Y 6/6 橙 (内)5Y 6/8 橙	密	良好	(19.9)	(40.8)	1/2	(外)口縁ヨコナデ、刺突文。頸部に櫛描き直線文、櫛描き簾状文。胴部上半に櫛描直線文。胴部下半にタテミガキ。穿孔あり。 (内)ナデ。
6	広口長頸壺	方形周溝墓状遺構	(外)7.5YR 5/3 にぶい橙 (内)7.5YR 7/6 橙　10YR 4/1 褐灰	やや密	やや軟	(20.4)	(27.4)	頸部のみ完形	(外)磨滅のため調整不明。頸部～胴部上半に櫛描き直線文7帯。 (内)磨滅のため調整不明。
7	広口壺	方形周溝墓状遺構	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)10YR 2/1 黒	密	良好	20.8	(13.5)	口縁部5/6	(外)口縁ヨコナデ、刺突文。頸部～胴部上半粗いハケ。胴部櫛描直線文。 (内)口縁ヨコナデ、口縁～頸部ヨコ方向ハケ、胴部上半左上がりハケ。
8	広口壺	方形周溝墓状遺構	(外)5YR 5/6 明赤褐 (内)2.5Y 7/3 浅黄	密	良好	(13.0)	23.6	底部のみ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部上半櫛描き直線文、胴部下半ミガキ。穿孔あり。全体的に磨滅。 (内)ナデ。
9	広口壺	方形周溝墓状遺構	(外)5YR 5/4 にぶい赤褐 (内)7.5YR 6/6 橙	やや密	良好	11.1	22.0	ほぼ完形	(外)口縁ヨコナデ、刺突文。頸部～胴部上半櫛描直線文。胴部下半縦位ミガキ。黒斑あり。穿孔あり。 (内)粗いハケ。
10	壺	方形周溝墓状遺構	(外)10YR 7/4 にぶい黄橙 (内)2.5Y 2/1 黒	やや密	良好	6.6	(19.6)	ほぼ完形	(外)胴部上半、櫛描き直線文、櫛描き波状文。胴部下半縦位ミガキ。穿孔あり。 (内)胴部上半左上がりハケ、胴部下半指頭圧痕。
11	細頸壺	方形周溝墓状遺構	(外)10YR 8/6　黄橙 (内)―	やや粗	やや軟	7.0	(28.6)	ほぼ完形	(外)頸部櫛描き波状文1帯、櫛描き直線文4帯。胴部上半櫛描き直線文、櫛描き波状文。胴部下半横～縦位ミガキ。 (内)口縁～胴部櫛描文。底部縦位ナデ。
12	細頸壺	方形周溝墓状遺構	(外)7.5YR 6/8 橙 (内)―	やや密	良好	5.9	27.4	ほぼ完形	(外)頸部櫛描き直線文、頸部胴部界櫛描き簾状文、胴部櫛描き直線文、櫛描き簾状文。胴部下半縦位ミガキ。 (内)ナデ。
13	細頸壺	方形周溝墓状遺構	(外)10YR 7/3 にぶい黄橙 (内)2.5Y 7/3 浅黄	密	良好	4.0	12.9	ほぼ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部上半ハケ、胴部下半縦位ミガキ。 (内)ナデ。
14	壺	方形周溝墓状遺構	(外)5YR 6/8 橙 (内)5YR 6/8 橙	密	良好	7.0	11.5	ほぼ完形	(外)胴部ミガキ、磨滅が著しい。穿孔あり。 (内)ナデ。
15	壺	方形周溝墓状遺構	(外)2.5Y 5/3 黄褐 (内)2.5Y 6/3 にぶい黄	やや粗	良好	4.4	(12.4)	底部のみ完形	(外)胴部ミガキ。胴部中央付近に工具痕。 (内)部分的にナデ。
16	瓦器椀	井戸SE02 上層	(外)N 3/0 暗灰 (内)N 3/0 暗灰	密	良好	14.8	6.1	ほぼ完形	(外)ユビオサエの上からミガキ、高台ナデ。 (内)ユビオサエの上からミガキ、底部格子状暗文。
17	瓦器椀	井戸SE02 下層	(外)N 4/0 灰(内)N 4/0 灰	密	良好	14.6～16.0	5.9	完形	(外)ユビオサエの上からミガキ、高台ナデ。器形に歪みがある。 (内)ユビオサエの上からミガキ。底部並行性状暗文。
18	甕	井戸SE02 下層	(外)10YR 6/3 にぶい黄橙 (内)N 2/0 灰	密	良好	12.6	9.9	ほぼ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部ユビオサエ。復元済み。 (内)口縁～胴部上半ナデの上からハケナデ、胴部下半ハケ。
19	皿	井戸SE02 下層	(外)2.5Y 6/2 灰黄 (内)2.5Y 5/2 暗灰黄	密	良好	(14.5)	2.35	1/2	(外)口縁ナデ、底部ユビオサエ、部分的に不定方向ナデ。 (内)ナデ。
20	須恵器杯	井戸SE02 下層	(外)N 5/0 灰 (内)N 5/0 灰	密	良好	(11.6)	2.9	1/4	(外)口縁ヨコナデ、底部ヘラケズリの上からヨコナデ。 (内)ヘラケズリの上からヨコナデ。
21	須恵器蓋	自然流路NR02 上層	(外)5YR 4/2 灰褐 (内)7.5YR 4/1 褐灰	密	やや軟	14.5	5.3	1/2	(外)口縁、つまみ部回転ナデ。ヘラ記号(×字状)あり。 (内)回転ナデ、口縁内側に一本沈線あり。
22	須恵器蓋	自然流路NR02 上層	(外)2.5YR 3/3 にぶい赤褐 (内)2.5YR 8/1 赤灰	密	良好	(14.2)	(4.2)	口縁部1/3	(外)つまみ部分欠損。胴部回転ヘラ削り。口縁回転ナデ。 (内)ロクロナデ。
23	須恵器蓋	自然流路NR02 上層	(外)N 5/0 灰 (内)N 6/0 灰	密	良好	11.3	3.0	ほぼ完形	(外)中央部に回転ヘラキリ、口縁ヨコナデ、胴部内外面に灰釉付着。 (内)ヨコナデ。
24	須恵器蓋	自然流路NR02 上層	(外)N 4/0 灰 (内)N 4/0 灰	粗	良好	(13.0)	2.8	1/3	(外)底部回転ヘラケズリ、口縁回転ナデ。 (内)回転ナデ。

第２表　出土遺物観察表（２）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
25	須恵器 杯	自然流路NR02 上層	(外)7.5YR 6/1 灰 7.5Y 7/1 灰白 (内)7.5Y 6/1 灰	粗	良好	(16.9)	6.7	1/2	(外)口縁～胴部ロクロナデ、底部ナデで整えてあるが一部未調整部分あり。 (内)口縁～胴部ロクロナデ、底部不定方向のナデ。
26	須恵器 杯	自然流路NR02 上層	(外)N 6/0 灰 (内)10YR 6/1 褐灰	密	良好	13.0	3.8	ほぼ完形	(外)ヨコナデ、高台貼り付け。底部に「一村堂」の墨書。外面に一部スス付着。 (内)ヨコナデ。
27	須恵器 高杯	自然流路NR02 上層	(外)N 6/0 灰 (内)N 6/0 灰	密	良好	13.2	(13.9)	脚部のみ残存	(外)シボリ目、カキ目、裾部ヨコナデ。 (内)シボリ目の上からヨコナデ。
28	須恵器 甕	自然流路NR02 上層	(外)N 5/0 灰 (内)N 6/0 灰	密	良好	19.1	(4.3)	口縁部1/4	(外)ヨコナデ。 (内)ヨコナデ。
29	須恵器 短頸壺	自然流路NR02 上層	(外)7.5Y 7/1 白灰 (内)10Y 6/1 灰	密	良好	11.6	(17.5)	胴部上半のみ	(外)ヨコナデ。広範囲に自然釉が付着している。 (内)ヨコナデ。
30	須恵器 平瓶	自然流路NR02 上層	(外)N 6/0 灰 (内)N 6/0 灰	密	良好	胴部径 12.6	(6.3)	体部のみ	(外)胴部上半カキ目。胴部下半、回転ヘラケズリ後ヨコナデ。底部回転ヘラケズリ、底部中央ヘラ切り後未調整。口頸部周辺カキ目。 (内)調整不明。風船技法が確認できる。
31	須恵器 甕	自然流路NR02 上層	(外)N 6/0 灰 (内)N 6/0 灰	密	良好	20.4	44.0	口縁、胴部下半完形	(外)口縁ナデ、胴部タタキ。外面のタタキ目は胴部・底部とも同一器具を使用していると見られる。 (内)口縁～肩部ナデ、胴部当て具痕。内面の当て具痕は胴部と底部付近で異なっている。
32	平瓦	自然流路NR02 上層	(凸面)10YR 7/3 にぶい黄橙 (凹面)10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好	26.8	(4.0)	破片	(凸面)ナデ。 (凹面)ナデ。
33	平瓦	自然流路NR02 上層	(凸面)10YR 8/3 浅黄橙 (凹面)10YR 8/3 浅黄橙 N 2/0 黒	粗	軟	—	—	破片	(凸面)磨滅のため調整不明。 (凹面)布目残る。
34	杯	自然流路NR02 上層	(外)10YR 7/2 にぶい黄橙 (内)10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	(11.6)	2.2	5/6	(外)口縁付近ヨコナデ、底部磨滅のため調整不明。 (内)口縁付近ヨコナデ、底部磨滅のため調整不明。
35	杯	自然流路NR02 上層	(外)5YR 8/3 淡橙 (内)5YR 8/4 淡橙	密	良好	(12.2)	(4.1)	口縁部1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部～底部ナデのちユビオサエ。 (内)ナデ。
36	杯	自然流路NR02 上層	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)7.5YR 7/3 にぶい橙	密	良好	11.9	4.3	完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部ユビオサエ。 (内)口縁～胴部ヨコナデ、底部調整不明。
37	杯	自然流路NR02 上層	(外)2.5Y 7/2 灰黄 7.5YR 6/4 にぶい橙 (内)10YR 5/4 にぶい黄褐	密	やや軟	12.0	3.5	1/3	(外)口縁ヨコナデ、胴部部分的にユビオサエ。 (内)ヨコナデ、胴部渦巻き状の直線暗文。
38	杯	自然流路NR02 上層	(外)2.5YR 7/4 淡赤橙 (内)2.5YR 7/4 淡赤橙	密	良好	(12.0)	(3.9)	口縁部3/4	(外)口縁付近ヨコナデ、胴部～底部ユビオサエのちナデ。 (内)ヨコナデ。
39	杯	自然流路NR02 上層	(外)2.5Y 6/3 にぶい黄 (内)7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	13.0	(4.1)	1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部ユビオサエ。 (内)ヨコナデ。
40	杯	自然流路NR02 上層	(外)7.5YR 8/2 灰白 (内)7.5YR 8/2 灰白	密	良好	(13,6)	3.9	1/3	(外)口縁ナデ、口縁下ヨコナデ。胴部、右斜上方向へのナデ。底部、ユビオサエ。 (内)口縁ナデ、胴部ヨコナデ、底部ユビオサエ・ナデ。
41	杯	自然流路NR02 上層	(外)10YR 7/4 にぶい黄橙 (内)7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	6.6	(3.4)	5/6	(外)口縁ヨコナデ、胴部ユビオサエ。 (内)ヨコナデ、口縁部分的にタテ方向ハケ。
42	杯	自然流路NR02 上層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙 (内)10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好	13.6	3.3	1/2	(外)口縁ヨコナデ、底部部分的にユビオサエ。 (内)口縁ヨコナデ、中央部調整不明。
43	杯	自然流路NR02 上層	(外)10YR 7/4 にぶい黄橙 5YR 6/8 橙 (内)2.5Y 7/3 浅黄	密	良好	13.3	(3.6)	1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部タテ方向直線ナデ。 (内)口縁ヨコナデ、底部調整不明。
44	杯	自然流路NR02 上層	(外)5YR 6/6 橙 (内)5YR 6/8 橙	密	良好	14.6	3.8	3/4	(外)口縁～胴部ヨコナデ、底部調整不明。底部にヘラ記号(井字状)あり。 (内)口縁～胴部ヨコナデ、底部調整不明。
45	杯	自然流路NR02 上層	(外)10YR 6/3 にぶい黄橙 (内)10YR 5/3 にぶい黄褐	密	やや軟	17.5	5.5	1/3	(外)口縁ヨコ方向ミガキ、ヨコナデ。底部部分的にユビオサエ。 (内)ヨコナデ、放射状の暗文。
46	皿	自然流路NR02 上層	(外)10YR 5/4 にぶい黄褐 (内)7.5YR 5/4 にぶい褐	密	良好	(20.0)	2.7	1/2	(外)口縁ヨコナデ、底部部分的にハケ。 (内)口縁付近ヨコナデ、底部調整不明。
47	高杯	自然流路NR02 上層	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)7.5YR 6/6 橙	密	良好	—	(12.3)	脚部のみ	(外)杯部との接合部付近に擬口縁が観察できる。脚部に面取りを施している。 (内)ヨコ方向ケズリ。
48	壺	自然流路NR02 上層	(外)10YR 7/4 にぶい黄橙 (内)7.5YR 7/6 橙	密	良好	頸部径 6.7	(6.1)	体部のみ	(外)頸部ヨコナデ、胴部上半ヨコ方向ミガキの上からヨコナデ、胴部下半ヨコナデ。器面外側大部分にススが付着。 (内)頸部ヨコナデ、胴部磨耗のため調整不明。

第３表　出土遺物観察表（３）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
49	甕	自然流路NR02 上層	(外)5YR 6/6 橙 (内)5YR 7/6、6/6 橙	粗	良好	(17.2)	(13.4)	2/3	(外)口縁ヨコナデ、胴部タテ方向ハケ、一部ユビナデ。底部付近ユビオサエ。 (内)口縁ヨコ方向ハケ、一部ハケ後ナデ。胴部ユビオサエ、ヨコナデ。
50	瓦器 椀	自然流路NR02 上層	(外)N 4/0 灰 (内)N 4/0 灰	粗	良好	(7.5)	(5.8)	口縁部 1/2	(外)ヨコ方向ミガキ、高台付近ナデ。 (内)ヨコ方向ミガキ、底部付近格子状暗文。
51	広口壺	自然流路NR02 下層	(外)2.5Y 6/4 にぶい黄 (内)10YR 4/2 灰黄褐	密	良好	16.0	(8.5)	口縁1/3	(外)口縁ヨコナデ、頸部タテ方向ハケの上からミガキ、胴部ハケ。口縁付近に2個一組の穿孔。頸部に工具痕あり。 (内)ヨコナデ、頸部ユビオサエ。
52	永差形 土器	自然流路NR02 下層	(外)7.5YR 2/1 黒色 (内)7.5YR 6/3 にぶい褐色	密	良好	8.2	15.8	完形	(外)ヨコナデ、タテ、ヨコ方向ミガキ、胴部上半は器面剥落が激しい。把手内面に粘土を貼り付け。把手付近に穿孔あり。 (内)ユビオサエ、ヨコ方向ケズリ、ナデ、ナナメ方向ケズリ。
53	壺	自然流路NR02 下層	(外)2.5Y5/3黄褐 (内)10YR3/2黒褐	やや密	良好	底部径 5.2	(15.7)	胴部1/4	(外)胴部中央ヨコ方向ハケ、胴部下半ミガキ。 (内)胴部ナナメ方向ハケ。
54	壺	自然流路NR02 下層	(外)7.5YR 6/4 にぶい橙色 (内)10YR 6/2 灰黄褐色	密	良好	—	(14.6)	胴部1/2	(外)胴部タテ方向ミガキ、底部ヨコナデ。胴部外面に4本の線刻あり。 (内)ヨコ方向ナデ、ハケ(？)の上からナデ。
55	甕	自然流路NR02 下層	(外)10YR 5/1 褐灰 (内)10YR 4/1 褐灰	密	良好	14.0	(8.0)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部ヨコ方向タタキ目。 (内)口縁ヨコナデ、胴部調整不明。
56	甕	自然流路NR02 下層	(外)10YR 6/4 にぶい黄橙 (内)7.5YR 5/4 にぶい褐	密	良好	10.6	(4.4)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、肩部はヨコ方向ナデ、乱雑なミガキ。 (内)タテ方向ハケ。
57	器台	自然流路NR02 下層	(外)2.5Y 6/1 黄灰 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	—	(13.4)	頸部のみ	(外)タテ方向ミガキ、部分的にタテ方向ハケ。5個2段の透かし孔を持つ。 (内)乱雑なハケ。
58	高杯	自然流路NR02 下層	(外)2.5Y 6/2 灰黄 (内)2.5Y 6/2 灰黄	やや粗	良好	脚柱径 4.3	(8.85)	脚部のみ	(外)タテ方向ミガキ。 (内)脚柱部内面にシボリ目。
59	高杯	自然流路NR02 下層	(外)10YR 7/3 にぶい黄橙 (内)7.5YR 7/4 にぶい橙色	密	良好	12.2	(9.9)	脚部のみ	(外)ミガキの上からヨコナデ。ヨコナデの上から部分的にハケ。 (内)ヨコ方向ミガキ、シボリ目、ナデ。
60	高杯	自然流路NR02 下層	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)7.5YR 6/4 にぶい橙色	密	良好	21.0	(6.1)	杯部のみ 完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部細かいヨコ方向ミガキが見られる。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨耗のため調整不明。
61	高杯	自然流路NR02 下層	(外)7.5YR 6/4 にぶい橙 (内)7.5YR 5/6 明褐	密	良好	12.0	(7.1)	脚部のみ 完形	(外)タテ方向ミガキ、タテ方向ハケ、裾部へ伸びる直線ハケ。 (内)ユビオサエ、シボリ目、ヨコナデ。
62	土器片	自然流路NR02 下層	(外)10YR 7/2 にぶい黄橙 (内)10YR 6/4 にぶい黄橙	やや粗	良好	—	—	胴部破片	(外)器面に貼り付け突帯文。 (内)調整不明。
63	土器片	自然流路NR02 下層	(外)2.5Y 7/4 浅黄 (内)2.5Y 7/4 浅黄	密	良好	—	—	胴部破片	(外)頸部付近に2重の刺突文列。 (内)調整不明。
64	土器片	自然流路NR02 下層	(外)7.5YR5/3にぶい褐 (内)10YR5/3にぶい黄褐	密	良好	—	—	胴部破片	(外)ホコ方向タタキ。 (内)頸部ヨコナデ、胴部ナナメ方向ナデ。
65	甕	第Ⅲ'層	(外)7.5YR 6/4 にぶい黄橙 (内)口縁部7.5YR 7/4 にぶい黄橙　胴部2.5Y 4/1 黄灰	密	良好	(17.8)	(10.2)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部上半ナナメ方向タタキ、一部磨滅している。胴部下半ヨコ方向タタキ。胴部内外面に接合痕あり。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しく調整不明。
66	甕	第Ⅲ'層	(外)2.5YR 7/8 橙 (内)5YR 7/6 橙	密	良好	(14.0)	(5.2)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部ヨコ方向タタキ、一部磨滅している。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しい、一部ヨコナデ。
67	甕	第Ⅲ'層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙 (内)7.5YR 7/3,7/4 にぶい橙	密	良好	(13.8)	(8.0)	口縁部1/6	(外)口縁ヨコナデ、頸部タタキ後ナデ、胴部タタキ一部器面剥落。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しい、一部タテ方向のナデ跡、粘土を補填した後ナデ。
68	甕	第Ⅲ'層	(外)7.5YR 7/4,6/4 にぶい橙 (内)5YR 7/4,6/4 にぶい黄橙	密	良好	(14.4)	(8.6)	口縁部1/6	(外)口縁ヨコナデ、頸部タタキ後ヨコナデ、胴部ヨコ方向タタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しい。
69	壺	第Ⅲ'層	(外)7.5YR 7/6 橙 (内)7.5YR 7/6 橙	粗	良好	(19.5)	(5.9)	1/8	(外)口縁端部ヨコナデ、磨滅、ヨコ方向ミガキ、口縁部下半ヨコナデ、ヨコ方向のミガキ、磨滅している。 (内)口縁端部ヨコナデ、口縁ミガキ後ヨコナデ、器面剥落、磨滅が激しい。
70	器台	第Ⅲ'層	(外)5YR 6/6 橙 (内)7.5YR 6/6 橙	密	良好	(9.6)	(2.5)	1/2	(外)ミガキ、磨滅が激しい。 (内)磨滅、器面剥落が激しい。
71	器台	第Ⅲ'層	(外)7.5YR 8/2 灰白 (内)10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	(10.4)	(4.7)	4/5	(外)磨滅のため調整不明。 (内)磨滅のため調整不明。
72	小型 丸底鉢	第Ⅲ'層	(外)5YR 6/6 橙　一部　5YR 5/1 褐灰 (内)7.5YR 7/4 にぶい橙　一部　7.5YR 5/1 褐灰	密	良好	12.0	6.3	ほぼ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部ミガキ主体、一部ユビオサエ。屈曲部ヨコナデ。口縁の磨滅、欠損が激しい。 (内)タテ方向ミガキ暗文、底部磨滅のため調整不明。

第４表　出土遺物観察表（４）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
73	軒丸瓦	第Ⅲ'層	(外)2.5Y 6/1 黄灰 (内)5Y 4/1 灰	粗	軟	—	—	—	瓦当部のみ残る。単弁十葉蓮華文軒丸瓦。全体的に磨滅が激しい。
74	甕	溝SD06 上層上部	(外)10YR 8/2 灰白 (内)10YR 8/3 浅黄橙	粗	軟	(14.0)	(15.3)	1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しいため調整不明。 (内)口縁ヨコナデ、胴部上半一部にケズリ、胴部下半にナデ・ユビオサエ。全体的に磨滅が著しい。
75	甕	溝SD06 上層上部	(外)5YR 5/6 明赤褐 (内)5YR 5/6 明赤褐	密	良好	(14.6)	(4.2)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部ミガキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ、指頭圧痕。
76	甕	溝SD06 上層上部	(外)10YR 7/2 にぶい黄褐 (内)10YR 7/2 にぶい黄褐	やや粗	やや軟	頸部径 (6.4)	(11.2)	胴部ほぼ完形	(外)ヨコナデ。内外面共に磨滅が激しい。 (内)ナデ。
77	甕	溝SD06 上層上部	(外)10YR 8/3 浅黄橙　10YR 8/2 灰白 (内)10YR 8/2 灰白	粗	軟	(12.4)	(7.8)	1/4	(外)磨滅が激しく調整不明。口縁部は欠損・磨滅が激しい。 (内)口縁部磨滅が激しく調整不明。胴部ケズリ。
78	壺	溝SD06 上層上部	(外)5YR 6/6 橙 (内)5YR 6/8 橙	密	良好	10.4	(6.5)	口縁部のみほぼ完形	(外)口縁端部凹線、ミガキ。 (内)口縁ヨコナデ、頸部下に指頭圧痕。
79	壺	溝SD06 上層上部	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)7.5YR 6/6 橙	密	良好	10.6	(7.0)	口縁部のみ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部ミガキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ。
80	壺	溝SD06 上層上部	(外)5YR 7/4 にぶい橙　一部7.5YR 5/1 褐灰 (内)10YR 4/1 褐灰　口縁と一部　7.5YR 8/4 浅黄橙	粗	軟	18.7	(7.7)	口縁のみ完形	(外)磨滅が激しい。一部ヨコナデ。 (内)磨滅が激しい。一部ヨコナデ、内面全体に黒斑が見られる。
81	高杯	溝SD06 上層上部	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	(16.7)	(13.5)	1/2	(外)杯部ヨコナデ、脚部ヨコナデ。 (内)杯部ヨコナデ、脚部ヨコナデ、シボリ。
82	高杯	溝SD06 上層上部	(外)5YR 7/6 橙 (内)10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	(12.8)	(8.8)	脚部ほぼ完形	(外)磨滅が激しい。タテ方向の面取り後ヨコ方向ミガキ。 (内)ナデ。
83	鉢	溝SD06 上層上部	(外)2.5Y 7/2 灰黄 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	やや軟	(10.9)	(7.5)	胴部ほぼ完形、口縁部1/32	(外)磨滅が激しい。頸部ヨコナデ整形後ヨコ方向ミガキ。胴部に黒斑が見られる。 (内)磨滅が激しい。底部にユビオサエ。
84	鉢	溝SD06 上層下部	(外)5YR 8/3 淡橙　7.5YR 8/2 灰白 (内)5YR 8/3 淡橙　7.5YR 8/2 灰白	密	良好	(16.4)	(4.1)	1/2	(外)口縁部磨滅や欠損が激しい。ヨコ方向ミガキ後ヨコナデ。細かい雲母を多く含む。 (内)ヨコ方向のミガキ後ヨコナデ。
85	甕	溝SD06 上層下部	(外)10YR 8/3 浅黄橙　10YR 2/1 黒 (内)10YR 8/4 浅黄橙	粗	良好	(18.6)	(4.0)	1/6	(外)口縁5条の擬凹線、胴部ヨコナデ。吉備系。 (内)ヨコナデ。
86	甕	溝SD06 上層下部	(外)10YR 8/4 浅黄橙 (内)2.5Y 8/3 淡黄	密	良好	(29.2)	(7.1)	口縁部1/4	(外)口縁強いヨコナデ、頸部上ヨコナデ、頸部下ミガキ。北近畿系。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ケズリ。
87	甕	溝SD06 南岸下層	(外)10YR 6/3 にぶい黄橙 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	(14.8)	(7.4)	1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部ハケ。頸部に列点文。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ハケ。
88	甕	溝SD06 南岸下層	(外)10YR 7/2 にぶい黄橙　一部N 2/0 黒 (内)10YR 7/2 にぶい黄橙	密	やや軟	(12.6)	14.1	1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)磨滅が激しく調整不明。
89	甕	溝SD06 南岸下層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙　7.5YR 5/1,4/1 褐灰 (内)7.5YR 7/4 にぶい橙　7.5YR 6/1 褐灰	やや粗	良好	(15.4)	(6.0)	1/4	(外)口縁タタキ後ナデ。胴部タタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部タテ方向板ナデ。
90	甕	溝SD06 南岸下層	(外)10YR 6/4 にぶい黄橙　N 2/1 黒 (内)2.5Y 6/3 にぶい黄	密	良好	6.8	(19.0)	底部完形	(外)頸部ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)ヨコ方向ハケ。
91	長頸壺	溝SD06 南岸下層	(外)5YR 5/6 明赤褐 (内)7.5YR 5/4 にぶい褐	密	良好	(12.0)	(13.9)	口縁～胴部1/4	(外)口縁ハケのちヨコナデ、頸部～胴部上半タテハケ、胴部下半ミガキ。一部煤化。 (内)口縁端部ヨコナデ、口縁～頸部ヨコハケ、胴部ナデ。胴部ユビオサエ。
92	高杯	溝SD06 南岸下層	(外)5YR 6/6 橙 (内)5YR 5/8 明赤褐	密	良好	(26.0)	(6.2)	杯部1/2	(外)口縁、3条の沈線が断続的に残る。胴部ミガキ。北近畿系。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ミガキ、ほとんど磨滅している。
93	短頸壺	溝SD06 南岸下層	(外)5YR 6/8 橙 (内)10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	(13.6)	(13.7)	口縁～胴部3/4	(外)口縁ユビオサエ、全体的にミガキ、一部うすい黒斑。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ、所々剥落している。胴部工具圧痕、指頭圧痕あり。
94	壺	溝SD06 北岸下層	(外)7.5YR 8/4 浅黄橙 (内)7.5YR 8/4 浅黄橙	やや粗	良好	(22.0)	(16.3)	1/8	(外)口縁～頸部ヨコナデ、胴部タテ方向ハケ、磨滅が激しい。 (内)口縁上部器面剥落のため調整不明。口縁下部ヨコナデ、磨滅が激しいため調整不明。胴部ヨコ方向ケズリ。
95	甕	溝SD06 北岸下層	(外)10YR 5/3 にぶい黄褐 (内)10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	(11.6)	(11.3)	1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。一部煤化。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ。接合痕あり。
96	甕	溝SD06 北岸下層	(外)10YR 5/2 灰黄褐 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	4.2	(5.2)	底部のみ完形	(外)タタキ、底部付近磨滅している。 (内)まばらなハケ、ユビオサエ跡あり。

第５表　出土遺物観察表（５）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
97	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 6/2 灰黄褐 (内)5Y 7/2 灰白	密	良好	(14.4)	17.4	1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ハケ。
98	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 6/2 灰黄褐(内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	(13.8)	15.5	1/3	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ。接合痕が見られる。
99	甕	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙 (内)10YR 7/4 にぶい橙	密	やや軟	12.2	12.3	ほぼ完形	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)口縁端部のみヨコナデ、残りナデ。
100	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 4/1 褐灰 (内)2.5Y 4/1 黄灰	密	良好	(11.8)	(4.1)	2/3	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。頸部ユビオサエ。 (内)細かいハケ、ユビオサエ。
101	甕	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙 10YR 2/1 黒 (内)7.5YR 7/3 にぶい橙	やや粗	やや軟	(14.9)	(4.8)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。一部磨滅。 (内)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。
102	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 5/3 にぶい黄褐 (内)2.5Y 5/2 暗灰黄	密	やや良	(13.8)	(4.9)	2/3	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部ナデ。
103	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 7/3 にぶい黄橙 2.5YR 3/1 黒褐 (内)10YR 8/3 浅黄	やや粗	やや軟	(14.8)	(7.3)	口縁部1/4	(外)口縁ヨコナデ、胴部タタキ、一部ナデ。 (内)口縁ヨコナデ。上から板ナデで整えている。
104	甕	溝SD06 最下層	(外)2.5Y 7/2 灰黄 (内)2.5Y 8/2 灰白	密	良好	(16.0)	(13.5)	1/2	(外)口縁ヨコナデ、胴部粗いタタキ。 (内)口縁ヨコナデ、胴部上半ユビオサエ、接合痕、胴部下半粗いハケ。
105	広口壺	溝SD06 最下層	(外)5Y 7/1 灰白 (内)2.5Y 6/3 にぶい黄	やや密	良好	(13.8)	23.6	1/6	(外)口縁ヨコナデ、胴部ハケ。胴部下半に炭素が吸着している。 (内)口縁ヨコ方向ハケ、胴部上半、左上斜め方向ハケ、胴部下半タテ方向ハケ。
106	広口壺	溝SD06 最下層	(外)10YR 7/2 にぶい黄橙 (内)2.5Y 7/2 灰黄	密	良好	(17.2)	(7.5)	口縁部1/4	(外)口縁端部凹線、磨滅している。口縁上半強いヨコナデ、口縁下半～胴部ミガキ。 (内)ヨコ方向ミガキ、工具圧痕、ユビオサエ跡あり。
107	壺	溝SD06 最下層	(外)N 3/0 暗灰 (内)7/5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	(18.0)	(6.3)	口縁部1/4	(外)口縁ナデ、胴部タタキ。 (内)口縁ナデ、胴部粗いハケ。
108	広口壺	溝SD06 最下層	(外)10YR 8/2 灰白 (内)10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	(18.8)	(3.7)	1/8	(外)ヨコナデ。 (内)ヨコナデ。
109	壺	溝SD06 最下層	(外)10YR 6/2 灰黄褐 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	7.2	(5.8)	口縁部のみほぼ完形	(外)口縁端部凹線、口縁ヨコナデ。胴部ハケのちミガキ。 (内)口縁ミガキ、胴部ナデ。
110	壺	溝SD06 最下層	(外)10YR 6/2 灰黄褐 (内)2.5Y 6/3 にぶい黄	密	良好	(13.0)	(4.8)	口縁部2/3	(外)強いヨコナデ。口縁下に指頭圧痕あり。 (内)強いヨコナデ、胴部一部にハケ。
111	甕	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 8/3 浅黄橙 (内)10YR 8/1,8/2 灰白色	やや粗	やや軟	(6.0)	(4.9)	1/6	(外)口縁端部強いヨコナデ、頸部ヨコナデ、胴部刺突文。 (内)ヨコナデ、一部ユビオサエ。
112	甕	溝SD06 最下層	(外)2.5Y 8/2 灰黄 (内)2.5Y 8/2 灰黄	密	やや軟	(16.2)	(4.2)	口縁部1/8	(外)口縁擬凹線、頸部ヨコナデ。口縁形状から吉備系と思われる。 (内)口縁ヨコナデ、頸部より下の磨滅が激しい。
113	甕	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 5/1 褐灰 (内)N 4/0 灰	密	良好	(3.3)	(8.7)	底部～胴部3/4	(外)タタキ。底部付近ナデ。 (内)ハケ。
114	甕	溝SD06 最下層	(外)10YR 5/1 褐灰 (内)10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	(2.8)	(8.3)	3/4	(外)胴部上タタキ、胴部中ほどナデ、胴部下タタキ。 (内)胴部上半ナデ、胴部下半ハケ。ナデとハケの境界に工具圧痕あり。
115	瓢形壺	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 8/4 浅黄橙 (内)5YR 7/6 橙	密	良好	2.3	(8.2)	胴部のみ残存	(外)胴部上半タテ方向ミガキ、胴部中ほどヨコ方向ミガキ、胴部下半ミガキ、底部ナデ、1点穿孔あり。外面磨滅。東海系の瓢壺。 (内)頸部付近ヨコナデ、胴部上半に器具の圧痕あり。胴部下半ヨコ方向と左上方向ハケ。
116	無頸壺	溝SD06 最下層	(外)口縁 5YR 8/3 淡橙 胴 10YR 8/2 灰白 (内)5YR 8/4 淡橙	粗	軟	(11.0)	(4.9)	口縁部1/6	(外)口縁ヨコナデ、胴部ヨコ方向ミガキ、磨滅激しい。 (内)口縁ヨコナデ、胴部磨滅が激しい、一部ナデ。
117	台付鉢	溝SD06 最下層	(外)7.5YR 6/4 にぶい橙 (内)7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密	良好	9.5	6.1	完形	(外)ナデ、磨滅が激しい。 (内)ナデ。
118	高杯	溝SD06 最下層	(外)2.5Y 7/2 灰黄 (内)2.5Y 7/2 灰黄	密	良好	(16.0)	(11.4)	4/5	(外)口縁ヨコハケ、杯部ハケのちミガキ、脚部ハケ、裾部ミガキ、4方向透かし孔、裾端部ヨコハケ。 (内)口縁ヨコミガキ、杯部ミガキ、脚部
119	高杯	溝SD06 最下層	(外)10YR 7/2 にぶい黄橙 (内)2.5Y 7/3 浅黄	密	良好	(19.0)	(7.7)	1/2	(外)脚部ミガキ、裾部ミガキ、裾端部ヨコナデ。 (内)裾端部ヨコナデ、中央部ナデ。
120	高杯	溝SD06 最下層	(外)10YR 7/2 にぶい浅黄 (内)10YR 7/2 にぶい浅黄	やや粗	やや軟	(18.7)	(5.6)	口縁部1/8	(外)口縁端部ナデ、胴部タテ方向ミガキ、一部磨滅が激しい。 (内)口縁端部ナデ、胴部タテ方向ミガキ。全体的に磨滅している。

第６表　出土遺物観察表（６）

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法量 口径等	器高	残存率	調整・備考
121	高杯	溝SD06 最下層	(外)5YR 7/6 橙 (内)5YR 7/6 橙 2YR 7/3 にぶい黄橙	やや粗	良好	—	(5.0)	1/8	(外)タテ方向ミガキ、屈曲部ヨコナデ。 (内)タテ方向ミガキ、磨滅が激しい。
122	高杯	溝SD06 最下層	(外)10YR 7/6 灰黄褐 (内)2.5Y 7/6 橙	密	良好	(18.4)	(5.7)	1/8	(外)口縁～胴部ヨコ方向ミガキ。底部磨滅が激しい。外面の口縁部に黒斑が見られる。 (内)口縁ヨコ方向ミガキ、胴部タテ方向とヨコ方向ミガキ。
123	鉢	溝SD06 最下層	(外)10YR 8/3 浅黄橙 (内)10YR 7/3,6/3 にぶい黄橙	粗	軟	(14.7)	(9.7)	1/6	(外)ナナメ方向ハケ後タテ方向ハケ。底部付近、焼成前に外側から内側へ穿孔を施している。胴部下半に黒斑。 (内)器面剥落と磨滅が激しい。
124	鉢	溝SD06 最下層	(外)5YR 8/4 淡橙 10YR 8/2 灰白 7.5YR 4/1 褐灰 (内)5YR 7/6 橙	やや粗	やや軟	(13.3)	(10.5)	1/8	(外)口縁端部剥落、磨滅が激しい。胴部ユビオサエとタテ方向ハケ。磨滅が激しい。底部付近、焼成前に外側から内側へ穿孔を施している。 (内)下から上方向ハケ、器面剥落、磨滅が激しい。
125	有段口縁壺	自然流路NR03 上部覆土層	(外)5YR 6/4 にぶい橙 (内)2.5Y 6/1 黄灰	密	良好	18.4	9.5	1/4	(外)口縁強いヨコナデ、頸部ハケ。 (内)口縁強いヨコナデ、頸部ヨコナデ。
126	広口壺	自然流路NR03 上部覆土層	(外)10YR 6/2 灰黄褐 (内)10YR 6/1 褐灰	密	良好	(14.6)	(3.0)	1/6	(外)口縁ヨコナデ、竹管文あり。口縁下ヨコナデ後ハケ。接合痕あり。 (内)ヨコナデ、磨滅が激しい。
127	鉢	自然流路NR03 上部覆土層	(外)10YR 6/3 にぶい黄橙 (内)10YR 4/2 灰黄褐	やや粗	良好	30.2	19.6	1/2	(外)口縁付近ヨコナデ、胴部タテ方向ミガキ。底部磨滅のため調整不明。外面磨滅が激しい。底部付近一部黒斑がある。 (内)口縁ヨコナデ、胴部上半ヨコ方向ミガキ。胴部下半～底部、タテ方向ミガキ。
128	甕	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 7/3 にぶい橙 一部 7.5YR 3/1 黒褐 (内)10YR 8/2 灰白	密	良好	(22.0)	(6.4)	1/3	(外)口縁ヨコナデ、頸部下タテナデ、タタキ。内面・外面に接合痕が見られる。 (内)口縁ヨコナデ、胴部上半ミガキと一部ナデ。
129	甕	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 6/3 にぶい褐 (内)7.5Y 7/4 にぶい橙	密	やや良	3.4	(12.0)	体部1/4	(外)タタキ。胴部中央に焼成後穿孔した痕跡のものが見られる。 (内)強い板ナデ。黒斑あり。
130	甕	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 8/1 灰白 一部 2.5Y 2/1 黒 (内)7.5Y 8/1 灰白	密	良好	(5.0)	(13.2)	底部のみ完形	(外)胴部タタキ、左上方向のハケ。胴部下方タテ方向ハケ後ナデでタタキを消している。底部に穴あり。黒斑が見られる。 (内)胴部不定方向ハケ、底部タテ方向ハケ。
131	底部	自然流路NR03 上部覆土層	(外)2.5Y 4/1 黄灰 (内)2.5Y 6/2 灰黄	密	良好	5.3	(2.5)	底部のみ	(外)ハケ、ヨコナデ、器具の圧痕(ハケ)。磨滅が激しい。 (内)ハケ、内面一部器面剥落。
132	底部	自然流路NR03 上部覆土層	(外)5YR 5/4 にぶい赤褐 (内)5YR 5/6 明赤褐	密	良好	(4.0)	(2.5)	底部のみ完形	(外)タテ方向ミガキ、ヨコ方向ナデとユビオサエの跡も見られる。底部未調整。 (内)タテ方向ハケ。
133	底部	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 7/3 にぶい橙 (内)7.5YR 6/3 にぶい褐	密	良好	3.8	(6.8)	底部のみ完形	(外)磨滅・器面剥落が激しく、調整不明。底部ヨコナデ・ナデ。一部に黒斑、底部に焼成前に穿孔された孔が1点。 (内)タテ方向ハケ。
134	把手付台付鉢	自然流路NR03 上部覆土層	(外)10YR 6/2 灰黄褐 (内)10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	18.8	14.7	鉢部1/4 台部完形	(外)口縁端部に沈線あり。口縁ミガキのちヨコナデ。体部ミガキ、脚部ケズリのちナデ、脚裾部ヨコナデ。把手部分ナデ。把手1点残存、もう一個ついていた可能性あり。 (内)口縁ミガキのちヨコナデ、体部ミガキ、脚部付け根ナデ、脚部ケズリ。口縁付近にうすい黒斑
135	高杯	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 6/6 橙 (内)5YR 6/6 橙	密	良好	脚柱部径5.2	(12.6)	脚部のみ	(外)外面に凹線が刻まれている。磨滅のため調整不明、凹線も不明瞭。 (内)粘土が充填されている。内面に絞りの跡が見られる。
136	高杯	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 4/2 灰褐 (内)10YR 5/3 にぶい黄褐	密	良好	脚柱部径6.6	(13.5)	脚柱部のみ	(外)器面磨滅が激しい。縦位ミガキ。 (内)磨滅が激しい、一部ヨコナデ。杯部底部、磨滅のため調整不明。
137	高杯	自然流路NR03 上部覆土層	(外)7.5YR 7/4 にぶい橙 (内)7.5Y 7/4 にぶい橙	密	良好	14.0	(9.8)	脚部のみ3/4	(外)杯底部磨滅のため調整不明。脚部タテヘラケズリのちミガキ。 (内)脚上部シボリメ、脚部ハケ。
138	高杯	自然流路NR03 上部覆土層	(外)10YR 8/2 灰白 (内)10YR 7/2 にぶい黄褐	密	良好	(13.4)	(3.1)	底部1/2	(外)ハケ後ミガキ、裾部ハケ・ミガキ後ヨコナデ。縁に刻み、線刻あり。表面から開けられた孔あり。 (内)ヨコナデ。
139	台付鉢	自然流路NR03 上部覆土層	(外)10YR 4/3 にぶい黄褐 (内)7.5YR 5/2 灰褐 一部 7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	(8.6)	(7.1)	底部1/4	(外)器面剥落と磨滅が激しい。わずかにハケ目が見られる。裾部ヨコナデ。 (内)上半ユビオサエの跡、裾部ヨコナデ。

Ⅴ．まとめ

今回の第28次調査の調査成果を、平等坊・岩室遺跡およびその周辺におけるこれまでの調査による知見を踏まえて概観しておきたい。

環　濠

第28次調査溝SD06、SD07は集落北側の環濠帯の一部を構成すると思われる。周辺でこれまでに確認された遺構をみると、第８次調査SD02（弥生時代後期）（青木1996）、第12次調査SD01・SD03（弥生時代中期後半）（青木1996）などが関連する可能性があるだろう。今回の第28次調査SD06、SD07の北には自然流路NR01がある。これより北方の微高地上には方形周溝墓状遺構、井戸SE01などが見られるのみで弥生時代の遺構密度は高くない。基本的には集落の北側縁辺の状況を反映していると考えられる。

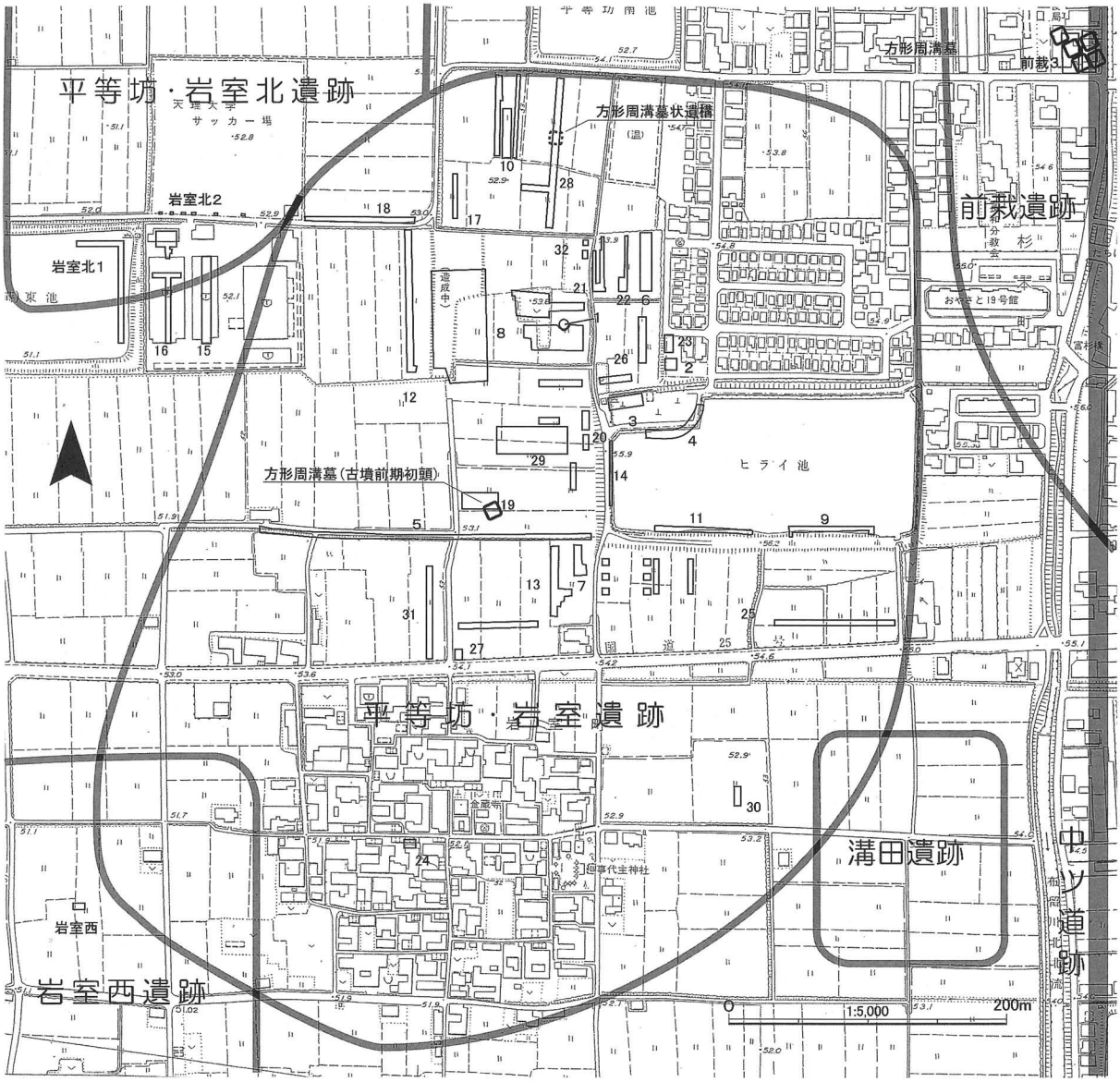
自然流路

第28次調査で検出した自然流路NR02は、これまで平等坊・岩室遺跡の北部で実施された調査で確認されてきた自然流路との関連が想定されるものである。まず、第28次調査地の東では、第22次調査NR01（青木2005）、および第６次調査「河道部」（松本1983）において、弥生時代中期～奈良時代の遺物を包含する流路が確認されている。また、第28次調査地の西では、第17次調査NR01・02（青木2003）、第18次調査「自然河川」（松本2003）において、同様に弥生時代中期～平安時代の遺物を包含する流路が確認されている。それぞれの流路で確認された出土遺物の時期は第28次調査NR02と同様であり、一連の流路である可能性が高い。集落域の北辺を北側に大きく蛇行しながら西流する自然流路を想定することができる。

方形周溝墓状遺構

今回の第28次調査では、第１調査区の中央付近で、弥生時代中期の完形土器群を伴う溝を検出し、方形周溝墓に伴う可能性があると考えた。想定される規模は一辺約９ｍ程度に復元される。このほかに方形周溝墓の可能性がある遺構は検出できておらず、通有の方形周溝墓が複数で群を構成する点からすると問題を残すが、溝内からの土器群の出土状況を重視してこのように判断した。

第21図　平等坊・岩室遺跡北部の様相



第22図　方形周溝墓の検出地点

平等坊・岩室遺跡では、第19次調査（松本1999）において古墳時代前期初頭の方形周溝墓を検出しているほかに方形周溝墓の検出例が無く、墓域の位置が問題であった。周辺では、これまでに北東約400mの地点にある前栽遺跡第３次調査（松本1998）において弥生時代中期中葉の方形周溝墓５基が検出されており、この付近を平等坊・岩室遺跡の墓域と想定していた。今回の第28次調査で方形周溝墓の可能性のある遺構が検出されたことにより、集落の北側一帯に墓域を点在させていた可能性を新たに考えられるようになった。この想定の当否は今後の調査を通じて明らかにされていくだろう。

７世紀代の瓦

平等坊・岩室遺跡では、これまでに第８次調査や第10次調査（青木1993）において、奈良時代前後の掘立柱建物などが検出されており、当該時期の寺院もしくは官衙に類する施設が存在したことが推定されている。今回の第28次調査区北半は第10次調査区のすぐ東側に隣接するが、第10次調査区で確認されたような奈良時代の掘立柱建物は検出されなかった。この付近が微高地であることから、後世の削平が及んでいる可能性も考えられる。なお、第28次調査では７世紀後半に属する素弁蓮華文軒丸瓦

片が出土した。平等坊・岩室遺跡における古代瓦の出土例のなかでも最古のものであり、存在が推定される当該時期の施設との関連が注目されるところである。（石田大輔）

〔参考文献〕

第６次　松本洋明1983「天理市平等坊・岩室遺跡第６次調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度第１分冊　奈良県立橿原考古学研究所

第８次　青木勘時1996「平等坊・岩室遺跡（第８・11・12次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成４・５年度　天理市教育委員会

第10次　青木勘時1993「平等坊・岩室遺跡（第10次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成４年度・国庫補助調査　天理市教育委員会

第12次　青木勘時1996「平等坊・岩室遺跡（第８・11・12次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成４・５年度　天理市教育委員会

第17次　青木勘時2003「平等坊・岩室遺跡（第17次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成８・９年度　天理市教育委員会

第18次　松本洋明2003「平等坊・岩室遺跡（第18次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成８・９年度　天理市教育委員会

第19次　松本洋明1999「平等坊・岩室遺跡（第19次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成10年度・国庫補助調査　天理市教育委員会

第22次　青木勘時2005「平等坊・岩室遺跡（第22次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成14・15年度・国庫補助事業　天理市教育委員会

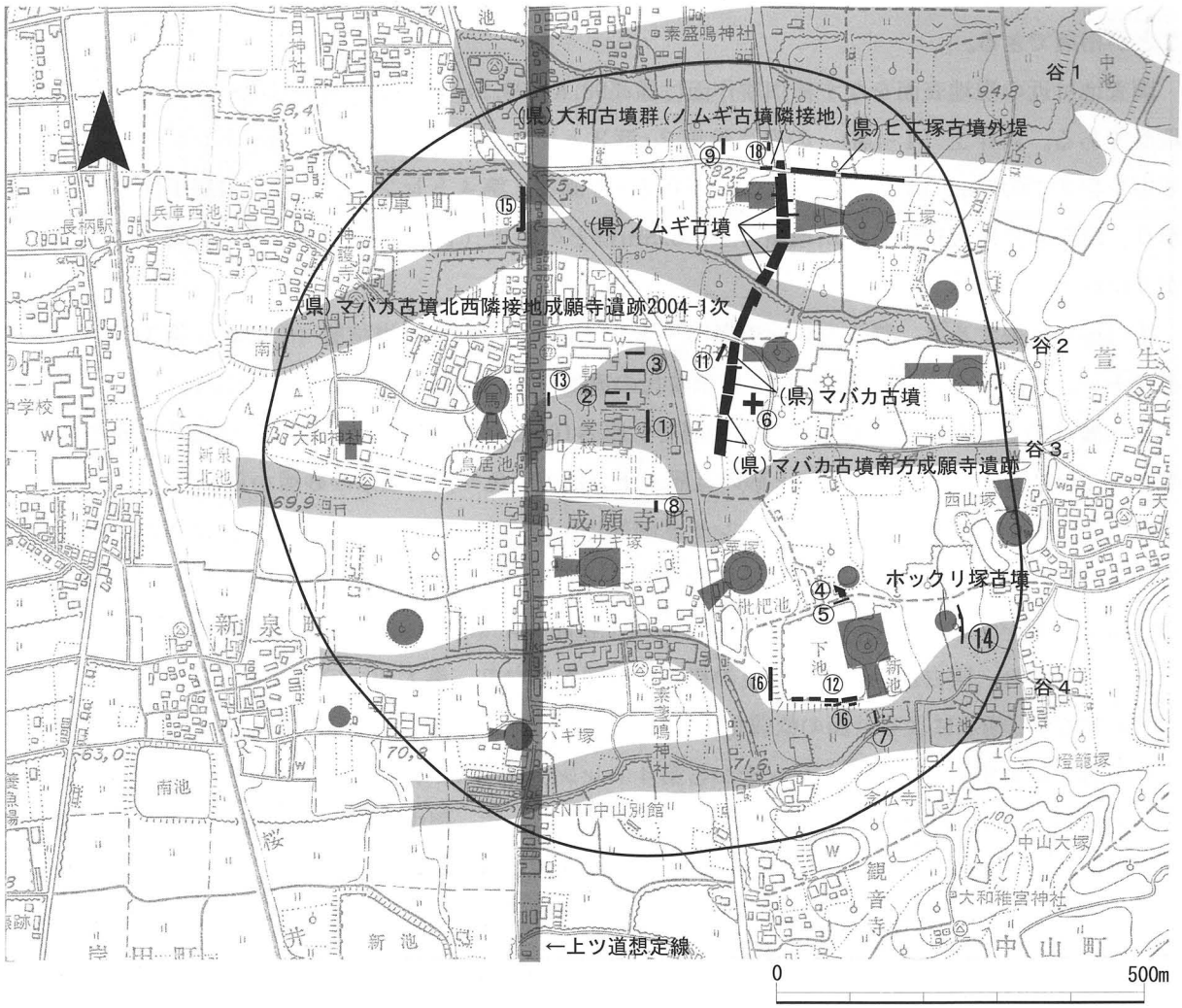
前栽遺跡第３次　松本洋明1998「前栽遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成６・７年度　天理市教育委員会

2．成願寺遺跡（第14次）

Ⅰ．調査の契機と経過（第23図・第25図）

今回の調査は、天理市南部の萱生町における市道敷設に伴う調査として実施したものである。調査対象地は成願寺遺跡に該当するほか、ホックリ塚古墳（円墳、直径約25m）に近接する。このため、関連する遺構や遺物包含層の有無確認、また市道敷設時に極力遺構を保護する工法を取るために、遺物包含層・遺構面までの深さを知ることを目的として、発掘調査を行った。

調査対象地は、柿畑の中に帯状の空閑地を設けて、通路として利用されてきた場所であり、今回の調査はこの通路を市道として整備する工事に先立つものである。このため、調査対象地間際にまで柿畑が迫っていることから、調査区の幅を十分に確保することが困難であり、結果的には幅１ｍの狭長な調査区を設定し、部分的に拡張する形での調査となった。南北に長い対象地内に、周囲の地形や埋設物の位置などを考慮して、食い違い部や屈曲部を伴う形で調査区を設定した。トレンチ北端から墳丘北側の食い違い部までを第１トレンチ、墳丘北側の食い違い部から墳丘東側の屈曲部までを第２ト



第23図　成願寺遺跡調査区配置・旧地形復元図（S=1/10000）

レンチ、墳丘東側の屈曲部から墳丘南側の食い違い部までを第３トレンチ、それ以南を第４トレンチとした。また、第４トレンチからやや南方に離れて、墳丘南側に現存する谷地形の肩部を確認するためのトレンチを設定し、第５トレンチとした（第25図）。

現地では平成18年６月12日に調査を開始し、同年７月18日に全ての作業を終了した。調査対象地内での総調査面積は、約100㎡であった。

Ⅱ．調査の概要

１．基本層序（第24図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査においては、第２～第３トレンチで遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）の下方に比較的安定した基盤層（Ⅳ層）を検出したが、北側（第１トレンチ）及び南側（第４・第５トレンチ）では砂礫を伴う河川性の堆積（Ⅰ-2層及びⅡ-2層）が深く、底をなす安定地盤は検出することができなかった。このことからは、第２・第３トレンチ付近に北東～南西方向にのびる尾根が存在し、その北側及び南側は地形的に大きく落ち込んで谷地形をなす、という旧地形が復元できる。また、第２・第３トレンチはホックリ塚古墳墳丘に近接することから、ホックリ塚古墳築造場所の選地にあたり、地盤の安定した尾根上が選択されたことが指摘できる。

調査地付近の現地表面をなす柿畑耕作面は標高98.8～99.9mを測り、南から北へ向かって高くなる地形である。耕作土（Ⅰ-1層）の厚さは第２・第３トレンチで0.2～0.4m、第１トレンチ北半及び第４トレンチで0.8m、第５トレンチで0.3～0.7mを測る。第４トレンチでは、Ⅰ-1層下面が段状に下がり、段以南では後述する河川堆積の上に0.5mほどの盛土（Ⅰ-1層下半）を施して整地している様子がうかがえる。

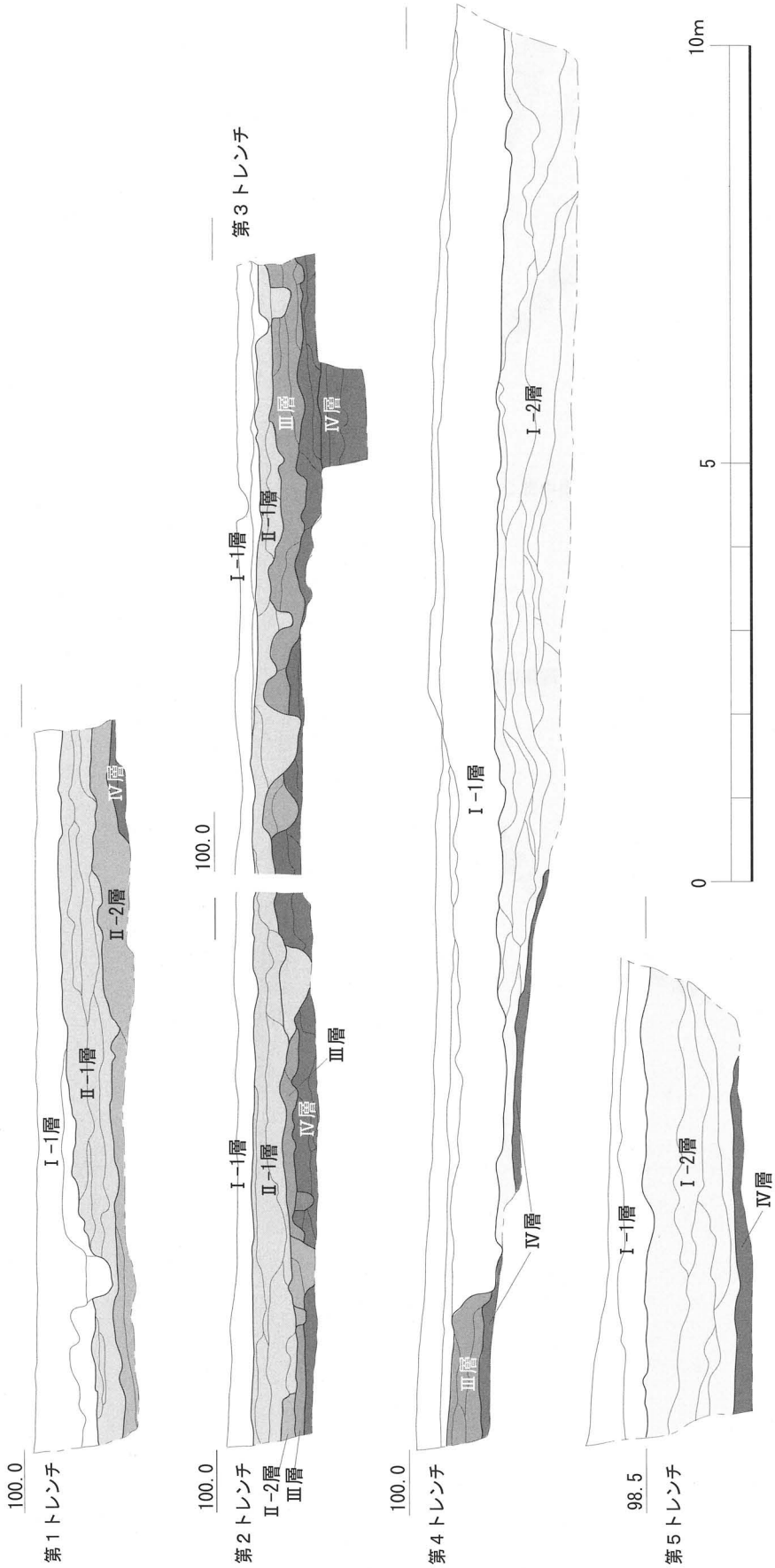
Ⅰ-1層を除去すると、第４トレンチ南半～第５トレンチでは河川堆積層（Ⅰ-2層）、第１トレンチ～第４トレンチ北半では弥生時代後期～古墳時代の遺物を含む包含層（Ⅱ-1層）が現れる。

Ⅰ-2層は中近世の遺物を含む河川堆積層で、厚さ100cm以上を測る。上方は灰黄色系の砂礫と微砂の互層、中ほどは黒褐色系の砂礫と砂の互層、下方は黄灰色～褐灰色系の砂層からなる。

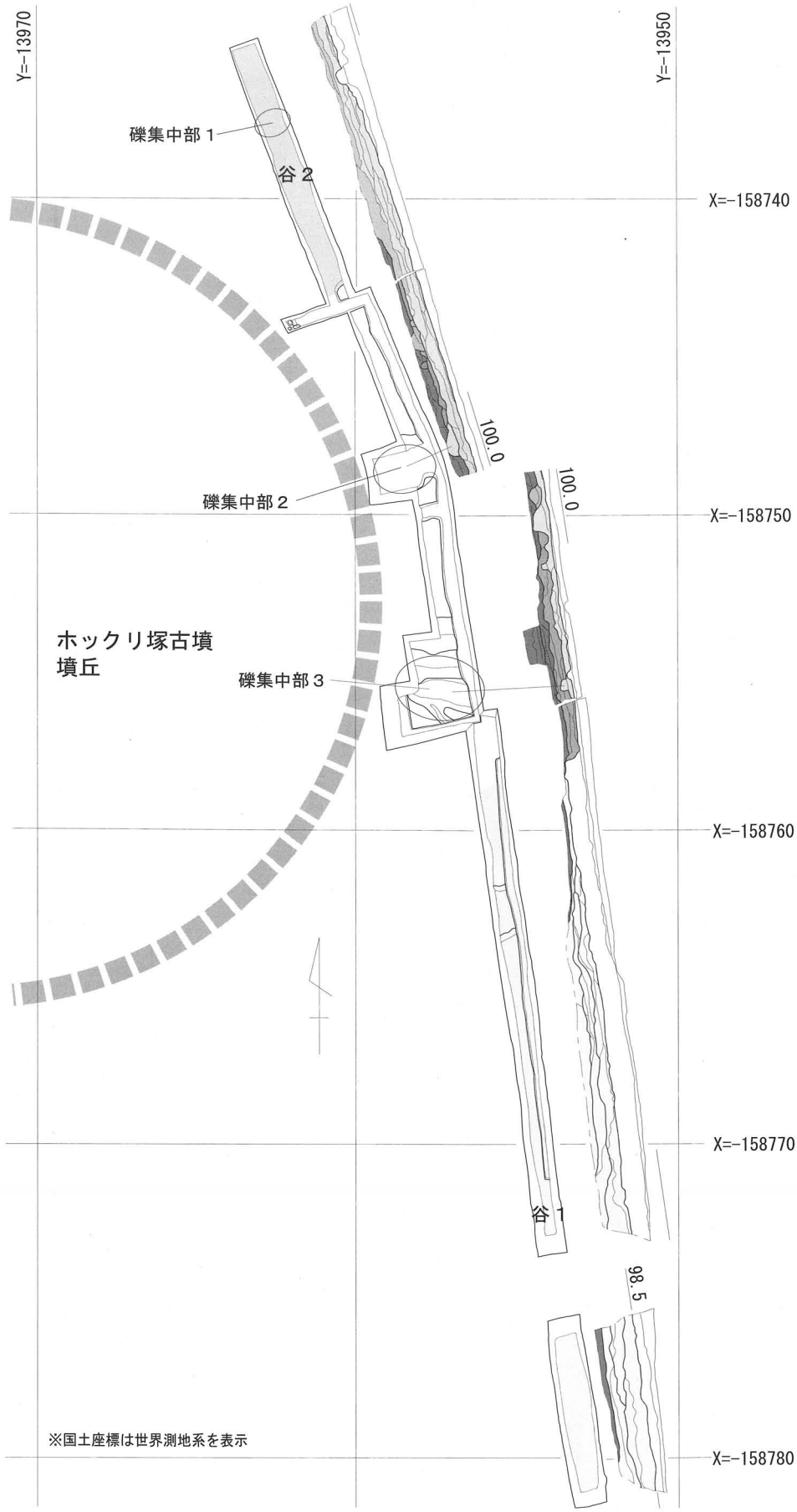
Ⅱ-1層は第１トレンチから第４トレンチ北端部にかけて存在する遺物包含層で、厚さ15～50cmを測る。灰黄色～黒褐色系の砂～砂質シルトを主体とする層中には、弥生時代後期後半段階の土器片を含む。第１トレンチにおいてはⅡ-1層下方に河川堆積層（Ⅱ-2層）が存在し、同じく弥生後期後半段階の土器片を含む。灰白色～にぶい黄色の粗砂～砂礫からなり、拳大前後の礫を多く含む。層厚は50cm以上を測るが、湧水による壁面の軟弱化が著しく、危険防止のためⅡ-2層途中で掘削を中止している。

Ⅱ-1層を除去すると、第２トレンチから第４トレンチ北端にかけて、にぶい黄褐色～黄灰色系の砂～砂質シルトを主体とする遺物包含層（Ⅲ層）があらわれる。層中には、弥生時代中期末～後期前半の土器片を含み、層厚は10～35cm前後を測る。

Ⅲ層の下部は全く遺物を含まない土層（Ⅳ層）となる。Ⅳ層は第２～第４トレンチ北端ではにぶい黄色～黄褐色系の極めてしまりの強い細砂～砂質シルト、第１・第４・第５トレンチでは黒褐色粘土からなる。完掘後に第３トレンチ南端付近で深掘りによる補足調査を実施したところ、前者の下方で後者を検出しており、前者を尾根上に形成されたベース層、後者を基盤層となる地山と捉えることが



第24図　トレンチ東壁土層断面図（S=1/80）



第25図　遺構配置図および土層断面図（S=1/200）

できよう。前者の層厚は最大で30cm弱を測る。

2．主な遺構と遺物（第25～29図）

今回の調査区はホックリ塚古墳に極めて近接しており、古墳に伴う遺構の検出が期待されたが、調査区内では明確な人為的遺構を検出することはできなかった。自然の営力の所産として調査中に注目されたものには、礫集中部３か所と谷２条がある。谷２条のうち南側の１条は、Ⅱ-1層上面を検出面として中世の遺物を含むが、北側の１条及び礫集中部はⅢ層上面を検出面として、遺物を含まないものと弥生時代後期後半代の遺物を含むものがある。

谷　　１（図版13）

第４トレンチ北半部に肩を持ち、南へ下がっていく谷地形である。第５トレンチ南側の調査区外に広がるため、南側の肩は検出できていないが、現状地形は調査地南側の現流路を谷底として下がっており、谷１についても同様の傾向を示すものと思われる。遺物は中世の東播系須恵器のほか、小片のため図示していないが土師器羽釜片や土師皿片などを含む。

１は東播系須恵器擂鉢の口縁部～体部片である。体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部は上下にツマミ出して端部は幅広の面をなす。口縁端面が大きく外反する部分があり、片口部の端に当たると思われる。口縁端面には部分的に自然釉の付着がみられる。また、内面の下端は使用による器面の荒れが著しい。

谷　　２（図版14）

第１トレンチ南端部に肩を持ち、北へ下がっていく谷地形である。第１トレンチ北側の調査区外に広がるため、北側の肩は未検出である。Ⅱ層下部のⅡ-2層を埋土とし、遺物は細片を含むのみで時期の特定は困難であるが、上層のⅡ-1層に弥生時代後期後半代の遺物を含むことから、谷２の時期の下限を当該期に求めることが可能であろう。

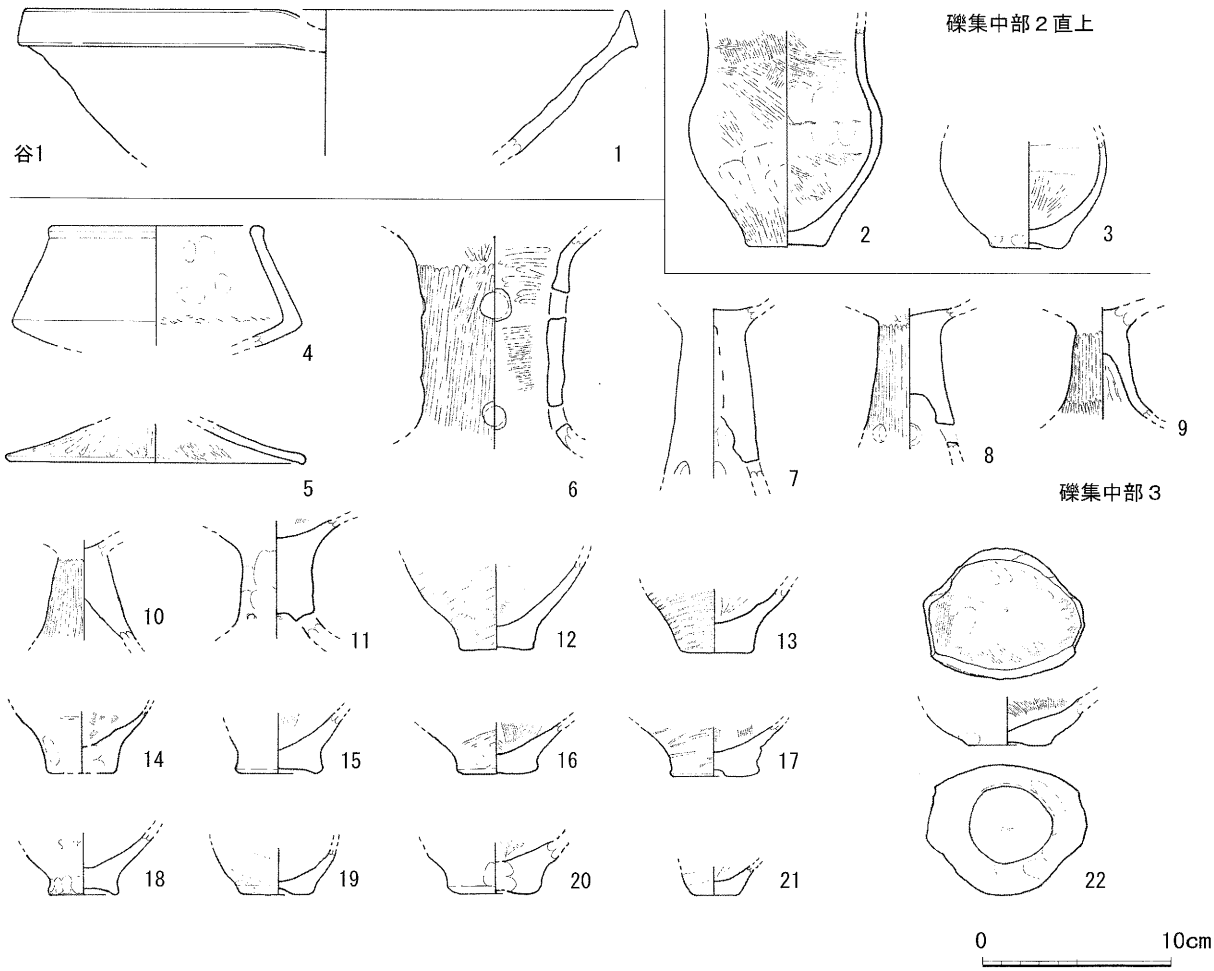
礫集中部１（図版14）

第１トレンチで検出した礫集中部である。幅30cm前後、厚さ20cm前後を測り、最大で長径20cm程度の礫が帯状に集中する。旧耕作土の直下、Ⅱ層の上面に形成されたもので、礫層中に遺物を含まない。礫の堆積状況に規則性や人為性も認め難いことから、自然の営力によって形成された礫集中部であると考えられる。

礫集中部２（図版14・15）

第２トレンチ南端で検出した礫集中部である。幅70cm前後、厚さ45cm前後を測り、最大で長径10～15cm程度のやや小ぶりな礫が帯状に集中する。礫層の上面で、弥生時代後期後半の壺片が出土した。礫の堆積状況に規則性・人為性は認め難く、自然の営力により形成された礫集中部と考えられる。

２・３は弥生土器の壺である。２は長頸壺の底部～頸部片である。やや突出する平底の底部から球形の胴部が立ち上がり、頸部は太くほぼ直立する。接合痕が胴部上半の内面にみられ、この接合痕を半ば消すように縦横のナデで成形したのち、内外面に縦位～左上がりのハケで調整する。頸部外面のハケは他の部分のそれに比べて密である。なお、胴部外面に黒斑を有する。３は底部～胴部最大径付近までの破片である。中央部が凹んでドーナツ状を呈する底部から球形の胴部が立ち上がる。外面は著しく磨滅しており、底部側面から胴部下端にかけて指頭圧痕が多くみられるのみである。内面は胴



第26図　各遺構出土遺物実測図（S=1/4）

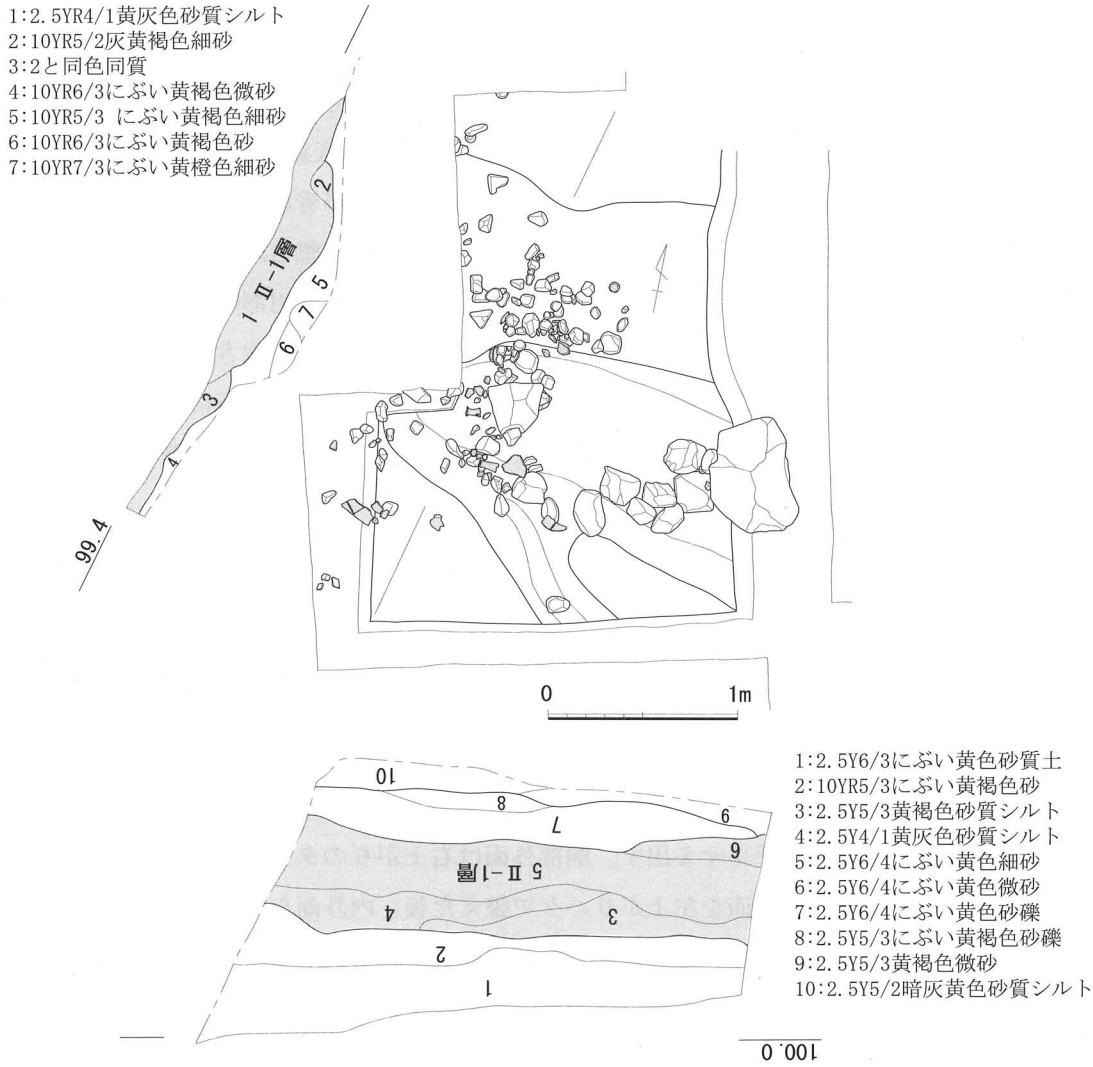
部下半に縦位ハケ、胴部最大径付近に横位ナデが看取される。

礫集中部３（第27図・図版15）

第３トレンチ南端で検出した礫集中部である。幅120cm前後、厚さ30cm前後を測り、おおむね長径20cmまでの礫からなるが、南側では長径50～120cmの大ぶりの礫が目立つ。礫層中に弥生時代後期後半ごろの土器片を多く含む。大型の礫を含むものの、堆積状況に規則性・人為性は認め難く、自然の営力により形成された礫集中部と考えられる。

４は鉢である。屈曲する胴部から口縁部が立ち上がり、口縁端部は平らな面を持つ。外面は磨滅が著しく調整が不明であるが、内面には縦横のナデが看取される。また、内面の屈曲部にはヘラ状工具痕がみられ、屈曲部以下の内面はヘラミガキ調整の可能性がある。全体に無文化しており、後期初頭に位置づけられる。５は高坏脚裾部である。やや外反して広がり、裾端部はツマミ上げる。外面に縦位ミガキ、内面に横位～左上がりハケを密に施す。６は器台である。体部はほぼ直立し、上方及び下方は大きく屈曲する。外面は縦位ミガキ、内面は上方を横位ミガキ、下方を横位ハケにより調整するほか、屈曲部の外面にわずかながら縦位ハケが看取できる。外面側から４方向２段にスカシ孔を穿つ。

７～11は高坏脚部である。７はやや長めで中空の脚柱部で、３方向に円形スカシ孔を穿つ。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、内面には成形時のシボリ痕が顕著に残り、脚柱部下端にはシボリ



第27図　礫集中部３平面図（S=1/40）

痕を消す横位ナデが看取できる。８は７よりやや短い中実の脚柱部で、３方向に円形スカシ孔を穿つ。外面は縦位ミガキ、内面はヨコナデで調整され、成形時のシボリ痕跡を残さない。９は短く中空の脚柱部で、下方で大きく屈曲して脚裾部へ続く。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して坏底部とする。外面は縦位ミガキ、内面はヨコナデにより調整されるが、内面は成形時のシボリ痕がごくわずかに残る。10は開きの大きい中実の脚柱部で、下方でやや屈曲して脚裾部へ続く。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して坏底部とする。外面を縦位ミガキ、内面をヨコナデにより調整する。11はほぼ垂直にのびる短い中実の脚柱部である。脚柱部と脚裾部の境目付近に３方向の円形スカシ孔を穿つ。外面はヘラミガキがみられず、ナデのみで調整する。坏部内面にはナデおよび縦位ハケがみられる。

12～21は壺・甕の底部片で、このうち12～20は底部が突出する形態を示す。12･13は甕の底胴部で、いずれも平底である。12は底部側面をユビオサエで成形したのち、外面に右上がりタタキを施す。内面はおおむねナデ調整であるが、ところどころ横位～左上がりのハケが看取できる。13は外面に横位タタキ、内面に放射状の板ナデがみられる。14･15は壺底部か。14は平底で、内外面とも磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面に左上がり方向の板ナデ痕がわずかに看取される。胴部は薄手である。

15は底部縁辺をツマミ出す。器壁は厚手であるが胎土は砂粒を多く含んで粗く、底部側面～端面は磨滅が著しい。外面に指頭圧痕、内面に左上がり方向の板ナデがわずかに看取される。16～18は甕底部か。16は平底で、底部側面に指頭圧痕、底部～胴部外面に右上がり方向のタタキがみられる。内面は縦位～右上がりのハケ調整を施す。内面は使用により黒化する。17は底部中央付近が段を持って凹む。外面に右上がり方向の目の粗いタタキ、内面に左上がり方向のハケが看取される。18は底部縁辺をツマミ出し、丁寧なユビオサエによって形を整える。胴部外面もナデ調整されるが、内面は磨滅が著しく調整は不明である。19は壺底部である。底部の突出が弱く、中央部に円形のくぼみを持つ。全体に磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面にやや強い縦位ナデがわずかに看取される。20は平底の甕底部で、器壁は厚手である。内外面とも磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面に放射状ハケが看取される。内面は使用により若干黒化する。21は小形壺の底部で、内外面とも磨滅が激しく、指頭圧痕がわずかに看取されるのみである。

22は皮袋形土器の底胴部か。底部はほとんど突出せず、中心付近が段を持って凹む。胴部の立ち上がりは回転体をなさず、皮袋形土器のようにラグビーボール状の胴部になると思われる。外面には指頭圧やナデによって調整され、内面には左上がり方向のハケが看取される。

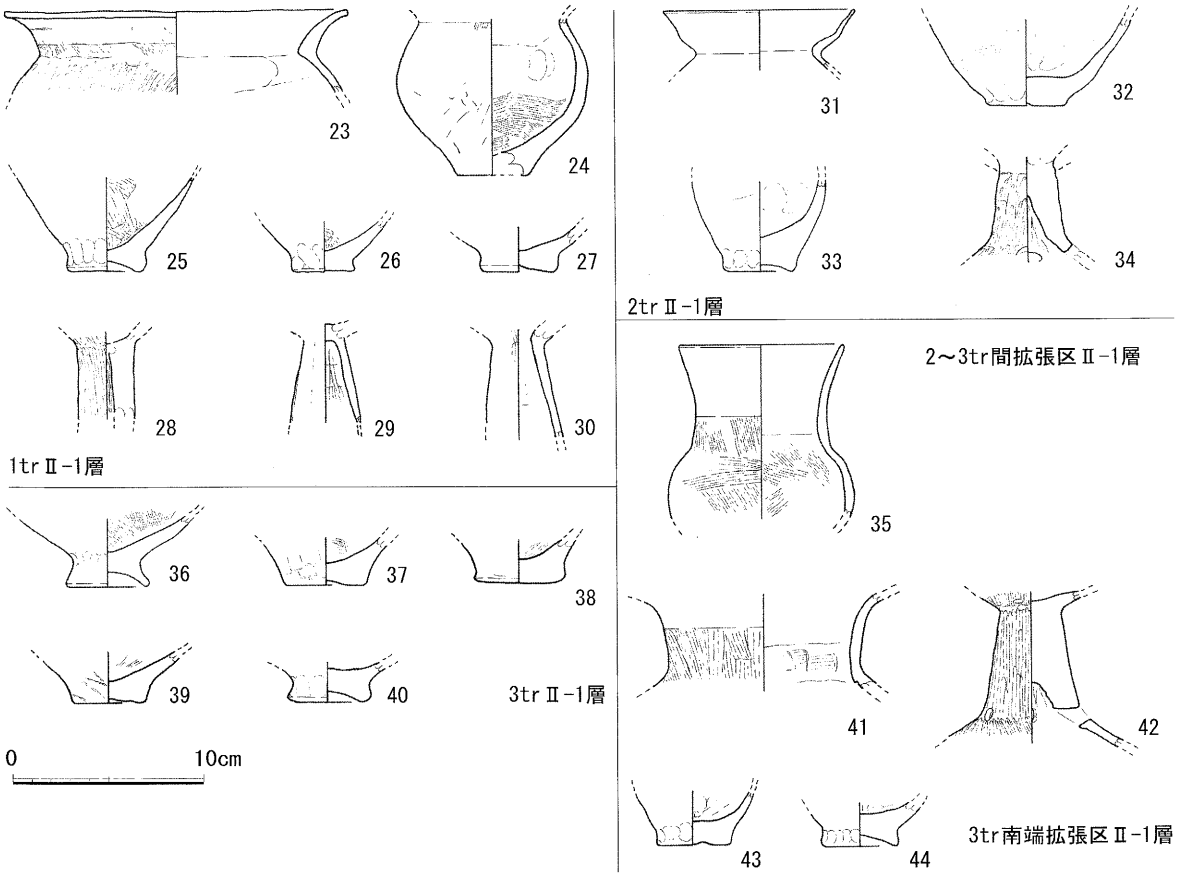
遺物包含層出土遺物

Ⅱ-1層　23～30は第１トレンチから出土した。23は甕の口頸部である。球形の胴部に外反する口頸部を接合しており、頸胴部界および口頸部上半に接合痕がみられる。頸胴部界は明瞭な稜を持って屈曲する。口縁端は外下方へ若干ツマミ出す。胴部外面は右上がりのタタキが明瞭に残り、内面は横位板ナデで調整する。口頸部は外面を左上がりハケで整えた後、内外面をヨコナデ調整する。24は小形壺の底部～胴部である。やや突出する底部から球形の胴部が立ち上がる。胴部上半には接合痕がみられ、器壁は法量に比して厚手である。外面は胴部下半に板ナデ、上半にわずかに縦位ハケがみられる。内面は胴部下半を横位ハケを施した後に上半を横位ナデし、頸胴部界には接合のための縦位ナデを施す。

25～27は甕・壺の底部である。25は底部の縁辺をツマミ出し、丁寧なユビオサエやナデにより形を整え、接地部には面取りを施し平らな接地面を作る。内湾する胴部の外面は磨滅が著しく調整不明であるが、内面は左上がりの板ナデを丁寧に施す。底部のほぼ半分とその上部にかけて大きな黒斑がみられる。26は突出する平底の底部で、底部側面を指頭圧により丁寧に整える。やや内湾する胴部は内外面とも磨滅が著しいが、内面の放射状板ナデがわずかに看取される。27は突出して中央部が若干凹む壺底部で、丁寧なユビオサエやナデにより形を整える。内面は使用により黒化する。

28～30は高坏脚柱部である。28は直立する中空の脚柱部で、器壁は厚い。外面は幅の狭い縦位ミガキを密に施し、内面には成形時のシボリ痕跡が明瞭に残る。29は中空の脚柱部で、器壁は薄く下に開く。外面は磨滅が激しく、面取りの単位がわずかにうかがえる。内面は成形時のシボリ痕跡をヨコナデで消すが、わずかに消え残る。30は29と類似するが、磨滅した外面に縦位ミガキがわずかにみられ、内面は横位ケズリによってシボリ痕跡を消す。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して坏底部とする。内面は黒みを帯びる。

31～34は第２トレンチから出土した。31は甕の口頸部である。口縁部下半は内湾して立ち上がり、上半は若干外反する。端部は丸くおさめる。内外面をヨコナデで調整する。32は壺の底部～胴部下半



第28図　Ⅱ-1層出土遺物実測図（S=1/4）

か。底部は突出しほぼ平底であるが、中心付近に凹みを持つ。底部側面は指頭圧で整える。胴部外面は磨滅するが、横位ハケがわずかにうかがえる。内面は縦位ナデにより調整する。33は小形壺の底部～胴部下半である。底部は突出し、縁辺を若干ツマミ出して指頭圧やナデにより丁寧に整える。内湾する胴部は内外面とも著しく磨滅するが、内面に指頭圧痕の輪郭がわずかに看取される。34は中空で下に開く高坏脚柱部である。外面は縦位ヘラナデ後に縦位ヘラミガキで調整し、内面はシボリ成形後に脚裾部をヨコナデ調整する。脚柱部と脚裾部の境付近に円形スカシ孔が穿たれ、配置から４方１段になると思われる。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して杯底部を構成する。

35は第２トレンチ～第３トレンチ間の拡張区で出土した壺である。35は口縁部～胴部最大径付近である。球形の胴部から、緩やかに外反する長い頸部が立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面とも胴部から頸部下半にかけて横位～左上がりのハケを施したのち頸部上半～口縁部をヨコナデ調整する。

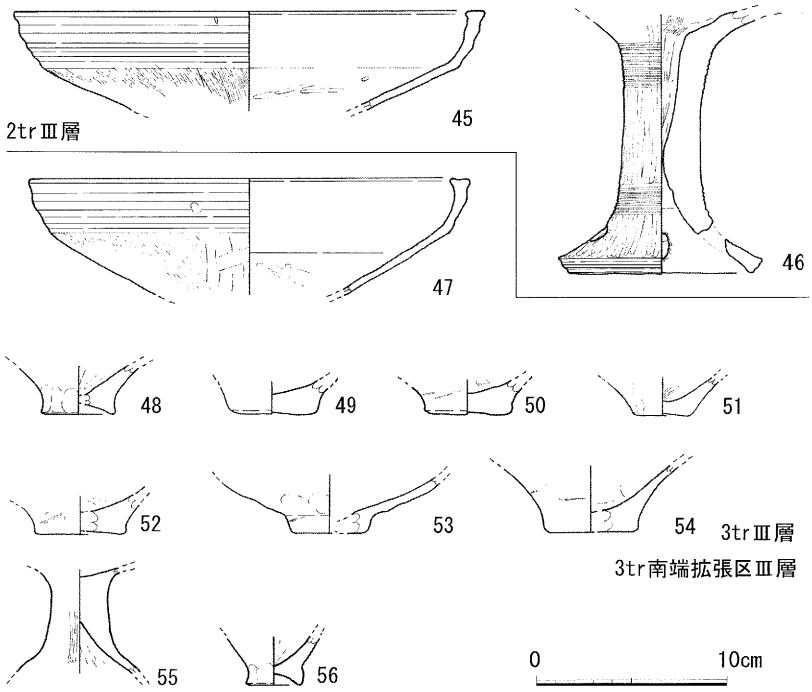
36～40は第３トレンチで出土した壺・甕の底部である。36は突出する底部の縁辺を強くツマミ出し、丁寧なナデや指頭圧で整えて端部は丸くおさめる。やや内湾する胴部の外面には指頭圧、内面には放射状の板ナデが看取される。37はやや突出する底部の中央が円形に凹むドーナツ状を呈する。外面に縦位板ナデ、内面に横位～左上がりハケが看取される。38は突出する平底の壺底部か。側面を弱い指頭圧により雑に整える。内面は放射状の板ナデが看取される。39は突出する底部の縁辺を若干ツマミ出す。内外面は磨滅が著しく、外面に指頭圧、内面に放射状板ナデがわずかに看取される程度である。

40は甕底部か。突出する底部の縁辺をツマミ出し、側面および底面を強い指頭圧やナデで整える。全体的に著しく磨滅しており、内面の調整は不明である。

41～44は第３トレンチ南端の拡張区で出土した。41は壺の頸部である。上端は大きく外反して口縁部に続き、下端は稜をもって屈曲して胴部に続く。頸胴部界付近に内面への粘土付加があり、胴部の成形後に頸部を接合したことがうかがえる。頸部外面の下半に縦位ハケ、内面の大半に横位ハケで調整した後、上半の内外面にヨコナデを施す。42は高坏の坏底部～脚裾部上半である。下に開く中実の脚柱部から大きく外反して脚裾部に至る。脚柱部と脚裾部の境に３方１段の円形スカシを穿つ。外面は全面的に縦位ミガキで調整され、内面は穿孔以下にヨコナデを施すが、それより上部では成形時のシボリ痕跡が残る。43・44は壺・甕底部である。43は突出した平底の壺底部で、側面および底面を丁寧な指頭圧やナデにより整える。胴部外面の調整は磨滅のためか不明瞭であるが、内面は縦位ナデが看取される。44は突出する底部の縁辺をツマミ出し側面および底面を丁寧な指頭圧やナデで整える。全体的に磨滅が著しく胴部外面の調整は不明であるが、内面には放射状板ナデが看取される。

Ⅲ層　45･46は第２トレンチで出土した高坏である。45は坏部で内湾して立ち上がる口縁部の外面に３条の凹線を施し、口縁部端は内側へツマミ出して上端に平らな端面をもつ。体部外面は縦位のハケおよびヘラケズリ、内面はナデを主体とするが一部横位ヘラミガキで調整される。外面の凹線文帯部分に籾圧痕がみられる。46は脚部である。ほぼ直立する器壁の厚い中空の脚柱部から滑らかに屈曲して脚裾部に至る。シボリ成形後に外面を縦位ミガキ、裾部内面をヨコナデで調整する。また、脚裾部端面は上下にツマミ出されて幅広の端面となり、そこに２条の凹線文を有する。調整後に２条１対の直線文を脚柱部と坏部の境に５単位、脚柱部と脚裾部の境に４単位施して文様帯とし、後者の直下に３方向１段の円形スカシを穿つ。脚柱部上端では、充填された坏底部粘土との接合面に縦位ハケ調整が看取される。

47～57は第３トレンチで出土した。47は高坏坏部である。内湾して立ち上がる口縁部の外面に３条の凹線を施し、口縁部端は内側へツマミ出して上端に平らな面をもつ。体部外面は縦位～左上がり方向のハケ、内面はヨコナデを主体として一部横位ヘラミガキで調整される。口縁部から体部上半にかけての外面に黒斑と破裂痕を、体部内面に籾圧痕を有する。48～57は壺・甕底部である。48は突出する底部の縁辺をツマミ出し、



第29図　Ⅲ層出土遺物実測図（S=1/4）

側面および底面を丁寧な指頭圧やナデで整える。内面は磨滅するが、放射状板ナデがわずかに看取される。49は突出する平底の底部で、側面および底面を弱い指頭圧やナデで整える。外面に右上がりタタキ、内面に左上がりハケが看取される。また、内面は使用により黒化する。50は壺底部か。やや突出する形態で、底部は中央部がわずかに凹む。外面に指頭圧痕、内面に放射状板ナデの工具痕が看取される。51は甕底部か。突出する平底の形態で、内外面とも磨滅して調整は不明瞭であるが、外面に指頭圧痕がわずかに看取される。52は壺底部か。やや突出する平底の形態で、外面は磨滅して調整が不明瞭であるが、内面には放射状板ナデが看取される。また、内面は使用により黒化する。53は壺底部～胴部下端である。突出する平底の底部から、やや内湾する胴部が緩角度で立ち上がる。全体に磨滅が及び、外面に指頭圧痕や板ナデ工具痕をわずかに見て取れるのみである。54は甕底部か。突出する平底の形態で、全面に磨滅を受けるが、内外面に板ナデ工具の痕跡がわずかに看取される。

55･56は第３トレンチ南端拡張区で出土した。56は高坏脚部である。ほぼ直立する中実の脚柱部から緩やかに屈曲して脚裾部が広がる。脚裾部は内湾する形態で、器壁は薄い。内外面とも著しく磨滅しているが、外面に縦位ヘラミガキ、内面に左上がりヘラケズリがわずかに看取される。56は甕底部である。突出する底部の縁辺をツマミ出し、側面および底面を指頭圧やナデにより整える。全体的に磨滅が著しいが、内面に放射状板ナデの工具痕がわずかに看取される。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、ホックリ塚古墳に極めて近接する位置での調査であったことから、同古墳に関わる遺構･遺物の検出が期待された。しかし、古墳に関わる遺構は全く検出できず、遺物についても古墳時代に属するものはごくわずかで、弥生時代中期末～後期後半と中世の遺物が大半を占める結果となった。古墳に関わる遺構･遺物がほとんど見られない点をどのように解釈するかについては、今回の狭小な調査区内での成果からは到底即断し得ないが、今後ホックリ塚古墳近傍で発掘調査をおこなう際には、古墳に関わる遺構の存否について一層の注意を払う必要がある。

弥生土器はローリングを受けたものが多い一方で、ほとんどローリングを受けていないものも一定数見られ、調査地より山側に当該期の集落域が広がっていたことが推定される。　（北口聡人）

第７表　出土遺物観察表（１）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
1	擂鉢	5Y6/1 灰	密 (石英・長石多く含む)	良好	(31.5)	(7.7)	口縁1/8	内外面ヨコナデ 口縁端部に自然釉
2	長頸壺	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (角閃石・雲母含む)	良好	底径4.2	(11.5)	底部完存 胴部1/2	(外)縦位～左上がりハケ (内)指頭圧・ヨコナデ・左上がりハケ
3	壺	7.5YR7/6 橙	やや密 (石英・長石多く含む)	良好	底径3.8	(5.7)	底部完存 胴部1/2	(外)調整不明 (内)縦位ハケ・横位ナデ
4	鉢	10YR7/4 にぶい黄橙	密 (長石・雲母含む)	良好	(10.4)	(6.4)	体部1/8	(外)調整不明 (内)縦横位ナデ・ヘラミガキ?
5	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英・雲母含む)	良好	(裾径15.8)	(2.0)	裾部1/4	(外)縦位ミガキ (内)横位～左上がりハケ
6	器台	10YR5/2 灰黄褐	密 (長石・石英・雲母少し含む)	良好	(体部径7.6)	(11.4)	体部1/4	(外)縦位ミガキ (内)横位ハケ・横位ミガキ
7	高坏	10YR7/6 明黄褐	やや粗 (長石・石英を少し含む)	やや 良好	脚柱部径4.8	(8.9)	脚柱部完存	(外)調整不明 (内)シボリ・横位ナデ
8	高坏	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英含む)	やや 良好	脚柱部径4.6	(7.4)	脚柱部完存	(外)縦位ミガキ (内)ヨコナデ
9	高坏	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 (長石・石英・雲母含む)	良好	脚柱部径4.5	(5.9)	脚柱部完存	(外)縦位ミガキ (内)ヨコナデ
10	高坏	7.5YR7/6 橙	やや粗 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径4.6	(5.2)	脚柱部完存	(外)縦位ミガキ (内)ヨコナデ
11	高坏	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英含む)	良好	脚柱部径4.0	(5.8)	脚柱部完存	脚部内外面ナデ 坏部内面ナデ・縦位ハケ
12	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 (長石・石英・雲母含む)	やや 良好	底径4.0	(4.6)	底部完存	(外)右上がりタタキ (内)横位～左上がりハケ
13	甕	2.5YR6/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	底径3.8	(3.4)	底部完存	(外)横位タタキ (内)放射状板ナデ
14	壺?	5YR6/8 橙	やや粗 (石英・長石含む)	やや 良好	底径3.5	(3.3)	底部1/3	(外)指頭圧 (内)左上がり板ナデ
15	壺?	10YR5/2 灰黄褐	粗 (石英・長石多く含む)	やや軟	底径4.7	(3.2)	底部完存	(外)指頭圧 (内)左上がり板ナデ
16	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 (石英・長石多く含む)	やや 良好	底径4.4	(2.7)	底部完存	(外)指頭圧・右上がりタタキ (内)縦位～右上がりハケ
17	甕	10YR4/1 褐灰	やや密 (長石・石英含む)	良好	底径4.7	(2.6)	底部完存	(外)右上がりタタキ (内)横位～左上がりハケ
18	甕?	5YR6/4 にぶい橙	密 (長石・石英・雲母含む)	良好	底径3.6	(3.3)	底部完存	(外)指頭圧・ナデ (内)調整不明
19	壺	7.5YR7/6 橙	やや密 (長石・石英含む)	良好	底径3.9	(2.5)	底部完存	(外)指頭圧 (内)縦位ナデ
20	甕	7.5YR7/6 橙	密 (長石・石英少し含む)	良好	底径5.0	(2.8)	底部3/4	(外)指頭圧 (内)放射状ハケ
21	小形壺?	7.5YR7/6 橙	やや粗 (長石・石英多く含む)	やや軟	底径2.6	(1.6)	底部完存	指頭圧痕
22	皮袋形 土器?	7.5YR6/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部完存	(外)ナデ・指頭圧 (内)指頭圧・左上がりハケ
23	甕	5YR6/6 橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(18.0)	(4.5)	口縁1/4 肩部1/2	(外)右上がりタタキ・左上がりハケ・ヨコナデ (内)横位板ナデ・ヨコナデ
24	小形壺	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	底径3.6	(8.3)	底部1/2 胴部1/4	(外)右上がり板ナデ (内)横位ハケ・縦横ナデ
25	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英含む)	良好	底径4.2	(5.0)	底部完存	(外)指頭圧・ナデ (内)左上がりハケ
26	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英含む)	良好	底径3.8	(2.7)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
27	壺?	5YR6/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	底径4.0	(2.4)	底部完存	指頭圧痕
28	高坏	5YR6/6 橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径3.0	(4.5)	脚柱部1/2	(外)縦位ミガキ (内)シボリ
29	高坏	5YR7/6 橙	密	良好	脚柱部径3.6	(5.2)	脚柱部1/2	(外)板ナデ? (内)シボリ・ヨコナデ
30	高坏	7.5YR7/6 橙	粗 (石英・長石わずかに含む)	やや軟	脚柱部径3.8	(5.8)	脚柱部上半	(外)縦位ミガキ (内)横位ケズリ

第８表　出土遺物観察表（２）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
31	甕	5YR6/6 橙	密 (石英・長石多く含む)	良好	(10.0)	(3.1)	口縁1/2	ヨコナデ
32	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	密 (石英・長石含む)	良好	底径4.1	(4.6)	底部完存	(外)横位ハケ・指頭圧 (内)縦位ナデ
33	壺	10YR8/2 灰白	やや密 (長石・石英わずかに含む)	やや 良好	底径3.8	(4.8)	底部完存	指頭圧痕
34	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (雲母をわずかに含む)	良好	(脚柱部径3.8)	(5.6)	脚柱部1/3	(外)ヘラナデ後ヘラミガキ (内)シボリ・ヨコナデ
35	長頸壺	7.5YR7/6 橙	密 (雲母をわずかに含む)	良好	(8.8)	(9.2)	口縁部1/5	(外)横位～左上がりハケ・ヨコナデ (内)左上がりハケ・ヨコナデ
36	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (雲母をわずかに含む)	良好	底径4.4	(3.7)	底部1/2	(外)ナデ・指頭圧 (内)放射状板ナデ
37	甕	10YR 7/4 にぶい黄橙	密 (長石・石英を少量含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部1/2	(外)縦位板ナデ (内)横位～左上がりハケ
38	壺?	7.5YR6/6 橙	密	良好	底径4.7	(2.3)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
39	甕?	5YR6/6 橙	やや粗 (長石・石英を多く含む)	やや 良好	底径4.0	(2.7)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
40	甕?	10YR 7/2 にぶい黄橙	粗 (長石・石英含む)	やや軟	底径4.4	(2.1)	底部ほぼ完存	(外)指頭圧 (内)調整不明
41	壺	5YR7/6 橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(頸部径10.8)	(4.5)	頸部1/4	(外)縦位ハケ・ヨコナデ (内)横位ハケ・ヨコナデ
42	高坏	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英含む)	やや軟	脚柱部径5.0	(8.2)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラミガキ (内)シボリ・ヨコナデ
43	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	密 (長石わずかに含む)	良好	底径3.9	(2.7)	底部完存	(外)指頭圧 (内)縦位ナデ
44	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 (石英・長石少量含む)	良好	底径4.1	(2.3)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
45	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 (石英・長石含む)	良好	(23.2)	(6.1)	坏部1/4	(外)縦位ハケ・縦位ヘラケズリ・ヨコナデ (内)ヨコナデ・横位ヘラミガキ
46	高坏	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 (石英・長石含む)	良好	裾径10.8	(13.7)	裾部1/2 脚柱部完存	(外)縦位ヘラミガキ (内)シボリ・ヨコナデ
47	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (石英・長石含む)	良好	(24.6)	(5.2)	口縁部1/4	(外)縦位ハケ・ヨコナデ (内)ヨコナデ・横位ミガキ
48	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	密 (石英・長石含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部3/4	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
49	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (石英・長石含む)	良好	(底径4.6)	(1.8)	底部1/3	(外)指頭圧・右上がりタタキ (内)左上がりハケ
50	壺?	7.5YR7/6 橙	密 (石英・長石わずかに含む)	良好	底径3.1	(2.1)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
51	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英多く含む)	やや 良好	底径4.7	(2.0)	底部完存	指頭圧
52	壺?	7.5YR7/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	(底径4.4)	(2.0)	底部1/2	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ
53	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(底径4.0)	(2.8)	底部1/4	(外)指頭圧・板ナデ (内)調整不明
54	甕?	7.5YR7/6 橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(底径5.0)	(3.5)	底部1/4	板ナデ?
55	高坏	7.5YR7/8 黄橙	粗 (長石・石英多く含む)	やや軟	脚柱部径2.9	(5.6)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラミガキ (内)左上がりヘラケズリ
56	甕	7.5YR7/6 橙	やや粗 (長石・石英多く含む)	やや 良好	底径3.0	(2.7)	底部完存	(外)指頭圧 (内)放射状板ナデ

3．願興寺跡

Ⅰ．調査の契機と経過（第30図）

今回の調査は、天理市北部の和爾町におけるJAライスセンター建設に伴う調査として実施したものである。調査対象地は古代寺院である願興寺の推定寺域内に位置し、寺院に関わる遺構の存在が予想されたため、埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査を行なった。

調査は対象地内に12m四方の調査区を設定し、重機によって造成土及び耕作土を除去したのち、人力掘削に移行した。現地では平成18年７月31日に作業を開始し、同年８月16日に全ての作業を終了した。なお、遺構等の実測に際しては日本測地系による国土座標を使用している。調査面積は144㎡であった

Ⅱ．調査の概要

１．基本層序（第31図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査地周辺の現地表面をなす造成土面は標高101.6m前後である。造成土は厚さ200cm前後に及ぶ非

第30図　調査地点位置図（S=1/2,500）

常に厚いもので、これを除去すると部分的に灰色砂からなる耕作土（Ⅰ層･厚さ５～10cm）がみられるが、調査区の大半では遺物包含層（Ⅱ層）が現れる。Ⅱ層は黄褐色～黄灰色のシルトからなり、厚さ最大35cmを測る。Ⅱ層を除去すると、にぶい黄色の粘土からなるⅢ層が調査区全面に現れ、この層の上面で律令期の遺構を検出した。検出面の高さは99.3～99.7mを測る。

２．主な遺構と遺物（第31図・第32図）

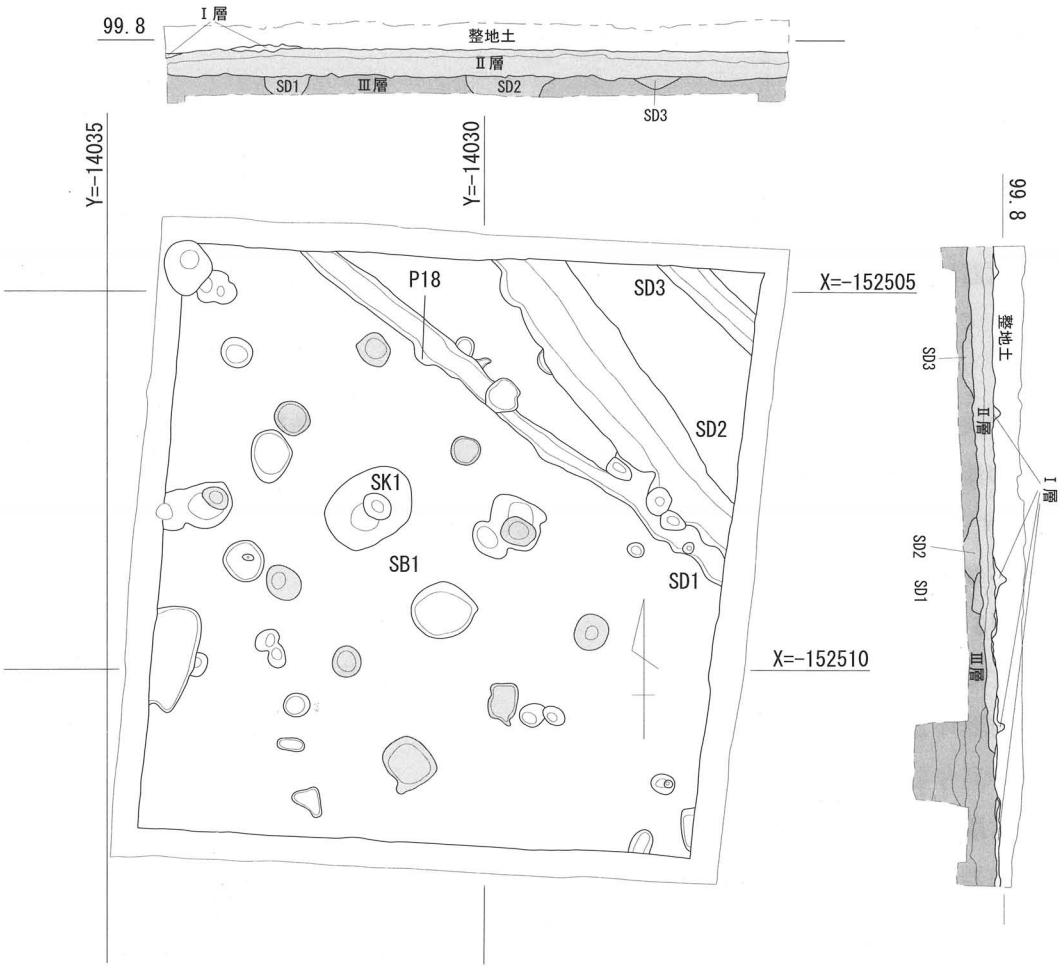
Ⅲ層上面において、掘立柱建物跡１基、溝３条、ピット多数を検出した。

掘立柱建物SB1

調査区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行３間（約4.5m）、梁間２間（約3.0m）で、柱間は1.3～1.8mを測る。建物主軸はN-36.5°-Wで、柱掘方は直径約40～50cmの不整円形を呈するが、南西隅柱のみ一辺60～65cm前後の不整方形となる。深さはややばらつきがあるが、検出面から20～40cmを測る。柱穴からは、律令期の土師器･須恵器の細片がわずかに出土する。

溝SD1

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-51.6°-Wで、幅約20～35cm、検出面からの深さ約15～20cmを測る。長さ約6.8m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。調査区東端付近で溝SD2を切



第31図　調査区平面図・断面図（S=1/100）

る。

１は須恵器坏蓋のツマミ部である。扁平なツマミを坏蓋天井部に貼り付ける。２は須恵器壺の底部か。底胴部を成形したのちに断面方形の高台を貼り付ける。高台端面は強いナデにより弱い凹面状を呈する。内外面にロクロナデ調整を施すが、底部外面は成形時のヘラキリの痕跡が明瞭に残り、未調整である。底部内面には灰降着が認められる。

SD1ではこのほかに、風化の激しい平瓦片１点が出土している。

溝SD2

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-38.0°-Wで、幅約90～100cm、検出面からの深さ約20cmを測る。長さ約4.6m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。調査区東端付近で溝SD１に切られる。SB1とおおむね方向が合い、建物と何らかの関係を持つ可能性もある。

３は須恵器坏Ｂの底部か。底部～体部を成形したのち、断面方形の高台を貼り付ける。内外面にロクロナデ調整を施すが、底部外面は成形時のヘラキリ痕跡が明瞭に残り、未調整である。４は土師器甕の口縁部～胴部上半である。全体に磨滅するが、口頸部にヨコナデおよび指頭圧痕、胴部には横位～右上がりのナデが看取される。口縁部内面は使用により黒化する。

SD2ではこのほかに、移動式カマドの破片や花崗岩製の不明石造物、混入遺物ではあるがサヌカイト製のスクレイパーが出土した（図版19）。不明石造物は上面･前後面の三面が残り、横から見ると上面は上向きの弧状を呈する。スクレイパーは、原礫面を残すサヌカイト剥片の一辺に調整剥離を加えて刃部を作る。

溝SD3

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-46.5°-Wで、幅約40cm、検出面からの深さ約15cmを測る。長さ約1.3m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。

５は須恵器坏Ａの底部～体部下端か。成形後に、内面および胴部外面にロクロナデを、底部外面に回転ヘラケズリを施す。

土坑SK1

調査区中央やや北西側で検出した土坑である。長軸約120cm、短軸約90cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さ約60cmを測る。建物軸線と、対向する側柱同士を結ぶ線の交点に位置することから、SB1に関連する土坑になる可能性がある。出土遺物に実測可能な破片はないが、律令期の土師器･須恵器の細片が多数出土する。

ピットP18

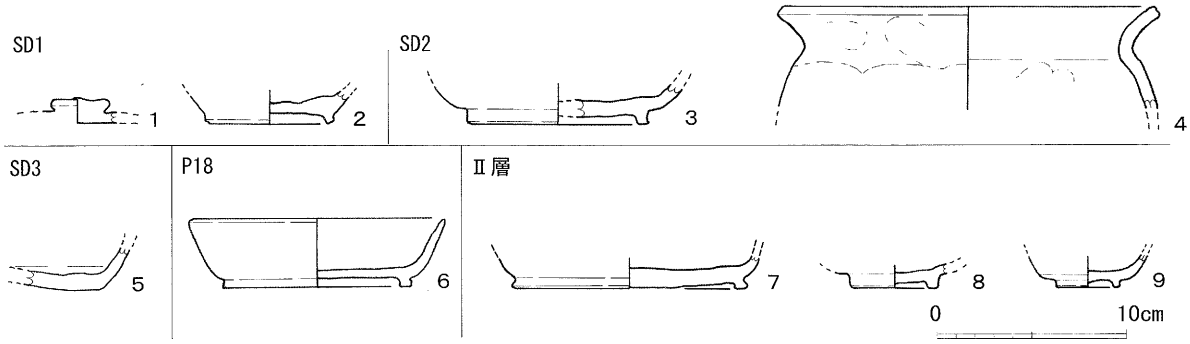
調査区北端で検出したピットである。大半をSD1に切られ、直径・深さ等は不明である。

６は須恵器坏Ｂである。体部・口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。成形後に断面台形の高台を貼り付ける。

遺物包含層出土遺物

７は須恵器坏Ｂ底部か。成形後に断面隅丸台形の高台を貼り付ける。内面および体部側の外面をロクロナデで調整する。底部外面にはヘラキリ痕跡が明瞭に見られ、未調整であり、調整時の工具圧痕が看取される。

８は青磁椀の底部か。削り出しにより断面長方形の高台を作り、表面調整はおおむねケズリによる



第32図　出土遺物実測図（S=1/4）

と思われる。見込み部と体部の境に段を持つ。内面および高台外側にはオリーブ灰色の釉薬がかかる。

９は白磁椀の底部～体部下半である。成形後に断面隅丸方形の高台を貼付け、底部内外面にナデを施す。底部の中心付近は強い回転ナデにより円錐形に突出する。体部以上には白色に施釉され、平らに面取りされており、体部は多角形状になるものと思われる。

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、小規模な掘立柱建物や溝などの遺構を確認した。これらの遺構からはおおむね奈良時代前後の遺物が出土しており、調査地周辺に存在が想定される願興寺の存続時期と一致する。今回の調査地の東側に隣接する農道敷設に伴う奈良県立橿原考古学研究所の調査（和爾遺跡第３次調査Ｅ区）では遺構が全く検出されておらず、調査地付近が願興寺寺域の中でどのような位置を占めていたかについては、今後の調査の進展をまって改めて検討していく必要がある。その際には、SD2で移動式カマド破片が多数検出されている事実も、重要な意味を持ってくる可能性があろう。

また、包含層に中世段階の遺物をも含み、建物を形成しない小ピットの中に中世段階の羽釜の小片を含むものもあることから、願興寺廃絶後の中世においても、寺とは別になにがしかの活動が行なわれていたことが推測できる。（北口聡人）

第９表　出土遺物観察表

番号	層位 遺構	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
						口径・底径or裾径	器高(現存高)		
1	SD1	蓋	N7/0灰白	やや粗 (長石含む)	良好	ツマミ径3.1	(1.4)	ツマミ部	ロクロナデ・指頭圧
2	SD1	壺？	N6/0灰	密 (長石わずかに含む)	良好	(高台径6.2)	(1.8)	底部1/4	ロクロナデ
3	SD2	坏B	N5/0灰	密 (長石・石英含む)	良好	(高台径9.6)	(2.1)	底部1/3	ロクロナデ
4	SD2	甕	2.5YR6/6橙	粗 (長石・石英多く含む)	良好	(19.4)	(5.4)	口縁部1/5	ヨコナデ
5	SD2	坏A	N7/0灰白	密 (長石含む)	良好	―	(2.3)	底部	ロクロナデ・回転ヘラケズリ
6	P18	坏B	N7/0灰白	密 (長石含む)	良好	(13.6)	3.7	底部1/4	ロクロナデ
7	Ⅱ層	坏B	N7/0灰白	密 (長石含む)	良好	(高台径12.4)	(1.7)	底部1/5	ロクロナデ・ナデ
8	Ⅱ層	椀	2.5Y6/1 オリーブ灰色	密	良好	高台径4.6	(1.3)	底部完存	回転ヘラケズリ
9	Ⅱ層	椀	5Y8/1灰白	密	良好	高台径3.4	(1.7)	底部1/2	面取り・ロクロナデ

4．平等坊・岩室遺跡（第29次）

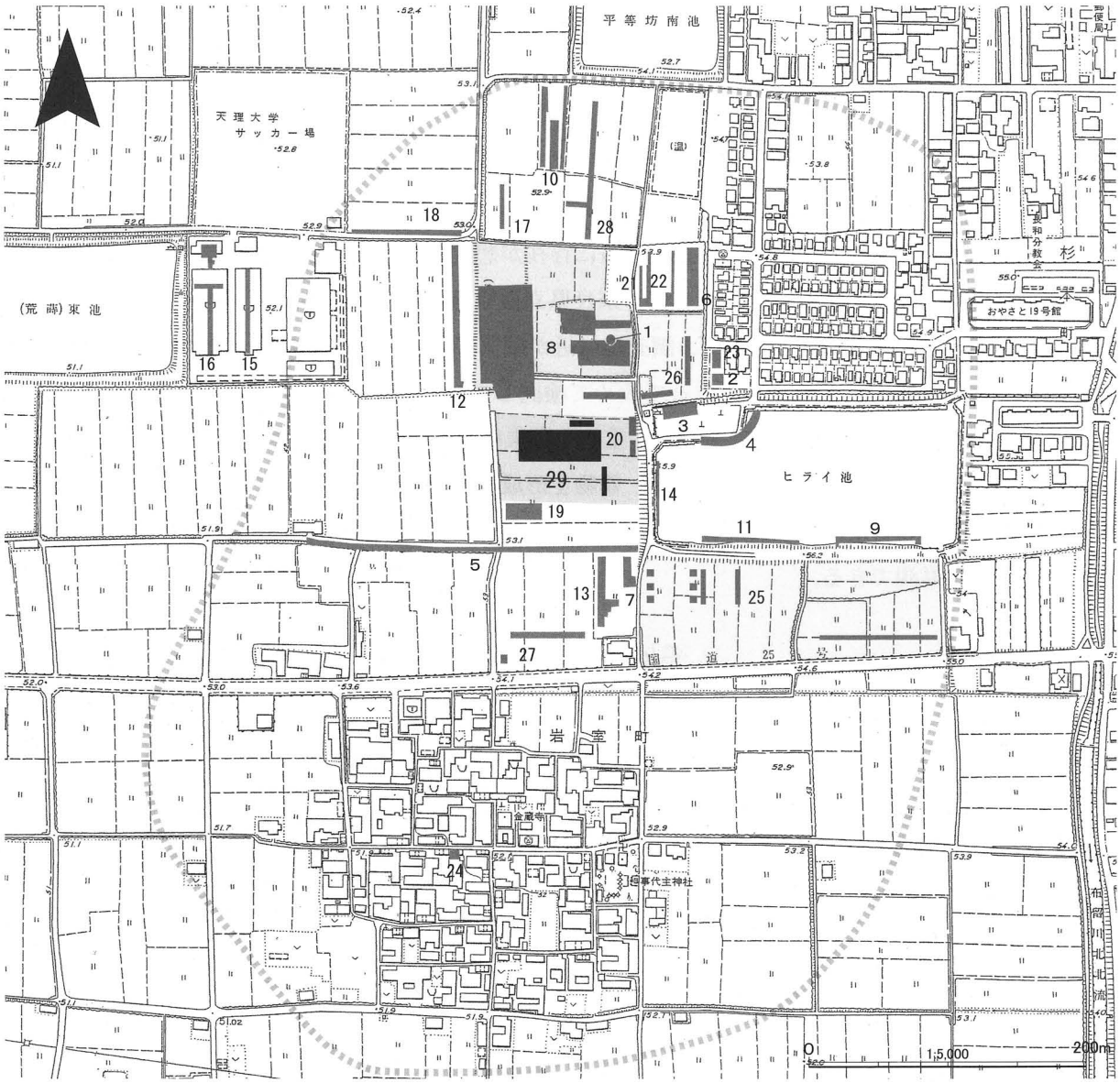
Ⅰ．はじめに

1．遺跡の概観

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代を中心とした大集落遺跡である。地理的には奈良盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成された扇状地下方に展開する沖積平野上に立地しており、水利に恵まれ農耕に適した土地条件により集落の定着と拡大が進んだ集落となったことが考えられる。

当遺跡の範囲については、これまでの発掘調査や分布調査により東方のヒライ池付近から現在の岩室町の村落付近までおよぶことが知られ、東西約400m、南北約600mの規模と推定されている。

これまでに遺跡北半部を中心に30数次にわたる発掘調査が実施され、その調査成果から弥生前・中



第33図　調査地と既往の調査地点（第29次調査まで）

・後期の全期間を通じて集落の周囲に大溝を巡らす環濠集落であることも確かめられており、奈良盆地東部における拠点的な集落として評価されている。

また、弥生後期後半頃には集落北東部の微高地上に一辺約30m規模の方形区画が形成され、環濠内部に特定の区画が出現することも確認されている。こうした方形区画の出現により、集落内における首長階層の誕生が予想され、続く古墳時代に向けての社会変革を示す現象として理解できる。以前の第８次調査地（青木1996）では、この方形区画を囲む大溝より弥生後期後半から古墳前期の土器が多量に出土しており、数度にわたる再掘削が見られることなどからも継続的に機能していたことが確かめられている。しかしながら、区画内部に該当する地点での調査の機会に乏しく、予想される首長居宅としての在り方を検証、特定するには至っていないのが現状である。いずれにせよ、弥生後期末から古墳前期にかけての時期に平等坊・岩室遺跡が周辺地域を含めた小地域圏の中枢となる集落となっていたことを示すものと思われる。

２．周辺の遺跡

当遺跡の周辺では、北東に縄文晩期の突帯文土器や弥生中期の方形周溝墓が検出された前栽遺跡や古墳前・中期の玉作り関連遺物が出土した九ノ坪・シマダ遺跡、東方に縄文時代から中世に至る複合遺跡の布留遺跡があり、南西には弥生時代の大規模環濠集落として著名な唐古・鍵遺跡や多くの絵画土器や銅鐸形土製品の出土した清水風遺跡がある。弥生・古墳時代の小規模な集落遺跡はほかにも幾つか知られているが、近年の京奈和自動車道関連の調査により新知見が多く得られている。また、西北には古墳中・後期の集落である小路遺跡があり、近接して星塚古墳や荒蒔古墳など後期古墳も存在する。なお、同時期の古墳は当遺跡の範囲内にもありヒライ池西北岸の岩室池古墳が知られている。

Ⅱ．調査の契機と経過

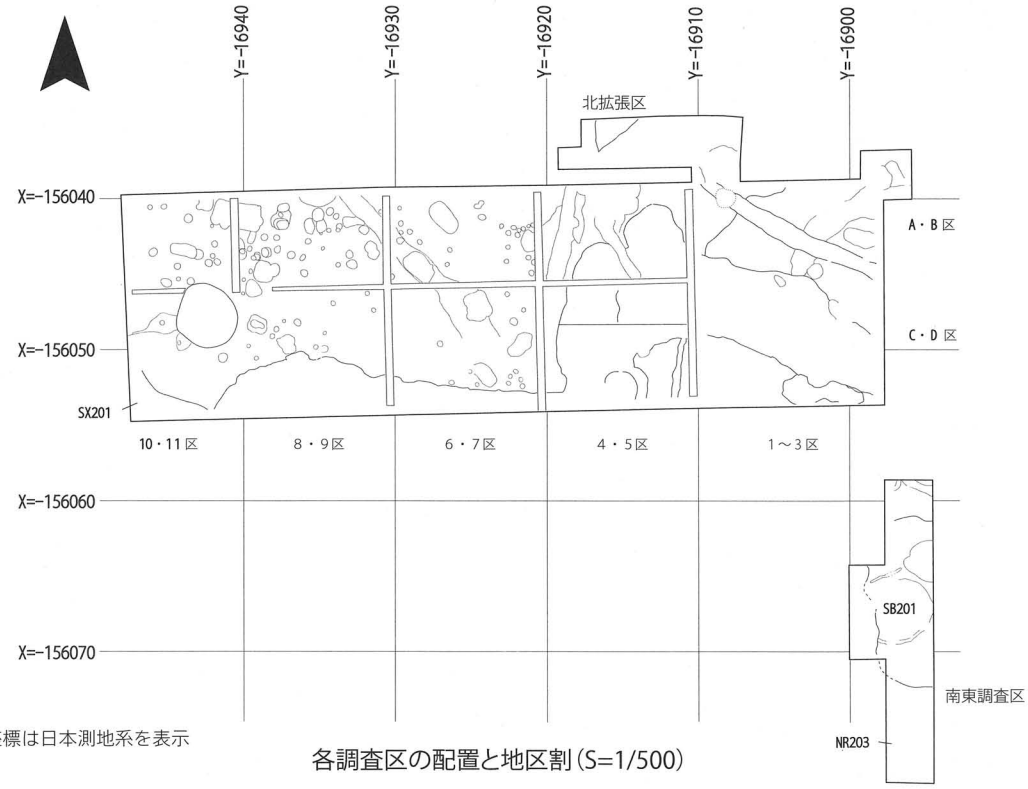
１．調査の契機

今回の調査は、岩室農住組合による民間の土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査として実施した。開発計画対象地の周辺においては、近年よりマンション建設や宅地造成等の開発を原因とする発掘調査が頻発したこともあり、それらの調査成果からも当該調査地では当初より弥生環濠集落内部の集落域に該当しており、区画溝や自然河道等の周辺検出遺構群との連続性の確認等、当遺跡の集落構造に関する新知見を得ることが予想された。

２．調査の経過

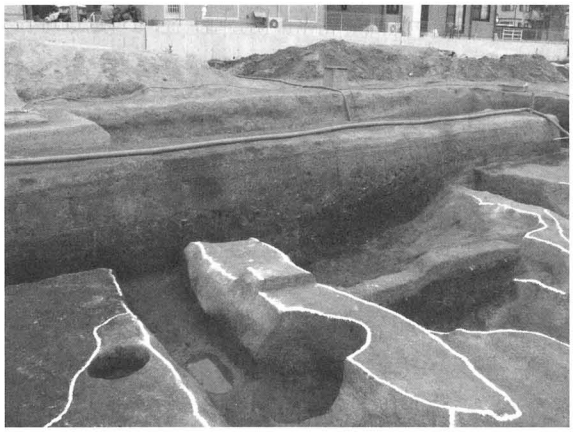
調査では、対象地内の造成計画における街路部分の総面積を対象面積として調査区の設定をおこない、当初には調査対象区域の北東寄りに南北15m、東西50mの長方形を成す調査区を設けて発掘調査を進行した。本来ならば区画内における街路占有地を対象に複数のトレンチ調査区を設定して調査を進めるべきであったが、調査期間、経費等の制約から時間短縮、作業効率向上の都合を考えて面的な拡がりを見るために１ヶ所の大調査区を設定することにした。そのため、調査区の配置に当たっては、周辺における既往の調査成果を追認可能な地点に集約するかたちで設定するに至った。

その後、調査の進行状況に従い、調査地の北、南東、北東の一部に補足的なトレンチ調査区等を追

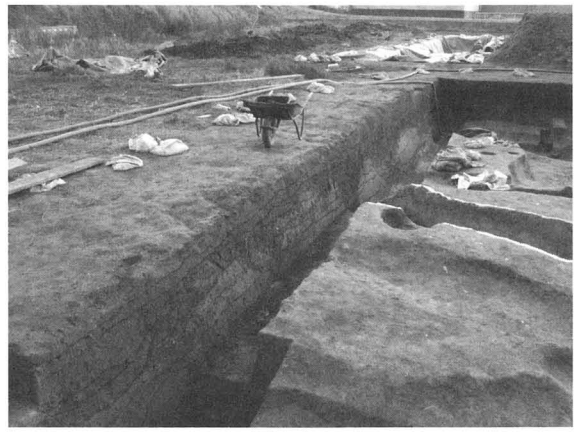


※国土座標は日本測地系を表示

各調査区の配置と地区割（S=1/500）



北壁（4・5区付近）土層断面



東壁土層断面

東壁南端付近の土層断面

南壁（1・2区付近）土層断面

第34図　調査区平面図・土層断面の状況

加、拡張し、広大な敷地内における遺構分布と原地形等の確認に努めた。

現地における発掘調査は平成18年10月10日から開始し、平成19年２月11日にすべての調査にかかる作業を終了した。なお、調査期間中の後半においては調査成果についての記者発表および現地説明会（平成19年１月20日）を実施し、市民に向けての成果公表にも努めた。

総調査面積は北拡張区（南北３ｍ×東西10ｍ＝30㎡）および南東拡張区（３ｍ幅×20ｍ＝60㎡）、その他の拡張箇所を含めて860㎡であった。

Ⅲ．調査の成果

１．基本層序

当調査地における基本層序は、調査区東壁および南壁の土層断面をもとに概ね以下に示したような状況となっていた。

第Ⅰ層　暗褐色砂質土（耕作土）。層厚0.2～0.3ｍで調査地全域に拡がる近年までの耕作土である。

第Ⅱ層　にぶい黄褐色砂質土（床土）。層厚0.2～0.3ｍ。耕作土直下の水田・畑の床土相当層である。

第Ⅲ層　淡褐色砂質土（中・近世遺物包含層）。現地表下0.5ｍ前後の深度で遺存する中世以降の遺物包含層である。層厚0.2ｍと薄く堆積する。

第Ⅳ層　灰褐～暗褐色砂質土・砂混じり粘質土（弥生～古墳時代遺物包含層）。調査区の北東から南西の方向にかけて分布する遺物包含層である。現地表下0.6～0.8ｍに遺存し、上下層に分層可能であった。上部では弥生中・後期～古墳前・中期の土器類が多く出土するが、地山面直上の低地のみに分布する下部の堆積層では弥生前期の土器片が主体となっていた。

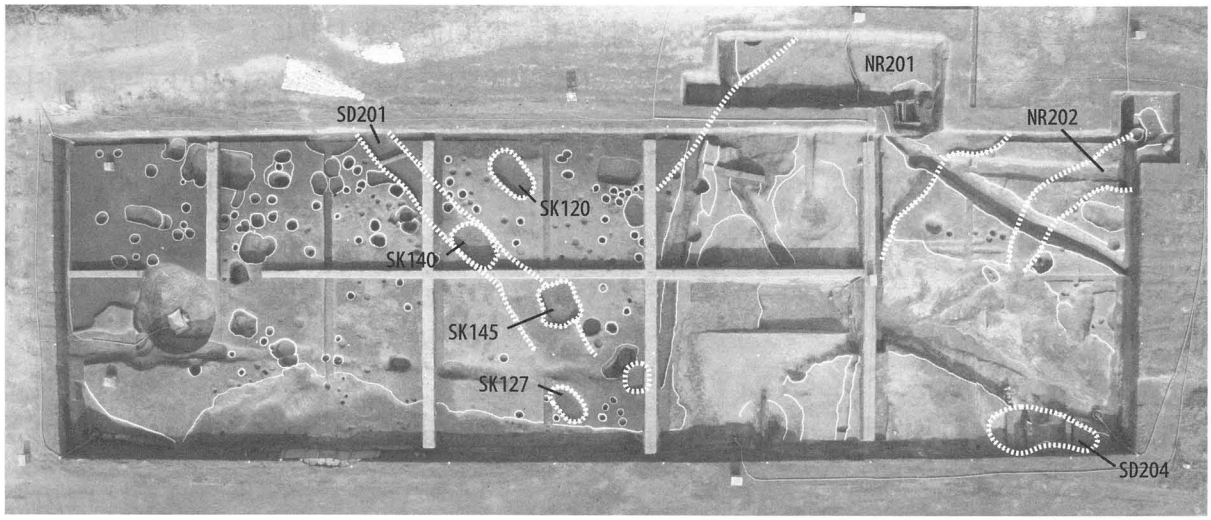
第Ⅴ層　黄橙～黄灰色微砂・シルト・粘土（地山）。上部は安定した基盤層を成し、北東方向に向かって安定度を増す状況を呈した。

調査地内においては、上面全体として北東方向からの第Ⅴ層（地山）による安定基盤層が南西方向に向かい緩やかに下降する緩斜面様の地形上に該当するようである。そのため、特に調査区北東側では中世以降の農地化による削平がおよぶ状況を呈し、ここでは第Ⅰ層（耕作土）・第Ⅱ層（床土）および第Ⅲ層（中・近世遺物包含層）の直下において第Ⅴ層の地山面が見られ、第Ⅳ層（弥生～古墳遺物包含層）の欠落が見られた。そのため、この付近では第Ⅴ層上面に標高51.8ｍ付近の高さにおいて弥生中期以降中・近世までの長期間にわたる遺構が重複して検出されている。

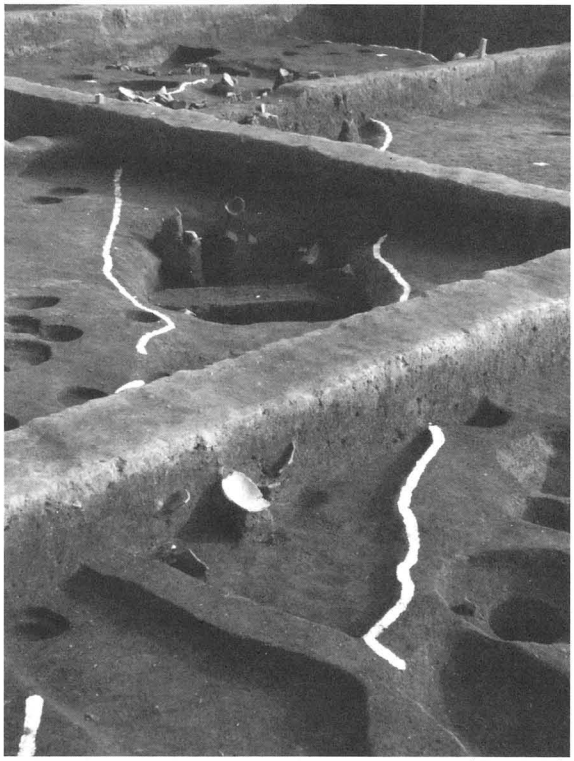
調査区全体としては、第Ⅳ層上面検出の中・近世遺構群を除いては検出遺構の多くが第Ⅴ層上面検出の弥生前期～古墳前・中期遺構群で占められる状況を呈していた。

２．主要な遺構と遺物

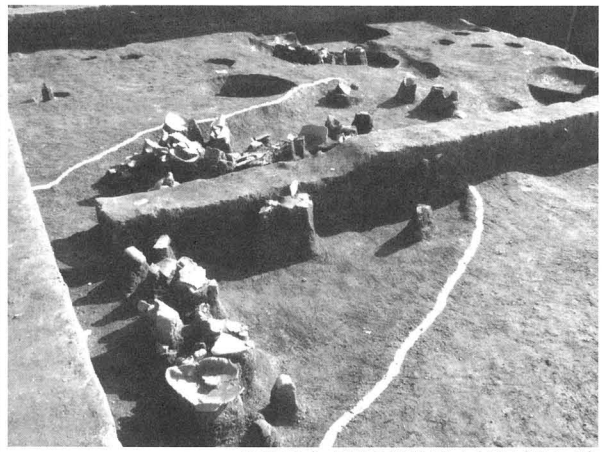
今回の調査地では、弥生前期から古墳前・中期に至る時期にかけての多くの遺構と遺物の存在が確認されている。また、調査区北東部の第Ⅴ層（地山）上面および拡張区を含めての調査区全域において第Ⅳ層（遺物包含層）の上面より中・近世の遺構面も検出しており、出土遺物量もコンテナ1000箱近



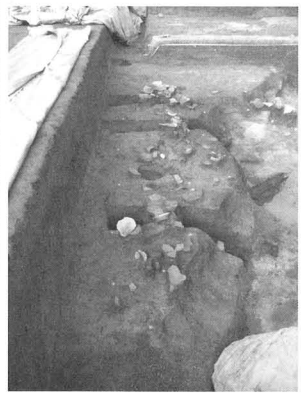
弥生前期～中期初頭・前半の主要遺構

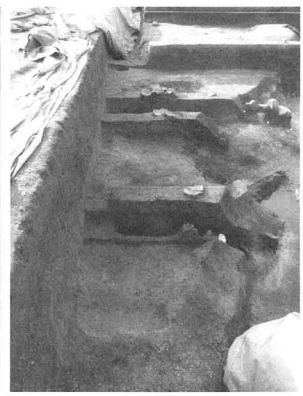


SD201（北西から）

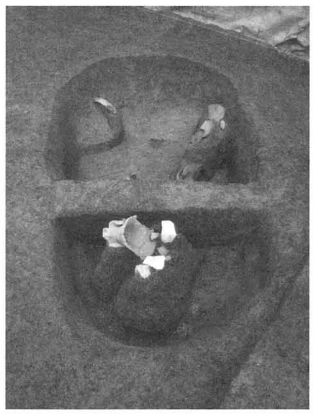


SD201中央部の遺物出土状況（西から）



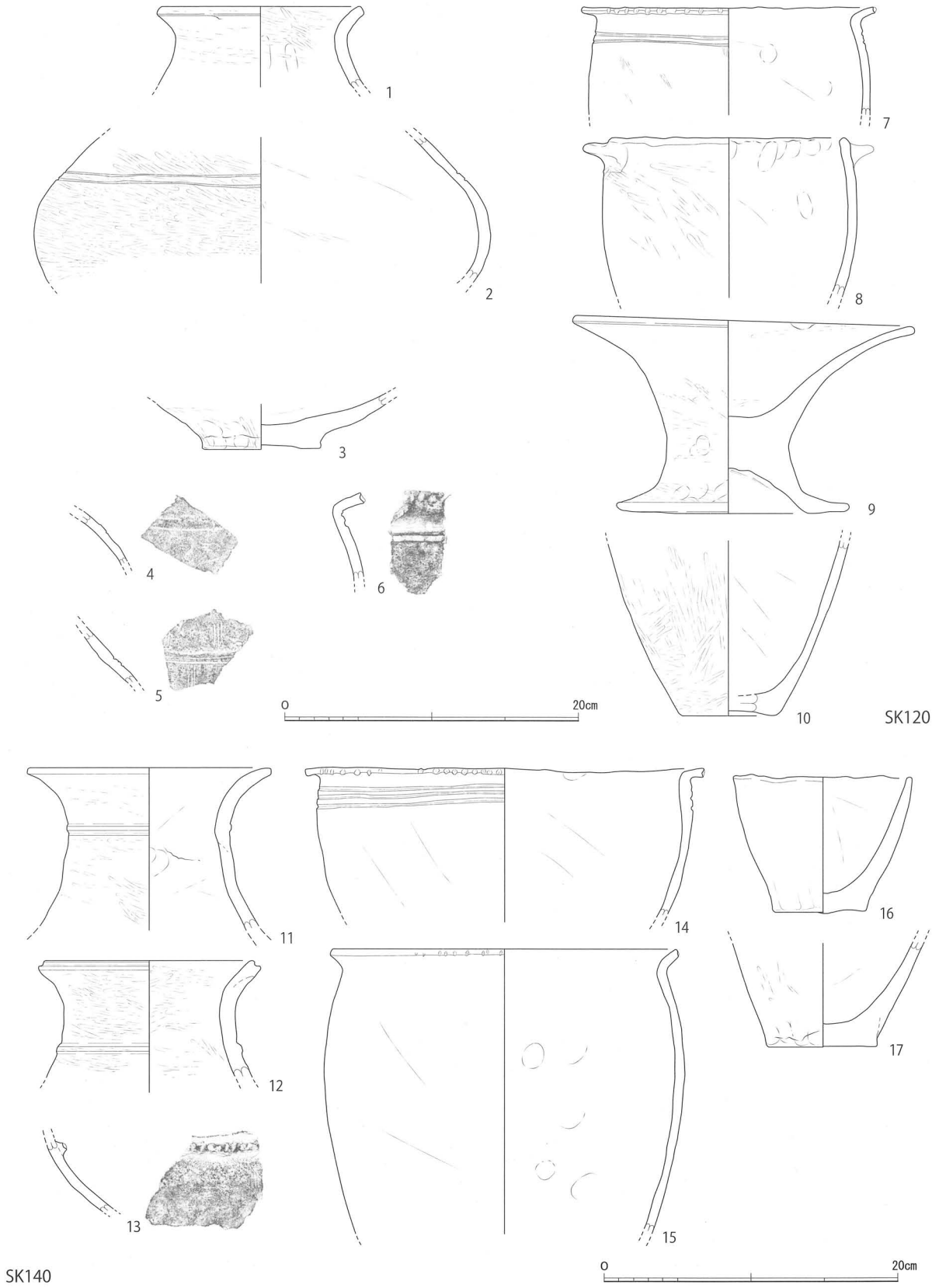


SD204検出時および完掘状況（東から）

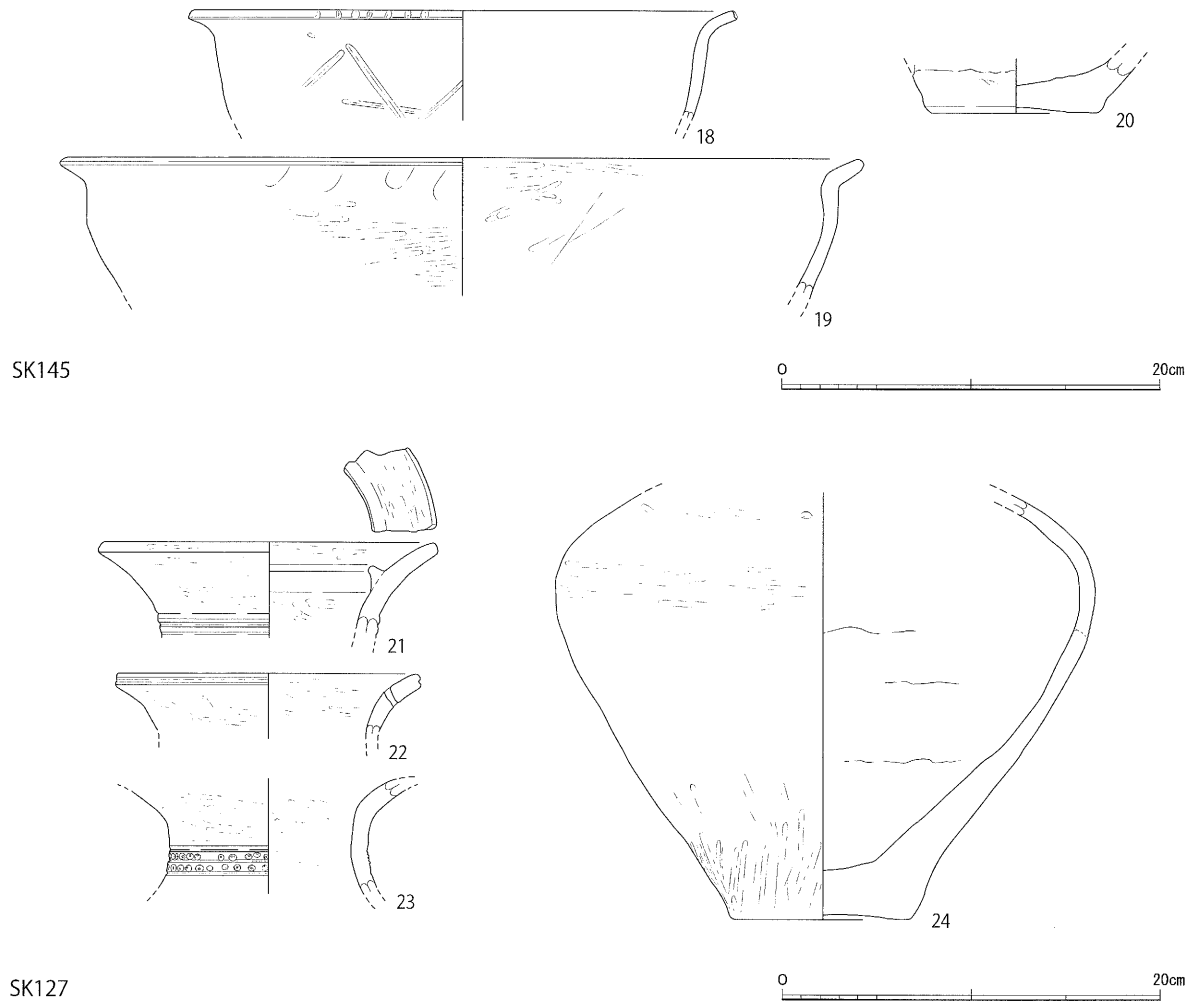


SK120（南西から）と土層断面（北東から）

第35図　弥生時代前期～中期初頭・前半の主要遺構



第36図　土坑SK120・SK140出土遺物実測図(S=1/4)



第37図　土坑SK145・SK127出土遺物実測図(S=1/4)

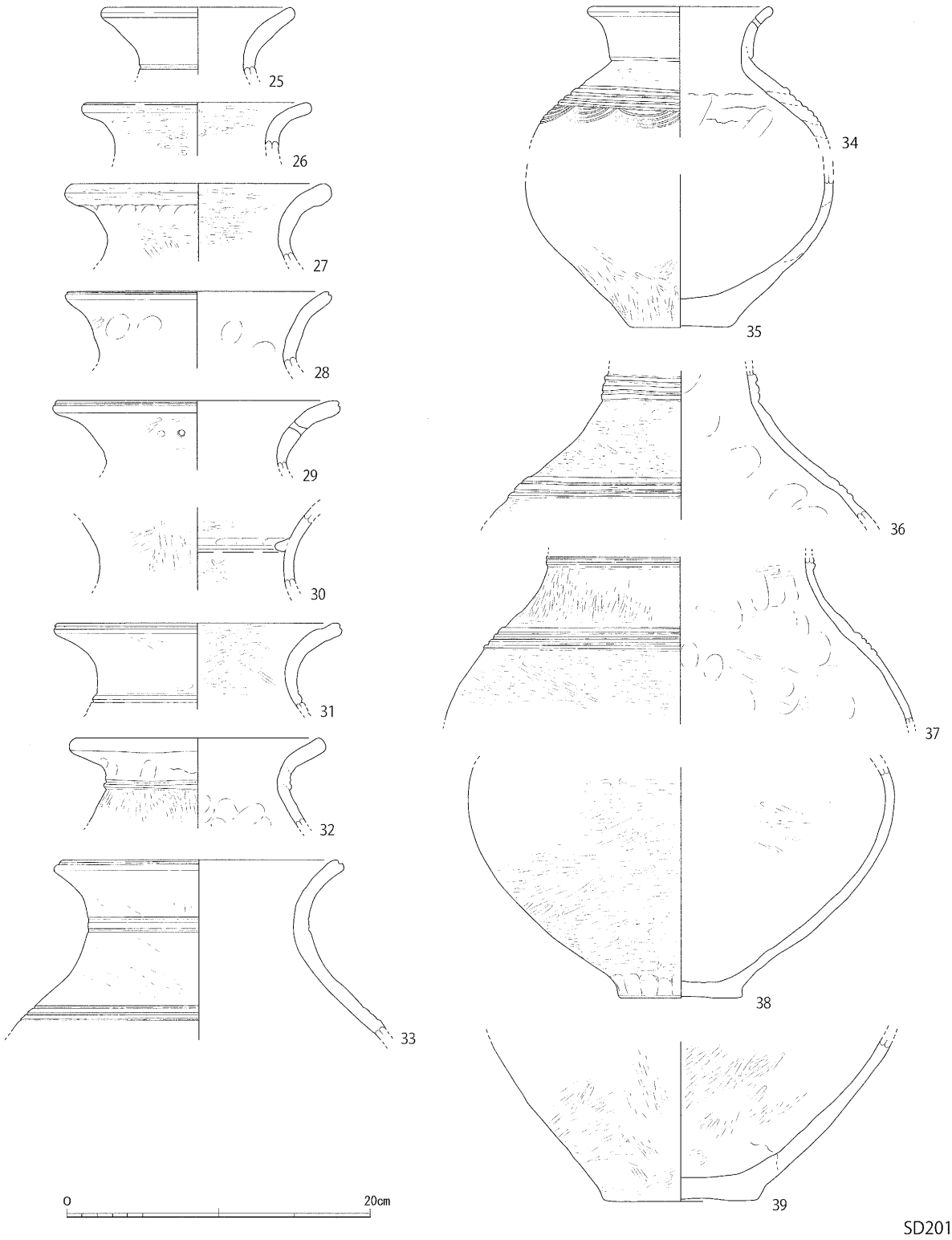
くに及ぶほどであった。

ここでは、各時期別の主要遺構の概観のみ記すことにし、遺物についても実測図の提示のみに留めておくものとするため各遺構の時期検討のための参考にされたい。

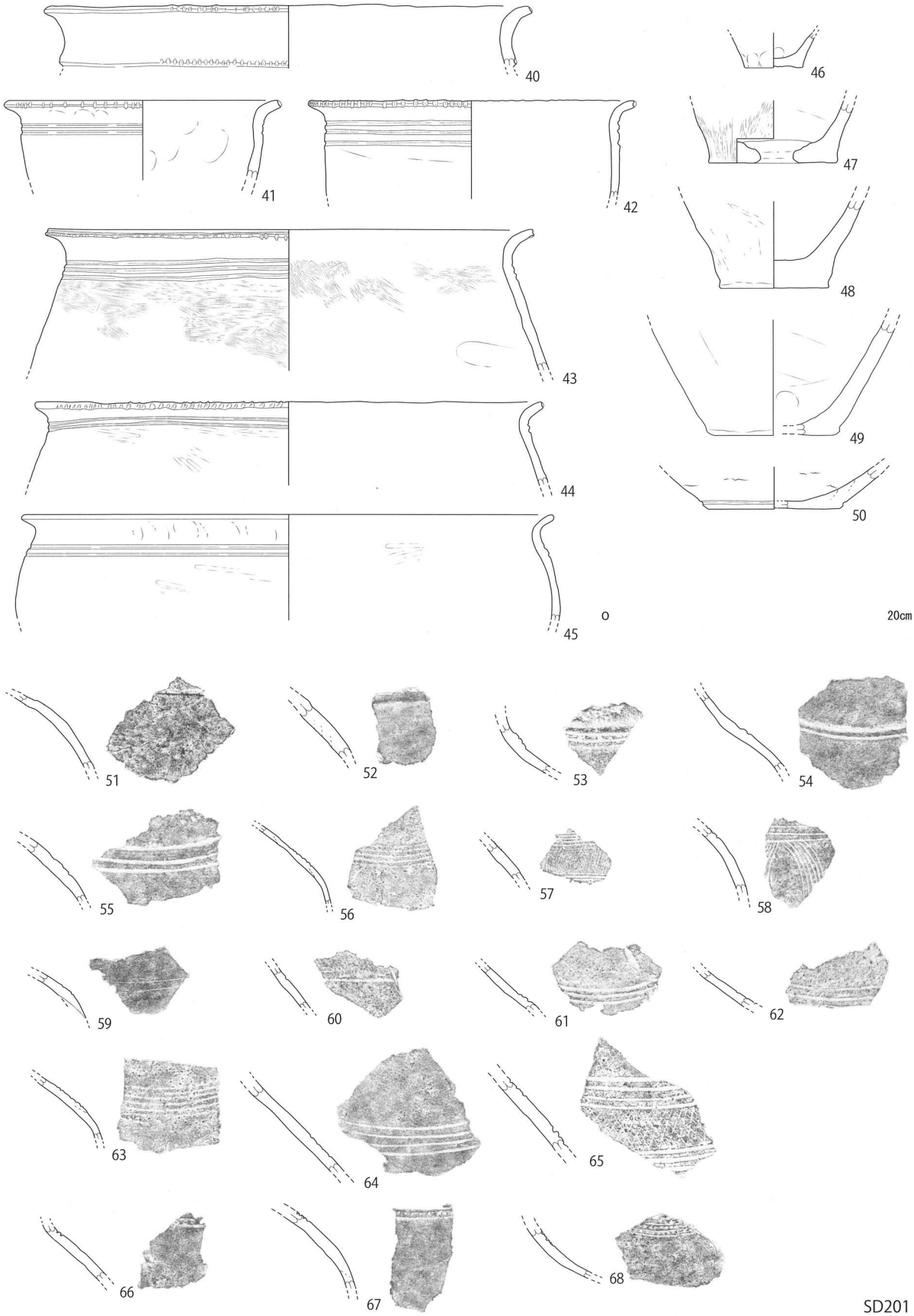
(1)弥生前期～中期初頭・前半の遺構

平等坊・岩室遺跡における集落の初現となる弥生前期の遺構では、**自然河道NR201**、**溝SD201・SD204**、**土坑SK120・SK127・SK140・SK145**などが検出されている。いずれも第Ⅴ層（地山）上面において上部を削平され浅く遺存するもので占められていた。また、調査地が当遺跡における安定基盤層の拡がりを見る微高地近辺に該当したためか、本来は弥生前期の小集落の展開が見られたことが考えられ、遺物包含層中や上面に重複した弥生前期以降の遺構埋土にも弥生前期まで遡る土器片等の遺物混入が顕著であった。

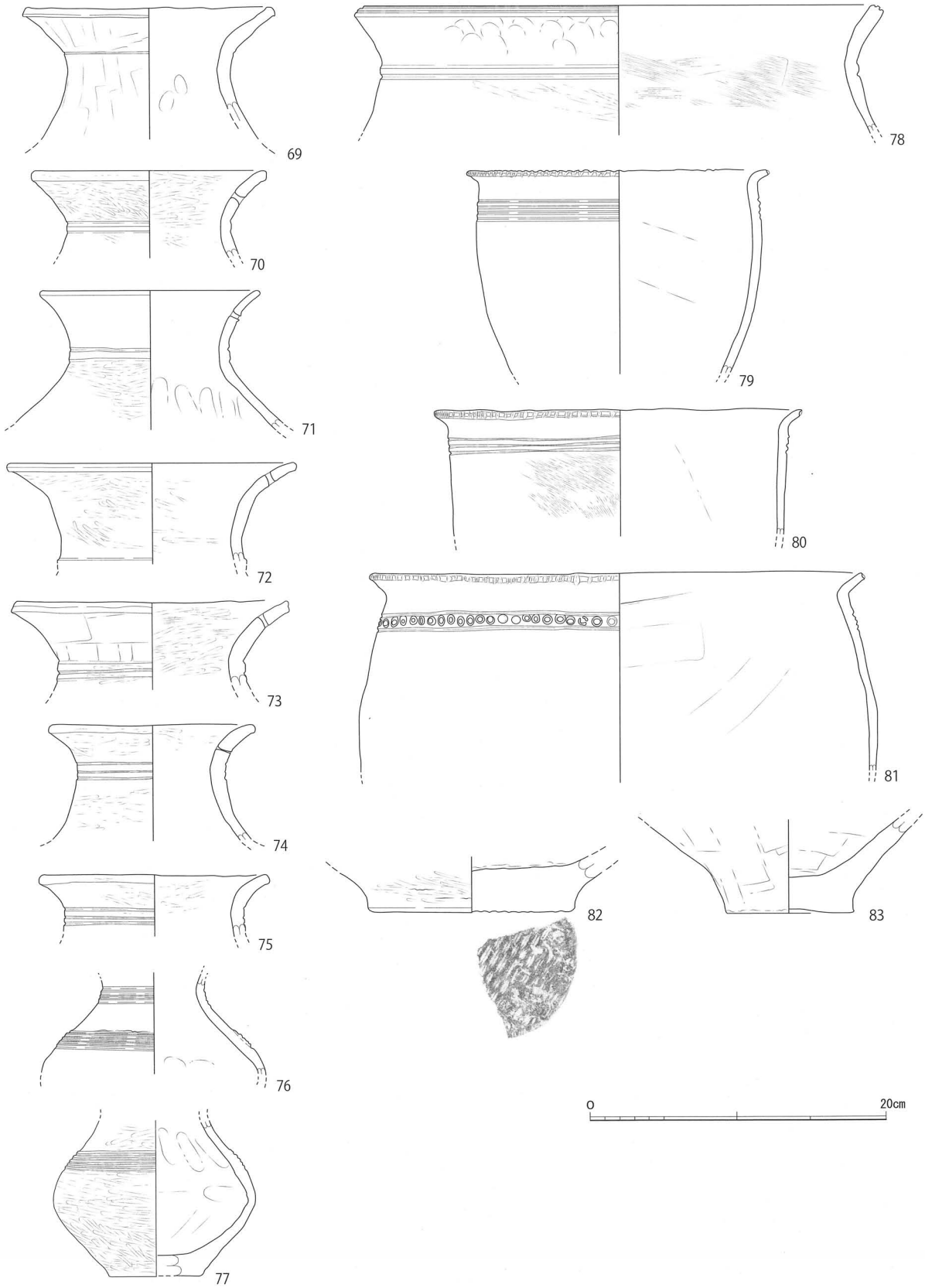
自然河道NR201は北東から南西・南方にかけて斜行、蛇行する河川跡である。北拡張区および調査区４・５区でのみ部分的に完堀したが、埋土下部の砂層堆積より若干の弥生前期土器片が出土しているのみである。上部では弥生中期前半頃の土器片も出土しており、その間に機能した河川であること



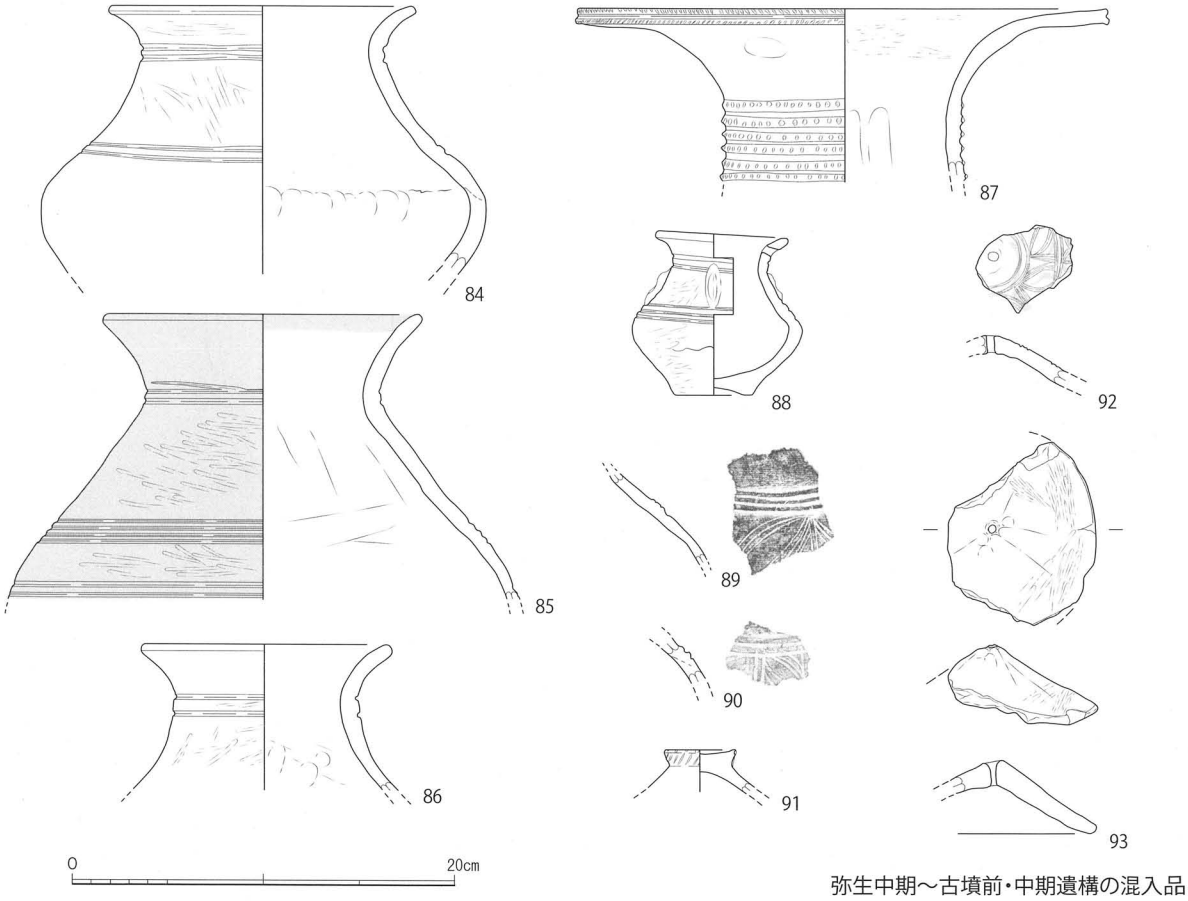
第38図　溝SD201出土遺物実測図１（S=1/4）



第39図　溝SD201出土遺物実測図２(S=1/4)



第40図　溝SD204出土遺物実測図(S=1/4)



第41図　他の遺構埋土に混入した弥生時代前期遺物実測図(S=1/4)

が知られた。この河道に平行するように幅の狭い小河川である**NR202**も検出されているが、埋土は砂層のみで遺物も同様に前・中期土器の小片のみ出土している。

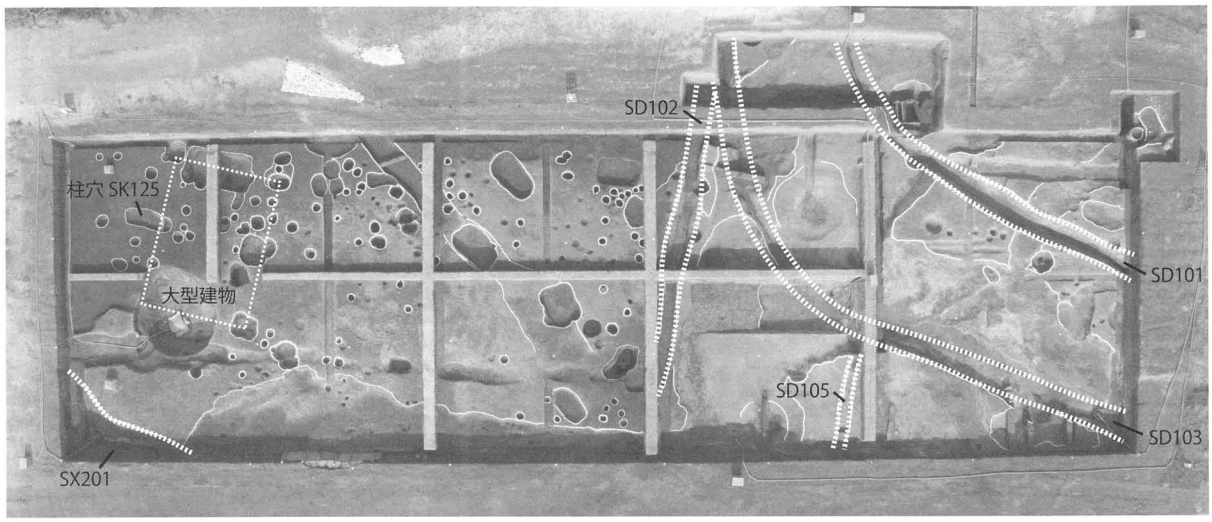
溝SD201は調査区中央で検出された北西～南東方向の溝である。残りは浅く、深さは0.3m前後であった。低地へと移行する溝の南端は上部の削平のためか途切れてしまっていた。調査区南東隅付近で検出の**溝SD204**は両端が途切れるものの、東西方向の溝であると思われる。検出時には多くの土器片が列を成す状況を呈した。

土坑は総数４基以上が確認されている。いずれも楕円形あるいは隅丸方形の平面形を成す土坑で占められていた。先述の溝SD201に平行する方向性のある土坑が多く、時期についてはともに前期前半頃まで遡る。溝と土坑の関係については不明であるが、**SK140**のように溝内に収まる土坑も見られるため同時期性も考慮すべきかと思われる。

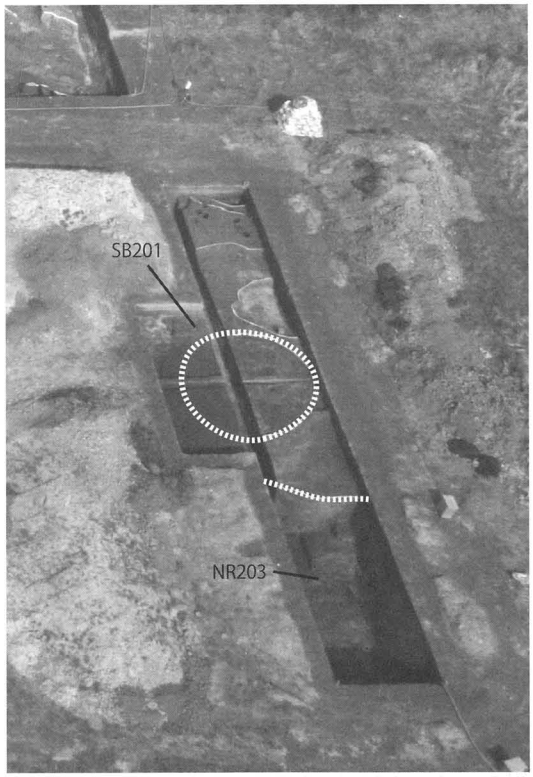
(２)弥生中期後半～後期初頭・前半の遺構

当遺跡の弥生集落の発展が見られた弥生中期以降の遺構では、自然河道、溝、土坑、竪穴住居、柱穴等がある。

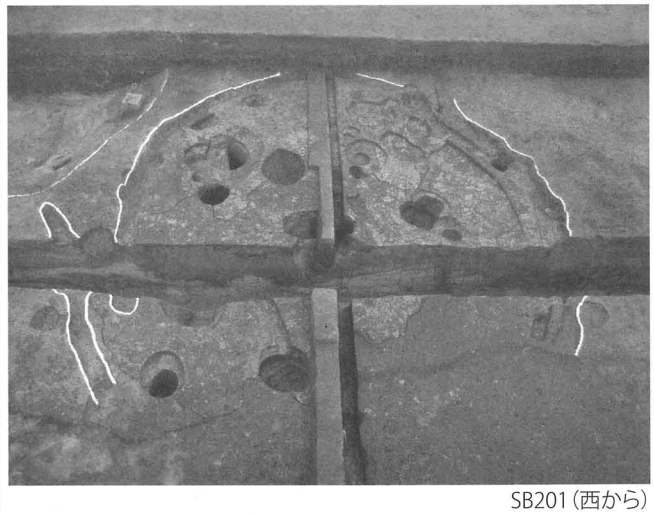
自然河道は調査区内の２箇所で検出、確認されている。**NR203**は、南東拡張区の南端で北岸のみを確認した河道である。やや北西に向く大きな流路であり、川底のまで約２m近く下がる深さであった。



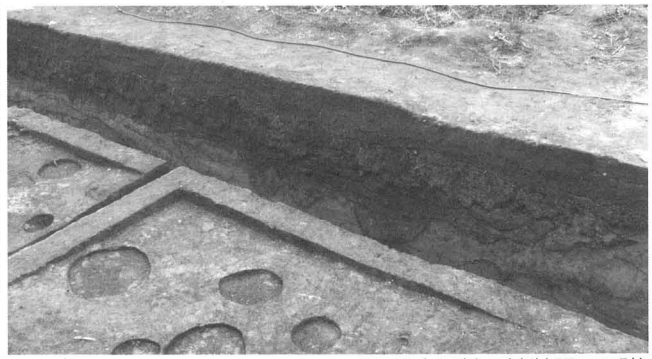
弥生中期後半～後期初頭・前半の主要遺構



弥生中期後半～後期初頭・前半の主要遺構
（南東拡張区）



SB201（西から）

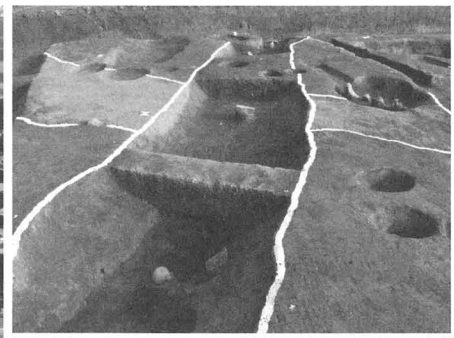


SB201土層断面（南拡張区西壁）

NR203土層断面（南拡張区南端西壁）

第42図　弥生時代中期後半～後期初頭・前半の主要遺構（1）

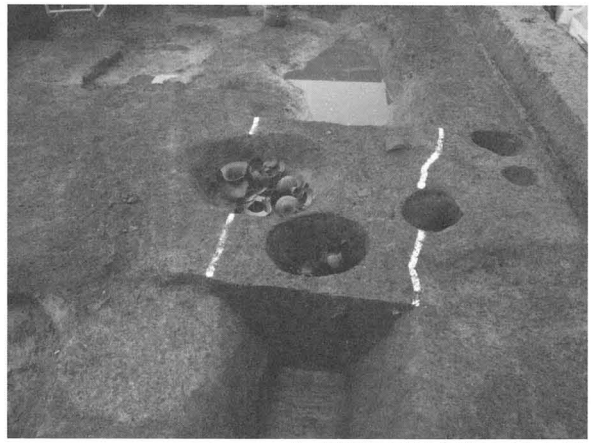
調査区北東に巡る区画溝SD101（北西から）



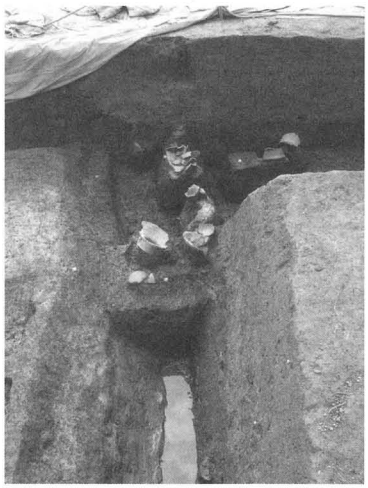
区画溝SD101（西から）

区画溝SD101土層断面（東から）

直線的な区画溝SD102（南から）



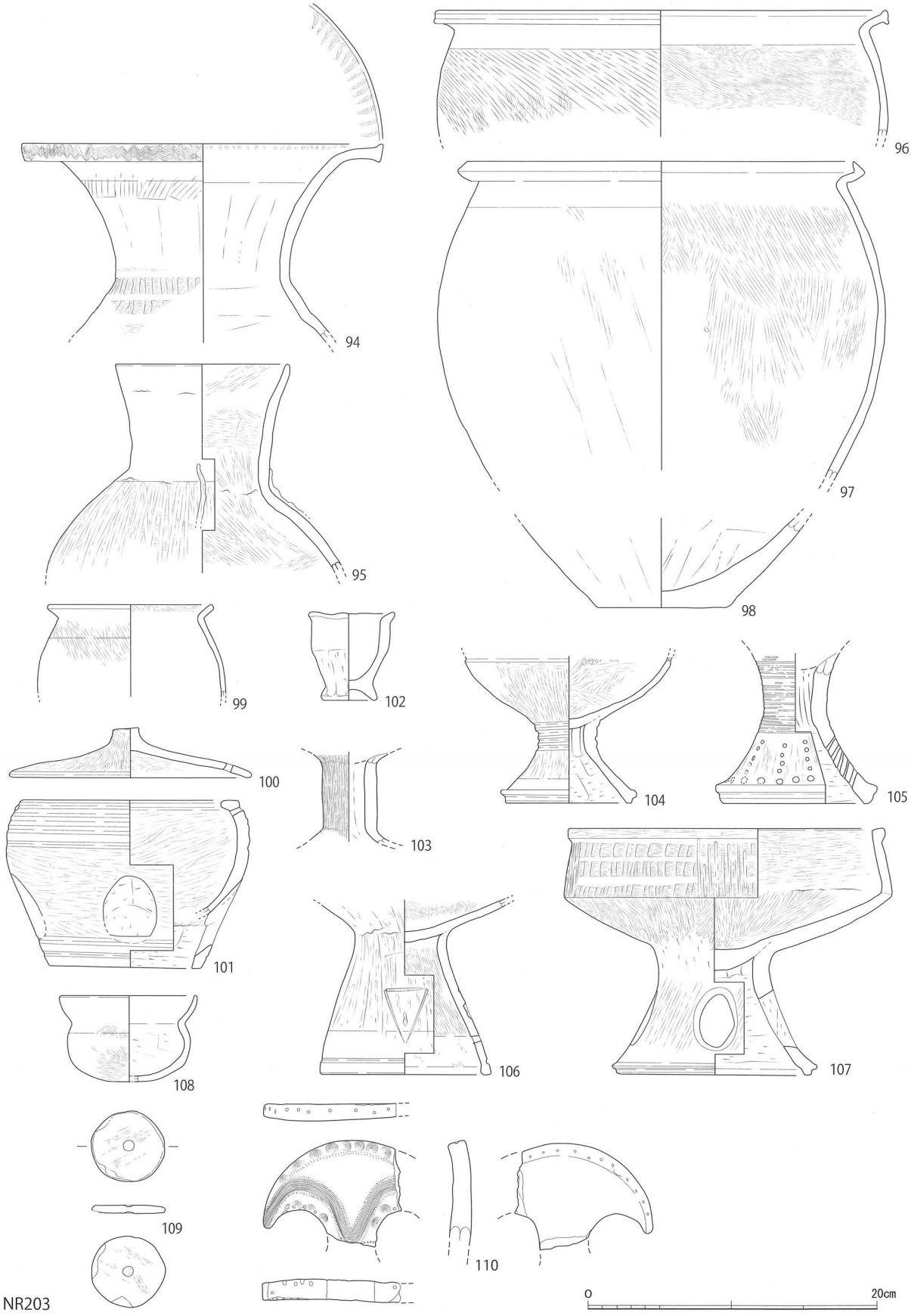
区画溝SD102土層断面（北から）



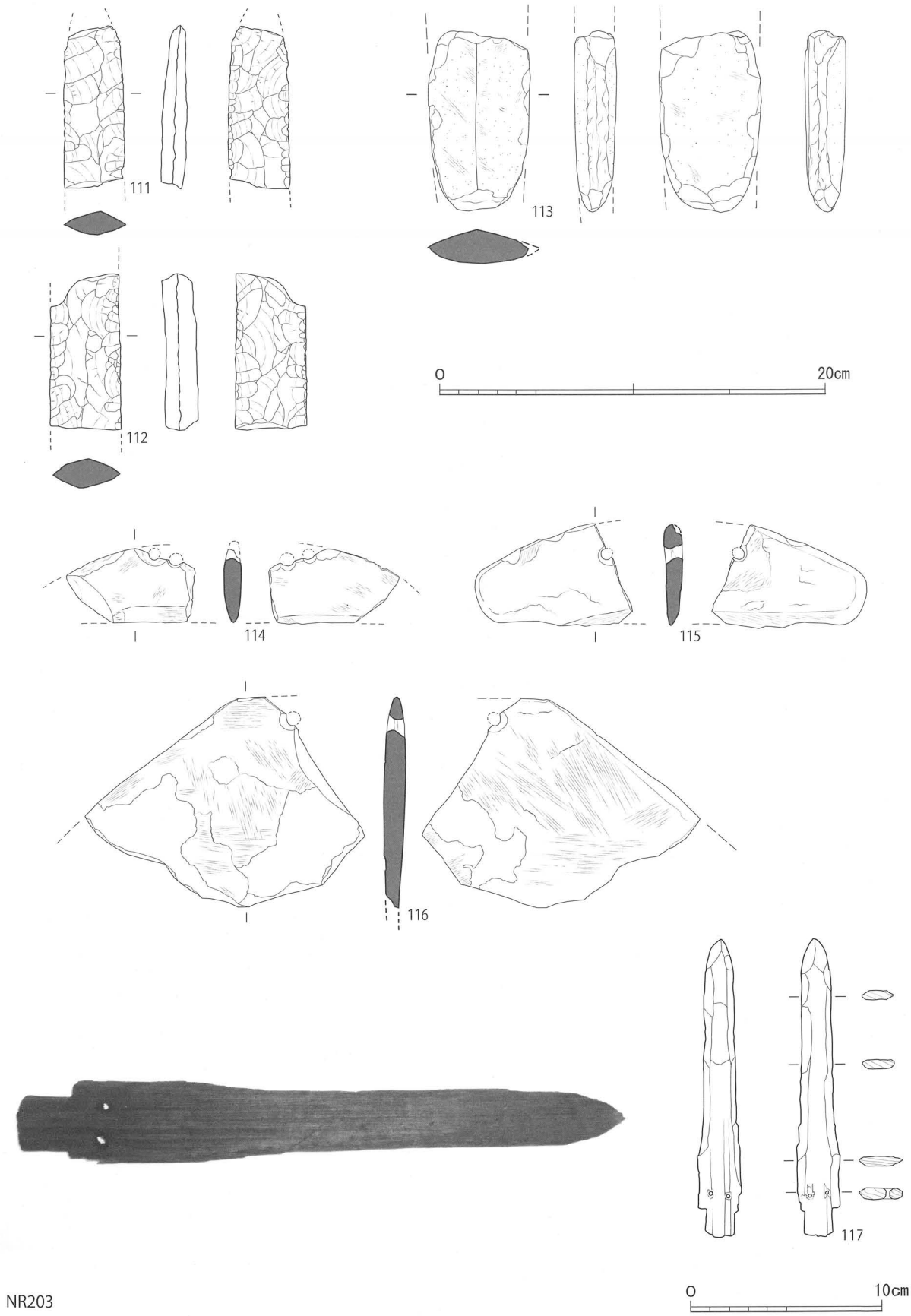
区画溝SD101（南拡張区・北から）

溝SD101に平行して巡る区画溝SD103（西南から）

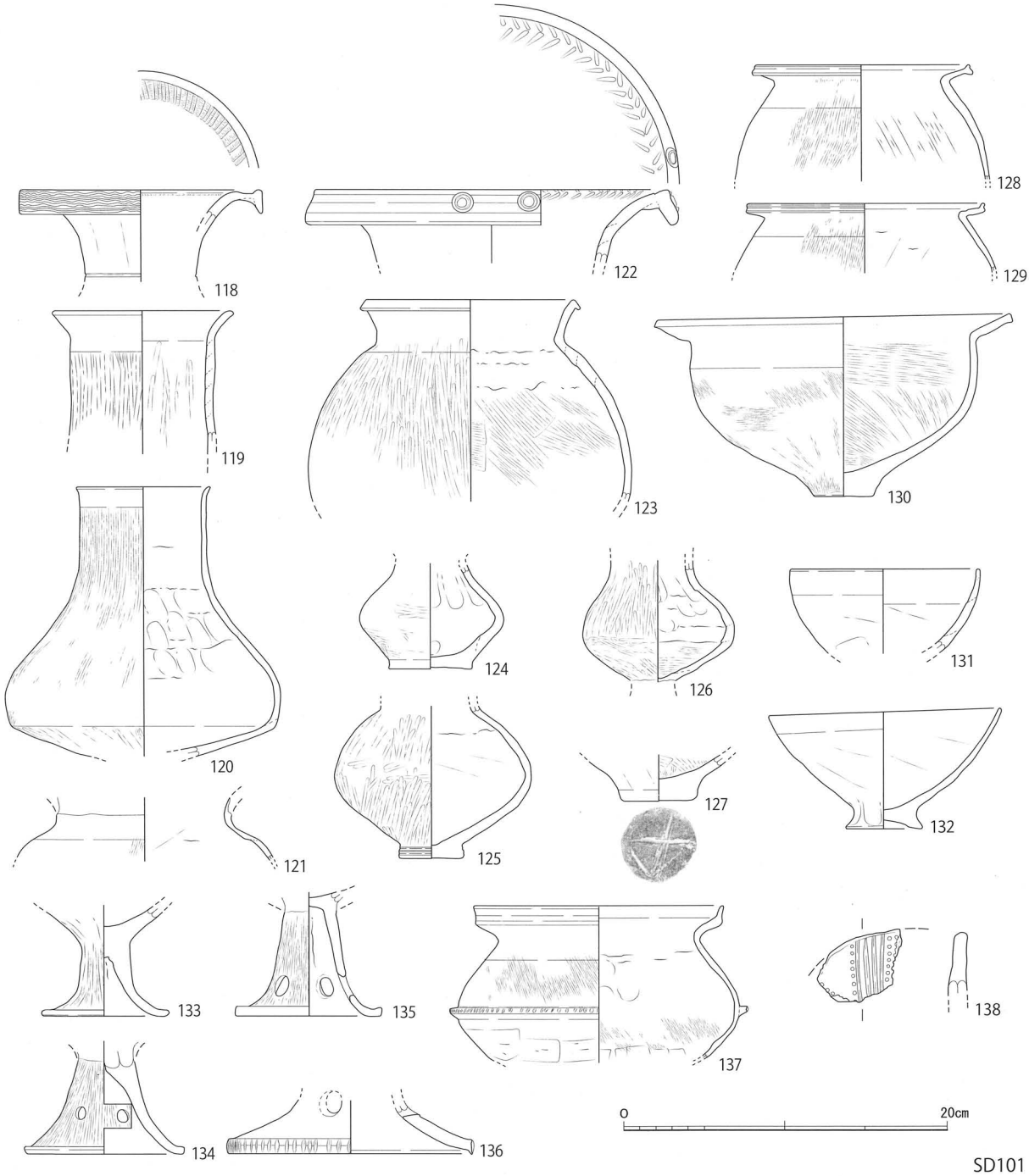
第43図　弥生時代中期後半～後期初頭・前半の主要遺構（２）



第44図　自然河道NR203出土遺物実測図１（S=1/4）

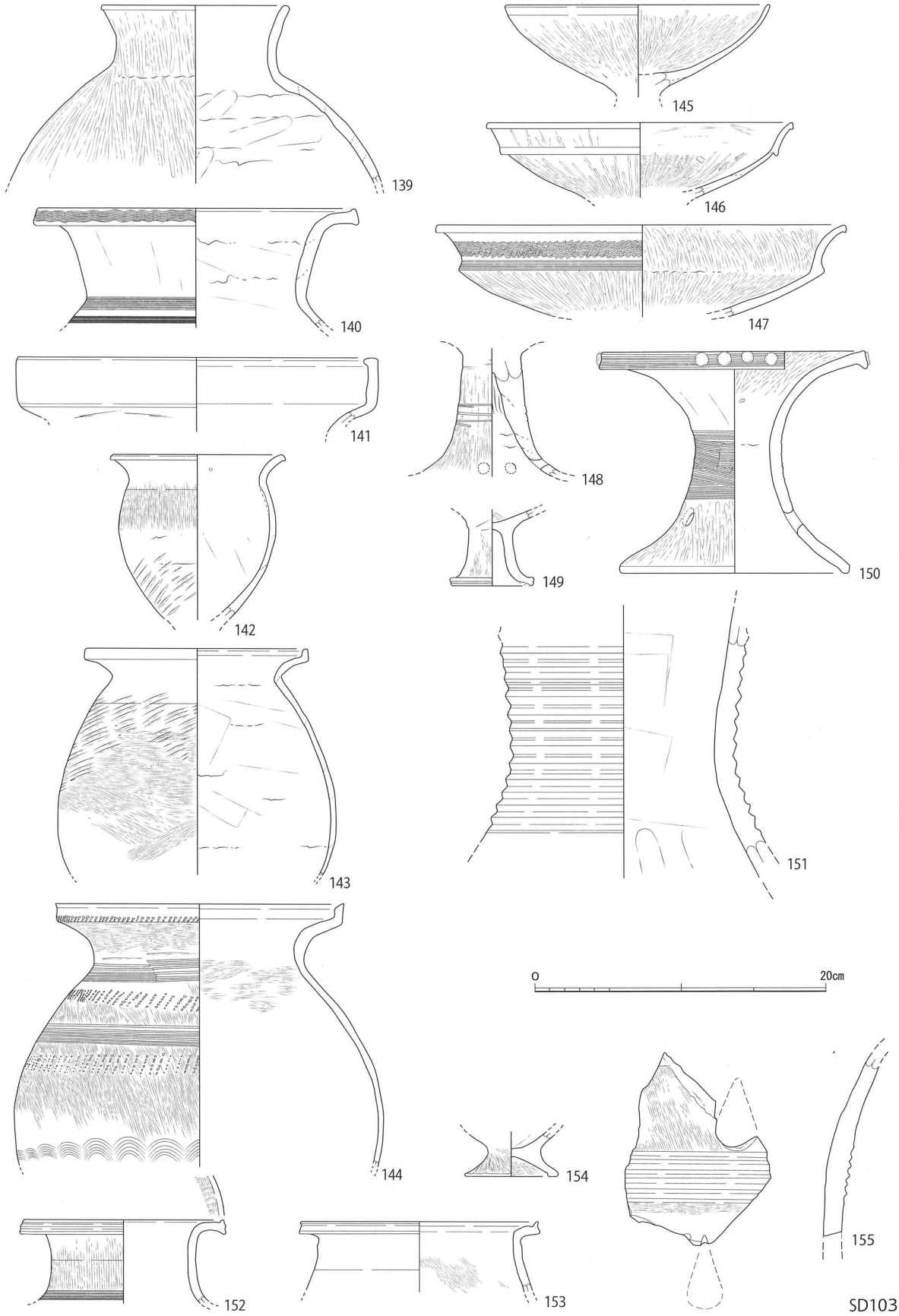


第45図　自然河道NR203出土遺物実測図２(S=1/3)

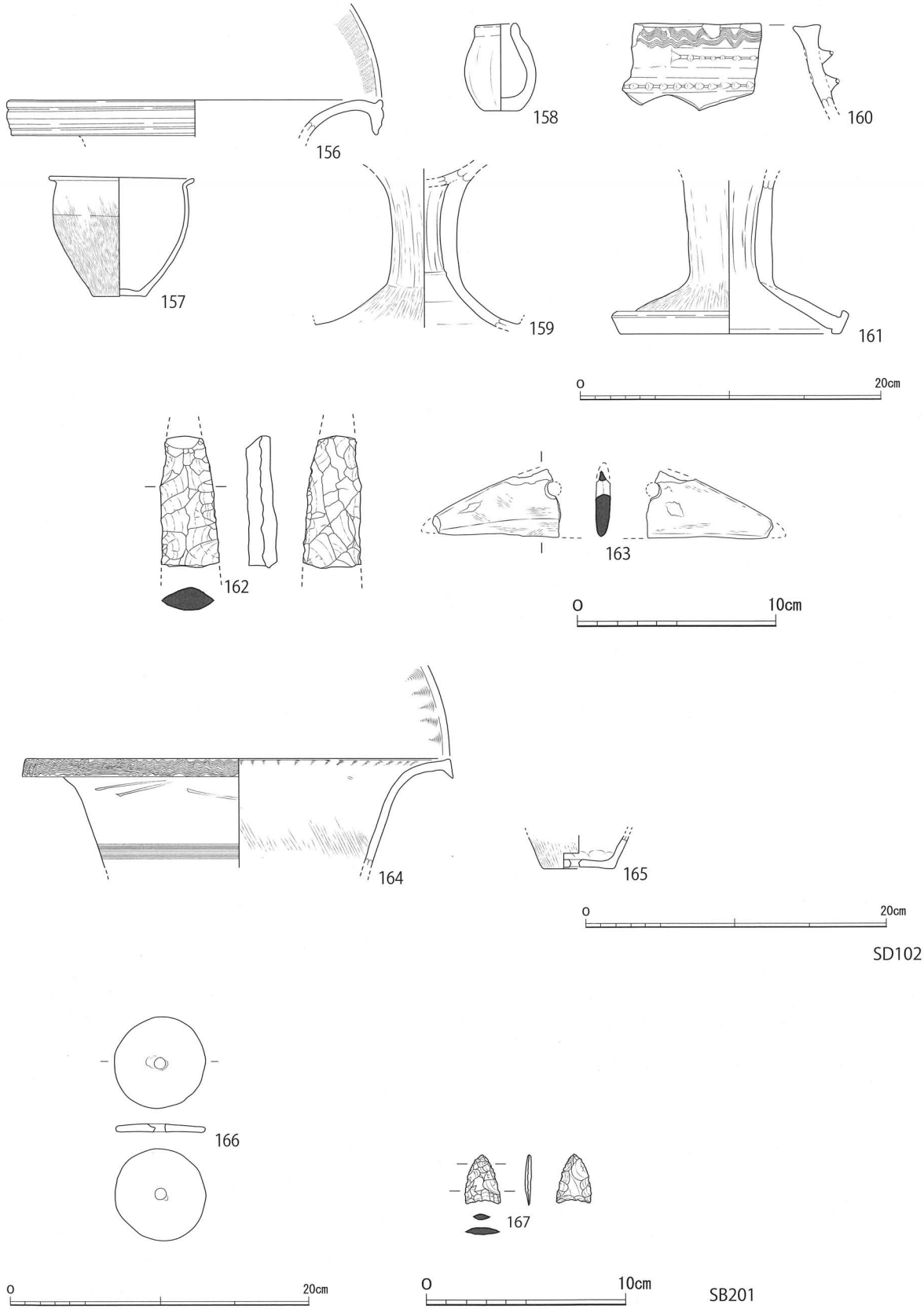


第46図　溝SD101出土遺物実測図(S=1/4)

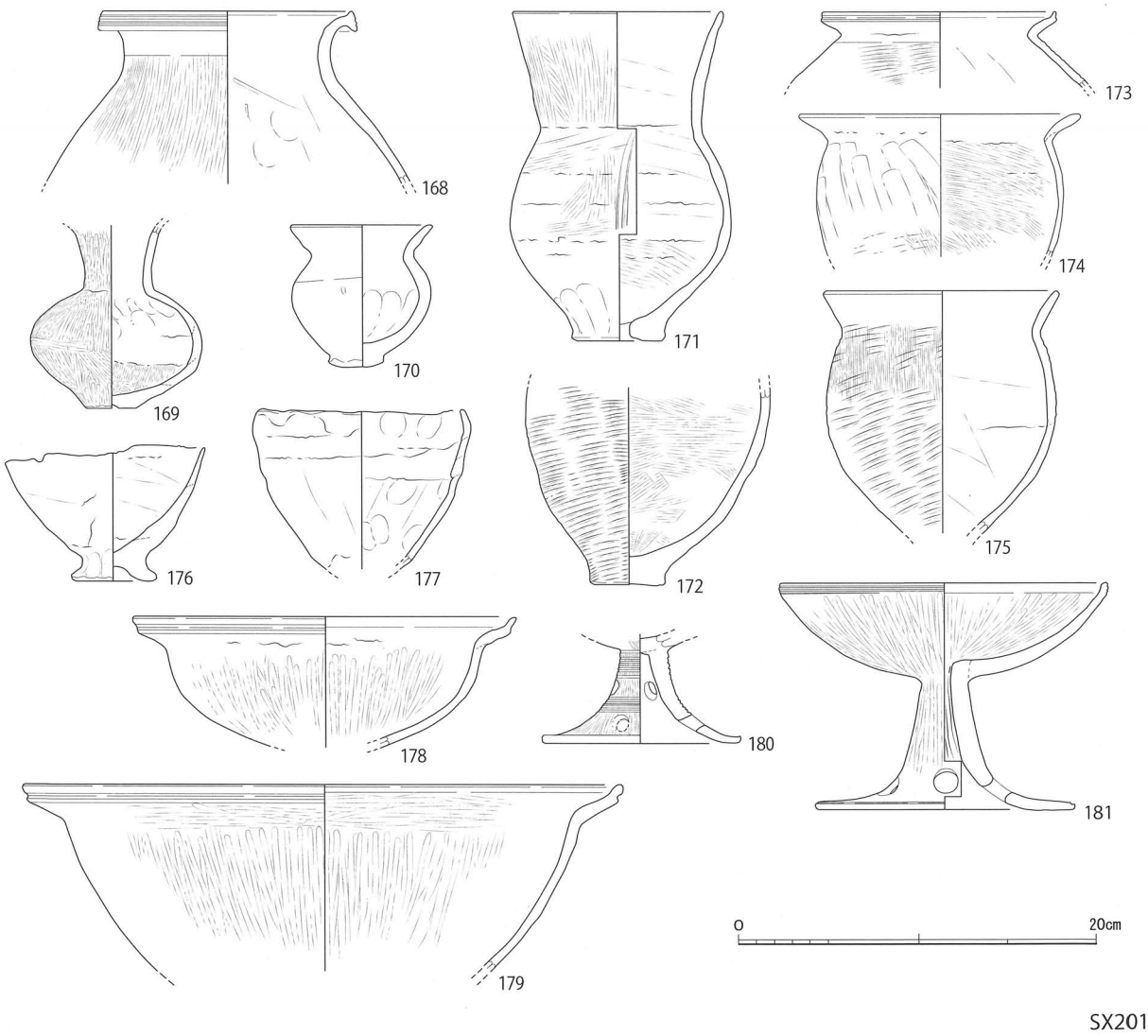
埋土は下半のほとんどが砂と粘土の互層堆積であり、弥生中期後半～後期初頭の多くの土器片とともに石器類、少量の木製品等が出土している。特筆すべき遺物としては、当遺跡で初めて出土が確認された装飾性に富む分銅形土製品がある。また、剣形木製品のような祭祀遺物も出土している。調査区南西隅検出の不明遺構としたSX201でも北岸の一部のみを確認しているが、埋土も下半が同様の砂、粘土の互層となっていた。これらの河道では出土土器に中期末～後期初頭の間で若干前後に重複するものの、平等坊・岩室弥生集落の中央部を西流する同一の河川と考えられるものである。



第47図　溝SD103出土遺物実測図(S=1/4)



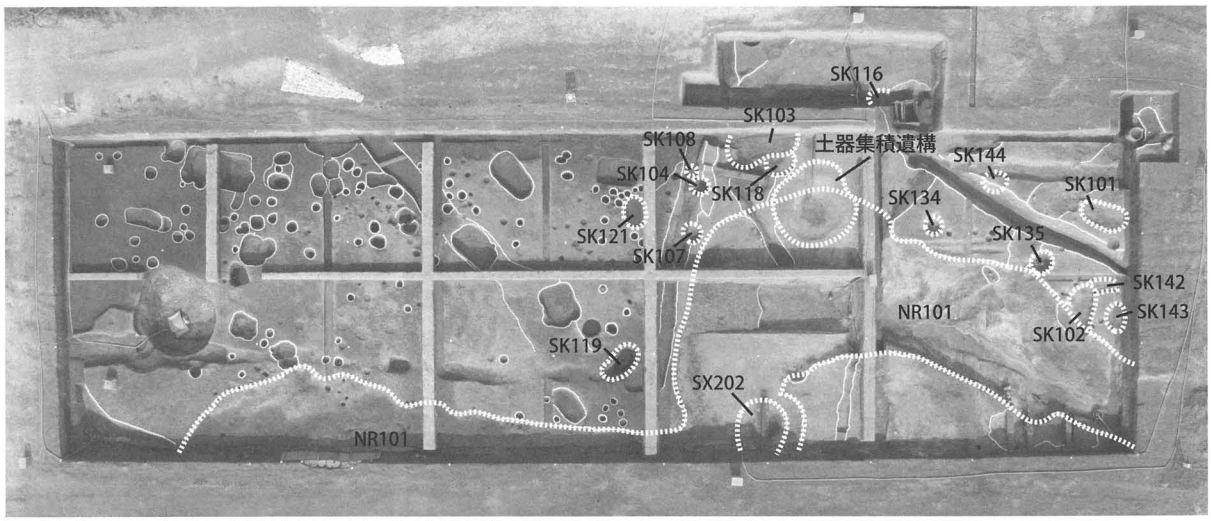
第48図　溝SD102・住居SB201出土遺物実測図（土器S=1/4・石器S=1/3）



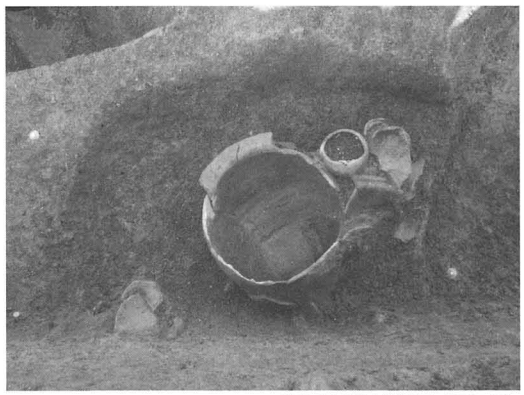
第49図　自然河道SX201出土遺物実測図(S=1/4)

溝では断面Ｖ字形を呈する区画溝的なもののみ４条を検出している。調査区北東の安定基盤から成る微高地の縁辺を多重に巡るように掘削された**区画溝SD101・SD103**では、いずれも埋土上半の堆積層中に弥生中期末～後期初頭・前半までの土器が出土しており、弥生中期後半～末には機能していたものと思われる。また、これらの弧状に巡る区画溝に先行する南北方向の**溝SD102・SD105**も平行した位置関係で確認されている。**溝SD102**は、北拡張区において前述のSD103との重複関係が見られ、明らかに時期的に先行する溝であった。遺物は中期後半～末にかけての土器片がわずかに出土している。調査区南辺の**SD105**も上部を重複した中・近世東西区画溝に著しく破壊されてはいるが、埋土からは微細な弥生土器片が見られた。

当該時期の土坑では、明確に土器等の出土が顕著なものは見られなかったものの、調査区の西半付近のみに幾つか検出されている。調査中に土坑として掘削したものの中には大型の柱穴となるものも見られたが、建物を想定復元できたものは１棟のみであった。大型柱穴となるものでは直径あるいは一辺が１ｍを超える平面規模のものが多く、柱根は残らずに抜取り痕が観察されるものばかりであった。**大型柱穴SK123、長方形土坑SK125**では掘り方埋土より中期後半～末の土器片が出土している。

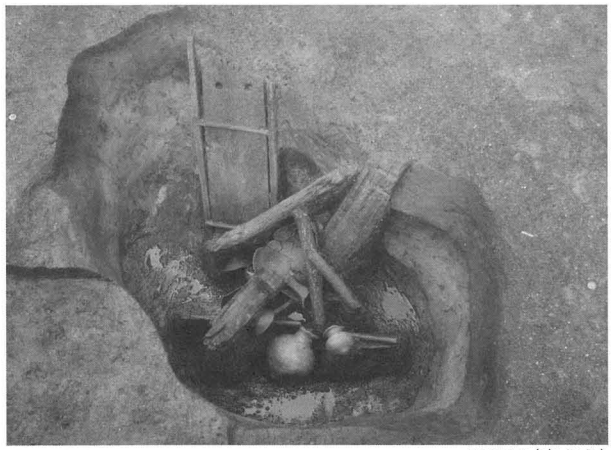


弥生後期後半～古墳前・中期の主要遺構



SK116（北拡張区・南から）

SX202木材（南から）



SK119（東から）

SK119不明木製品

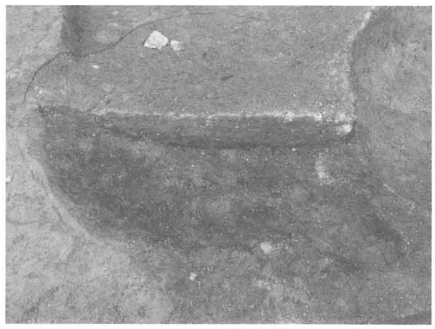
SK103土層断面（調査区北壁）

第50図　弥生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構（1）

古墳前・中期の土坑群（北から）

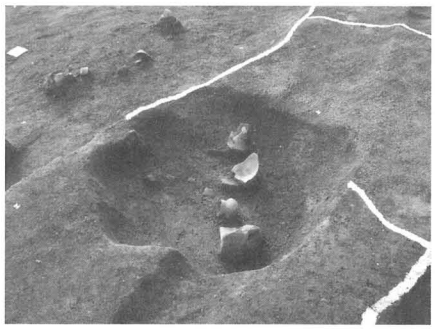
SK104（北から）

SK108（北から）



焼土坑SK117（南から）

河岸の土器集積遺構（南西から）



SK135（東から）

SK135土層断面（西から）

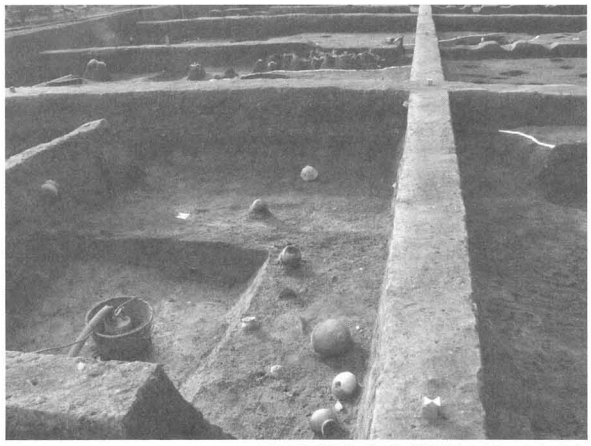
土器集積遺構 土層断面（西から）

第51図　弥生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構（2）

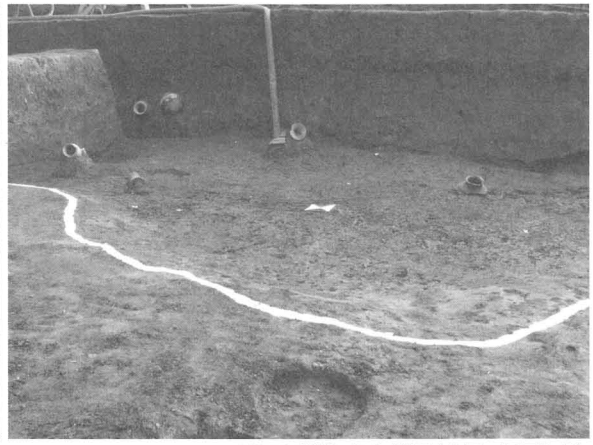
NR101土層断面（東から）

NR101土層断面（南から）

NR101土層断面（西から）



NR101遺物出土状況（５区・東から）



NR101遺物出土状況（８区・北西から）

NR101遺物出土状況（６・７区・東から）

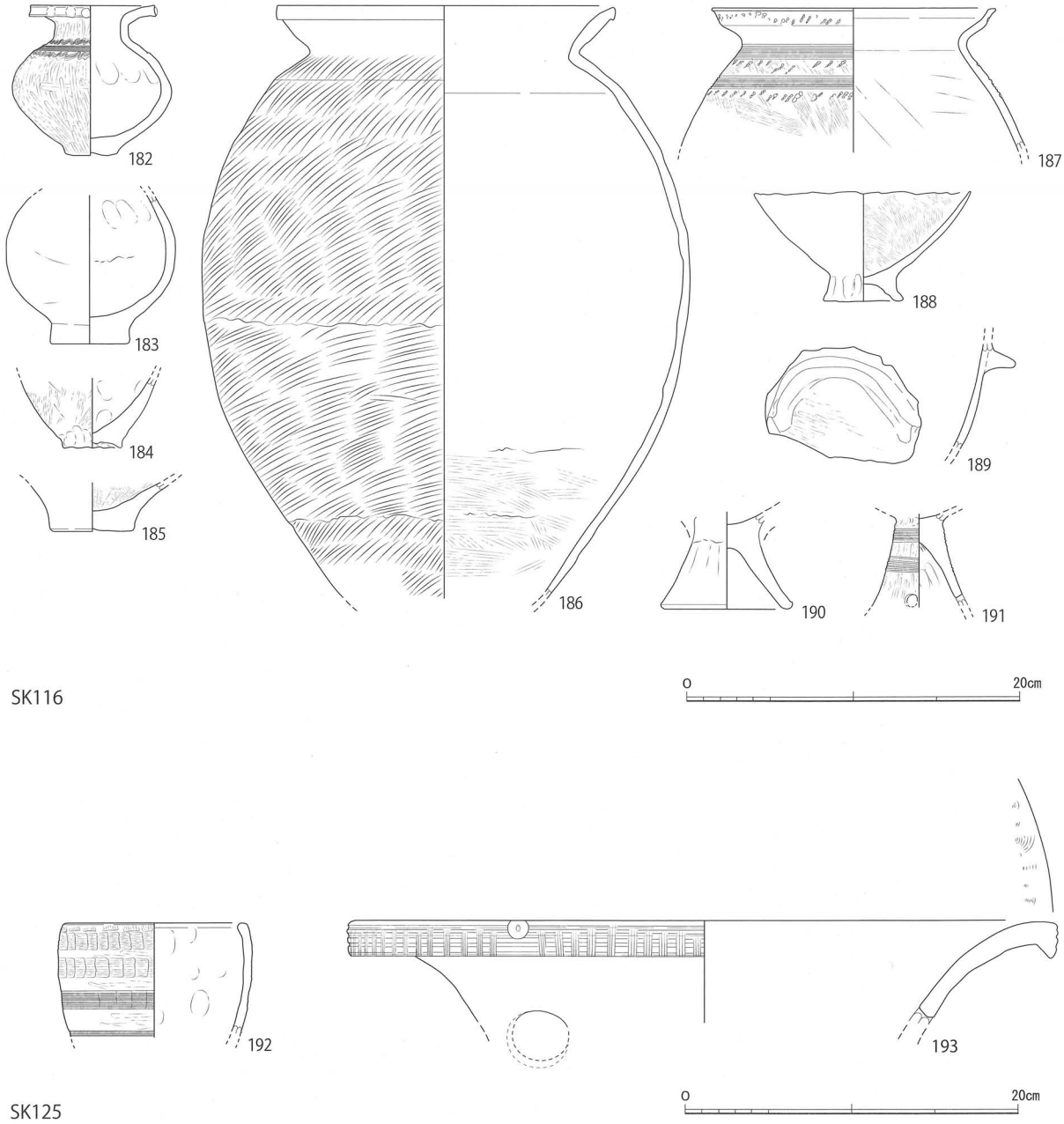
NR101土層断面（４・５区・南から）

第52図　弥生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構（３）

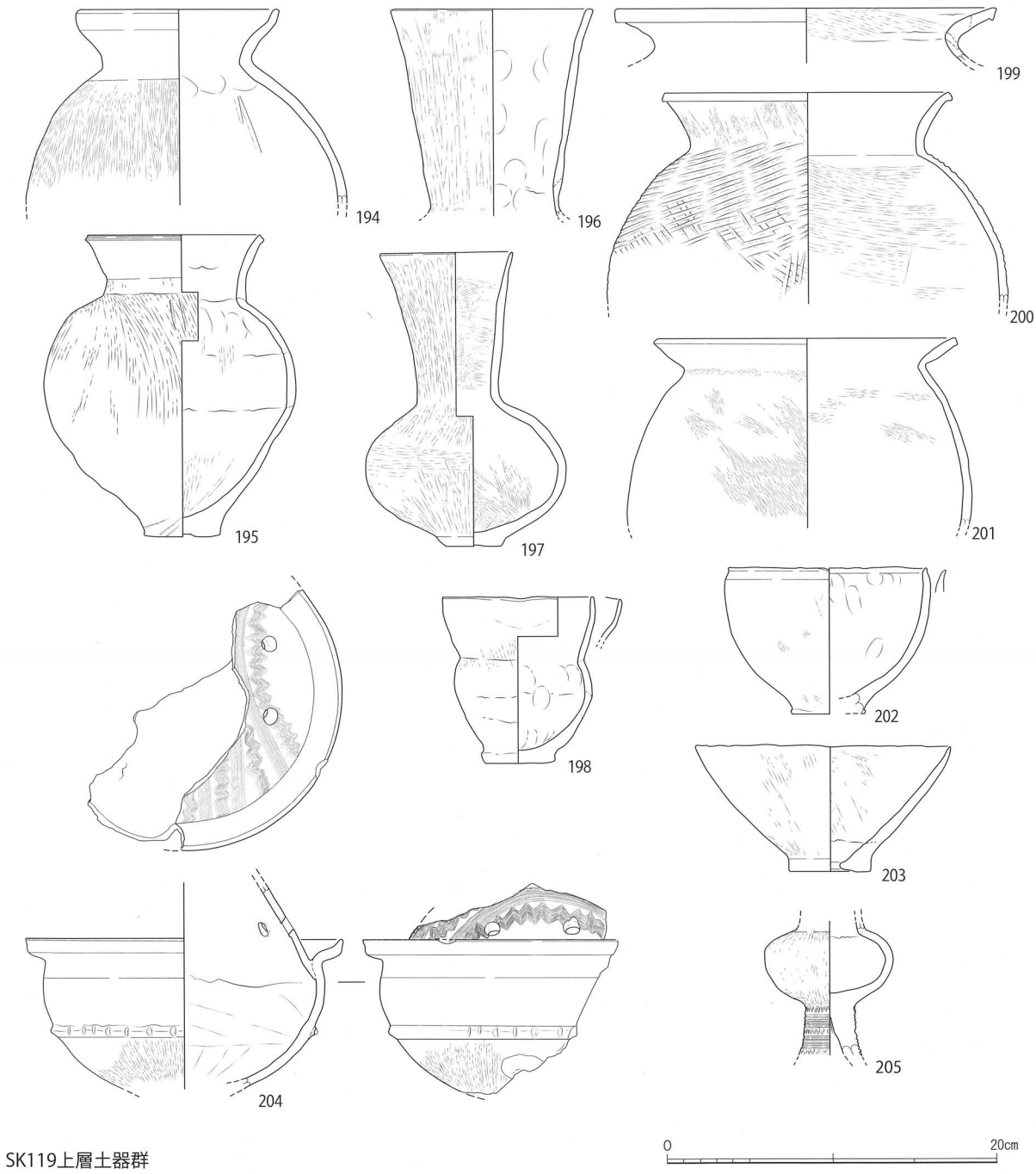
南東拡張区では**円形竪穴住居SB201**を検出している。西半の一部を欠くもののほぼ良好な状況で確認した住居跡である。径約４ｍの規模を示し、周縁には壁溝が巡る。遺物は中期後半の土器片を主体に出土するがほとんどが小片であった。ほかには周壁溝より土器片利用の土製円盤と石鏃が出土している。概ね中期後半の住居と考えられる。

（３）弥生後期後半～古墳前・中期の遺構

当遺跡において、弥生環濠集落の終焉を迎えた弥生後期後半以降の遺構では自然河道と多くの土坑（井戸）が見られた。

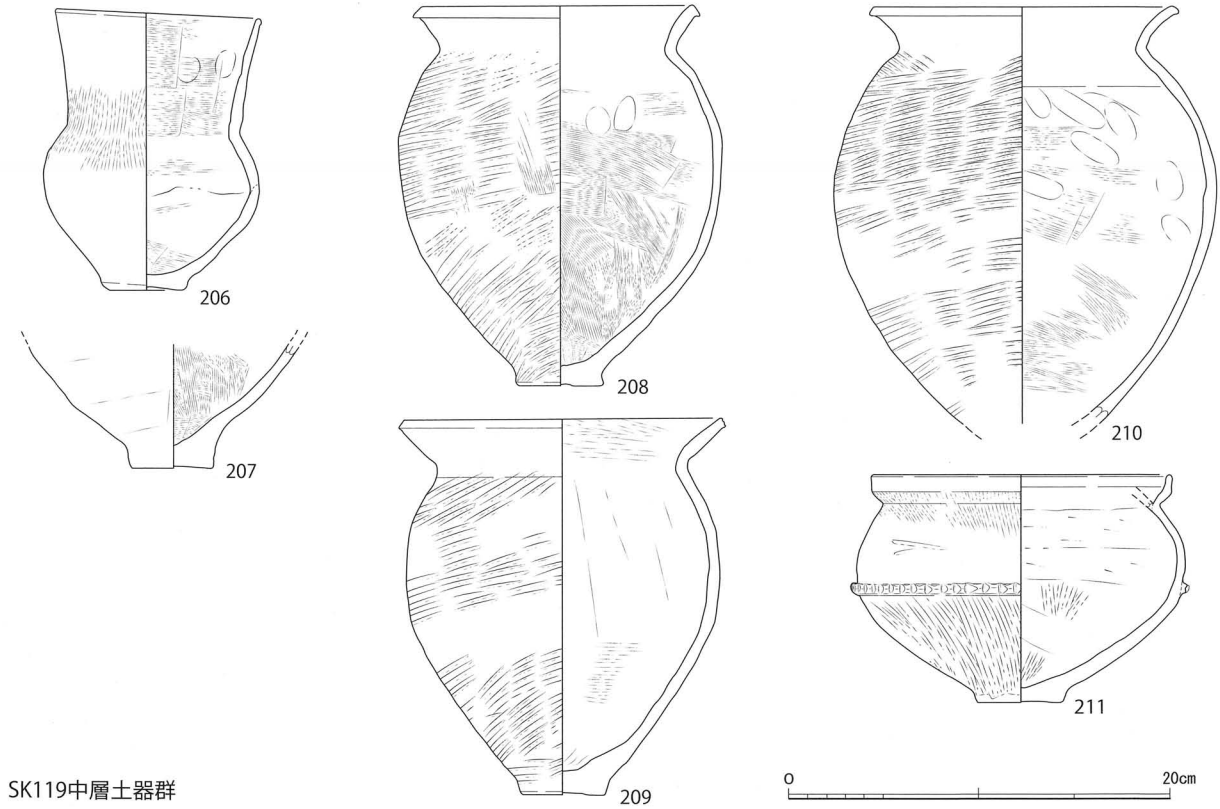


第53図　土坑SK116・柱穴SK125出土遺物実測図(S=1/4)

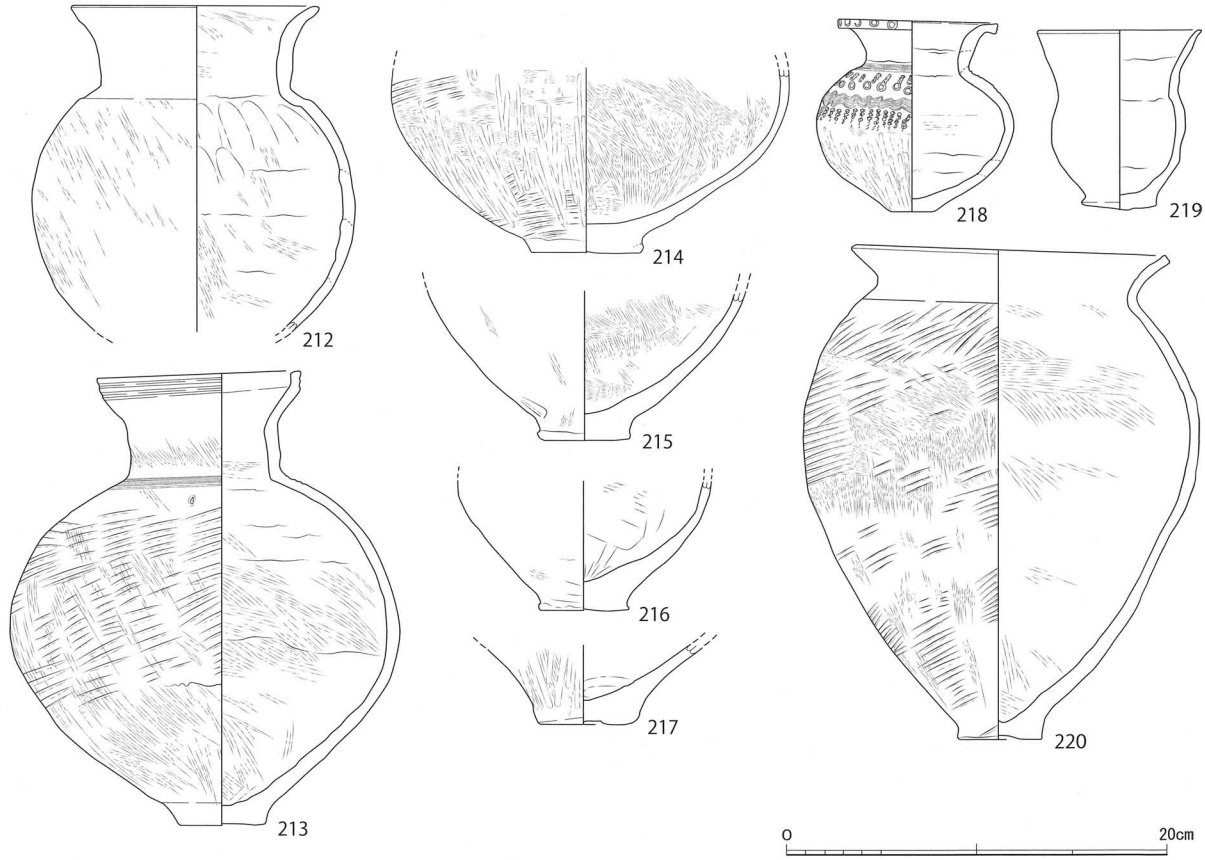


第54図　土坑SK119出土遺物実測図１（S=1/4）

土坑SK116は北拡張区において検出され、区画溝SD101の東辺に重複して掘削されたほぼ円形の土坑である。**土坑SK119は**長円形の平面形を呈する素掘り井戸状の土坑である。検出時より用途不明木製品とともに多量の完形土器が投棄された状況が見られた。上面・上層から中・下層までに多くの土器が見られたが、間層を挟み底面直上では完形、ほぼ完形の直口壺が２点のみ出土している。ほかにも弥生後期後半の遺構では、調査区中央南辺付近で丸太材を下面に据えた落ち込み状**土坑SX202**があり、自然河道NR101の蛇行部南岸辺に取り付くように設置されている。

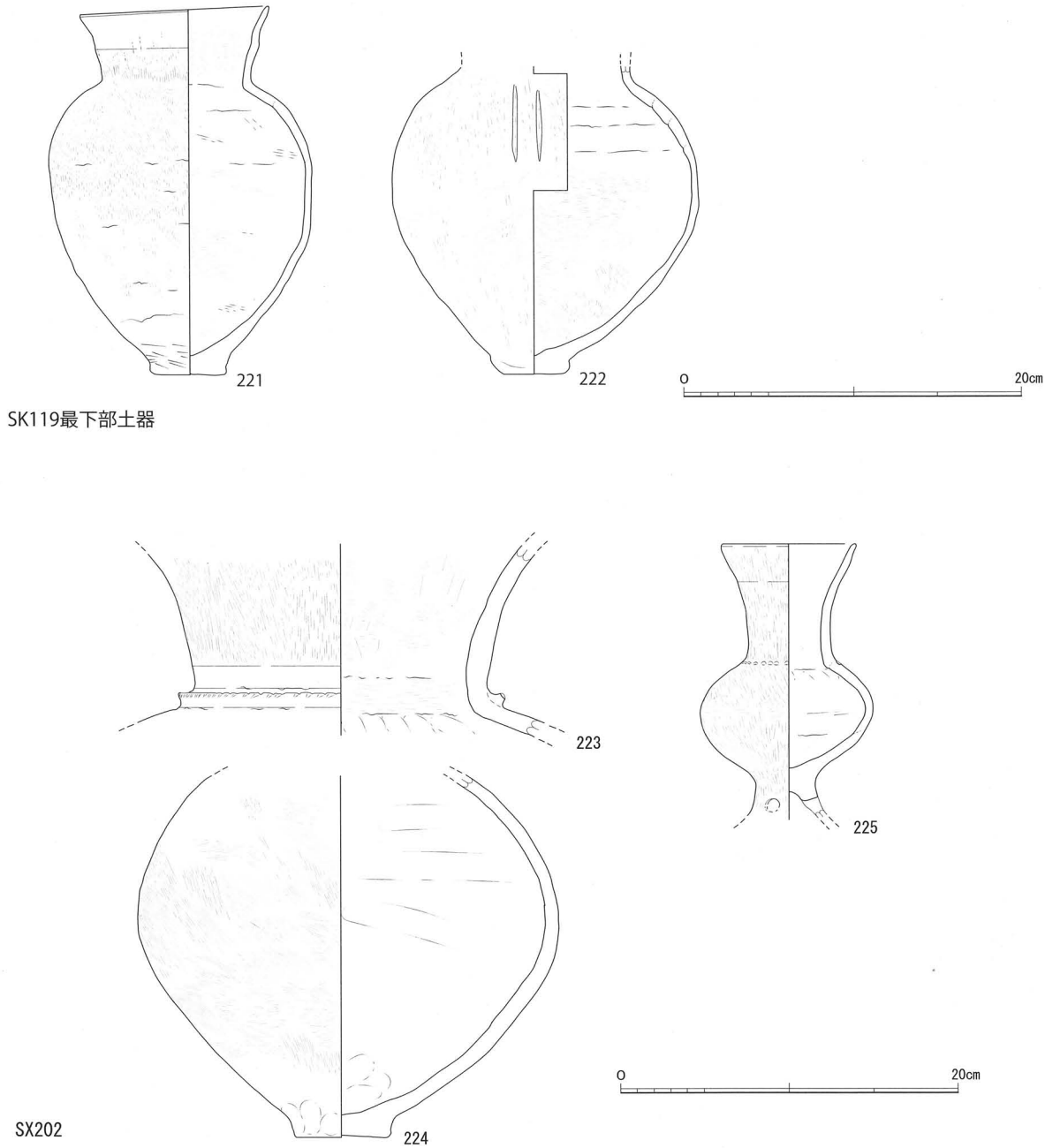


SK119中層土器群



SK119中～下層土器群

第54図　土坑SK119出土遺物実測図２(S=1/4)

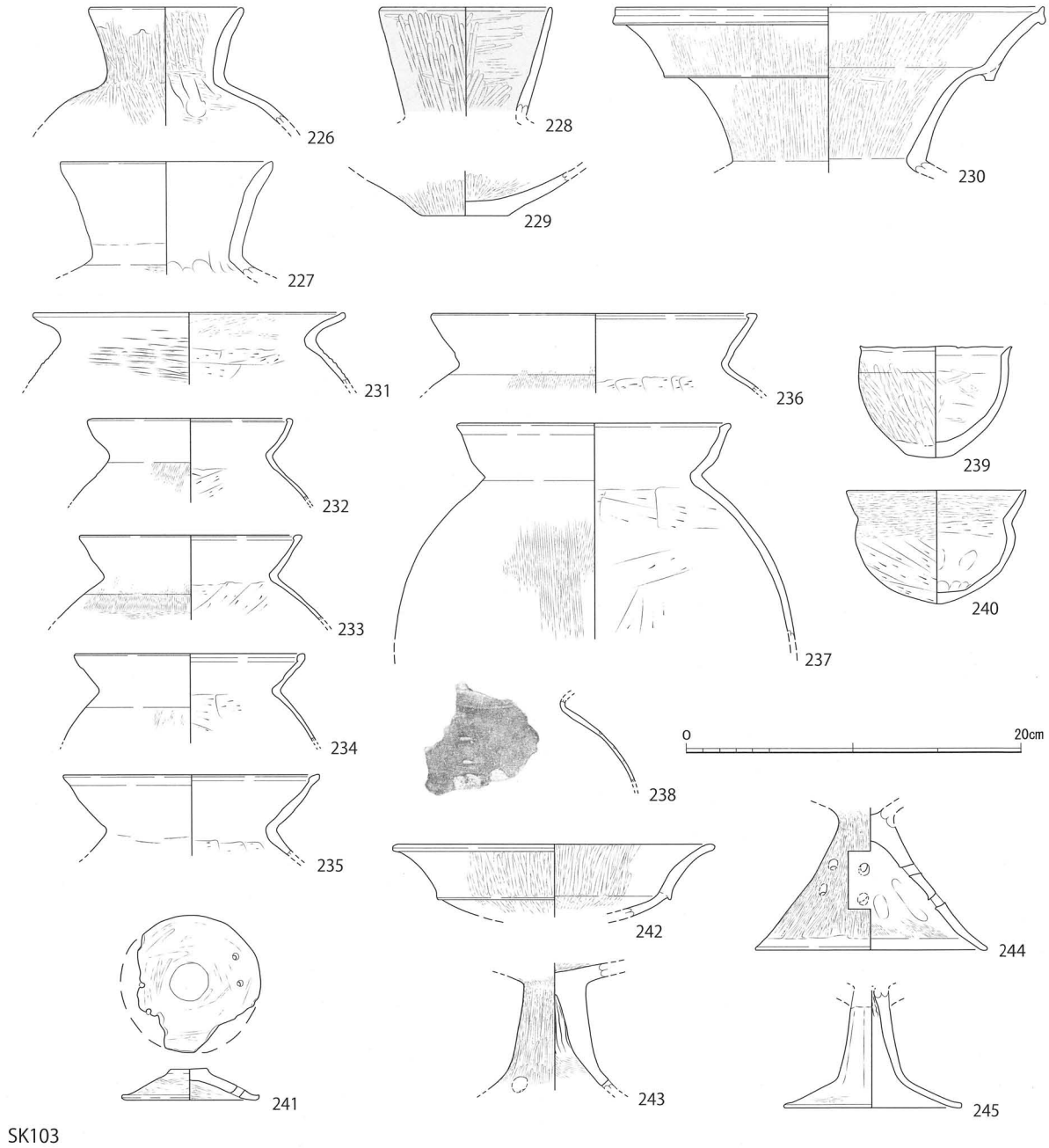


第56図　土坑SK119出土遺物実測図３・SX202出土遺物実測図(S=1/4)

土坑SK103・SK104・SK118はいずれも古墳前期初頭～前半の土坑である。古墳前期後半～中期の土坑には、鍬形石を埋納した土坑**SK108**や**SK135**がある。**SK135**は古墳時代土坑では最も時期的に後出する遺構となる

ここで明示していない遺構も含めて弥生後期後半以降の遺構のほとんどは調査区東半に分布し、特に古墳前期以降の土坑が自然河道の北岸に多く見られた。

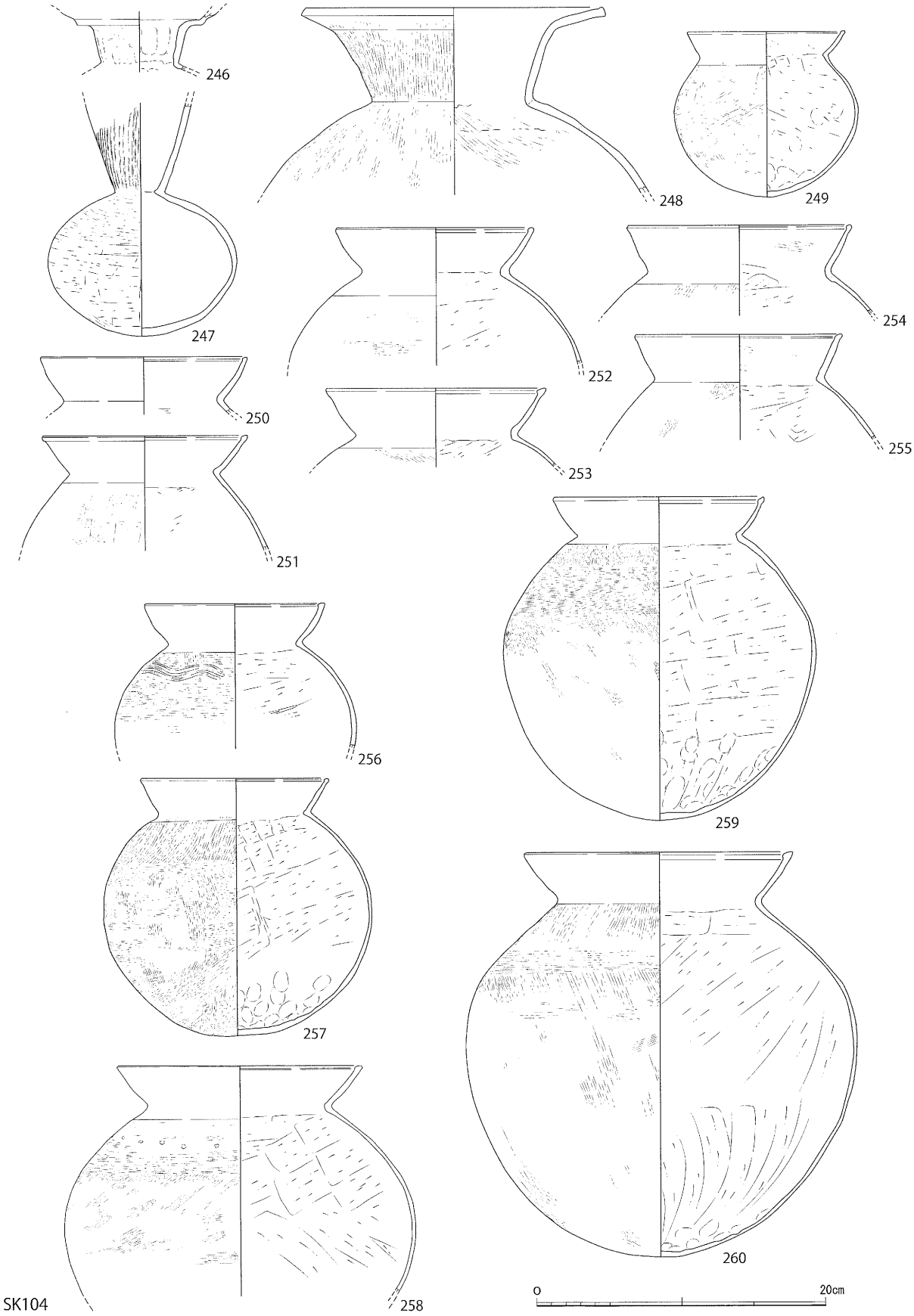
自然河道北岸の**土器集積遺構**は径約５ｍの規模をもつ落ち込み遺構である。下部は川岸の窪みとなっており、弥生後期後半～末の土器が出土しているが、上部には北岸側より投棄された多量の土器が見られた。土器の時期幅では庄内式期後半から古墳前期末までの間に限定されている。



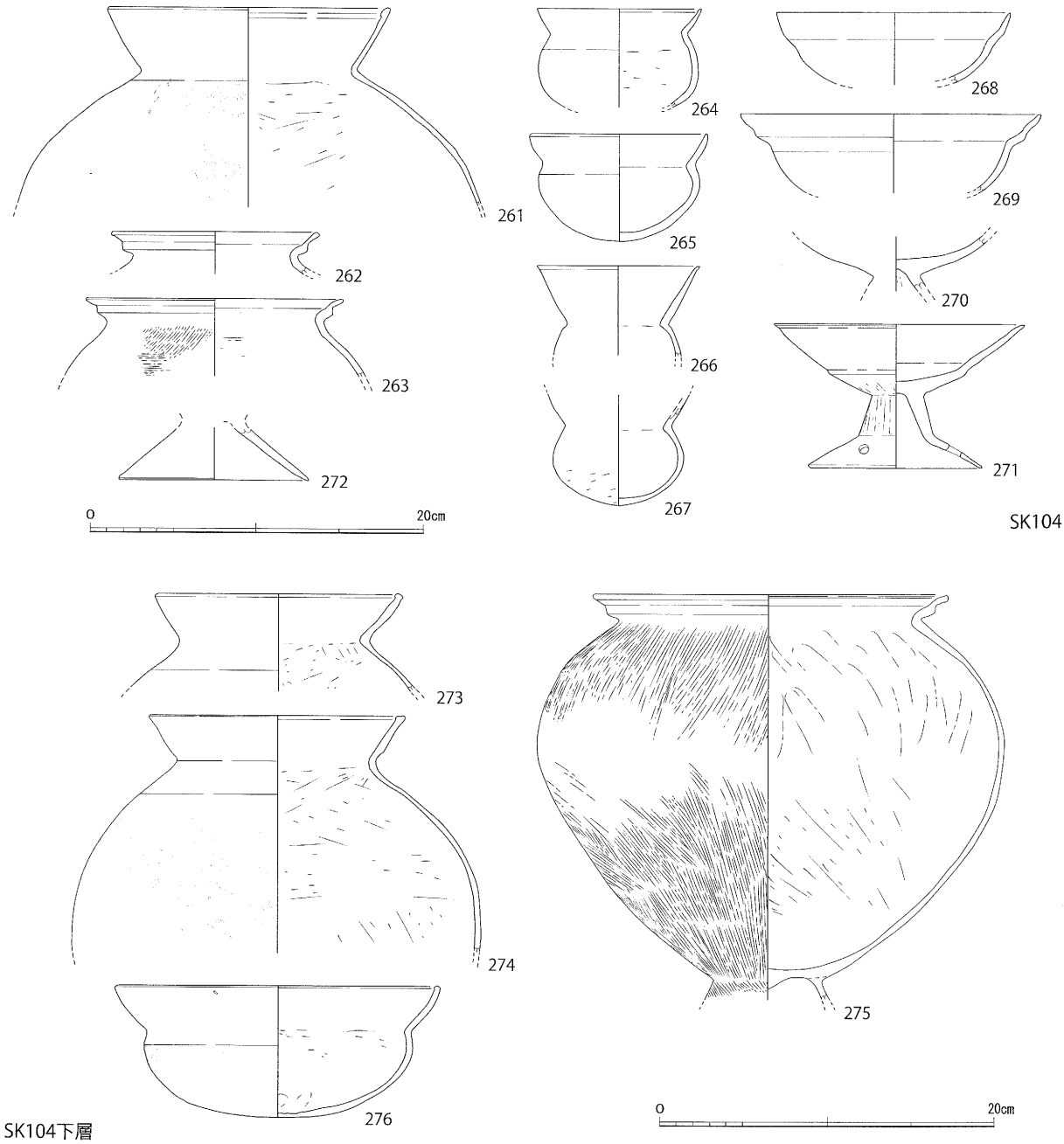
第57図　土坑SK103出土遺物実測図(S=1/4)

自然河道NR101は調査区の東西にわたって検出された河川跡である。調査区内で東西に大きく蛇行し、東半のみで両岸を検出している。調査区東半部の河道の下面には前段階の河道や溝遺構等が重複し、最も深くなっている。そのためか、ここでは弥生中・後期の土器片の混入が目立つ。調査区西半南側では北岸の法面部分のみを検出している。埋土はいずれも多量の砂が主体となり、完形品を含む多量の弥生後期後半～古墳前期の土器が出土している。おそらく河道としては古墳前・中期頃まで機能していたものと思われ、前述の土器集積遺構も同時併存したものと考えられる。なお、河道埋土の砂層からは、管玉再加工による鮮やかな青色ガラス製小玉や滑石製管玉未成品、緑色凝灰岩製管玉などの微細な遺物も出土している。

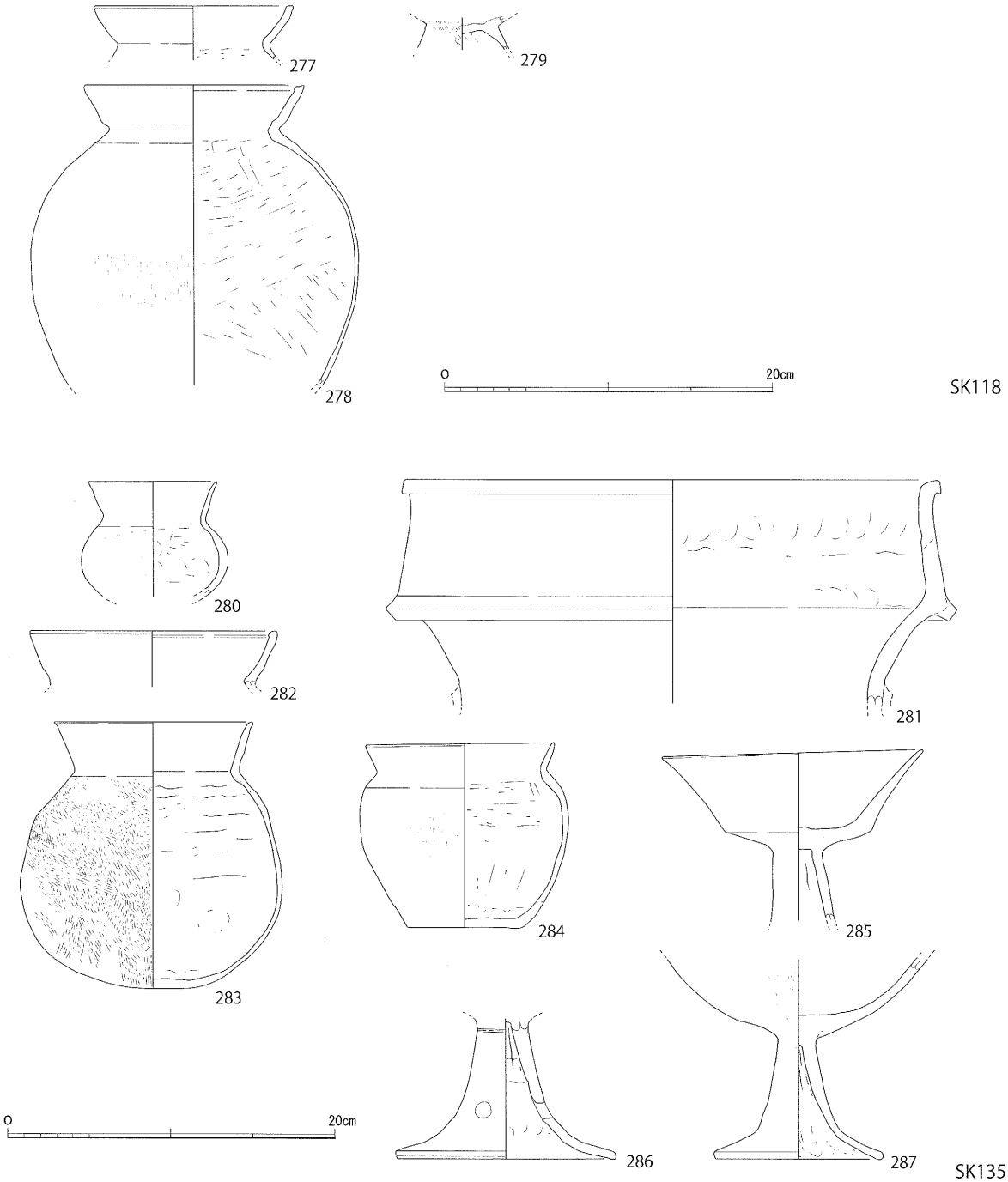
なお、鍬形石出土の**土坑SK108**については次章で詳述するものとしたい。



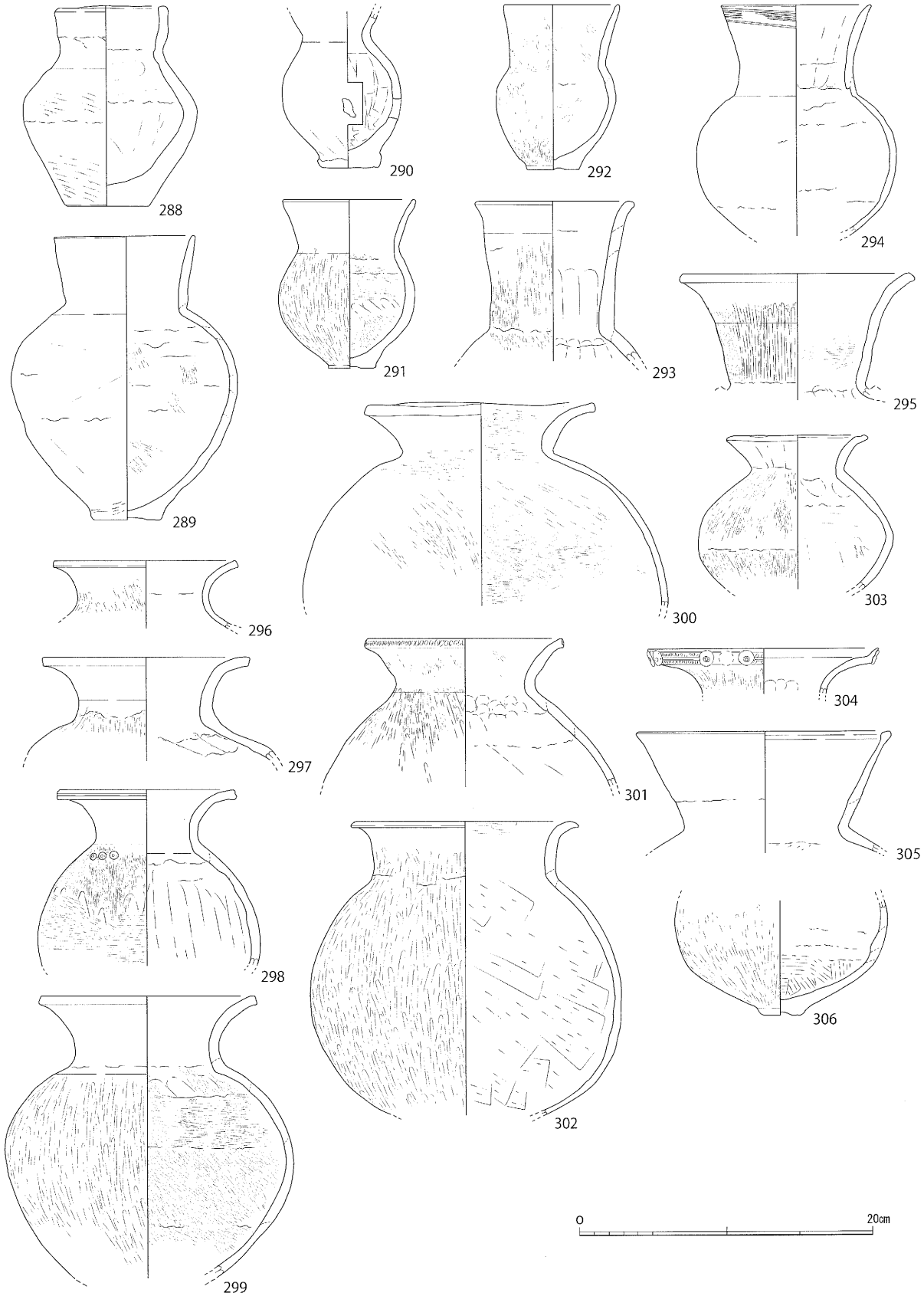
第58図　土坑SK104出土遺物実測図１（S=1/4）



第59図　土坑SK104出土遺物実測図２(S=1/4)

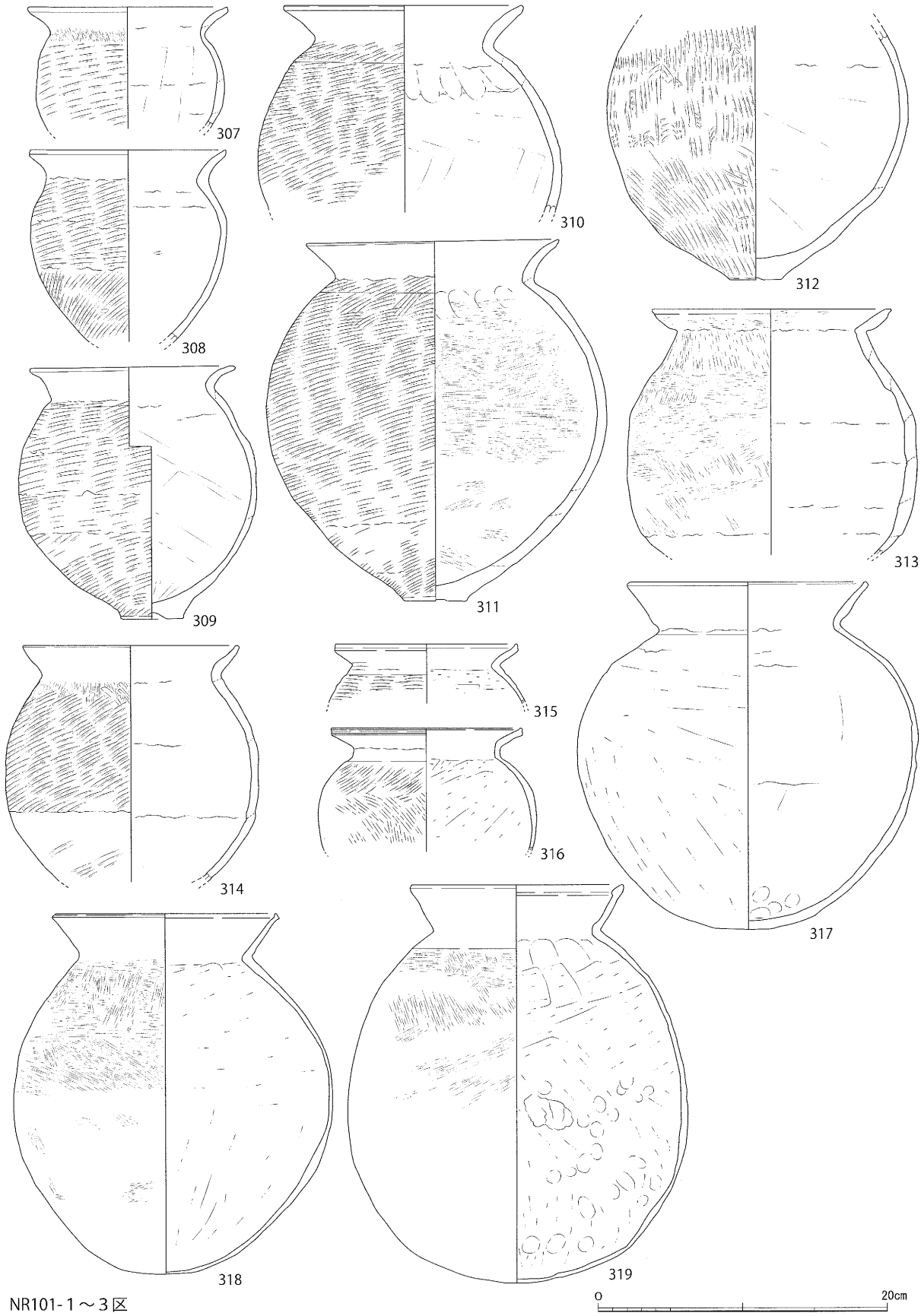


第60図　土坑SK118・SK135出土遺物実測図(S=1/4)

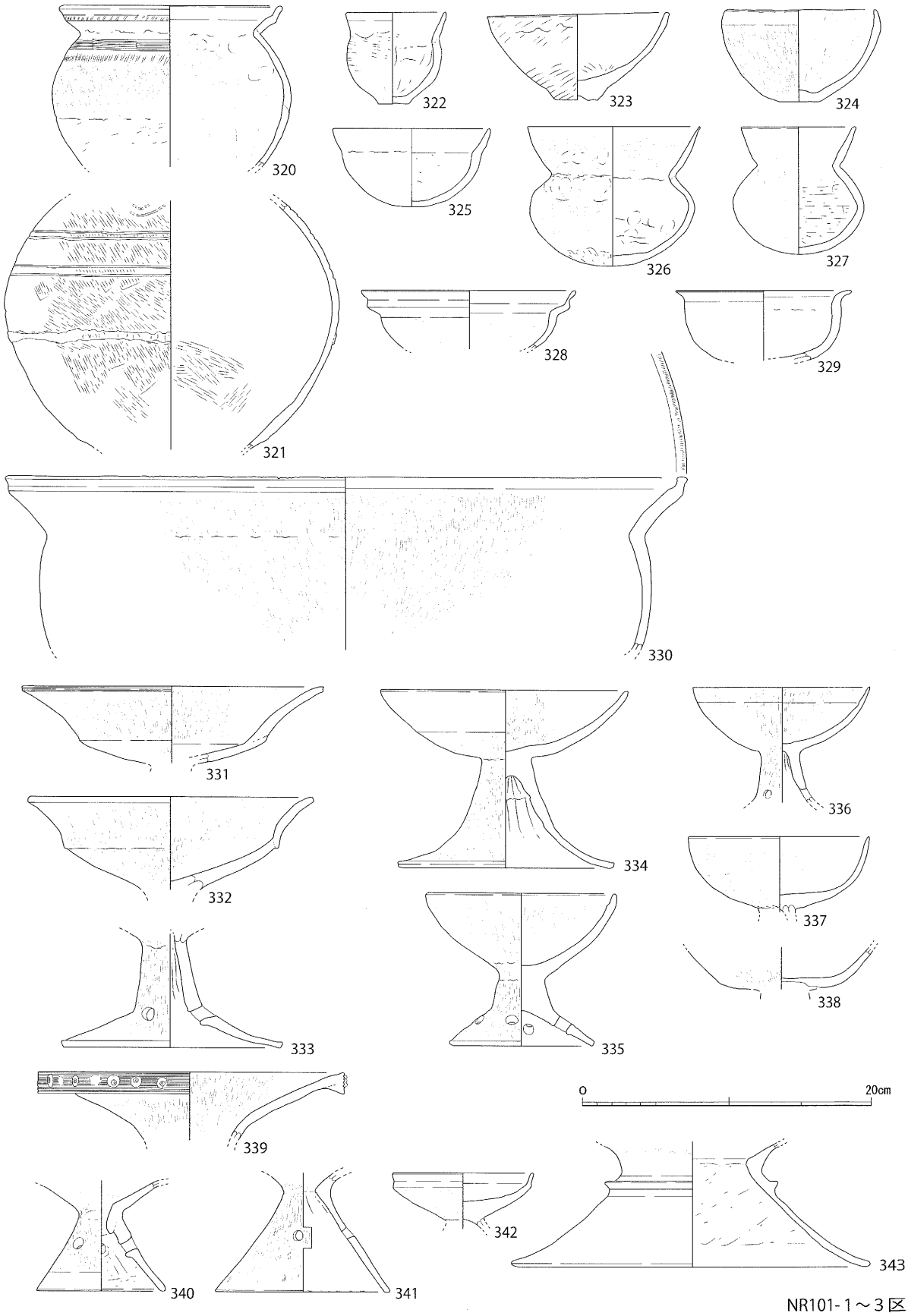


NR101-1～3区

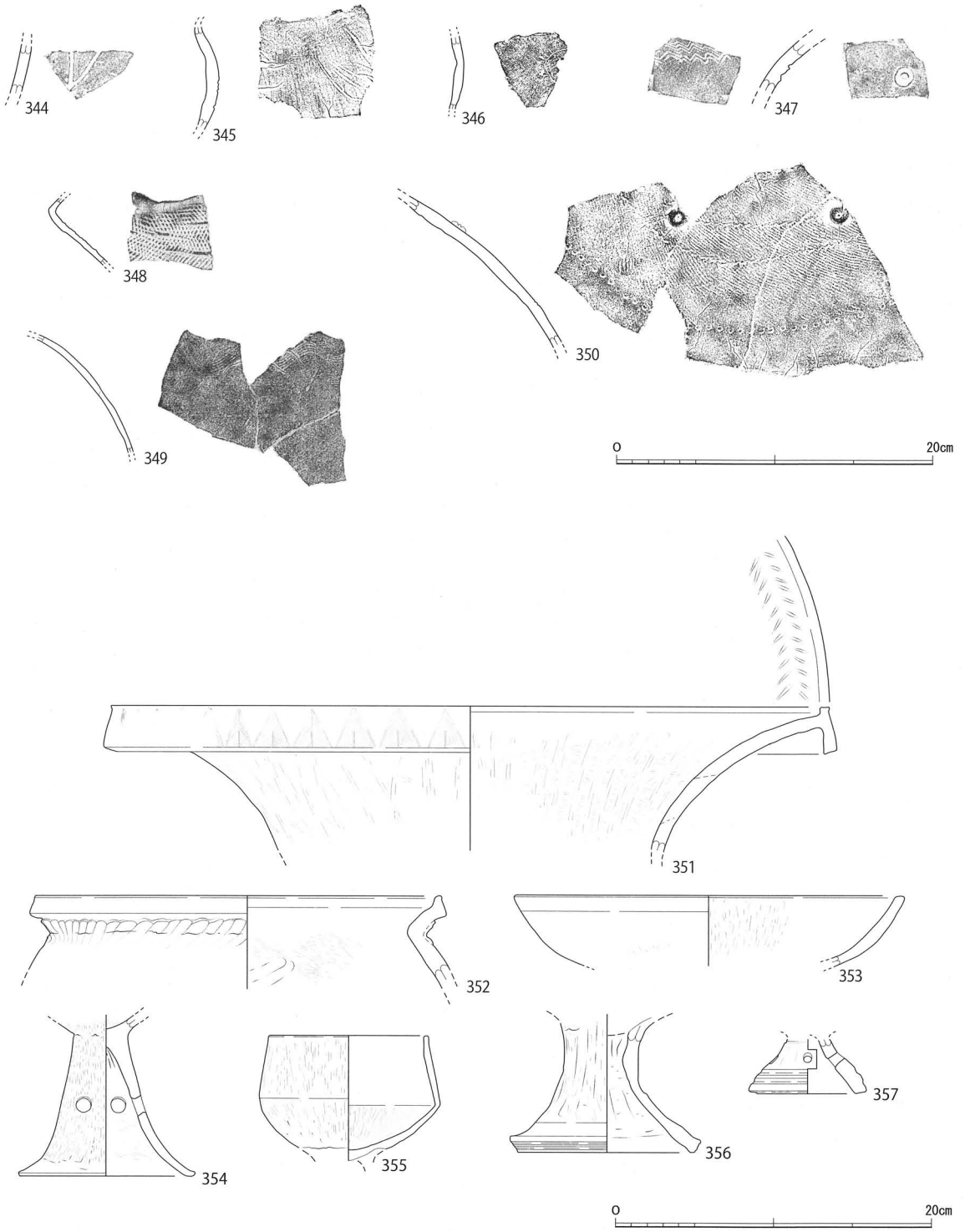
第61図　自然河道NR101出土遺物実測図１(S=1/4)



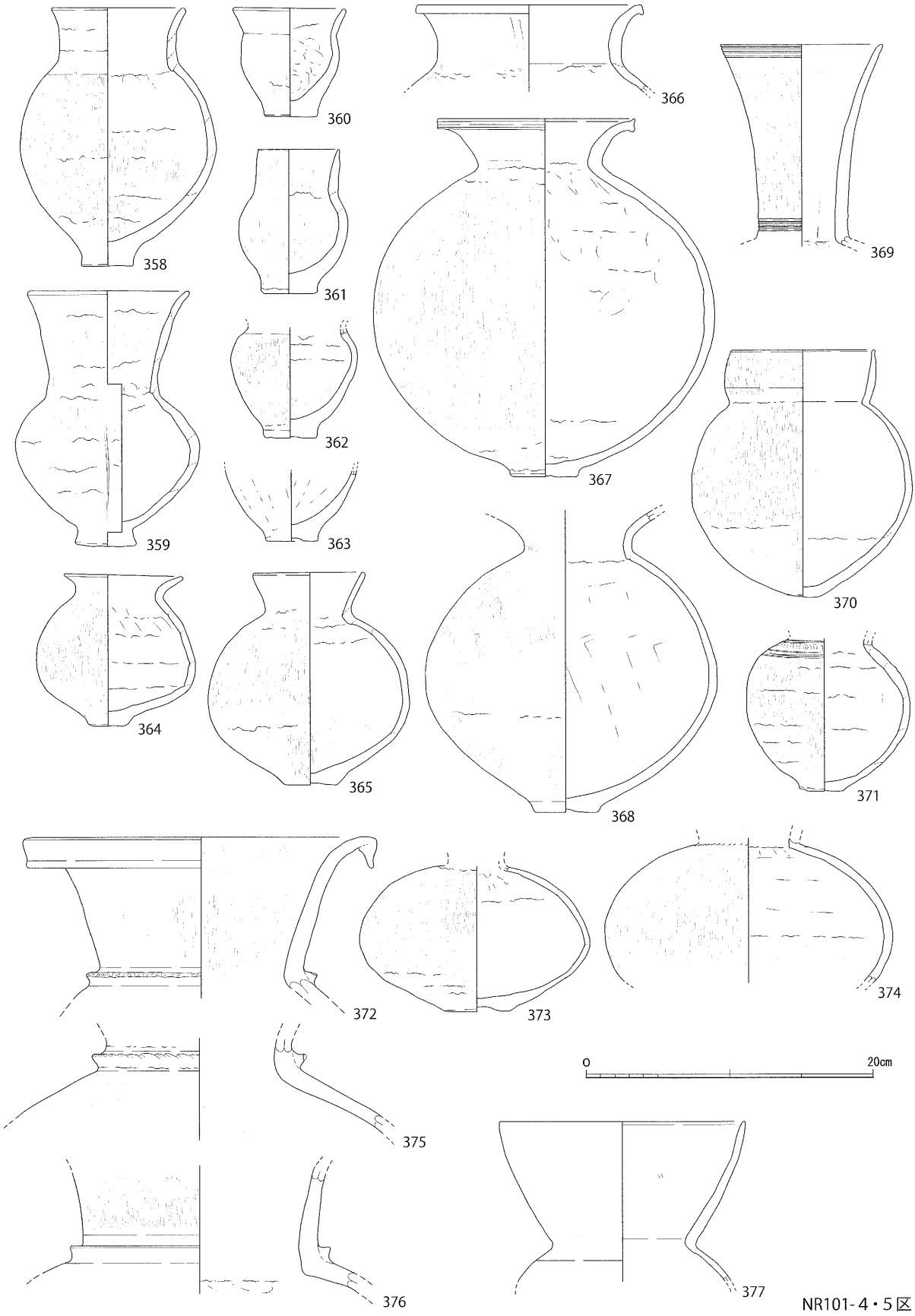
第62図　自然河道NR101出土遺物実測図２(S=1/4)



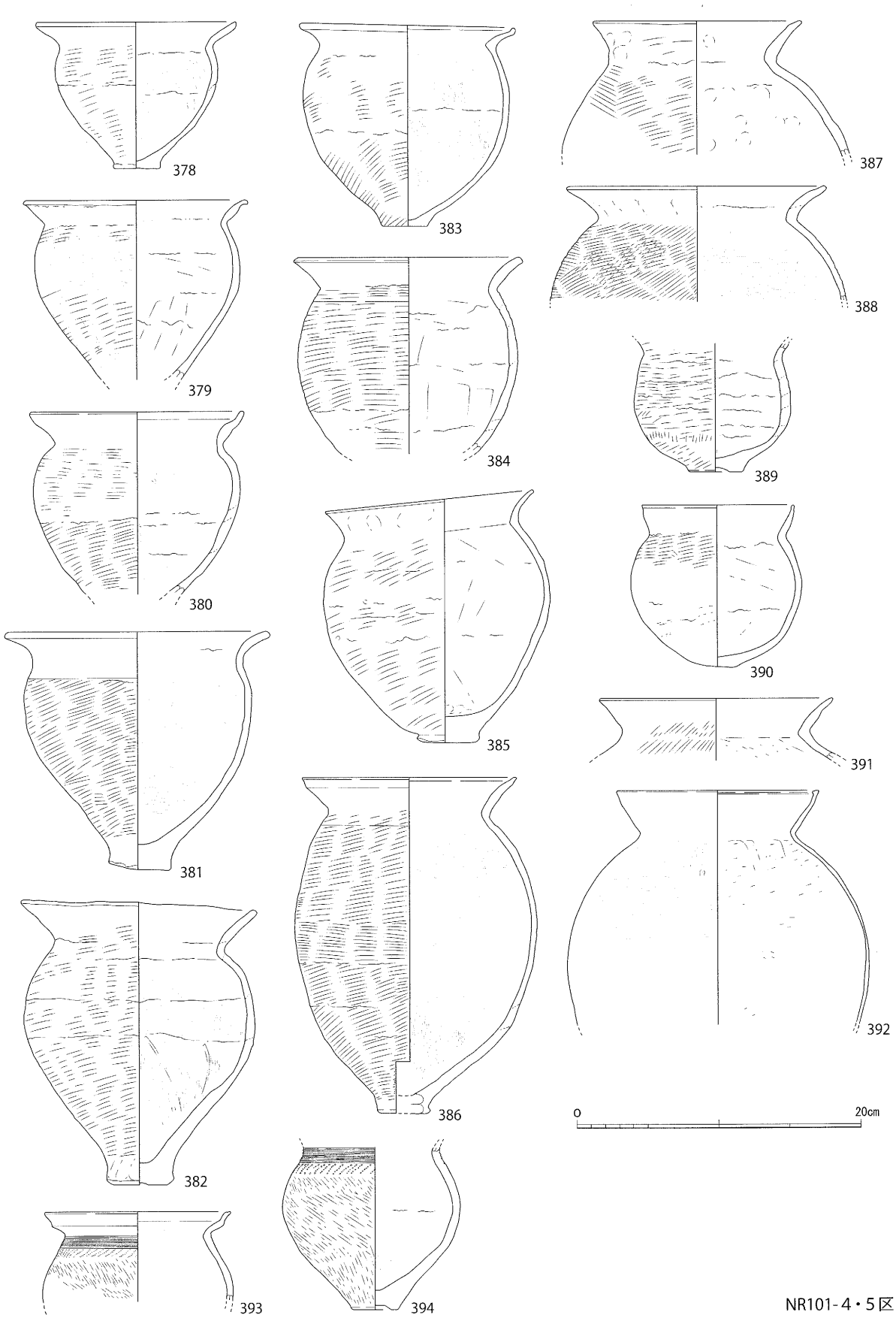
第63図　自然河道NR101出土遺物実測図３(S=1/4)



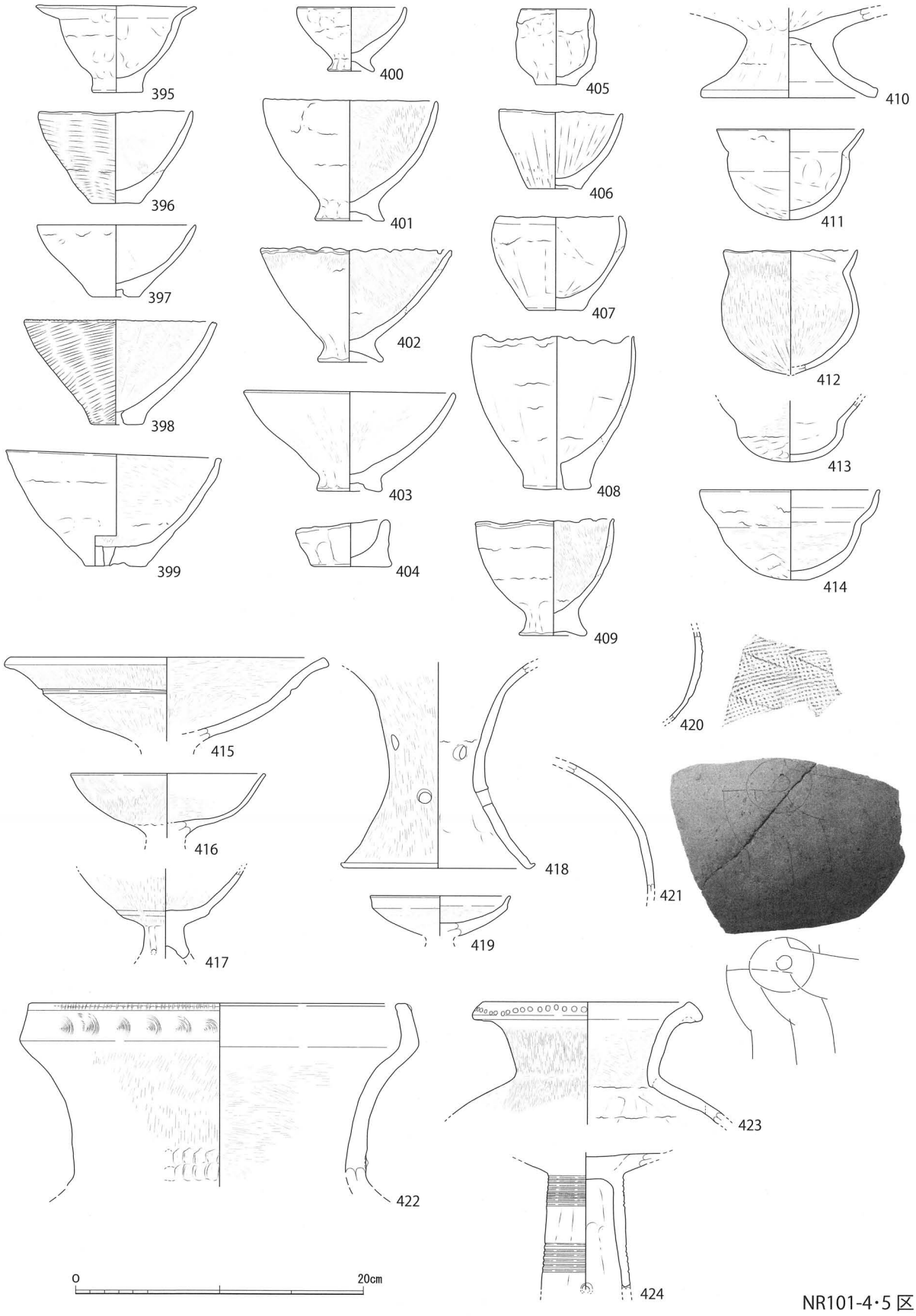
第64図　自然河道NR101出土遺物実測図４(S=1/4)



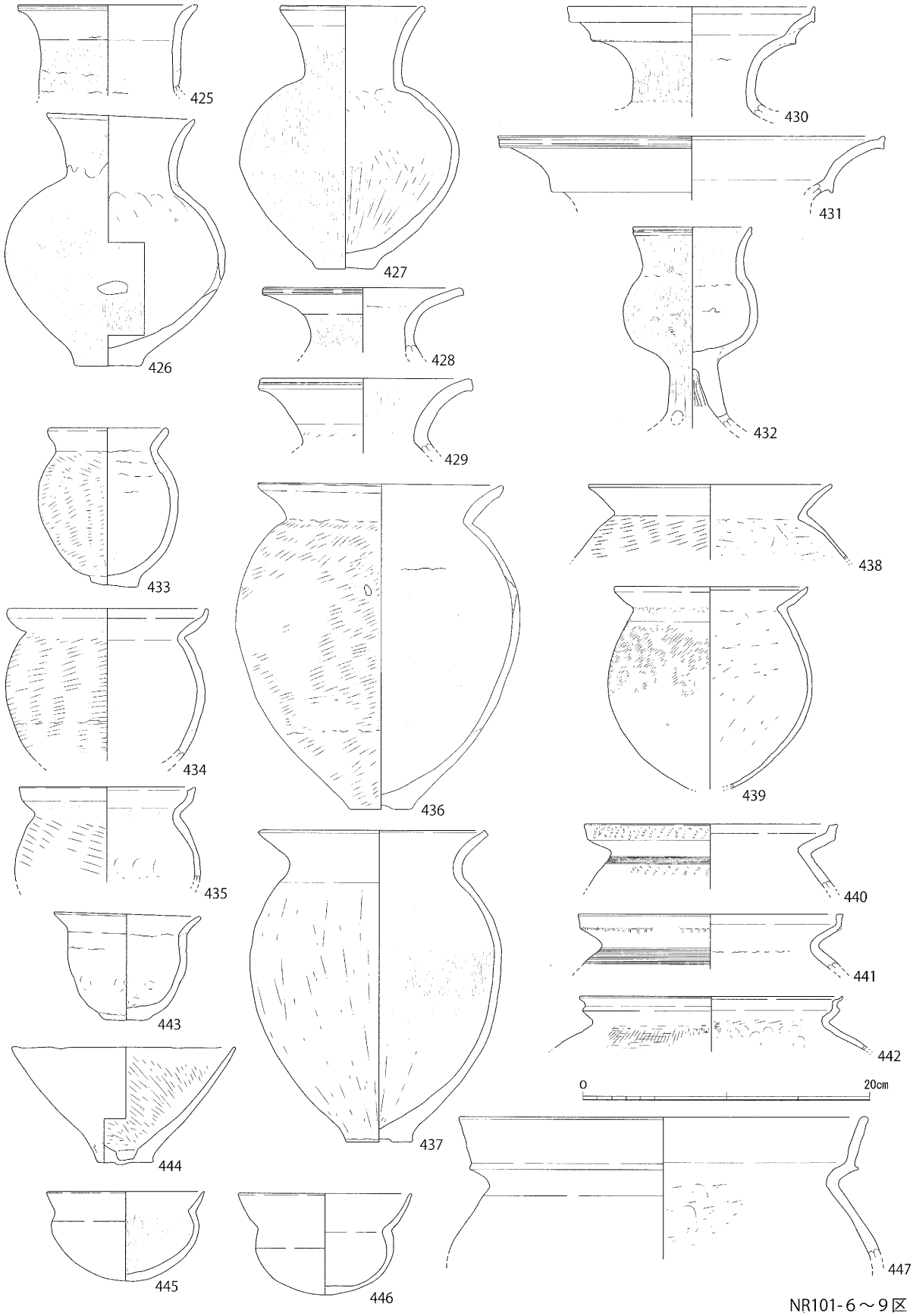
第65図　自然河道NR101出土遺物実測図５(S=1/4)



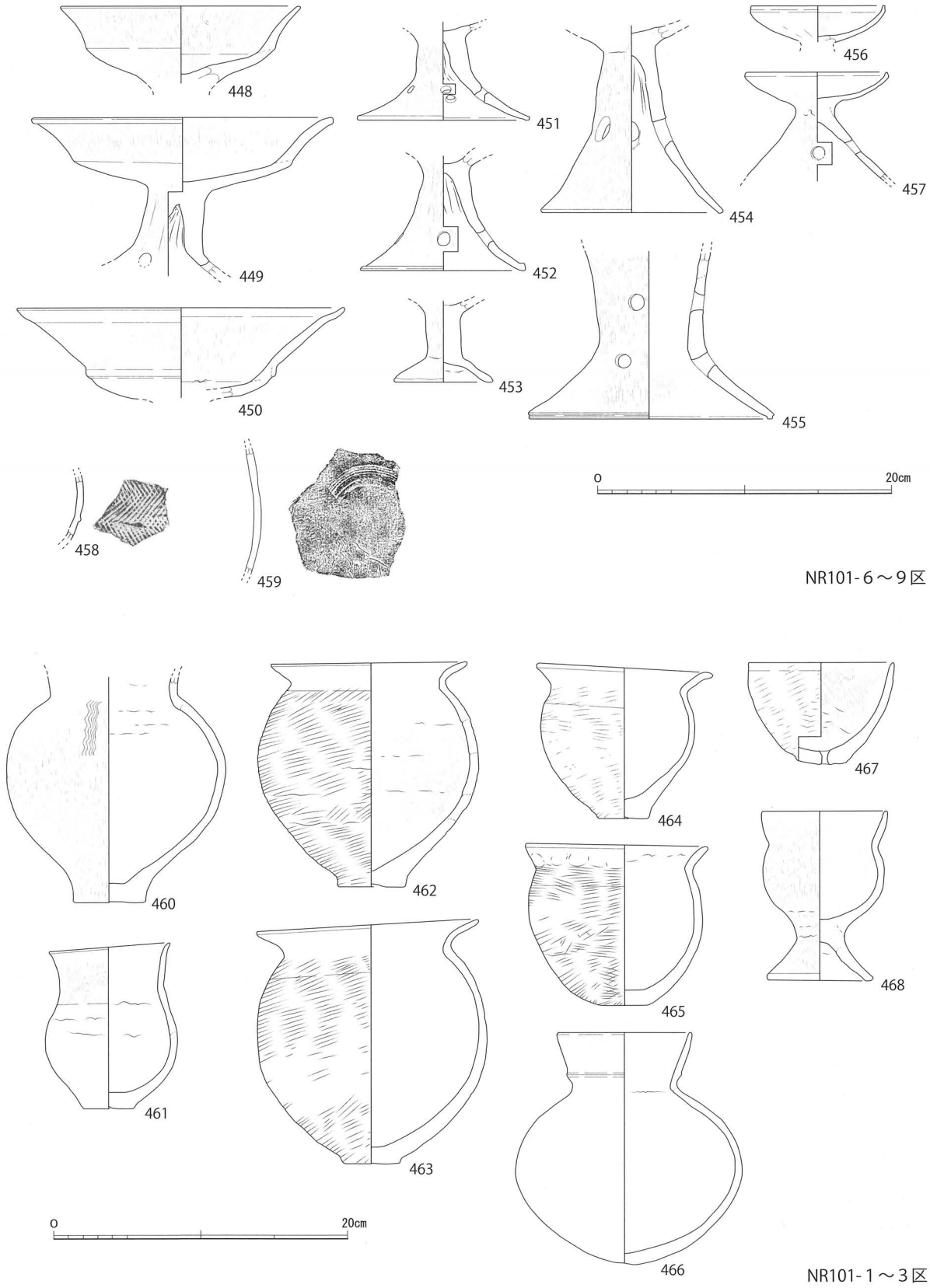
第66図　自然河道NR101出土遺物実測図６（S=1/4）



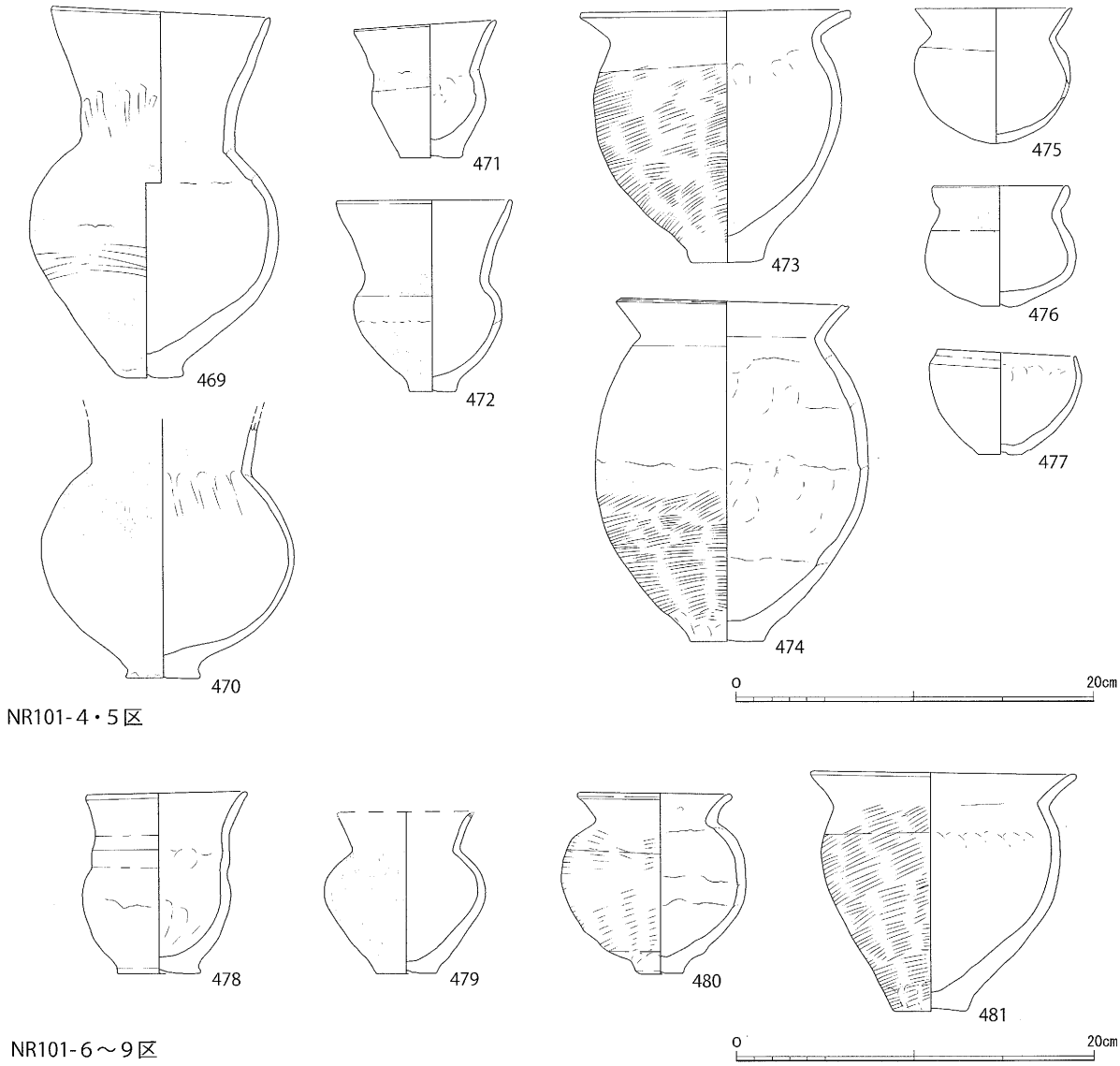
第67図　自然河道NR101出土遺物実測図７（S=1/4）



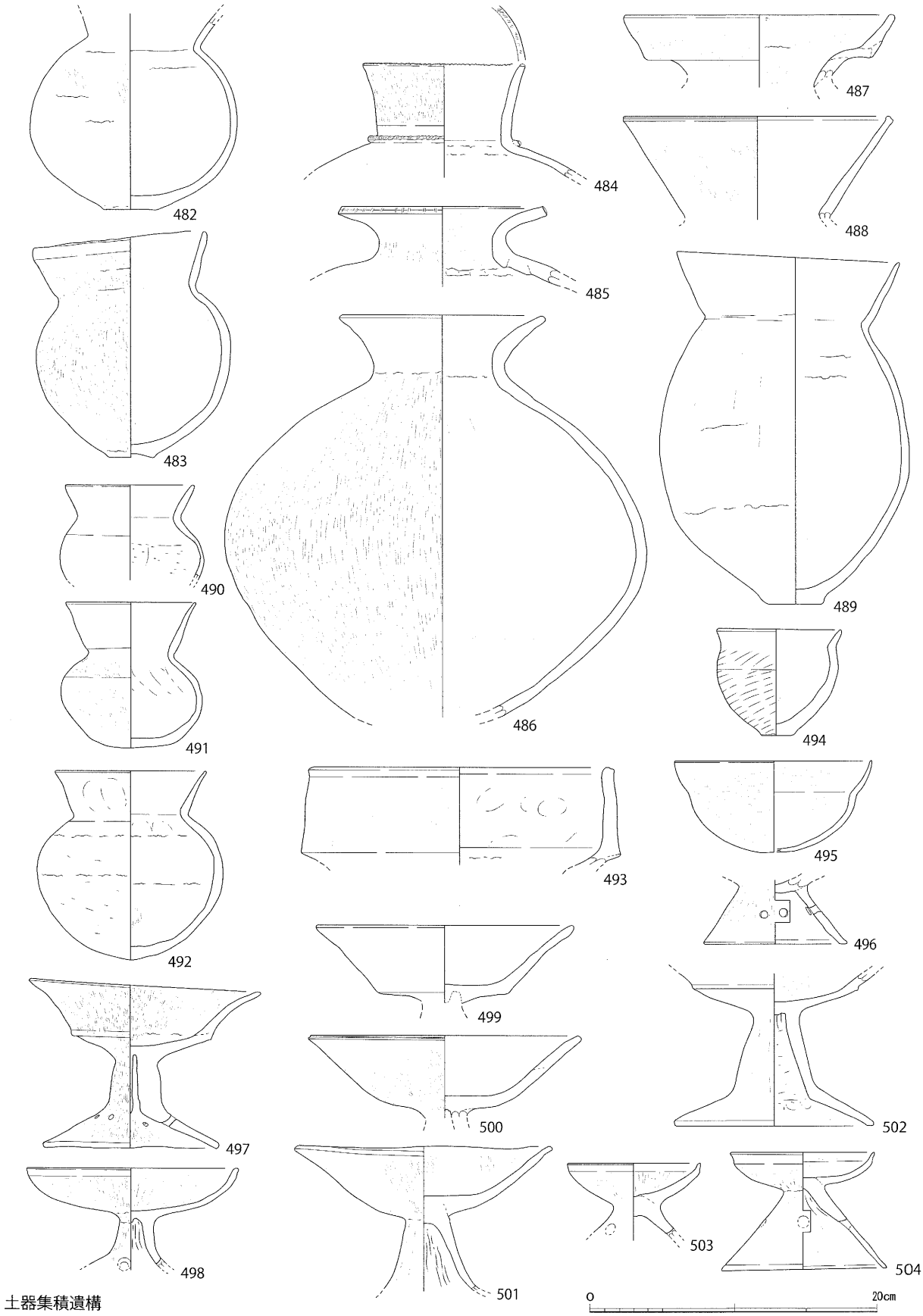
第68図　自然河道NR101出土遺物実測図８(S=1/4)



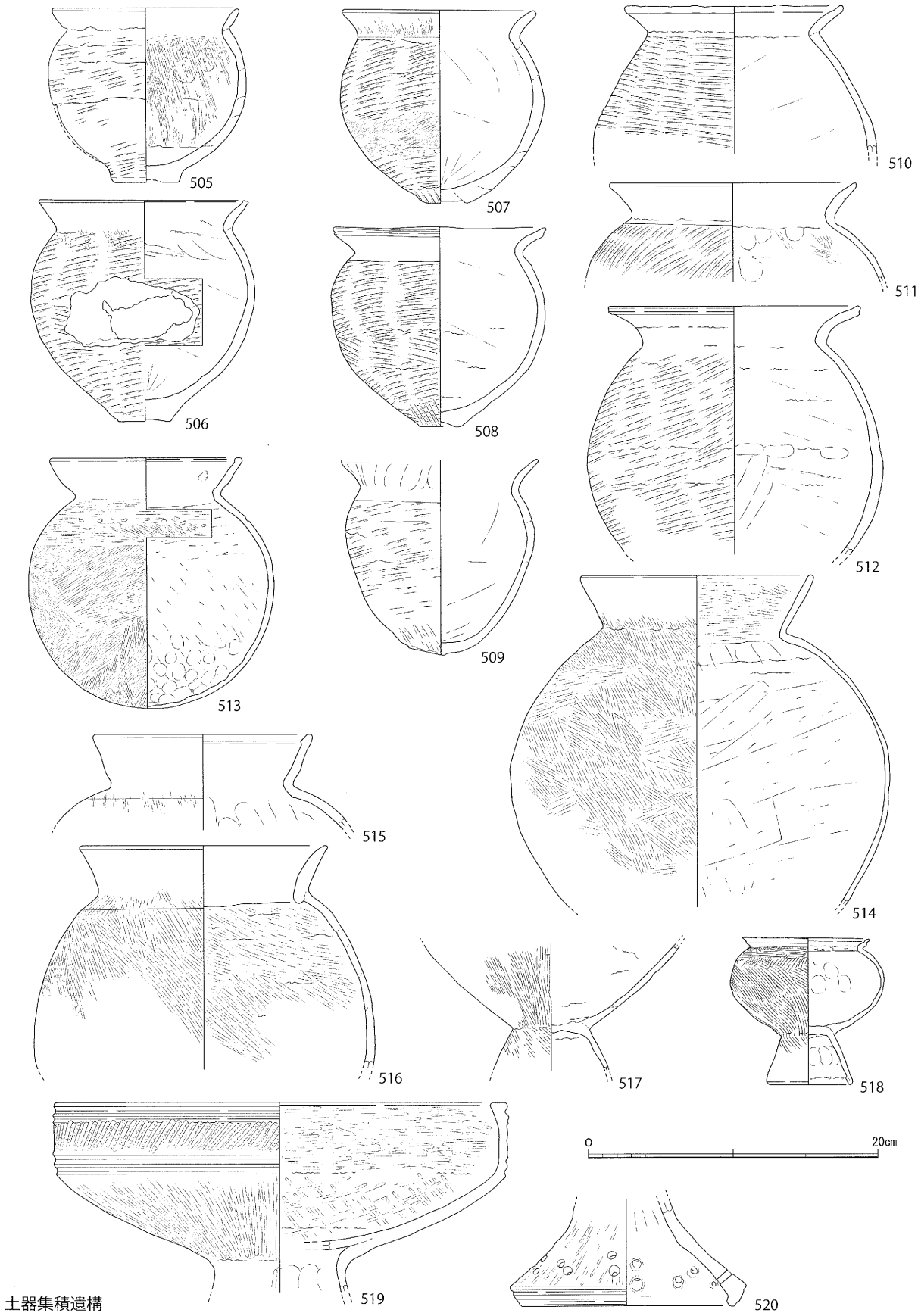
第69図　自然河道NR101出土遺物実測図９(S=1/4)



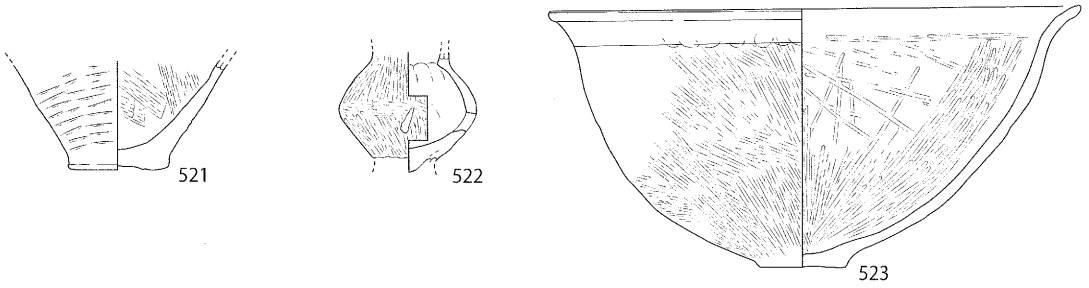
第70図　自然河道NR101出土遺物実測図10(S=1/4)



第71図　自然河道NR101北岸土器集積出土遺物実測図１(S=1/4)

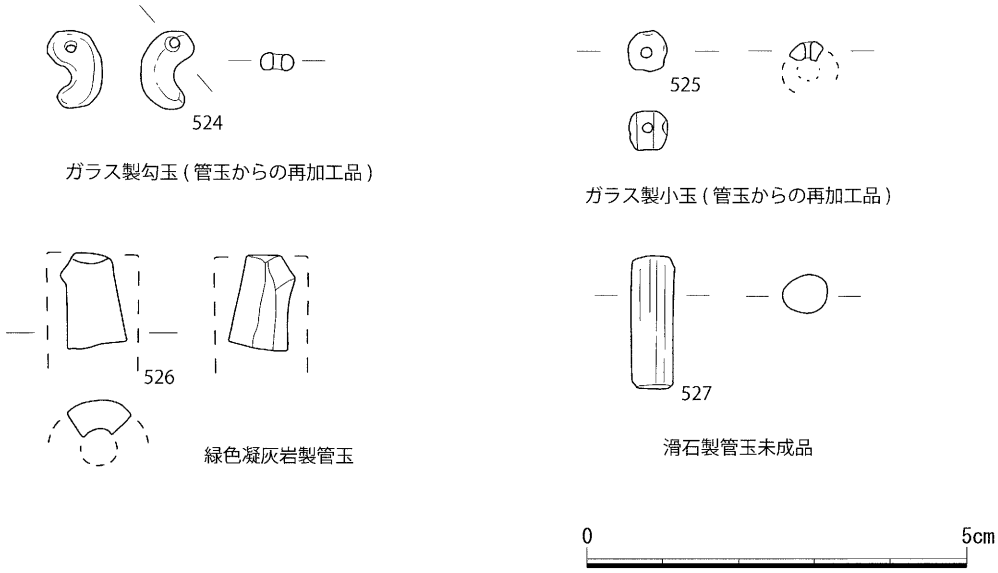


第72図　自然河道NR101北岸土器集積出土遺物実測図２(S=1/4)

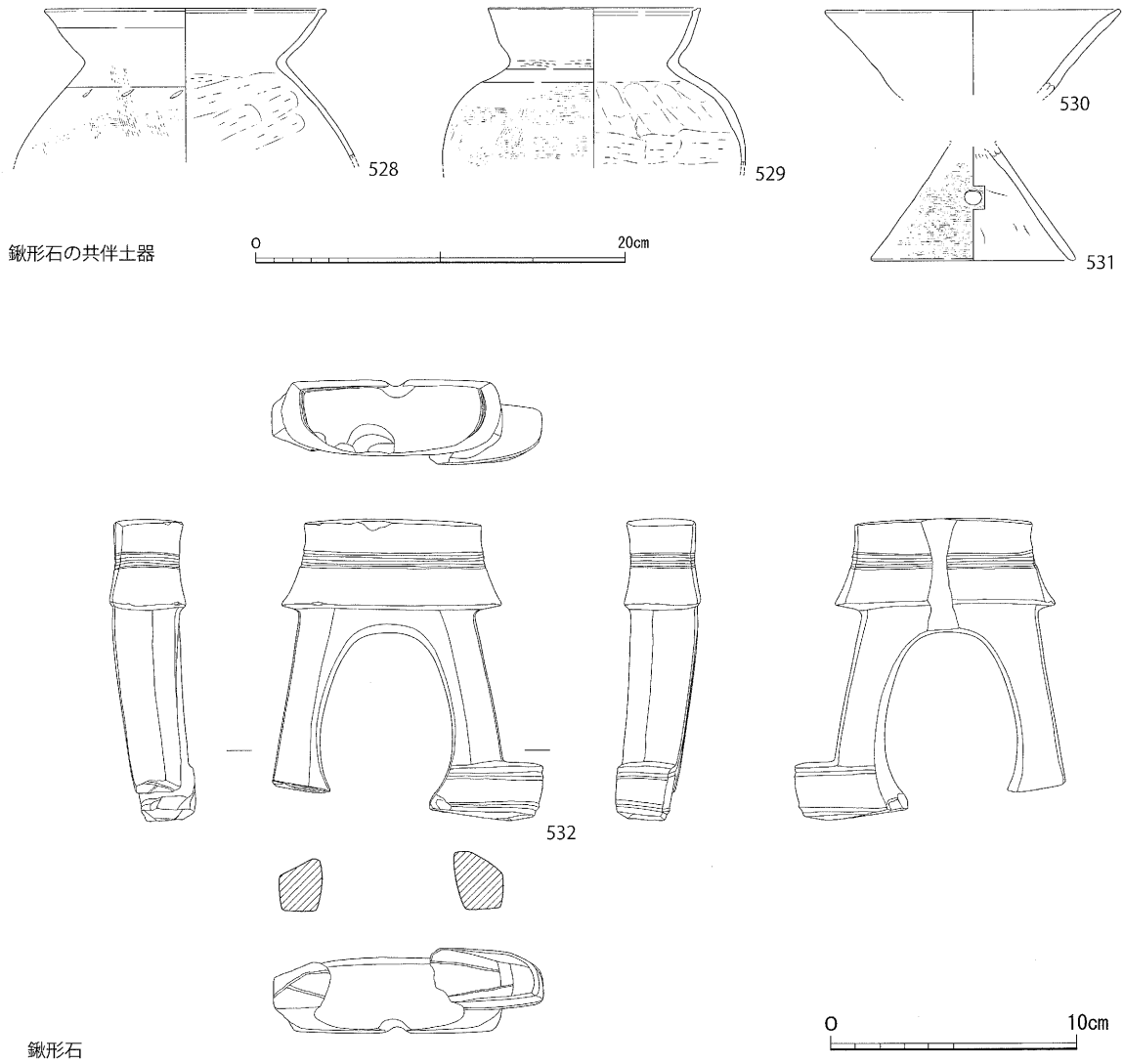


土器集積遺構下部

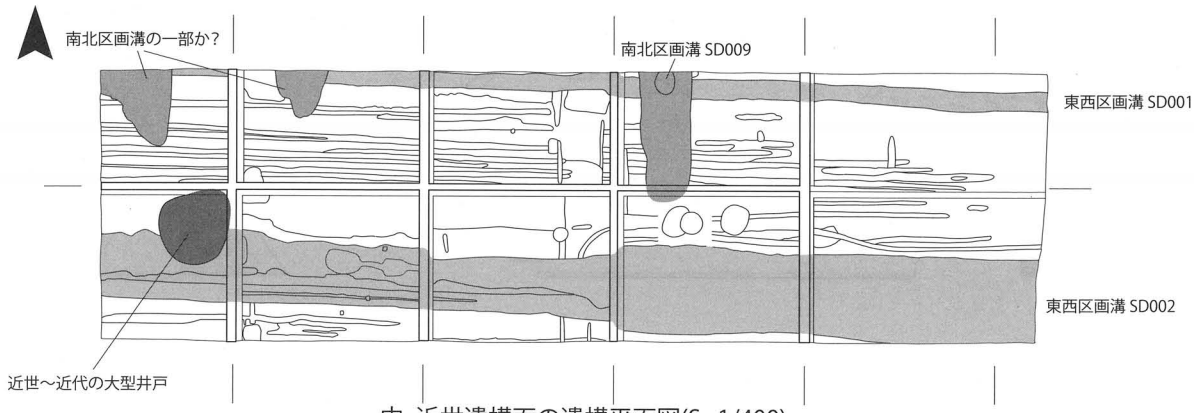
第73図　自然河道NR101北岸土器集積下部落ち込み出土遺物実測図(S=1/4)



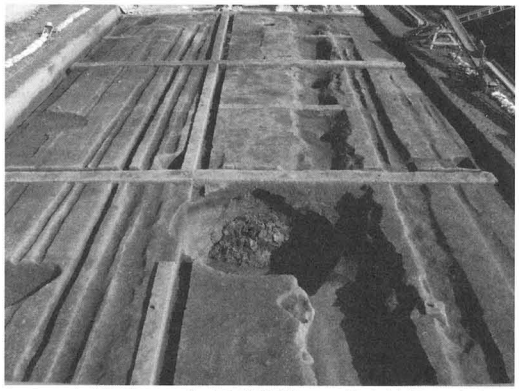
第74図　自然河道NR101出土玉類実測図(S=1/1)



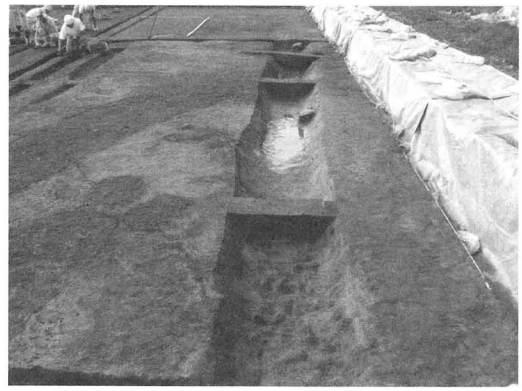
第75図　土坑SK108出土遺物実測図（土器S=1/4・鍬形石S=1/3）



中・近世遺構面の遺構平面図(S=1/400)

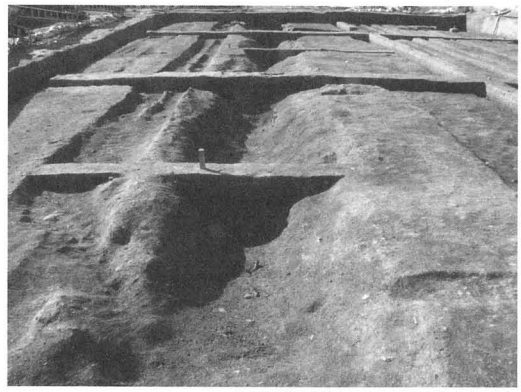


中・近世遺構面の検出状況(西から)

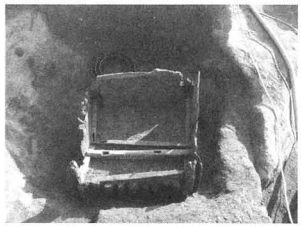


東西区画溝SD001(東から)

東西区画溝SD002東半(南東から)



東西区画溝SD002西半(東から)



中・近世遺構面検出の井戸遺構

第76図　中・近世の主要遺構

Ⅳ．まとめ

今回の調査成果としては、以下の３点を挙げることができる。ここでは、近年までの周辺における調査成果とあわせて次項以下の項目ごとにまとめておきたい。

１．弥生前期大溝と自然河道

調査区中央を北西～南東方向に弧状に巡る弥生前期大溝では、埋没期を示す弥生前期後半までの土器が多く出土した。この大溝の西側では粘土層の安定した基盤が続くが、逆方向の東側では砂、シルトを基調とした基盤層や北西～南西方向の自然河道が弥生中期段階まで続く。また、以前の第26次調査では初現の環濠出現以前の北東～南西方向の自然河道が検出されており集落出現期の居住域の想定が可能であったが、その展開としての環濠出現期が既往の調査での確認範囲より内側にあることが判明したことが成果と言える。

２．方形区画出現前段階の区画溝について

調査区中央より東、北方行に弧状に巡る断面Ｖ字状の区画溝を検出している。この溝の埋土からは弥生中期末～後期前葉の土器が出土しており、集落北東の微高地裾と安定基盤を囲むような状況で位置している。以前の第８次調査で確認している弥生後期後半期成立の方形区画よりも時期的に遡り、第26次調査検出の同時期建物群を区画するような位置付けであることから弥生後期末以降の方形特定区画の前身として評価できよう。他にも前述の方形特定区画から派生する南北方向の溝も重複して検出されている。

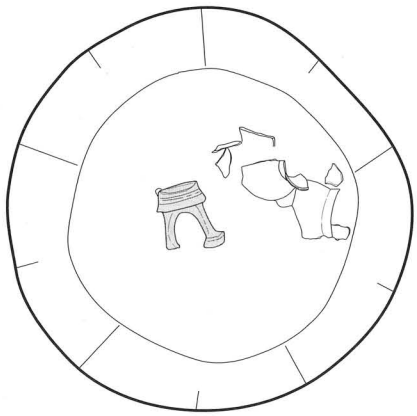
３．鍬形石と出土土坑の意義付け

（１）検出状況と周辺遺構による出土土坑の意義付け

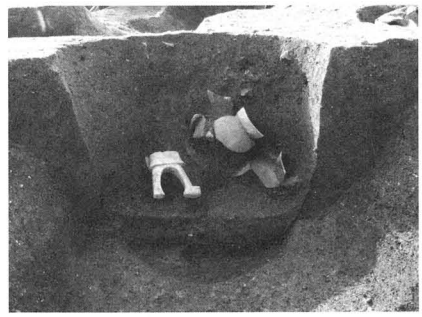
鍬形石は、前述の川岸北縁付近で検出された遺構群に含まれる径約0.5mほどの円形の平面形をもつ**土坑SK108**より出土している。土坑はほぼ逆台形の断面形を呈し、底面までの深さは0.4mを測る。底面付近には有機質の混じる灰黒色粘土が10cmほどの厚さで堆積し、その上部に下端の板状部分（鍬先状の部分）を意図的に打ち欠いた状態で鍬形石が出土している。鍬形石の下部には数個の小礫があり上端を高く斜位にして意図的に置く状況が見られ、これより上位の埋土は人為的な埋め立てと思われる粘土ブロックや小礫の混じる灰褐色粘質土となっていた。また、埋土中には破砕された布留型甕、小型器台、高杯などの土器片が混じり鍬形石の共伴土器となっている。これら土器片および鍬形石そのものの形態による編年観においては大きな矛盾は認められず、概ね古墳前期後半、布留式古相から中相にかけての時期幅に収まるものと理解できる。

検出土坑の性格としては、出土状態と埋土の状況により埋納を意図した土坑として考えたが、河川蛇行部分の窪みに見られた土器の大量廃棄や炭化材、焼土を伴う断面皿状の浅い土坑など近在する同時期土坑群とともに、この埋納土坑を中心とした一連の祭祀行為に伴う遺構群として捉えることもできよう。

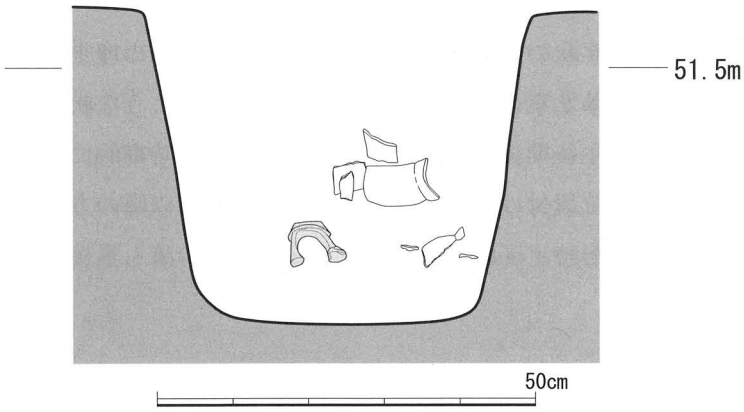
（２）埋納された鍬形石



SK108 鍬形石検出時の状況

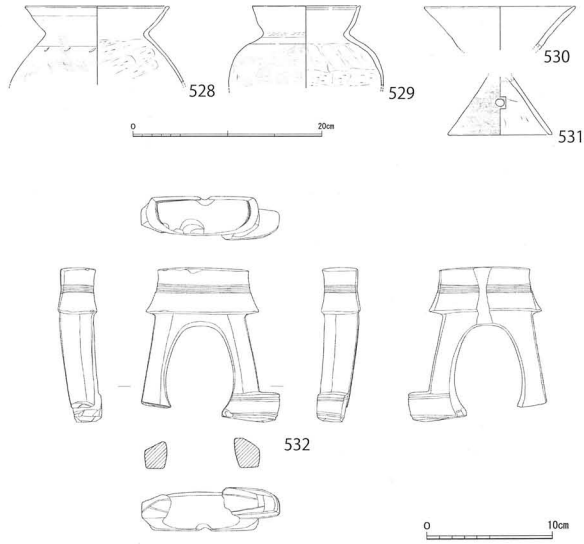


SK108 断ち割り状況（北からの側面）



SK108 遺物出土状況 平面・立面図（北から） S=1/20

SK108 遺物出土状況（上面から）



SK108 鍬形石と共伴土器

第77図　土坑SK108 鍬形石・土器出土状況

鍬形石の材質は北陸産の緑色凝灰岩製であり、表面に石理方向の縞模様を装飾的に残す。形態的には古墳副葬品としての盛行期に多いものであるが、他の例に比べて厚みがありやや肉厚な印象のものである。意図的に先端を打ち欠くにあたり、折損部付近の周囲を砥石状の工具(石鋸か？)により直線的に擦り切る様子が看取され、その後の敲打により先端を折り取ることが想定された。なお、各部位の法量については模式図の数値を参照されたい。

(3)埋納土坑の祭祀的側面

先述の一連の同時期遺構群の在り方からは鍬形石の埋納行為に際しての祭祀行為が想定された。本来は古墳に副葬されるべき祭器、宝器であるはずの鍬形石を意図的に原型を損ねて土器とともに埋納する行為については、やはり葬送の儀式としての想定が可能と思われる。さらに、この点について強調するならば、支配領域である集落の居宅地(方形区画)の縁辺の川辺においておこなわれた葬送祭祀とも考えられよう。

4．総括

今回の調査は、遺跡北半部における近年の宅地造成、店舗建設等に伴う調査のなかでもまとまった調査面積の調査であったため多くの新知見と成果が得られた。

弥生集落の動態としての新知見では、①弥生前期大溝がこれまでの出現期環濠のさらに内部にあることが知られ、北接した第26次第Ⅲトレンチ調査区の自然河道出土の弥生前期前半期土器群に直属する時期には機能していたものと考えられた。

次に②方形区画出現前段階の区画溝の存在からは、弥生中期末頃には集落内部の微高地を囲むように環濠内部に区画が形成されていたことがうかがえ、その後の方形区画出現の前身遺構として成立していたものと考えられる。

また、その後の経過としての弥生後期後半期の方形特定区画の成立、古墳前期前半期への継続性とともに③土坑出土石製品の意義が強調され、同時期の複数の炭・焼土混じり土坑の存在も併せて北方の首長居宅を望む位置での石製品破砕、焚き火等の祭祀行為がおこなわれたことが想起されるものである。

以上のように今回の調査では多大な成果を得ることができた。詳細については今後の遺物整理等の経過により多少の変動と再考が求められるが、本概報をもって一応の成果公表としてまとめておきたい。

（青木勘時）

5．合場遺跡（第６次）

Ⅰ．調査の契機と経過（第78図）

今回の調査は、天理市西部の合場町に所在する井戸堂小学校校舎建設に伴う調査として実施したものである。対象地は井戸堂小学校の西側に隣接する水田で、合場遺跡の東縁辺に位置するため、埋蔵文化財の有無確認を目的として発掘調査を行なった。

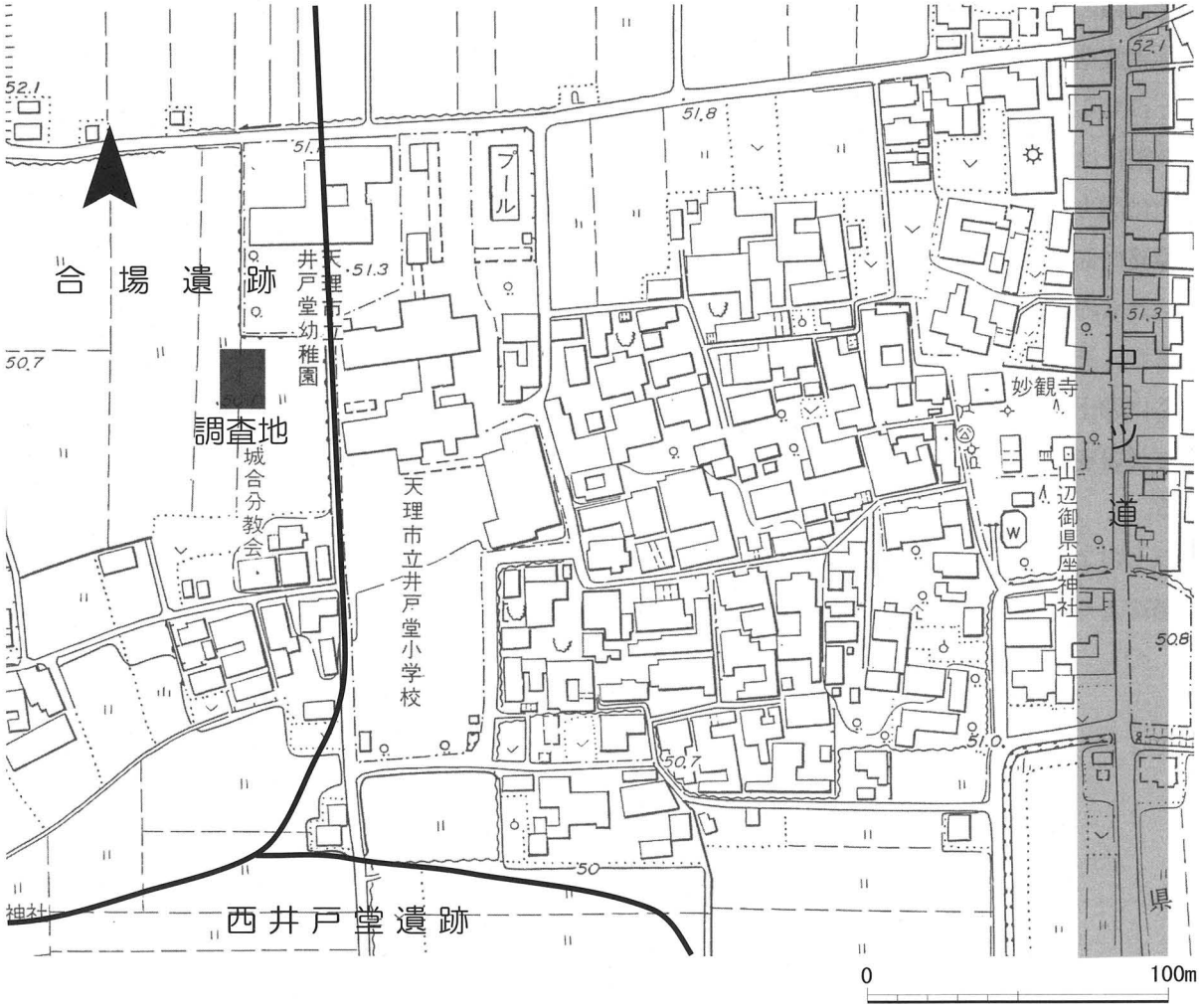
調査は対象地の水田内に南北20m、東西15mの長方形の調査区を設定し、重機により耕作土を除去した後、人力掘削に移行した。現地では平成18年10月30日に作業を開始し、同年12月15日に全ての作業を終了した。調査面積は300㎡であった。

Ⅱ．調査の概要

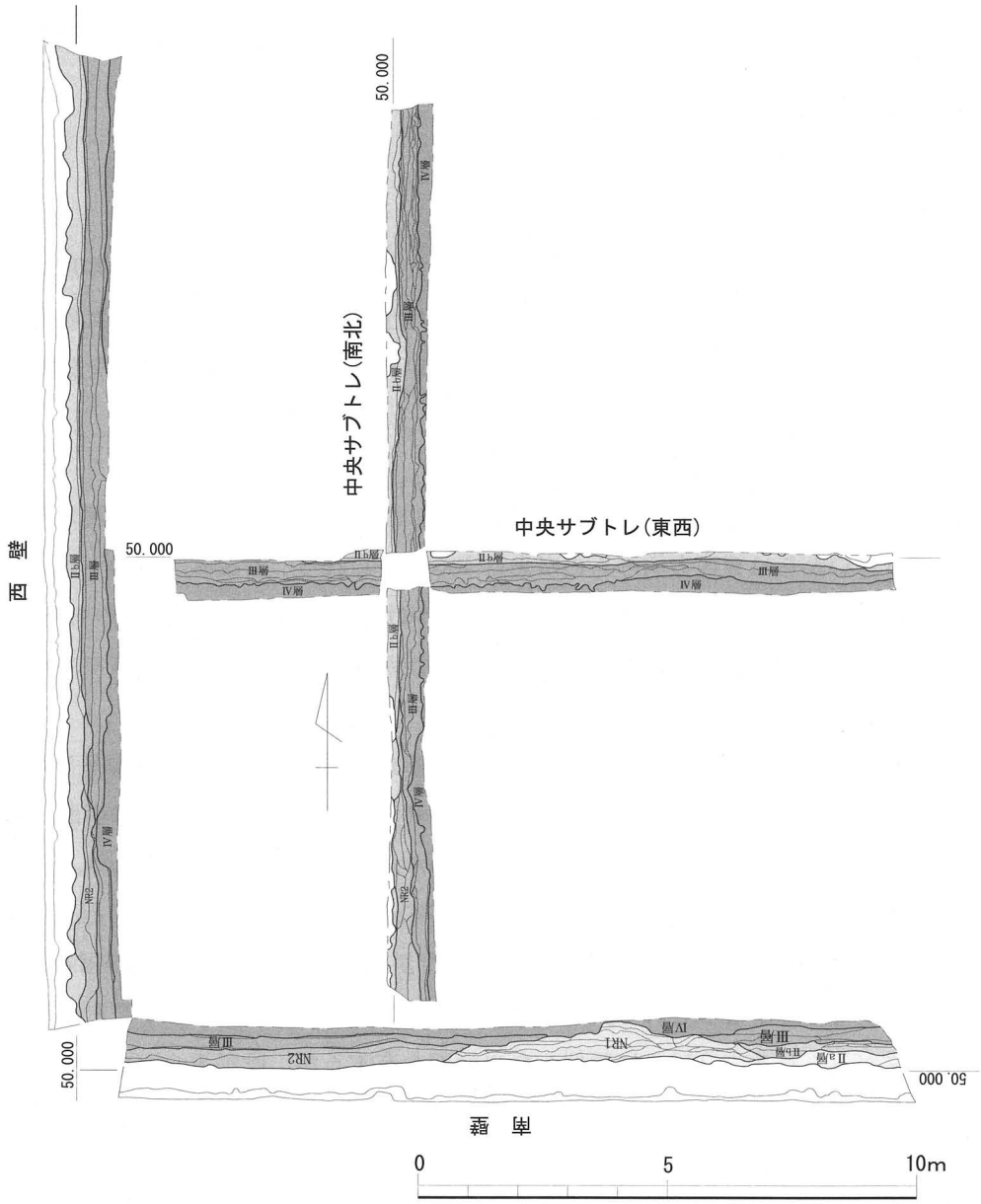
1．基本層序（第79図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査地付近の現地表面をなす水田耕作面は標高50.6m前後を測り、現状ではほぼ水平である。表土（Ⅰ層）は耕作土及び床土で、明緑灰～灰黄褐色土からなり、厚さ50㎝前後を測る。Ⅰ層を除去する



第78図　調査地点位置図（S=1/2,500）



第79図　土層断面図（S=1/150）

と、調査区南東側では灰黄褐色シルト層（Ⅱa層）が、それ以外では灰黄～黄橙色系の微砂～細砂層（Ⅱb層）が現れる。この面で、中世段階の素掘溝を確認した。Ⅱa層はⅡb層の上位に部分的に堆積した厚さ最大30cm程度の土層であり、Ⅱa層を除去すると調査区全面にⅡb層が現れる。Ⅱb層の厚さは20～40cm程度である。

Ⅱb層上面では、先述の素掘溝群の他に、それに切られる流路を調査区南半で検出した。流路埋土は灰色～灰黄色系の砂からなる。

Ⅱb層を除去すると灰色～緑灰色系（下半では灰白～黒色系）のシルト～砂層（Ⅲ層）が現れる。Ⅲ層上面では、ほぼ東西に走る流路の北肩と、不整形の落ち込みを数基検出した。流路埋土は橙色系の砂～粗砂層からなる。

厚さ40～60cm前後のⅢ層を除去すると、黒褐色粘土層（Ⅳ層）に至る。Ⅳ層には遺物を含まないうえ、調査区全域に広がるしっかりした粘土層でもあることから、Ⅳ層を地山と認定した。

遺構検出はⅡa層・Ⅱb層・Ⅲ層・Ⅳ層の各上面で行なった。標高はⅡa・Ⅱb層上面が49.8～50.2m、Ⅲ層上面が49.5～50.0mm、Ⅳ層上面が49.1～49.6mを測る。

2．主な遺構と遺物

(1)中世の遺構（第80図・第83図）

Ⅱa・Ⅱb層を掘り込み面とする遺構群で、素掘溝群と井戸２基がある。このうち井戸については、本来はⅡa・Ⅱb層上面から堀りこまれたものであるが、埋土が周辺の土層と酷似した砂層堆積であったために同面で検出できず、Ⅳ層の黒褐色粘土層上面にいたって初めて遺構の存在を認識することとなった。

素掘溝群

調査区の東半分を中心に、中世の素掘溝群を多数検出した。南北方向のものと東西方向のものに大別できるが、切り合いからは東西方向のものが先行するとみられる。素掘溝は幅30～40cm、深さ10cm前後のものが多いが、数条が近接して重複したために見かけ上幅広の溝となったものもある。

東西方向の素掘溝群では細片の出土を見たのみであったが、南北方向の素掘溝群では実測可能な遺物が一定数出土した。

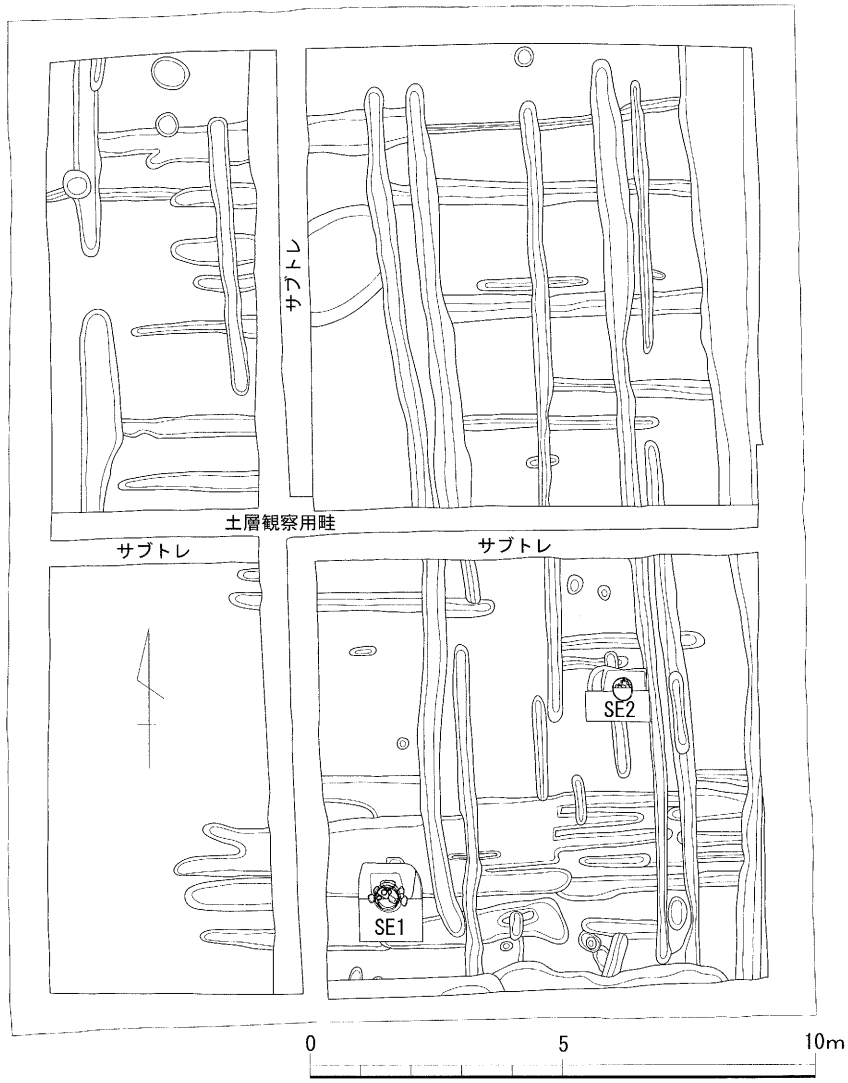
１～６は瓦器椀である。１はヨコナデによって外反する口縁端部の内面側に、沈線１条を有して段状になる。高台は扁平な逆三角形の貼付け高台で、一周せずC字状になる。底部は床面に接する。体部外面は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、暗文ヘラミガキがごくわずかに看取される。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部に連結輪状文を有するがほとんど磨滅している。２の口縁部は１よりも外反が弱い。高台は逆三角形だがやや高さがある。外面の指頭圧痕は弱く、水平～斜方向のヘラミガキが看取される。内面は同心円状の暗文ヘラミガキをやや密に施し、見込み部には連結輪状文がみられる。３は１に類似した口縁部を有するが、段が浅く面取り状になる。高台はやや扁平な逆三角形になる。外面の指頭圧痕は弱くヘラミガキを省略する。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部には連結輪状文を有する。なお、重ね焼きのため底部付近は炭素吸着が及んでいない。４は１に類似した口縁部を有する。高台には、成形時の作業台に敷かれていた藁や竹管の圧痕が顕著にみられ、本来の扁平な断面逆三角形の形状をとどめる部分はわずかである。底部は高台より突出し、高台の形骸化が著しい。外面は成形時の指頭圧痕がやや顕著で水平方向のヘラミガキを疎に施す。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部には連結輪状文を有する。重ね焼きのため外面の炭素吸着にムラがでている。５は３に類似した口縁部を有する。高台はやや高さのある逆三角形で、全周せず途切れる部分が見受けられるうえ、潰れて本来の形状を失っている部分も多い。底部は床面に接し、高台の形骸化が進んでいる。外面に成形時の指頭圧がみられ、水平方向のヘラミガキを疎に施す。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキが密であり、見込み部に連結輪状文を有する。６は１に類似した口縁部を有する。やや背の高い逆三角形の高台をもつが、底部は床面に接し、高台の形骸化が進んでいる。外面に成形時の指頭圧痕が顕著で、ヘラミガキは省略される。内面は同心円状の暗文ヘラミガキをやや密に施し、見込み部分に連結輪状文を配する。重ね焼きのため、口縁部の炭素吸着が希薄になる。

７は瓦器小皿である。手づくねで成形したのち、口縁部に強い一段ナデ、見込み部に不定方向のナ

デを施して仕上げる。口縁部は強いナデにより短く外反して端部は丸い。見込み部にジグザク状の暗文を施す。底面には重ね焼きによる炭素吸着のムラが見られる。

８は土師器坏である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は若干上方にツマミ出して丸くおさめる。調整はヨコナデを主体とするが、部分的に指頭圧痕がみられる。

９は土師器皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや強くナデて若干ツマミ上げ、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデを主体とする。

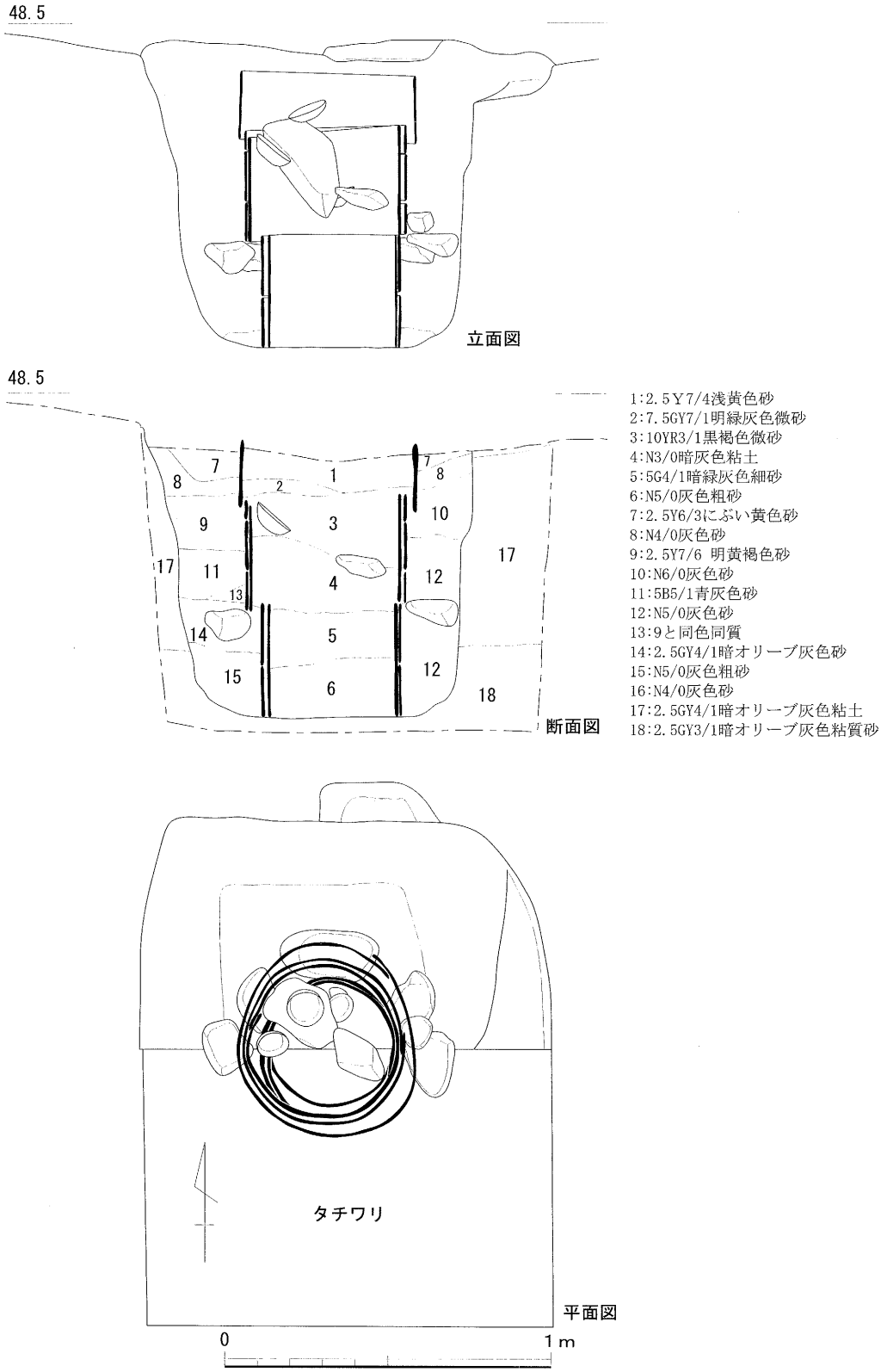


第80図　中世遺構配置図（S=1/150）

10～15は土師器小皿である。10は底部中央が高まる。体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。体部をヨコナデ、底部を指頭圧痕で調整する。11は平底で体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。器形に若干の歪みがみられる。内外面とも磨滅が著しく、ヨコナデの単位がわずかに看取できる程度である。12は底部中央が若干高まり、体部は内湾気味に立ち上がって口縁端部をツマミ上げる。内外面とも磨滅が激しく、ヨコナデや指頭圧の単位がわずかに看取されるが、切り込み円盤技法に伴う接合痕が底部に残る。外面側からの焼成後穿孔１か所が認められるほか、口縁端部付近に薄い油煙の付着がみられる。13･14は指頭圧による成形の後に口縁部を強い一段ナデで調整する。口縁端部は若干ツマミ上げて丸くおさめる。15は底部中央が若干高まり、体部は内湾気味に立ち上がって口縁端部をツマミ上げる。内外面とも磨滅するが、手づくね成形時の指頭圧痕が外面に見られ、口縁部付近はヨコナデ調整される。内面に帯状の油煙の付着がみられ、灯明皿としての使用が考えられる。

井戸SE1（第81図）

中世の井戸状遺構である。時間的制約から、検出後に南半部を大きく断ち割って調査を進めたが、



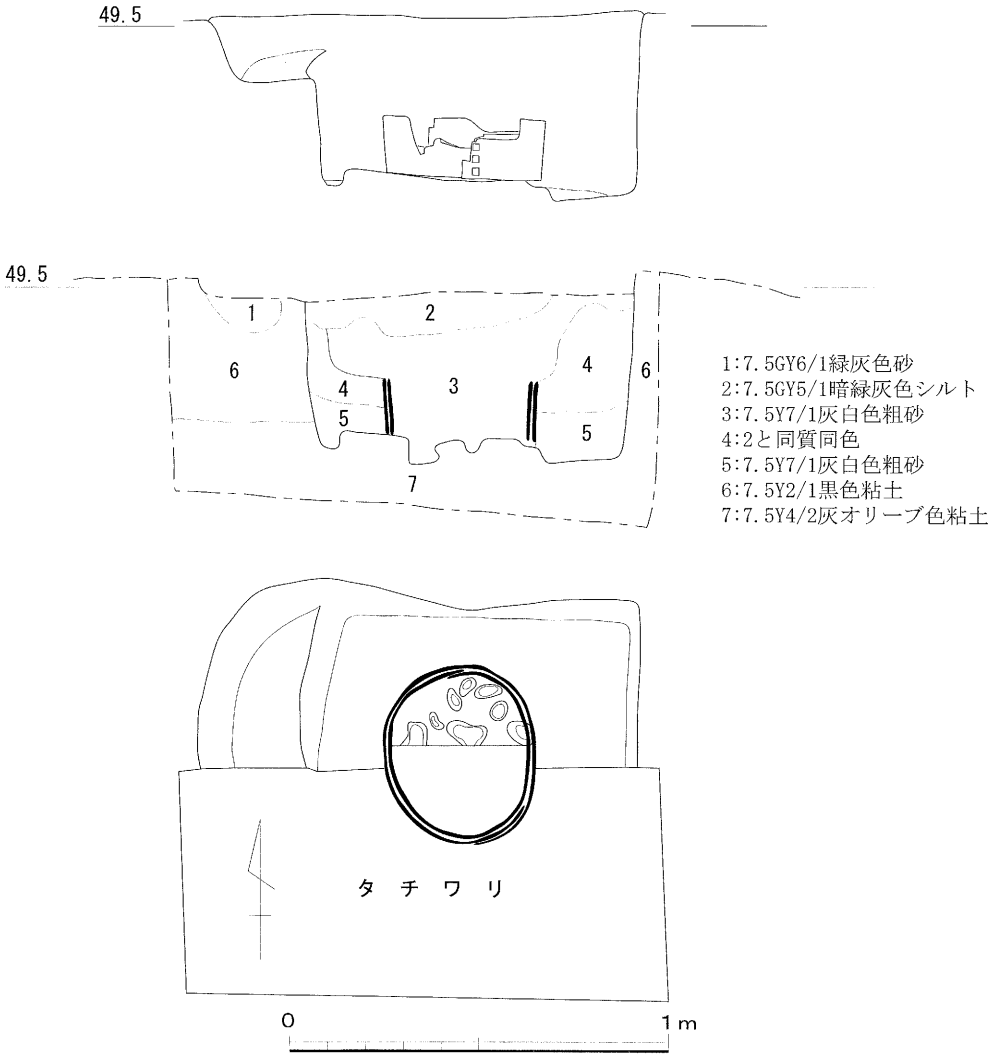
第81図　井戸SE1 平面・立面・断面図（S=1/20）

東西約１m、南北約1.4m（復元）、検出面（Ⅳ層上面）からの深さ90cm前後の方形掘り込み内に井戸枠を据える。井戸枠は二重（最上段のみ一重）の曲げ物が用いられ、３段分を検出した。下段は直径約42cm、高さ約35cmを測り、内側は１枚であるのに対して外側は高さ20cm弱の曲げ物を２枚接ぐ。中段は

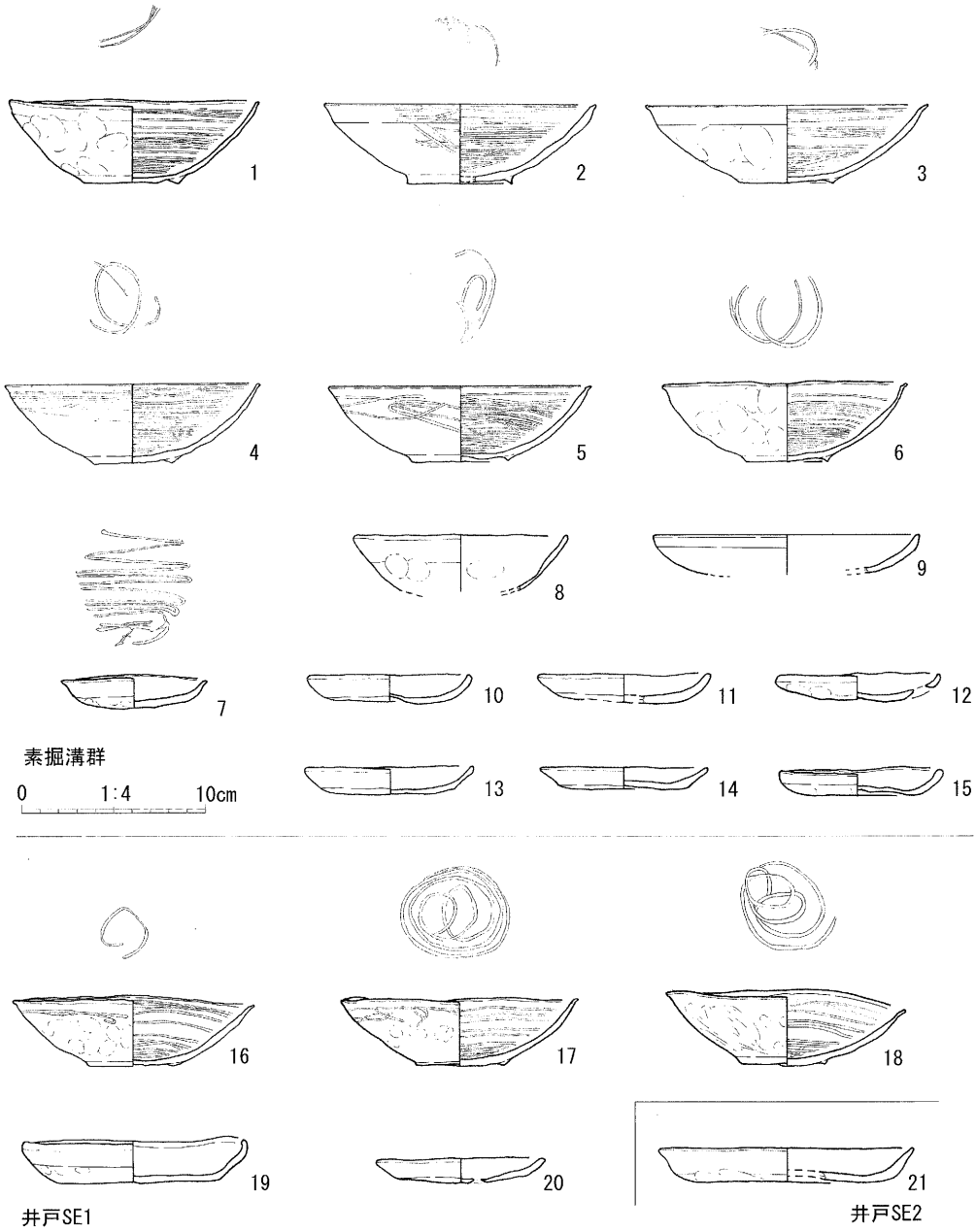
直径約49cm、高さ約34cmを測り、内側が1枚であるのに対して外側は高さ8～12cmの曲げ物を３枚接ぐ。上段は直径約54cm、高さ約21cmを測り、この段のみ曲げ物は一重である。井戸枠設置後に、下方で灰色～青灰色、上方で黄色～黄褐色系の砂で周囲を埋め戻す。下段の井戸枠を完全に埋めた段階で、井戸枠を囲うように長軸20～30cmの石を設置している。井戸枠内は灰色～緑灰色系の砂で埋まっており、中段から上段にかけては廃絶時に投げ込まれたと思われる石や土師器・瓦器、木製品などがまとまって出土した。

16～18は瓦器椀である。ヨコナデによって外反する口縁部の内面側に、沈線１条を有して段状になる。高台は扁平な逆三角形の貼付け高台で、16・17では全周せず16はＣ字形、17は馬蹄形になる。18はかろうじて全周はするものの、起端と終端が食い違っており、完全な円にならない。底部は16がわずかに上げ底気味になるのに対して17・18は高台よりも突出する。体部外面は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、暗文ヘラミガキがわずかに見られる。体部内面は口縁部ヨコナデ、見込み部不定方向ナデで仕上げた後に同心円状の暗文ヘラミガキを疎に施し、見込み部には16に一重の輪状文、17・18に連結輪状文がみられる。器表面には重ね焼きによる炭素の吸着ムラが大きい。なお、18は外面に木の葉を押しつけて圧痕を残している点が特徴的である。

19～20は土師皿である。19は器高がやや高く、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は端部ツマミ上げにより強く内湾して端部は丸い。底部には作業台の板圧痕が、体部下半には成型時の指頭圧痕が残り、口縁部～体部上半にヨコナデ、見込み部に不定方向のナデを施して仕上げる。20は手づくね成形後、口縁部に一段ナデ、見込み部に一定方向のナデを施して仕上げる。底部に外面側からの焼成後穿孔１か所がみられる。



第82図　井戸SE2 平面・立面・断面図（S=1/20）

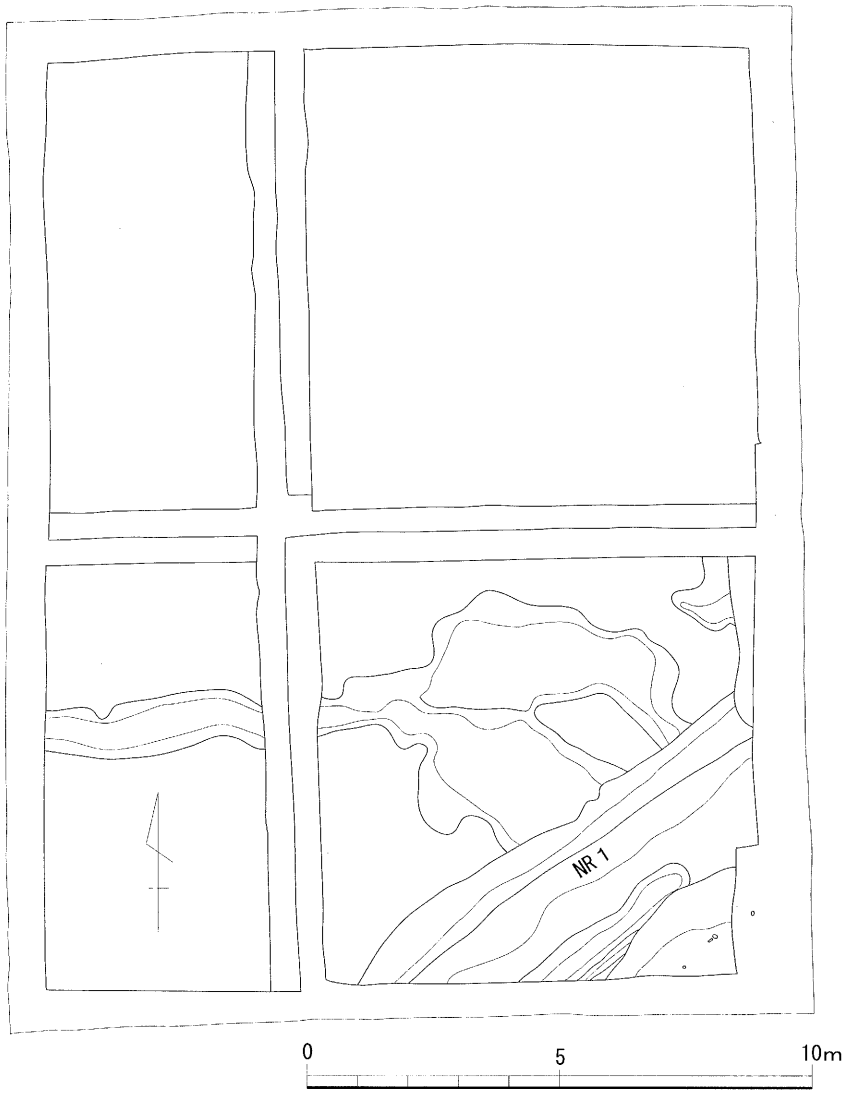


第83図　中世遺構出土遺物（S=1/4）

井戸SE2（第82図）

中世の井戸状遺構である。時間的制約から、検出後に南半部を大きく断ち割って調査を進めたが、東西約0.9m、南北約１m（復元）、検出面（Ⅳ層上面）からの深さ50cm前後の方形掘り込み内に井戸枠を据える。井戸枠には二重の曲げ物が用いられ、１段分を検出した。直径約45cm、高さ約15cmを測る。井戸枠設置後に、周囲を灰白色粗砂と暗緑灰色シルトで埋め戻す。井戸枠内部に灰白色粗砂が流れ込み、その上層にも暗緑灰色粗砂がみられることから考えると、当初は井戸枠の周囲を灰白色粗砂と暗緑灰色シルトの互層で埋め戻していたことが想定される。

21は土師器皿である。指頭圧による成形後、口縁部内外面に一段ナデで調整し、さらに見込み部をヨコナデと不定方向ナデにより仕上げている。口縁端部は丸くおさめる。



第84図　Ⅱb層上面遺構配置図（S=1/150）

（２）律令期の遺構（第84図・第87図）

調査区南半で、斜行する自然流路１条と、それから東西方向に分かれる不整形の流路状落ち込みを検出した。このうち、斜行する流路から律令期の遺物が出土しており、存続時期の一端を示す。

自然流路NR1

調査区南東隅で検出した、北東－南西方向に走る流路である。幅３ｍ前後、検出面からの深さ40㎝前後を測る。埋土は上方が明赤褐色～黄灰色系の砂質土、下方が青灰色系の粗砂と粘土の互層となる。

22は須恵器の大甕である。頸部は外反して立ち上がり、口縁部はやや厚い。口縁部端は端面にもナデが及んで平らな面になる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整する。胴部は外面に平行タタキ後水平方向カキメ、内面には同心円状当て具痕がみられ、部分的に当て具痕の上からヨコナデを施す。口頸部内外面および胴部外面に自然釉の付着がみられ、胴部外面のそれは特に厚い。また、胴部外面に坏蓋の天井部が鎔着し、鎔着部分は凹む。

23･24は土師器坏である。23の底部は丸底で、成形後に口縁部および見込み部をヨコナデ調整する。口縁部は強いヨコナデにより外反して端部は丸くおさめる。底部には成形時の指頭圧痕が残るほか、縦位の接合痕も看取される。24は平底で、体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面は底部～体部下半にヘラケズリ、体部上半～口縁部にヨコナデが看取されるが、ヘラケズリはその後のナデにより明瞭さを欠く。内面は全面ヨコナデ調整後に、ヘラミガキによる放射状の暗文が施される。

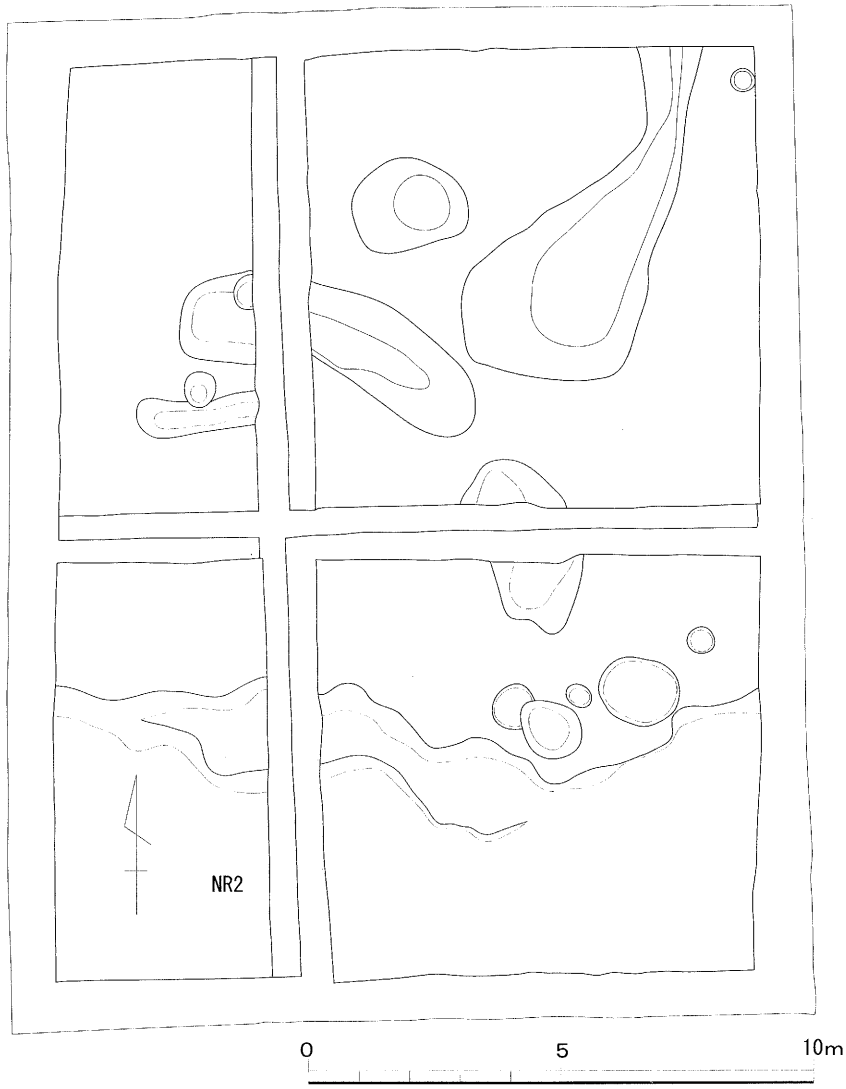
（３）古墳時代の遺構（第85図・第87図）

調査区南半で、東西方向に走る幅の広い流路の北肩を検出したほか、北半にかけて不整形の落ち込

みを複数検出している。東西方向の流路とそれに伴う淀み状の起伏を捉えたものと考えられる。

自然流路NR2

調査区南半で検出した東西方向に走る幅広の流路である。幅６ｍ以上、検出面からの深さ35㎝前後を測る。調査区内では北肩のみを検出したに留まり、南肩は調査区外にのびている。埋土は上方で灰褐～灰白色砂、下方で橙色系の砂からなる。

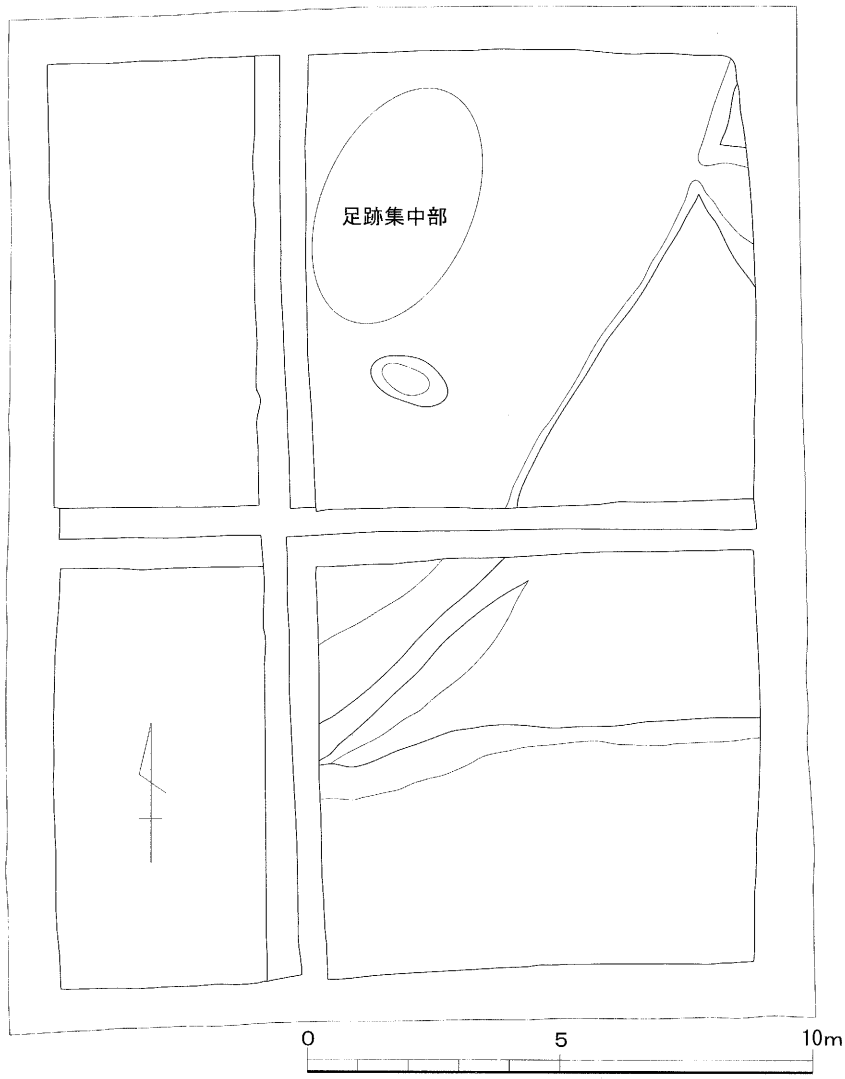


第85図　Ⅲ層上面遺構配置図（S=1/150）

25は須恵器蓋である。天井部に大形のツマミを有する。時計回りのロクロナデ調整後、水平方向のカキメを施す。外面には部分的に灰降着がみられる。26・27は須恵器坏身である。水平ないしやや上向きのかえりを有し、口縁端部は26が内傾する平らな面、27は明瞭な凹面をもって段状になる。底部は丸底である。体部外面下半を回転ヘラケズリで調整する他は、内外面ともロクロナデ調整で仕上げる。

28は須恵器無蓋高坏の坏部である。坏底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。調整は坏底部外面が回転ヘラケズリ、そのほかはロクロナデである。体部下半に櫛描波状文からなる文様帯を有し、その上下には断面三角形の凸線を上に２条、下に１条配する。また、脚部との接合部付近に水平方向のカキメを施す。さらにこのカキメを切って、脚部にスカシを切り込む際の刀子の当たりがみられる。このほか、内面には口縁部から体部にかけて灰降着、見込み部に自然釉の付着がみられる。

29～32は土師器甕である。29はやや縦長な球形の胴部から内湾する頸部が立ち上がり、口縁部はツマミ出しにより短く外反する。胴部外面は左上がりハケ、内面は不定方向ナデによって調整したのち、口頸部の内外面及び肩部外面にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。胴部の下1/3ほどは、煮炊具としての使用により被熱・煤化が見られる。内面の底部にも黒色の付着物が看取される。30は球形の

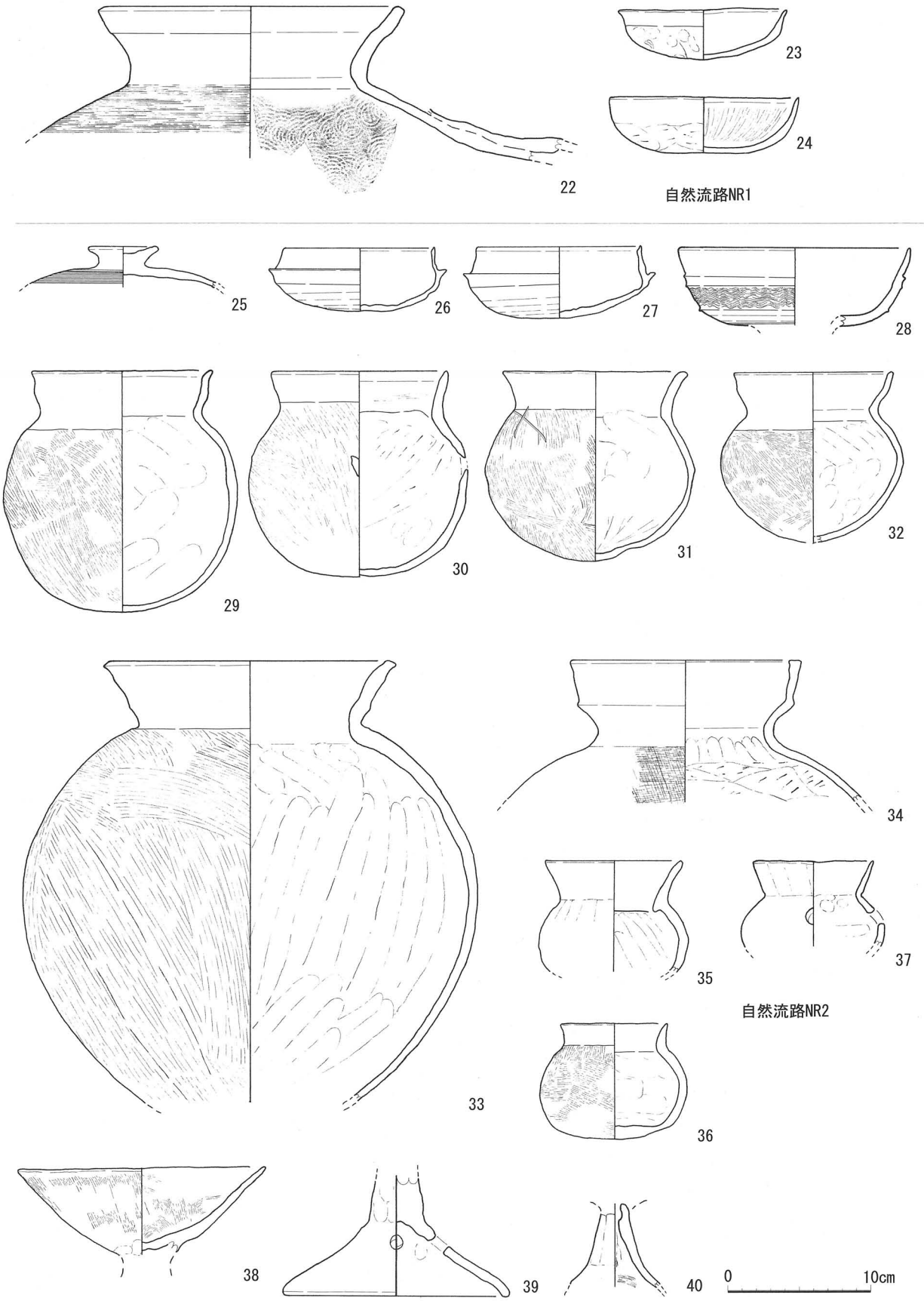


第86図　Ⅳ層上面遺構配置図（S=1/150）

胴部から口頸部が直線的に立ち上がり、口縁部端は丸くおさまる。胴部外面を粗い左上がりハケ、内面を右上がりのヘラケズリで調整した後、口頸部にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。外面の大半に煤化ないし被熱が見られ、胴部内面の上半も若干黒化する。胴部最大径付近に焼成後穿孔が見られる。31はやや横長な球形の胴部から厚手の口頸部が外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。胴部外面を細かい左上がりハケ、内面下半を放射状板ナデ、上半を左上がりナデで調整した後、口頸部にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。肩部に×字状のヘラ記号がみられる。外面は被熱が著しく、胴部上半を中心に器壁の剥落する部分も多い。底部は煤化が見られ、内面も胴部上半を中心に黒色の付着物が全面に看取される。

32は肩の張った球形の胴部から内湾する口頸部が立ち上がり、口縁端部はツマミ出して内傾する弱い凹面をなす。胴部外面を細かい左上がりハケ、内面を左上がりナデで調整した後、口頸部から肩部にかけてヨコナデ調整を施す。胴部外面はほぼ全面にわたって被熱ないし煤化し、内面も胴部上半を中心に黒化する。

33は土師器の大型甕である。やや縦に長い球状の胴部から頸部が直線的に立ち上がる。口縁端部は外側にツマミ出して端面を持つ。頸部から口縁部にかけては強いヨコナデが施され、胴部は外面が縦位～左上がりハケ、内面が右上がりのナデで調整される。頸胴部界には接合のための指頭圧が看取される。胴部外面は広範囲にわたって被熱・煤化が見られ、内面も上半はやや黒化する。34は土師器大型壷である。口縁部から肩部までの破片であり、外反する頸部の上端に短く丸い稜を持ち、そこから口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は内外にツマミ出し、やや幅広な凹面を作る。頸部～口縁部はヨコナデ、胴部は外面が縦横のハケ、内面は右上がりのケズリで調整する。頸胴部界の内面は、



第87図　自然流路出土遺物（S-1/4）

接合に伴う指頭圧が顕著である。外面は広範囲に煤化するほか、口頸部内面にも黒色付着物が見られる。

35･36は土師器小型丸底壺である。35は球状の胴部を持ち、口頸部は若干外反して口縁端部を丸くおさめる。胴部成形後に口頸部を接合しており、口頸部界の内面には接合の痕跡がほとんど調整されずに残る。外面は著しく磨滅して調整は不明であるが、器表面には黒色の付着物が見られる。内面は胴部に強い縦位ナデ、口頸部にヨコナデが看取される。36は胴部が横長の球形を呈し、底部は平底に近い。口縁部は外反して短くたちあがり、端部は丸くおさまる。胴部外面には粗い横位ハケ、細かい縦位ハケが、内面には不定方向のナデが看取される。口縁部内外面はヨコナデ調整される。胴部上半には接合痕が顕著である。

37は碗である。胴部は球形で、口頸部は直線的に立ち上がる。口縁部は外面をヘラ状工具で成形したのち、内外面を横ナデで調整する。胴部外面の調整は磨滅により不明瞭であるが、内面には横位のナデや指頭圧痕がみられる。

38～40は高坏である。38は坏部で、直線的に立ち上がる体部からやや外反して口縁部に至る。内外面とも磨滅するが、ヨコナデ後に左上がりを主体とするハケで調整する状況が部分的に看取される。39･40は脚部である。中実の脚柱部から裾部が直線的に開き、端部は面取りされて平らな面を持つ。器面は磨滅するが、脚柱部や脚裾部内面上半に指頭圧が看取される。脚裾部上端に４方向の円形スカシ孔を穿つ。40は中空の脚柱部で下方が広くなり、若干外反して裾部に移行する。外面は磨滅するが、ヘラナデの単位がかろうじて看取される。内面は脚柱部内面にヨコナデ、脚裾部は左上がりハケが看取されるが、成形時のシボリ痕は完全には消えていない。上方から２単位の焼成前穿孔があり、一方は太く貫通するが、他方は細く途中で止まっている。

このほか、第Ⅳ層上面では北東－南西方向の地形の起伏と足跡状遺構の集中部を確認した（第86図）が、いずれも遺物を含むものではなかった。

（４）遺物包含層出土遺物（第88図・第89図）

Ⅱa層

41は須恵器坏蓋である。天井部は扁平で、口縁部との境に稜は見られない。口縁端部は内面側が面取りされて内傾する端面となる。器壁の大半をロクロナデ調整したのち、天井部外面の半分ほどに回転ヘラケズリ、内面に不定方向の仕上げナデを施す。ヘラケズリの範囲が狭いために、全体としてややシャープさを欠く器形となる。天井部外面に平行線状のヘラ記号２条が看取される。42は須恵器坏身である。口縁部のたちあがりはごく低いうえ著しく内傾し、端部は丸くおさめる。全体をロクロナデ調整した後、見込み部を不定方向ナデで仕上げる。底部はヘラキリ未調整のため器壁も厚く、雑な作りである。

43は須恵器平瓶である。胴部の成形後、肩付近に穿孔して頸部を接合し、胴部上半の中心付近を粘土板で閉塞する。外面には自然釉の付着が顕著である。

44は黒色土器椀の底部である。薄手の底部に外反する高台が付き、高台の端部は丸くおさめる。ヨコナデ調整を主体とし、見込み部に一定方向のヘラミガキが看取される。また見込み部は黒色処理を受ける。

Ⅱb層

45～48は須恵器の坏蓋である。45はツマミを有する。内面に段をもつ口縁部が垂直に立ち上がり、口縁部と天井部の境は短く丸く突出する稜で区画され、外面は天井部上半が回転ヘラケズリ、その他はロクロナデで調整される。内面は全面的にロクロナデ調整され、口縁部端はツマミ上げられ、明瞭な凹面をもって段状になる。口縁部外面には部分的に灰降着が見られる。46～48はツマミを持たないが、成形・調整手法は45と共通する。46は口縁部高さがやや低く、体部から天井部は深く丸みを帯びる。外面の回転ヘラケズリが天井部の2/3ほどにも及ぶ。天井部内面に灰降着が見られる。47・48はやや高い口縁部を持ち、天井部は46に比べて若干扁平である。

49は須恵器坏身である。突出の大きい断面三角形のかえりを有し、口縁部は垂直に高く立ち上がる。口縁端部は内面側に明瞭な凹面を伴って段状になる。外面は底体部のほとんどを回転ヘラケズリで調整し、ロクロナデはかえり直下に１単位見られるのみである。口縁部内外面及び見込み部は、ロクロナデおよび不定方向ナデで仕上げる。他の須恵器に比べてやや古い形態を呈する。

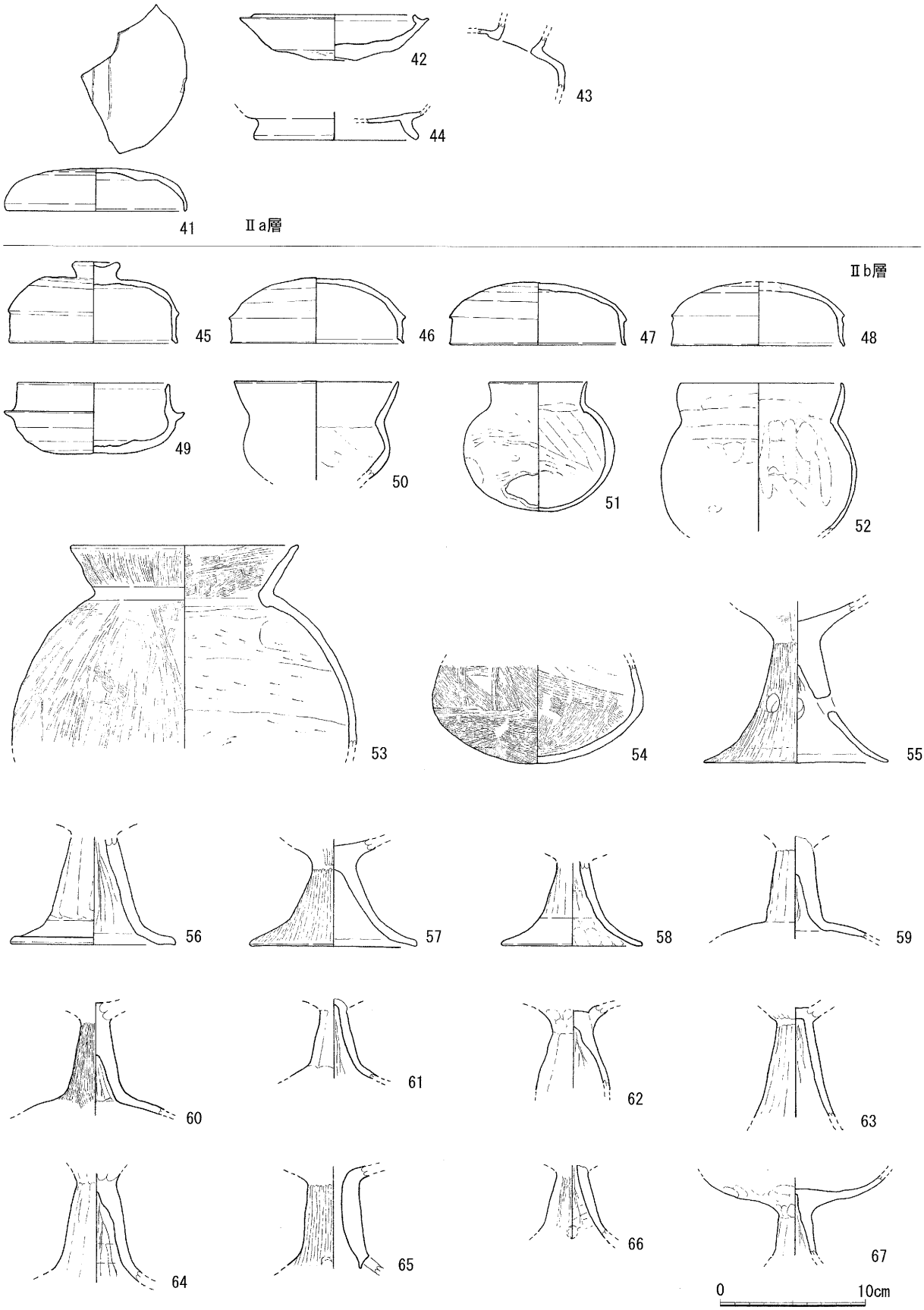
50・51は土師器小型丸底壺である。50は胴の張る扁球形の胴部からくの字状に屈曲して、若干内湾する口頸部が立ち上がる。内面には胴部と口縁部の接合痕が明瞭にみられる。磨滅が激しく外面の調整は不明瞭であるが、内面では胴部を右上がり方向の強いナデで調整した後に口縁部にヨコナデを施す。51はやや横長な球形の胴部から口頸部がやや外反しながらほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面を不定方向のナデ・ハケ、内面を胴部下半は左上がりケズリ、上半は左上がりナデで調整したのち、口縁部内外面をヨコナデで仕上げる。頸胴部界は特に強くナデており、明瞭な稜線ができている。底部はやや大きな穴状の欠損部分があり、意図的に打ち欠かれた可能性がある。欠損部周辺の外面に黒斑があり、胴部内面は使用により黒化する。

52は土師器甕である。胴部は球状で、口頸部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。頸胴部界のくびれは浅い。全体に磨滅が著しく調整が不明瞭な部分が多いが、口縁部外面にヨコナデや指頭圧痕、胴部内面には下から上への縦位ナデが看取される。また、胴部内面には縦位ナデによって消しきれなかった接合痕が２条程度残る。胴部上半および口頸部の内面は使用により黒変する。また、外面の胴部最大径付近に黒斑が見られる。

53は土師器甕である。球状の胴部からくの字状に屈曲して、口頸部が直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。外面は口頸部を縦位ハケ、胴部を粗い縦位ハケで調整する。内面は口頸部に横位～右上がりハケ、胴部に横位ケズリが看取される。胴部を成形後に頸部を接合しており、接合部の内面には粘土を貼り足して補強する。

54は小型丸底壺か。丸底で胴の張る扁球形の底部～胴部である。内外面とも不定方向の細かいハケ調整を密に施すが、内面の上半にはハケが及んでおらずナデの痕跡が残る。胴部最大径付近に明瞭な接合痕が看取される。

55～67は土師器高坏である。55は坏底部下端～脚裾部で、中空の脚柱部から滑らかに外反して脚裾部に至る。脚柱部と脚裾部の境に三方向のスカシ円孔を穿ち、裾端部は丸くおさめる。内外面とも磨滅するが、外面には縦位ヘラミガキ、坏部内面には板ナデがかろうじて看取される。内面はスカシより上にシボリ痕が残り、以下ではこれをナデ消しているが単位はみえない。56は直線的に開く脚柱部から大きく外反して脚裾部に至り、裾端部は丸くおさめる。外面は脚柱部に縦位ヘラナデ、脚裾部に



第88図　Ⅱa・Ⅱb層出土遺物（S=1/4）

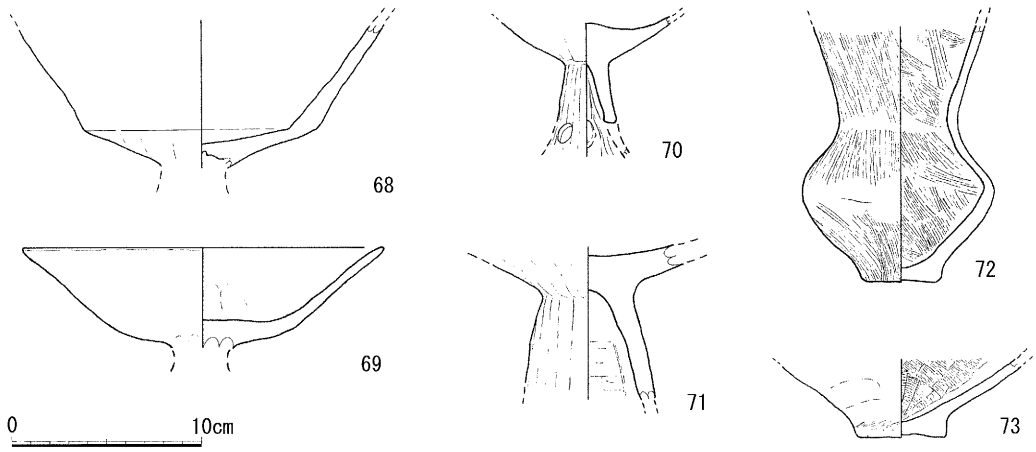
ヨコナデが看取される。内面はヨコナデを施すが、脚柱部のシボリ痕は消し切れていない。裾端部のヨコナデは強く、若干ツマミ出し気味になる。57は直線状に開く脚柱部から外反して裾部に至り、端部は丸くおさめる。脚部上端の周囲に粘土を付加して坏部を成形する。外面は磨滅が著しく調整不明である。内面はシボリ成形後にヨコナデを施し、シボリ痕をほとんど消している。58は中空の脚柱部が滑らかに外反して脚裾部にいたり、裾端部は丸くおさめる。脚柱部は外面に縦位ヘラナデが見られ、内面はヨコナデされるが成形時のシボリ痕がわずかに残る。脚裾部は外面にヨコナデ、内面には指頭圧痕や縦位ナデが看取される。59はわずかに下方に開く中空の脚柱部から明瞭に屈曲して、ドーム状をなす脚裾部に移行する。脚柱部外面をヘラナデ調整した後、脚裾部をヨコナデで仕上げる。脚柱部内面には成形時のシボリ痕が明瞭に残る。60は59と近似したプロポーションを示すが、脚柱部が59より細身である。シボリと外面ヘラナデにより成形し、脚柱部内面下端および脚裾部をヨコナデ、さらに外面を縦位ハケで仕上げる。脚柱部上端は周囲に粘土を付加して坏底部とする。外面には赤色顔料が付着する。

61は直線的に下へ開く中空の脚部から、脚裾部が大きく開く。脚部上端は坏部との接合面が露出する。器表面は全体にやや磨滅するが、脚柱部外面に縦位ヘラナデ調整、脚柱部内面にヘラ状工具によるナデが看取されるが、内面では成形時のシボリ痕がわずかに残る。62は中空の脚部で、内湾して下へ広がる。上端では周囲に粘土を付加する。破片上端の状況からは、この上にさらに粘土を充填して坏底部上面としたことがうかがえ、現状ではその充填粘土が剥離している。器表面は磨滅するが、接合部の外面には接合時の指頭圧痕がみられる。脚部外面はヘラ状工具による面取りを施すが、内面は未調整で成形時のシボリ痕が明瞭に残る。63は滑らかに外反する中空の脚柱部である。外面はヘラナデ調整、内面は上方に成形時のシボリ痕が残るが、ヨコナデにより部分的にシボリ痕が消される。64は内湾しつつ広がる中空の脚柱部で、下方で大きく外反して脚裾部に至る。シボリ成形後に外面をヘラナデ調整する。内面は上半でシボリ痕が明瞭にみられ、下半はヨコナデ調整されるもののシボリ痕を抹消するには至らない。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して坏底部としており、その外面もヘラナデ調整される。65はほぼ垂直にのびる中空の高坏脚柱部で、器壁は厚手である。上端には円盤充填技法による坏底部との接合面が露出している。脚柱部と脚裾部の境付近に円形スカシ孔を穿つ。外面を幅の細いミガキで調整し、内面は横位のヘラナデにより成形時のシボリ痕を消す。66は下に開く中空の脚柱部で、外面は縦位ハケ調整を施し、成形時のシボリ痕跡を横位ヘラケズリでほとんど消している。脚柱部と脚裾部の境に、２孔一対の円形スカシ孔がわずかに看取される。

67は高坏の坏底部～脚柱部である。脚部は中空で下方へ直線的に開き、上端に坏底部を接合する。坏底部～脚部上端の外面に指頭圧痕、脚柱部外面にヘラナデが看取される。脚柱部内面は未調整で、成形時のシボリ痕が残る。

Ⅲ層

68～71は高坏である。68･69は坏部である。68は直線的にのびる底部から大きく屈折して体部が立ち上がり、境には明確な稜を持つ。器表面は摩滅するが、外面では底部に縦位ナデ、脚部との接合面付近に不定方向のナデないし指頭圧痕が看取される。体部はヨコナデで調整されるが、単位は明瞭でない。69は体部がやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面の磨滅が著しいが、調整はヨコナデを主体として、脚部との接合部分や見込み部には接合時の指頭圧痕が看取される。破面の



第89図　Ⅲ層出土遺物（S=1/4）

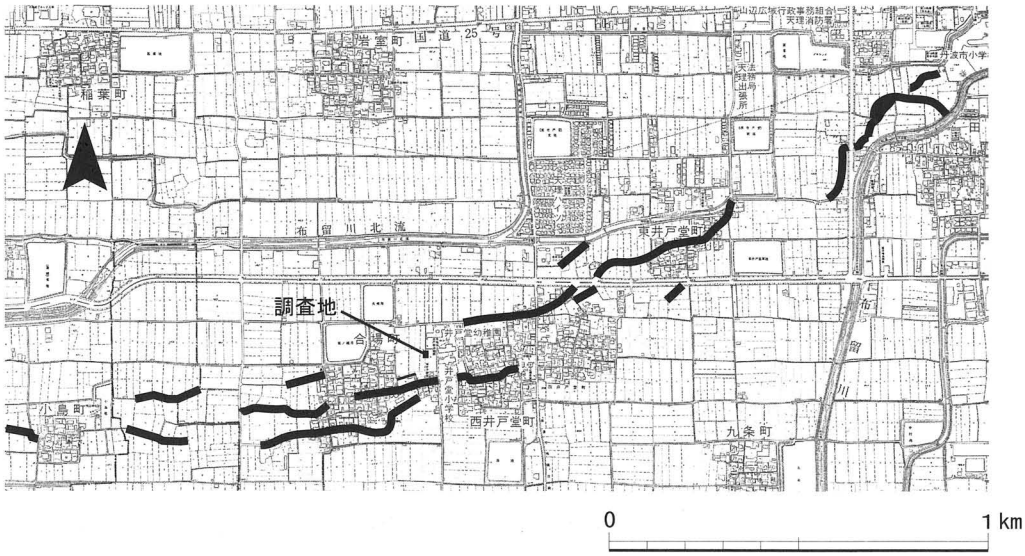
状況から、脚部上端の周囲に粘土を付加して坏部を成形する状況がうかがえる。70は坏底部から脚柱部片である。脚柱部は中空で、直線的に下方へ開き、外反して脚裾部へ移行する。坏底部外面は縦位ヘラナデ、内面は放射状のヘラミガキを密に施す。脚部外面は幅の狭い縦位ヘラナデで調整され、内面はシボリ成形後に横位のヘラナデを施すが、シボリ痕はわずかに残る。脚柱部と脚裾部の境付近に３方向の円形スカシ孔を穿つ。71は坏底部～脚柱部片である。わずかに下方に開く幅広で中空の脚柱部の上端で、厚手の坏底部に移行する。外面は縦位ナデを主体とし、坏底部内面はハケおよびナデ、脚柱部内面は成形時のシボリ痕を坏底部をナデや横位ヘラケズリで消す。

72･73は壺である。72は頸部～底部である。底部が突出する平底の長頸壺で、横に長い球形の体部から緩やかに頸部に移行し、頸部は直線的にのびる。外面は縦位ハケ、内面は左上がりハケで調整する。胴部内外面には接合痕がわずかに残る。胴部下半に細長い黒斑を有する。
73は底部～胴部下端である。底部は突出する平底の形態で、側面及び底面を丁寧な指頭圧や板ナデにより調整する。胴部は外面が若干磨滅しており調整は不明瞭であるが、底胴部界付近に板ナデ工具の圧痕がみられる。内面は放射状の左上がりハケが明瞭で、使用により黒化する。

Ⅱ．まとめ

今回の調査区では、中世の耕作痕跡群および井戸群、律令期・古墳時代中期の自然河川を各１条検出した。古墳時代河川の下層も弥生後期以降の土器を含む砂質土の堆積であることから、弥生時代後期から律令期に至るまで、調査地付近は河川を近傍に控えた後背地あるいは自然流路そのものであったと判断できる。調査では古墳時代中～後期を中心として多量の土器が出土したが、ほとんどローリングを受けていないものやほぼ完形で出土したものも一定量あることから、調査地近傍、おそらく合場遺跡の集落から投棄されたものである可能性が高い。

中世に入るとこうした様相は一変して、調査地付近は耕作地となる。元来河川性の土地であることから湧水も豊富であったとみられ、調査区内でも２基の井戸を検出した。耕作に伴う素掘溝が正方位を取ることから、このころまでに調査地付近に条里地割が及んでいたことが分かる。耕地化後は、調査区の範囲では屋敷地等に転換した形跡は認められず、中世以降連綿と耕作が続けられてきたものと思われる。



第90図　調査地周辺にみられる条里の乱れ（斜行・屈曲地割）

ここで、今回の調査区で検出した流路について、若干の地理的検討を加えておきたい。周知の通り、奈良盆地内は広く条里地割が施行され、現在に至っても正方位の地割が卓越する地域であるが、調査地周辺にはちょうど調査地をはさむ形で、正方位地割に斜行しておおむね北東－南西方向を取りつつ蛇行する里道や土地境界が散見される（第90図）。また、調査地から東北方へ斜行地割を追うと、断続的ながら丹波市小学校付近で現在の布留川北流に連続する。

奈良盆地を流れる河川には条里地割に沿って正方位の流路を取るものが多く、布留川についても北流は調査地の北方を、本流は調査地の東方をそれぞれ条里地割に沿って流れているが、これは自然地形に沿った斜方位の流路を条里地割に沿って改変した結果であると考えられている。とすれば、今回の調査で検出した自然流路および調査地周辺に散在する斜行地割は、条里に沿って改変される以前の布留川旧流路の痕跡であるとの推定も成立しうる。

この推定に立つ場合、流路本体を現流路に付け替えたにもかかわらず、旧流路に基づく地割が条里地割の浸食を受けずに残っている点などについて説明が必要となるが、現段階ではこれを一つの作業仮説として、付近における今後の発掘調査、旧地形の解明を進めて行くこととしたい。　（北口聡人）

第10表　出土遺物観察表（１）

番号	層位遺構	地区	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
							口径・底径or裾径	器高(現存高)		
1	素掘溝	南東	椀	5Y5/1灰	密 (長石含む)	やや軟	13.7・5.1	4.4	底部完存 口縁部1/2	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ヘラミガキ
2		南東	椀	N5/0灰	密	良好	(14.8・5.8)	4.2	底部1/2	(外)ヨコナデ・指頭圧・ヘラミガキ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
3		南東	椀	N4/0灰	密	良好	(15.4・5.0)	4.2	底部1/2 口縁部1/4	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ヘラミガキ
4		南東	椀	N5/0灰	密	良好	14.0・4.2	4.3	底部完存 口縁部1/2	(外)指頭圧・ヨコナデ (内ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
5		南東	椀	N5/0灰	密	良好	(14.1)・5.2	4.1	底部1/2 口縁部1/3	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
6		北東	椀	N5/0灰	密	良好	(13.2)・4.5	4.2	底部4/5	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
7		南東	小皿	N3/0暗灰	密	良好	7.9	1.6	完存	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ
8		南東	坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(11.5)	(3.1)	口縁部1/4	ヨコナデ・指頭圧
9		南東	皿	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(14.4)	(2.1)	口縁部1/4	ヨコナデ
10		南東	小皿	10YR7/3 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	8.9・6.3	1.4	底部4/5	ヨコナデ・指頭圧
11		南東	小皿	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英少量含む)	やや良好	9.4・4.8	1.5	1/2	ヨコナデ
12		南東	小皿	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	8.8	1.4	4/5	ヨコナデ
13		南東	小皿	10YR7/3 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	9.2・6.9	1.5	1/2	ヨコナデ・指頭圧
14		南東	小皿	2.5Y7/3 浅黄	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(9.1・7.0)	1.2	1/3	ヨコナデ・指頭圧
15		南東	小皿	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 (長石わずかに含む)	良好	(8.6・5.8)	1.3	完存	ヨコナデ・指頭圧
16	SE1 枠内	南東	椀	N3/0暗灰	密 (長石わずかに含む)	良好	13.3・4.7	3.9	完存	(外)ヨコナデ・指頭圧・ヘラミガキ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
17			椀	N3/0暗灰	密 (長石わずかに含む)	良好	12.8・4.7	3.7	完存	ヨコナデ・指頭圧・ヘラミガキ
18			椀	N4/0灰	密	良好	13.0・4.6	4.2	完存	(外)ヨコナデ・指頭圧・ヘラミガキ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ
19			皿	2.5Y7/2	密	良好	11.9・8.8	2.3	完存	(外)ヨコナデ・指頭圧 (内)ヨコナデ・ナデ
20			小皿	10YR6/3 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	9.2・6.9	1.3	1/2	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ・ナデ
21	SE2	南東	皿	10YR6/4 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(13.8・10.3)	1.8	1/5	ヨコナデ・指頭圧
22	NR1	南東	甕	5Y6/1灰	密 (長石・石英含む)	良好	(20.4)	(10.6)	口頸部1/4	(外)ヨコナデ・平行タタキ・カキメ (内)ヨコナデ・当て具
23			坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(11.8)	3.5	1/4	(外)指頭圧・ヨコナデ (内)ヨコナデ
24			坏	7.5YR7/3 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(13.2・5.6)	3.9	1/4	(外)ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ (内)ナデ・ヘラミガキ
25	NR2	南西	蓋	5Y6/1灰	密	良好	ツマミ径4.9	(2.7)	天井部上半	(外)ロクロナデ・カキメ (内)ロクロナデ
26		南西	坏	5Y6/1灰	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	10.4	4.5	完存	(外)回転ヘラケズリ・ロクロナデ (内)ロクロナデ
27		南西	坏	10Y7/1灰白	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	11.5	5.0	完存	(外)ロクロナデ・回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ
28		南東	高坏	5Y6/1灰	密 (長石・石英含む)	良好	(16.1)	(5.7)	坏部1/4	(外)ヨコナデ・カキメ (内)ヨコナデ
29		南西	甕	5YR7/6橙	やや密 (長石・石英含む)	良好	12.4	17.0	完存	(外)左上がりハケ・ヨコナデ (内)ナデ・指頭圧・ヨコナデ
30		南西	甕	5YR6/6橙	やや粗 (長石・石英多く含む)	良好	12.2	14.4	完存	(外)左上がりハケ・ヨコナデ (内)右上がりヘラケズリ・ヨコナデ

第11表　出土遺物観察表（2）

番号	層位遺構	地区	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
							口径・底径or裾径	器高(現存高)		
31	NR2	南東	甕	5YR7/2 明褐灰	やや密 (長石・石英含む)	良好	12.5	13.3	胴部完存 口頸部3/4	(外)左上がりハケ・ヨコナデ (内)板ナデ・指頭圧・左上がりナデ
32		南西	甕	10YR6/2 灰黄褐	やや密 (長石・石英含む)	良好	11.0	(12.0)	頸胴部 ほぼ完存	(外)左上がりハケ・ヨコナデ (内)指頭圧・左上がりナデ・ヨコナデ
33		南東	甕	10YR8/3 浅黄橙	密 (長石・石英含む)	良好	(19.2)	(31.0)	1/4	(外)縦位～左上がりハケ・ヨコナデ (内)右上がりナデ・指頭圧・ヨコナデ
34		南東	壺	2.5Y7/2 灰黄	密 (長石・石英含む)	良好	(15.6)	(9.9)	1/3	(外)縦横ハケ・ヨコナデ (内)横位ケズリ・指頭圧・ヨコナデ
35		南東	小形壺	2.5Y6/2 灰黄	密 (長石・石英わずかに含む)	やや良好	(9.5)	(7.8)	1/4	ヨコナデ・縦位ナデ
36		南東	小形壺	10YR6/4 にぶい黄橙	密 (長石・石英含む)	良好	7.3	8.1	完存	(外)ハケ・ヨコナデ (内)ナデ・ヨコナデ
37		南東	鼎	7.5YR8/6 浅黄橙	密 (長石・石英含む)	やや軟	(8.4)	(6.0)	1/2	ヘラナデ・指頭圧
38		南東	高坏	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 (長石・石英含む)	やや良好	17.4	(6.1)	坏部 ほぼ完存	ヨコナデ・左上がりハケ
39		南西	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 (長石・石英含む)	やや良好	(裾部径15.6)	(8.2)	脚裾部1/4	指頭圧・ナデ
40		南西	高坏	5YR6/6橙	密 (長石わずかに含む)	良好	(脚柱部径4.1)	(5.9)	脚柱部完存	(外)ヘラナデ (内)ヨコナデ・ヘラミガキ
41	Ⅱa	南東	蓋	N4/0灰	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(12.4)	3.0	1/4	(外)回転ヘラケズリ・ロクロナデ (内)ロクロナデ・ナデ
42		南東	坏	10BG6/1 青灰	密 (長石・石英含む)	良好	(10.9)	3.2	底部1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ・ナデ
43		南東	平瓶	N7/0灰白	密 (長石わずかに含む)	良好	－	(4.8)	肩部 ～頸部	ロクロナデ
44		南辺 サブトレ	椀	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	高台径11.1	(2.0)	底部1/2	(外)ヨコナデ (内)ヘラミガキ
45	Ⅱb	南西	蓋	10BG6/1 青灰	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	11.5	5.6	2/3	(外)ロクロナデ・回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ
46		南東	蓋	N7/0灰白	密 (長石・石英含む)	良好	11.9	4.5	完存	(外)ロクロナデ・回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ
47		南西	蓋	N6/0灰白	密 (長石・石英含む)	良好	12.1	4.3	2/3	(外)ロクロナデ・回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ
48		－	蓋	5Y7/1灰白	密 (長石・石英含む)	良好	(12.0)	(4.4)	1/4	(外)回転ヘラケズリ・ロクロナデ (内)ロクロナデ・ナデ
49		南辺 サブトレ	坏	5B6/1青灰	密 (長石・石英含む)	良好	10.5	4.9	完存	(外)回転ヘラケズリ・ロクロナデ (内)ロクロナデ・ナデ
50		南西	小形丸底壺	2.5Y6/2 灰黄	密	良好	(11.0)	(7.0)	1/4	(外)調整不明 (内)左上がりナデ・ヨコナデ
51		北西	小形丸底壺	7.5YR6/4 にぶい橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	6.6	9.0	ほぼ完存	(外)ヨコナデ・ハケ (内)左上がりケズリ・ナデ・ヨコナデ
52		南辺 サブトレ	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(11.1)	(10.3)	胴部上半	(外)ヨコナデ・指頭圧 (内)ヨコナデ・縦位ナデ
53		－	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (石英・長石多く含む)	良好	(15.4)	(14.4)	口頸部1/4	(外)縦位ハケ・ヨコナデ (内)横位ハケ・横位ケズリ
54		南西	壺	7.5YR6/6橙	密	良好	胴部最大径14.6	(6.8)	胴部下半	(外)ハケ (内)ハケ・左上がりナデ
55		南西	高坏	10YR6/6 明黄褐	やや密 (長石・石英多く含む)	やや良好	裾部径12.6	(11.2)	脚柱部完存 脚裾部1/2	(外)縦位ヘラミガキ (内)板ナデ・ナデ
56		南東	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(裾部径11.4)	(7.5)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラナデ・ヨコナデ (内)ヨコナデ
57		－	高坏	5YR6/3 にぶい橙	密 (石英・長石わずかに含む)	良好	(裾部径11.5)	(6.5)	脚柱部完存	ヨコナデ
58		北東	高坏	5YR6/6橙	やや密 (長石・石英含む)	良好	裾部径9.8	(5.8)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラナデ・ヨコナデ (内)ヨコナデ・縦位ナデ
59		北東	高坏	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英含む)	やや良好	脚柱部径4.1	(7.2)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラナデ・ヨコナデ (内)ヨコナデ
60		北東	高坏	5YR7/6橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径3.9	(7.8)	脚柱部完存	(外)縦位ハケ (内)ヨコナデ

第12表　出土遺物観察表（３）

番号	層位遺構	地区	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
							口径・底径or裾径	器高(現存高)		
61	Ⅱb	中央サブトレ北半	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (長石わずかに含む)	良好	脚柱部径3.4	(5.6)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラナデ (内)横位ヘラナデ
62		南辺サブトレ	高坏	7.5YR6/6橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(脚柱部径5.0)	(6.0)	脚柱部上半	(外)指頭圧・面取り (内)未調整
63		北東	高坏	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	やや良好	(脚柱部径5.7)	(7.6)	脚柱部1/2	(外)縦位ヘラナデ (内)ヨコナデ
64		南辺サブトレ	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(脚柱部径5.0)	(7.6)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラナデ (内)ヨコナデ
65		北西	高坏	10YR7/4 にぶい黄橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部4.2	(7.1)	脚柱部完存	(外)縦位ヘラミガキ (内)ナデ・横位ヘラケズリ
66		北東	高坏	5YR7/6橙	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	脚柱部径3.9	(5.1)	脚柱部完存	(外)縦位ハケ (内)横位ヘラナデ
67		南西	高坏	5YR6/6橙	密	良好	(脚柱部径3.0)	(5.4)	脚柱部上半	(外)指頭圧・ヘラナデ (内)未調整
68	Ⅲ	南東	高坏	5YR7/8 橙	やや粗 (長石・石英多く含む)	良好	坏底部径12.2	(8.0)	坏底部3/4	ヨコナデ・指頭圧
69		北東	高坏	10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英・角閃石含む)	良好	(19.0)	(5.3)	坏底部2/3	ヨコナデ・指頭圧
70		中央南北サブトレ	高坏	5YR7/6橙	密 (長石・石英含む)	やや良好	脚柱部径4.5	(7.4)	脚柱部上半	(外)ヘラナデ (内)ヘラミガキ
71		北西	高坏	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	脚柱部径6.7	(8.2)	脚柱部上半	(外)ナデ (内)ハケ・ナデ・横位ヘラケズリ
72		南東	壺	7.5YR7/4 にぶい橙	密 (石英含む)	良好	底部径3.9	(13.6)	底胴部完存	(外)縦位ハケ (内)左上がりハケ
73		北西	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	密 (長石・石英含む)	良好	底部径4.6	(4.2)	底部完存	(外)板ナデ・指頭圧 (内)左上がりハケ

6．平等坊・岩室北遺跡（第１次）

Ⅰ．はじめに

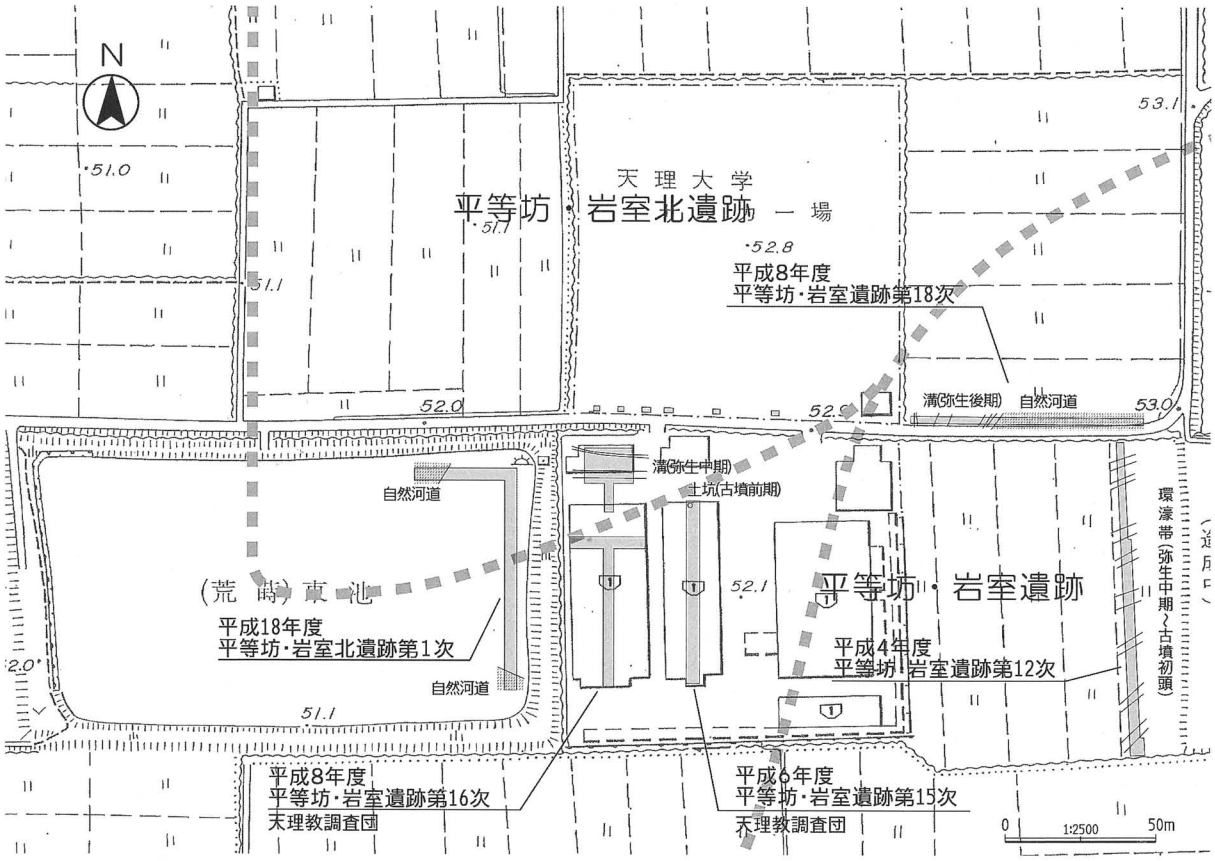
今回の調査は天理市荒蒔町地内の荒蒔東池において、池底掘削工・堤体改修工などを伴う溜池改修工事が計画されたことに伴って実施した。荒蒔東池は東半部が平等坊･岩室北遺跡に含まれることから、該当区域の発掘調査をおこなった。平成18年11月13日に排水作業を開始し、同11月22日より掘削に入り、同12月26日にすべての作業を終了した。最終的な調査面積は430㎡である。

Ⅱ．調査の経過

１．既往の調査（第91図）

今回調査をおこなった荒蒔東池は平等坊・岩室北遺跡の範囲に属する。平等坊・岩室北遺跡は弥生時代の拠点集落として知られる平等坊・岩室遺跡の北西に広がる遺跡で、現行の『奈良県遺跡地図』上では遺物散布地として記載されているが、実態はこれまでほとんど明らかにされていない。

荒蒔東池周辺では、東側隣接地にて埋蔵文化財天理教調査団が倉庫改築に伴う調査を二度にわたって実施している（日野(編)2010；当該調査地は『奈良県遺跡地図』では平等坊・岩室北遺跡に含まれているが、天理市教育委員会では便宜的に平等坊・岩室遺跡における一連の調査の一部として取り扱い、平等坊･岩室遺跡第15次調査、第16次調査の呼称を与えている)。このうち平成６年度に実施された第15次調査では顕著な遺構が検出されていないが、平成８年度に実施された第16次調査では、東西方向に伸びる弥生時代中期の溝２条、弥生時代後期末の土坑、古墳時代前期末の溝１条が確認されている。



第91図　調査区位置図

２．調査の経過

溜池内には調査着手以前に工事用仮設道路が設置されていたが、仮設道路外は地盤が著しく軟弱で重機の乗り入れが難しい状態であった。当初は遺構面がより良好に保存されていると想定される堤防寄りに調査区を設定する予定であったが、前述の理由により調査区の位置や大きさは仮設道路に制約され、予定より溜池内側に設定せざるを得なかった。調査区は仮設道路の外周に沿った逆Ｌ字形に配置し、幅約４ｍ、北調査区の全長約34m、東調査区の全長約70ｍとなった。

Ⅲ．層序・遺構

１．層序（第82図）

第Ⅰ層は池底堆積土および攪乱埋土である。**第Ⅱ層**は黒褐色砂質土である。**第Ⅲ層**は黄灰色砂質土でしまりが強い。**第Ⅳ層**は粗砂～細砂の堆積で厚さ50～70cmを測る。**第Ⅴ層**は暗灰色粘土を主体とする粘土層である。いずれも無遺物層であるが、第Ⅲ層以下は地山相当と考えられる。

遺憾ながら、仮設道路設置工事の際の重機による攪乱が調査区内の相当範囲に及んでいた。北調査区では全域が第Ⅴ層上面まで攪乱されており、特に北壁寄りの攪乱が著しかったため、仮設道路直下の南壁を土層観察の対象とした。東調査区も北部は第Ⅴ層上面まで攪乱が及んでいたが、南部は東壁寄りのわずかな部分が攪乱を免れていたため土層観察の対象とした。

２．主要な遺構（第82図）

自然流路NR01

北調査区西端の第Ⅴ層上面で検出した。北東－南西方向の流路で、西側の肩は調査区内では検出できなかった。河道幅は検出面で少なくとも12ｍ以上ある。東側の肩から続く河床は標高47.7mまで落ち込むことを確認したが、さらなる掘削は仮設道路への影響を考慮して見合わせた。このため、河道の深さは不明である。埋土に遺物は含まない。上部は全面的に攪乱を受けているため、東調査区で確認した基本層序との対応関係は不明である。

自然流路NR02

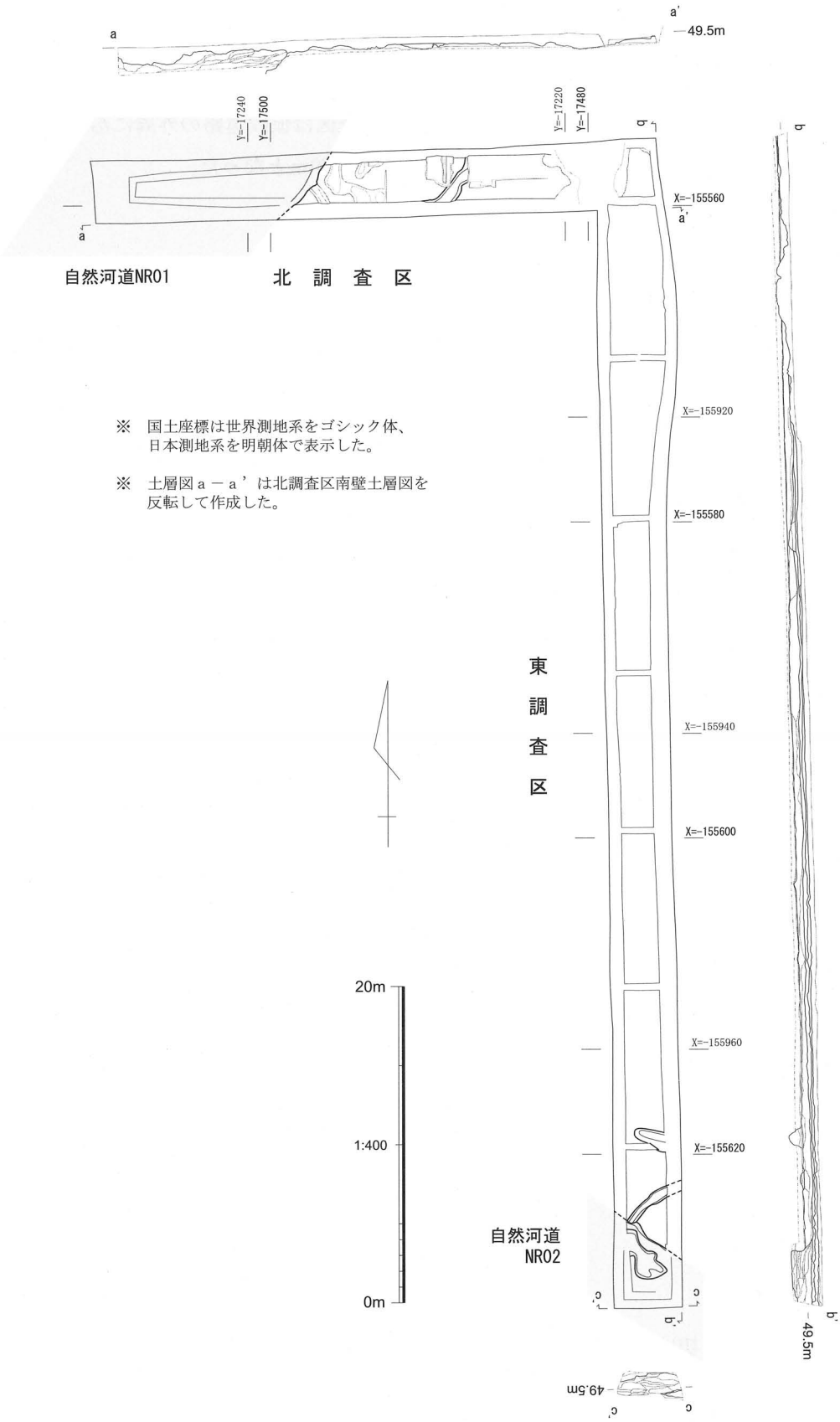
東調査区南端の第Ⅴ層上面で検出した。南東－北西方向の流路で、南側の肩は調査区内では検出できていない。河道幅は検出面で少なくとも５ｍ以上ある。河床はしまりの強い緑灰色細砂で、検出面からの深さ約1.0ｍを測る。埋土に遺物は含まない。

その他

第Ⅴ層上面で、溝状の落ち込みなどを検出しているが（SX01・SX02・SX03）、いずれも埋土に遺物は含まない。

Ⅳ．おわりに

今回の調査では、当初は東側に隣接する平等坊・岩室遺跡第16次調査地で確認された溝や土坑などに関連する遺構の検出が予想された。しかし、調査区設定位置が仮設道路に制約されたため、遺構面を良好に残すと考えられる堤防寄りを調査することができず、より溜池内側の調査となった。また、調査区内は広い範囲に攪乱が及んでいた。このため、本来の遺構面であった可能性がある第Ⅲ層上面



※ 国土座標は世界測地系をゴシック体、
日本測地系を明朝体で表示した。

※ 土層図ａ－ａ’は北調査区南壁土層図を
反転して作成した。

第92図　調査区平面図・土層図

以上を面的に検出することはできなかった。溜池内の大部分は、溜池築造時に削平されているものとみられる。第16次調査で確認された遺構群の広がりについては今後の課題とせざるを得ない。

第Ⅴ層上面で確認した２つの自然河道については、東側の平等坊・岩室遺跡で確認されている河道群との関連が注意される。河道内から遺物が出土していないため時期は決定しがたいが、NR02については層位から判断するとかなり古い時期のものとみられる。（石田大輔）

〔参考文献〕

日野　宏(編) 2010 『平等坊・岩室遺跡 第15・16次発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告27 埋蔵文化財天理教調査団

図　　版

図版1　平等坊・岩室遺跡（第28次）①

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

図版2　平等坊・岩室遺跡（第28次）②

調査区全景（垂直）